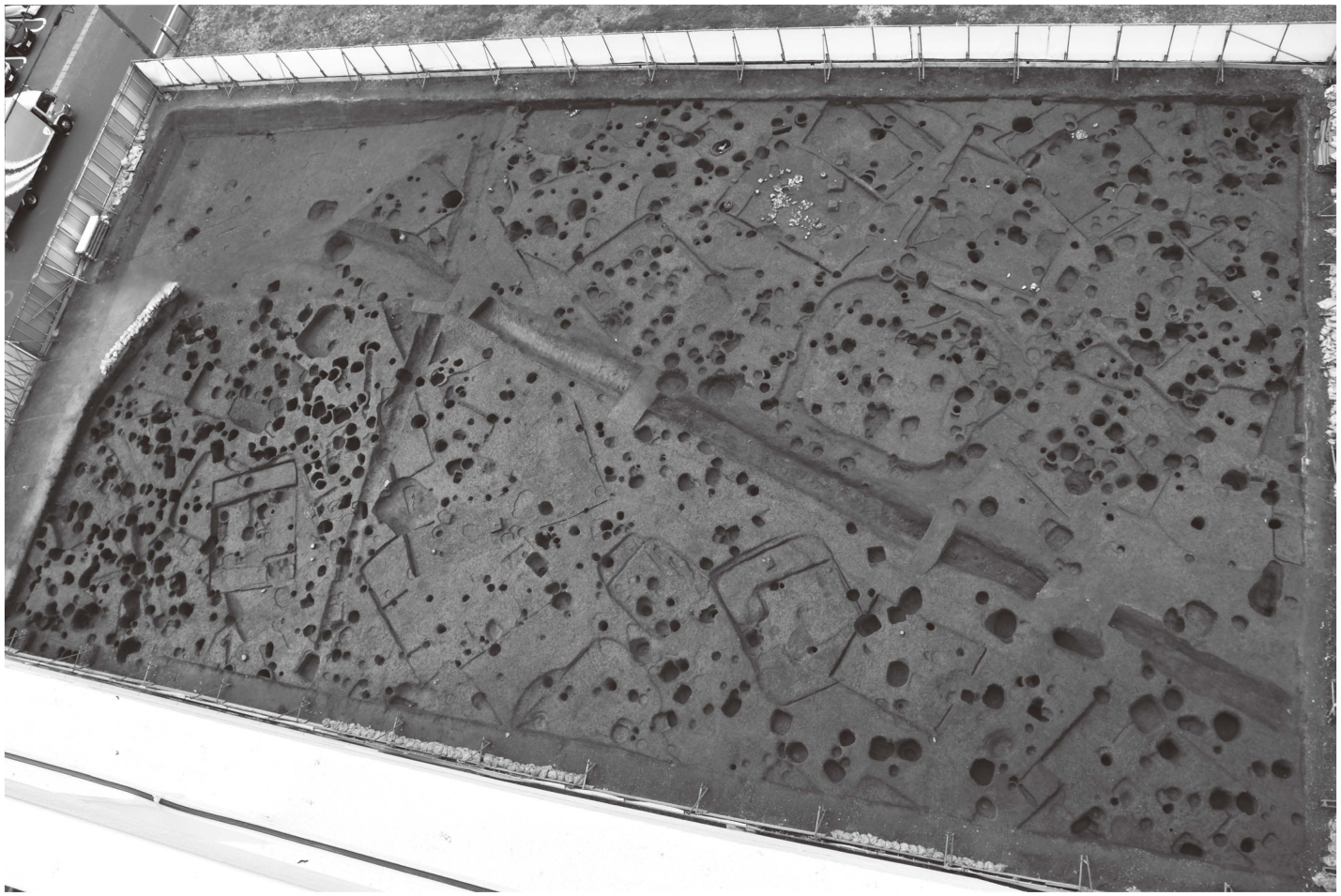
福岡市埋蔵文化財調査報告書第１３５１集

比恵８３

―比恵遺跡群第１４４次調査報告―



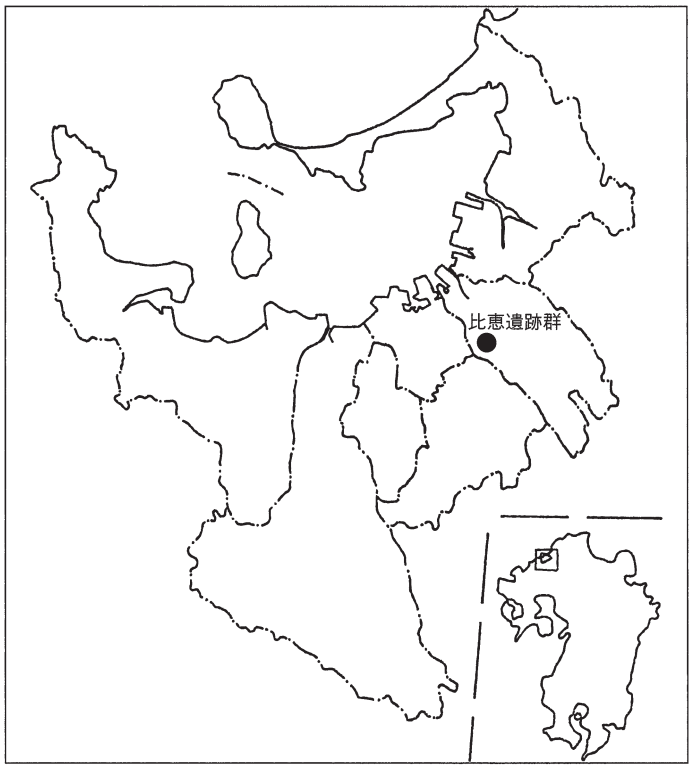
２０１８

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第１３５１集

比恵８３

―比恵遺跡群第１４４次調査報告―



２０１８

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市が位置する博多湾沿岸地域は玄界灘を介したアジア各地との交流の玄関口として発展してきました。地中に埋もれた数々の文化財は、人々が歴史・文化を積み重ね、現在の地域・社会を形作る礎となったことを示す貴重な財産です。福岡市教育委員会では開発などでやむを得ず遺跡が破壊される折には発掘調査を実施し、記録として残していけるよう努めております。

本書は、自走式駐車場建設に伴う比恵遺跡群第144次調査の報告です。調査では弥生時代から古墳時代までの竪穴住居の跡50軒以上が密集してみつかりました。邪馬台国について記した『魏志倭人伝』には、当時、福岡平野にあった奴国に「二万余戸あり」と記されています。この時期の奴国の中心はこの比恵遺跡群周辺と考えられており、『魏志倭人伝』で中国からの使者が目にしたのは、まさにこの場所の風景かもしれません。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました南近代ビル株式会社様をはじめとした関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長　星子明夫

例　　言

1、本書は自走式駐車場建設に伴い、平成 28（2016）年８月１日から平成 29（2017）年２月 17 日に発掘調査した比恵遺跡群第 144 次調査の報告書である。

2、遺構の実測は、主に 1/20 図を朝岡俊也が、その他の個別図を中園将祥が行った他、福岡大学学生の植田紘正・瓜生健・飯田孝一郎・成田一輝・薛婷・木原尭・田中水樹・牧之角健太が行った。

3、遺構の写真撮影は朝岡が行った。

4、遺物の実測は朝岡・神啓崇・牧之角が行った。なお、土器の時期決定等に関して久住猛雄氏に、石器の器種・石材判定に関して九州大学（当時）の森貴教氏に、木器の器種判定に関して山口譲治氏と田尻直子氏にご協力いただいた。

5、遺物の拓本は萩尾朱美が行った。

6、遺物の写真撮影は朝岡が行った。

7、遺構の製図は朝岡が行った。

8、遺物の製図は朝岡・神・三浦悠葵・山崎賀代子・井上加代子・大庭友子・熊埜御堂和香子が行った。

9、本書に掲載した方位はすべて座標北である。

10、本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。

11、本書に掲載した標高は都市再生街区基準点 10A92（H=5.541m）を基準とした。

12、本書に使用した遺構略号は以下の通り。

SA　柵列　　SB　掘立柱建物　　SC　竪穴建物　　SD　溝　　SE　井戸　　SK　土坑

SX　その他の遺構　　SP　柱穴

13、一部に以下の土層略標記を用いた。

L++　ローム主体土　　L+　ロームの混じりが多い　L-　ロームの混じりが少ない

S++　砂主体　　S+　砂を多く含む　　S　砂を含む

V+　粘性が強い　　C　炭を含む　　C+　炭を多く含む

14、遺構の時期でＩＡ期・ＩＢ期・ⅡＡ期・ⅡＢ期などの表記は久住氏の編年による時期を表す。また、遺物の時期決定に際し、主に以下の論文を参考にした。

久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究ＸⅨ』

久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土師器』

第 19 回九州前方後円墳研究会

平美典 2004「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」第 53 回埋蔵文化財研究集会

常松幹雄 1991「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学考古学会創立 40 周年記念

15、本書に関わる図面・写真・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

16、本書の執筆・編集は朝岡が行った。

遺　跡　名	比恵遺跡群	調 査 次 数	144次	調 査 略 号	HIE-144
調 査 番 号	1616	分布地図図幅名	東光寺37	遺跡登録番号	020127
事前審査番号	27-2-1055	申 請 地 面 積	1556.03㎡	調査対象面積	1350㎡
調 査 面 積	1248㎡		調　査　地	博多区博多駅南4丁目162-1、175	
調 査 期 間	平成28(2016)年8月1日～平成29(2017)年2月17日				

本文目次

序
Ⅰ. はじめに
1、調査に至る経緯 …… 1
2、調査の組織 …… 1
Ⅱ. 遺跡の立地と環境
1、地理的環境 …… 2
2、歴史的環境 …… 2
Ⅲ. 調査の記録
1、調査の概要 …… 5
2、竪穴建物 …… 7
3、掘立柱建物 …… 50
4、柵列遺構 …… 67
5、溝 …… 67
6、井戸 …… 76
7、土坑 …… 82
8、その他の遺構 …… 86
9、柱穴出土の遺物 …… 89
10、その他の遺物 …… 95
Ⅳ. 自然科学分析
SD225 出土石材に付着した赤色物質について …… 96
Ⅴ. まとめ
…… 98

挿図目次

Fig.1　比恵遺跡群位置図（1/25000） …… 3
Fig.2　比恵遺跡群調査区位置図（1/8000） …… 4
Fig.3　第 144 次調査区位置図（1/1000） …… 5
Fig.4　第 144 次調査区全体図 …… 折り込み表
Fig.5　柱穴の深さと遺物出土柱穴の位置 …… 折り込み裏
Fig.6　SC01・02 …… 9
Fig.7　SC01・02 出土遺物および SC03・04・05 …… 10
Fig.8　SC05 出土遺物 …… 11
Fig.9　SC06・07・08・09 …… 13
Fig.10 SC10・11・12・13 …… 14
Fig.11 SC14 …… 15
Fig.12 SC15・16 …… 17
Fig.13 SC16 出土遺物 …… 18
Fig.14 SC17 …… 19
Fig.15 SC18 …… 20
Fig.16 SC19・20 …… 21
Fig.17 SC21 …… 22
Fig.18 SC22 …… 23

Fig.19 SC23 …… 24
Fig.20 SC24・25 …… 25
Fig.21 SC26・27 …… 26
Fig.22 SC28・29 …… 27
Fig.23 SC30 …… 28
Fig.24 SC30 土器群 C …… 29
Fig.25 SC30 土器群 D …… 30
Fig.26 SC30 土器群 E …… 31
Fig.27 SC30 土器群 F …… 32
Fig.28 SC31・32 …… 33
Fig.29 SC33・34 …… 34
Fig.30 SC35・36 …… 35
Fig.31 SC37・38・39 …… 36
Fig.32 SC40・41 …… 37
Fig.33 SC42 …… 38
Fig.34 SC43 …… 40
Fig.35 SC44・45 …… 41
Fig.36 SC46 …… 42
Fig.37 SC47 …… 43
Fig.38 SC47 出土遺物 …… 44
Fig.39 SC48 …… 45
Fig.40 SC49・50・51・52・53・54 …… 47
Fig.41 SC55・56・57 …… 48
Fig.42 SC58 …… 49
Fig.43 SB01・02 …… 51
Fig.44 SP203 …… 52
Fig.45 SB03・04 …… 53
Fig.46 SB05・06 …… 54
Fig.47 SB07 …… 55
Fig.48 SB08・09 …… 56
Fig.49 SB10・11 …… 57
Fig.50 SB12・13・14 …… 58
Fig.51 SB15 …… 59
Fig.52 SB16 …… 60
Fig.53 SB17 …… 61
Fig.54 SB18・19 …… 63
Fig.55 SB20・21 …… 64
Fig.56 SC22・23 …… 65
Fig.57 SC24・25 …… 66
Fig.58 SA01 ～ 06 …… 68
Fig.59 SD02・03 …… 69
Fig.60 SD110 …… 70
Fig.61 SD110 出土遺物 …… 71
Fig.62 SD225 …… 72
Fig.63 SD225 出土遺物 …… 73

Fig.64 SD727 …… 74
Fig.65 SD727 出土遺物 …… 75
Fig.66 SE1207 …… 77
Fig.67 SE1238 …… 78
Fig.68 SE1238 出土遺物 …… 79
Fig.69 SE1251 …… 81
Fig.70 SK142・183 …… 82
Fig.71 SK357 …… 83
Fig.72 SK420・911 …… 84
Fig.73 SK1100・1206 …… 85
Fig.74 SK1250 …… 86
Fig.75 SX204・625・1333 …… 87
Fig.76 SX1403 …… 88
Fig.77 SP 出土遺物① …… 90
Fig.78 SP 出土遺物② …… 91
Fig.79 SP 出土遺物③ …… 92
Fig.80 SP 出土遺物④ …… 93
Fig.81 SP 出土遺物⑤ …… 94
Fig.82 その他出土の遺物 …… 95
Fig.83 弥生時代前期後半の遺構配置 …… 99
Fig.84 弥生時代中期末の遺構配置 …… 100
Fig.85 弥生時代後期の遺構配置 …… 101
Fig.86 弥生時代終末期の遺構配置 …… 102
Fig.87 古墳時代前期の遺構配置 …… 105
Fig.88 7 世紀以降の遺構配置 …… 106

表目次

Tab.1 竪穴建物一覧 …… 8
Tab.2 掘立柱建物一覧 …… 50
Tab.3 SE1251 出土木器一覧 …… 80

図版目次

PL.1 (1) 調査区全景合成（東より）

PL.2 (1) Ⅱ区全景（東より）
(2) Ⅰ区全景（東より）

PL.3 (1) SC01・02
(2) SP205（SC02）土器出土状況
(3) SC02 炉土層
(4) SC02 炉
(5) SC05
(6) SC06
(7) SC06 屋内土坑土層
(8) SC06 西側排水溝土層

PL.4 (1) SC06 炉
(2) SC07・08・09
(3) SC08 完掘
(4) SC10・11
(5) SC13
(6) SC14
(7) SC16
(8) SC16 完掘

PL.5 （1）SC18
（2）SC22
（3）SC22 炉土層
（4）SC23
（5）SC28・29・30
（6）SC28・29・30 完掘
（7）SC30 屋内土坑土層
（8）SC33

PL.6 （1）SC33 屋内土坑
（2）SC33 屋内土坑土層
（3）SC34
（4）SC37
（5）SC38 屋内土坑
（6）SC41
（7）SC42
（8）SP987（SC42）断ち割り

PL.7 （1）SC42 中央炉
（2）SC42 屋内土坑・SK420
（3）SC45 炉
（4）SC46
（5）SC47
（6）SC47 完掘
（7）SC48
（8）SC50

PL.8 （1）SC51
（2）SC55
（3）SC57 土器出土状況
（4）SC58
（5）SC58 屋内土坑？土層
（6）SX862（SB01）
（7）SB02
（8）SP203 土器出土状況

PL.9 （1）SP203（SB02）土層
（2）SP273（SB02・03）土層
（3）SP390（SB04）土層
（4）SB05
（5）SP37（SB17）土層
（6）SP86（SB17）土層
（7）SP492（SB17）土層
（8）SP547（SB17）土層

PL.10（1）SD02 土器出土状況
（2）SD110
（3）SD110 土器出土状況
（4）SD225
（5）SD225 Ⅰ区東側土層
（6）SD225 Ⅰ区西側土層
（7）SD225 Ⅱ区土層
（8）SD727

PL.11（1）SD727（上から）
（2）SD727 土器出土状況
（3）SE1207
（4）SE1238
（5）SE1238 土器出土状況
（6）SE1251 断ち割り
（7）SK142
（8）SK142 土層

PL.12（1）SK1100 土器出土状況
（2）SK1206
（3）SK1206 土層
（4）SK1250
（5）SK1250 土層
（6）SX204 土器出土状況
（7）SX625 土器出土状況
（8）SX1403

PL.13（1）SC30 土器出土状況①
（2）SC30 土器出土状況②

PL.14（1）SC30 土器出土状況③
（2）SC30 土器出土状況④

PL.15 遺物①
PL.16 遺物②
PL.17 遺物③
PL.18 遺物④
PL.19 遺物⑤
PL.20 遺物⑥
PL.21 木器①
PL.22 木器②

Ⅰ．はじめに

１、調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区博多駅南４丁目 162-1,175 の自走式駐車場建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 28 年（2016 年）３月１日付で受理した（事前審査番号 27-2-1055）。これを受けて埋蔵文化財課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれること、確認調査において現地表下 50㎝で遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、自走式駐車場建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 28 年７月 26 日付で南近代ビル株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年８月１日から発掘調査を、翌平成 29 年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

２、調査の組織

調査委託：南近代ビル株式会社
調査主体：福岡市教育委員会

【発掘調査　平成 28 年度】
調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第２係長　加藤隆也
調査庶務：文化財部埋蔵文化財課管理係　横田忍
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係文化財主事　大森真衣子
調査担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
埋蔵文化財課調査第１係文化財主事　中園将祥
発掘作業：飯田孝一郎　石川洋子　井上澄敏　井上節子　岩佐克行　内野信代　植田紘正
瓜生健　小野千佳　香月隆　木原尭　島津明男　下田和弘　神藤輝美　髙武奈美
古賀幸子　坂口七千花　篠原謹一郎　杉村修治　薛婷　節政善憲　髙瀬美智子
高手興志子　田中昭子　田中トミ子　田中守　田中水樹　田中ゆみ子　田中良一
田原俊則　田原美和子　塚副義一郎　遠山勲　豊丸秀仁　成田一輝　野内聖司
野口リウ子　花田昌代　北条こず江　牧之角健太　増田宣正　増田ゆかり
柗田典子　水田政敏　水田ミヨ子　皆川公　森田祐子　吉野一憲

【整理・報告　平成 29 年度】
整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第２係長　大塚紀宜
整理・報告庶務：文化財保護課管理調整係　松原加奈枝
整理・報告担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
整理作業：執行恭子　中間千衣子　萩尾朱美

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1、地理的環境

比恵遺跡群は福岡市域の東寄り、二つの二級河川である御笠川・那珂川等により形成された狭義の福岡平野に位置し、南北約 1000m、東西約 900m に展開する。南東の那珂遺跡群や北東の山王遺跡と合わせて比恵・那珂遺跡群と呼ばれ、御笠川・那珂川の間の洪積微高地上で南北 2km、東西 700m に遺跡が展開する。遺構面の標高は 4 ～ 9m である。阿蘇山の火山灰が堆積した鳥栖ローム層と呼ばれる黄褐色粘質土が遺構検出面となることが多く、遺構検出時の地山と遺構の境は比較的明瞭だが、乾燥すると土が固くなり、ひび割れを繰り返すと土色がややぼやっとする特徴がある。3m 程堆積した鳥栖ローム層の下には八女粘土層と呼ばれる白色粘土が堆積しており、やはり阿蘇山の火山灰に由来すると考えられている。

比恵・那珂遺跡群が立地する洪積台地は南西に向かって断続的に続き、五十川遺跡・井尻 B 遺跡を挟んで、須玖遺跡群が立地する春日丘陵に至る。反対に北西側は砂丘上に展開する博多遺跡群を挟み、約 1.5km で現在の海岸線に至る。

2、歴史的環境

比恵・那珂遺跡群は二つの河川に挟まれる。よって、古くから水運や農業の重要地点であり、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を密に検出する複合遺跡である。

最も古い遺物は後期旧石器時代のナイフ型石器や彫器が台地縁辺の比恵第 19 次、那珂第 38 次・41 次調査で出土し、また縄文時代前期の深鉢が比恵第 30 次調査から出土した。

遺構の初現は突帯文土器期からで、台地縁辺の低位部に展開し、那珂 37 次調査では二重環溝が検出された。弥生時代前期は比恵遺跡群では北西部を中心に、低位部に貯蔵穴や貯木土坑・水溜遺構などが検出される。弥生中期中頃から中期後半にかけては段丘中央の高位部へ広範に遺構が広がり、集落が拡大し、墳丘墓の造営も開始される。

弥生時代中期後半から爆発的に遺構が増加し、奴国の拠点集落のひとつと考えられる大規模な集落となる。特に古墳時代に入ると須玖岡本遺跡が衰退する中、遺構が激増し、「奴国」の中枢が移動したとも考えられている。比恵遺跡群東側には弥生時代後期から古墳時代前期までの首長居館の区画と考えられる大規模な方形区画溝があり、また那珂遺跡群には九州最古の前方後円墳ともされる全長約 85m の那珂八幡古墳が築造され、中心埋葬施設の横の第 2 埋葬施設からは三角縁神獣鏡等が出土した。南北に貫く 1.5km の道路を基準線とした集落の整備や、台地を横断する幅 25m 以上･深さ 3m 程･長さ約 200m の運河の掘削が想定されることからも、多くの人々を組織的に動員できる大きな権力の存在が示唆される。

集落は一時衰退するが、那珂遺跡群で 5 世紀末に前方後円墳である剣塚北古墳が築造されて以降、6 世紀代には竪穴建物と掘立柱建物群が数か所で広がる。6 世紀後半には 3 重周濠をもち、また阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえる全長 140m の前方後円墳である東光寺剣塚が築造され、集落も増大する。飛鳥時代にかけて比恵遺跡群北半で 3 本柱を一組とする柱穴列に囲まれた倉庫群が検出され、大宰府の前身である「那津官家」に関連する施設と考えられている。那珂遺跡群でも少し遅れて掘立柱建物群が出現し、比恵遺跡群では出土しない初期瓦を伴う。

比恵遺跡群東側の 79 次調査では、水城東門ルートの古代官道が検出された。8 世紀になると比恵遺跡群の集落は衰退するが、那珂遺跡群では集落が継続する。中世は、前半期には比恵・那珂遺跡群全体に遺跡が存在するが、後半期は那珂遺跡群を中心に遺跡が展開する。

1 **比恵遺跡群**
2 那珂遺跡群
3 東那珂遺跡
4 五十川高木遺跡
5 諸岡 B 遺跡
6 那珂君休遺跡
7 板付遺跡
8 高畑遺跡
9 諸岡 A 遺跡
10 井尻遺跡
11 笹原遺跡
12 三筑遺跡
13 麦野 A 遺跡
14 井相田 C 遺跡
15 井相田 D 遺跡群
16 立花寺 B 遺跡群
17 下月隈 C 遺跡群
18 上月隈遺跡群
19 下月隈 B 遺跡群
20 天神森遺跡群
21 宝満尾遺跡
22 席田大谷遺跡群
23 久保園遺跡
24 席田青木遺跡群
25 上牟田遺跡
26 東比恵三丁目遺跡
27 雀居遺跡

Fig.1　比恵遺跡群位置図（1/25000）

Fig.2　比恵遺跡調査区位置図（1/8000）

Ⅲ．調査の記録

１、調査の概要

第 144 次調査区は、比恵遺跡群の北寄りに位置する。敷地面積は 1556㎡である。

調査前の状況は平地式駐車場で、周辺道路よりもやや高くなっていた。確認調査の結果、耕作土盛土の下の地表下 50cm で地山の黄褐色粘質土（鳥栖ローム層）に達し、密な遺構の残存が確認された。調査期間の短縮のため、始めに地表下 30cm まで表土の鋤取りを行い、残りの深さ 20cm 分の表土は重機を用いて場内で反転処理した。調査区は細長く南東側のⅠ区と北西側のⅡ区を設定し（PL. ２）、最後に南西側の入り口付近をⅢ区とした。各調査区の調査期間はⅠ区が８月～ 12 月初旬、Ⅱ区が 12 月～２月（調査終了まで）、Ⅲ区が２月（Ⅱ区と併行）である。立体駐車場建設が遺跡に影響を与える調査対象面積は 1350㎡であったが、最終的な調査面積は 1248㎡である。

遺構面の標高は約６m でほぼ平坦である。しかし、Fig. ５で示した柱穴の底の標高をみると、調査区の南東側中央部に深い柱穴が少ないことがわかる。旧地形ではこのあたりが高くなっており、土地を平坦化した際に多く削られたためであろう。竪穴建物の残存が浅いことも、これを裏付ける。よって、認識できなかった竪穴建物も多数存在すると考えられる。

遺構の埋土は主に３種類に分けられ、おおよそ遺構の時期に対応する。弥生時代から古墳時代の土が黒褐色を呈するのに対し、７世紀の遺構埋土はやや灰色がかり、粒の大きな砂を含むために掘ると少しじゃりっとした印象がある。この２者は良好な土の状態での遺構検出時にはなんとなく見分けがつくが、土の乾燥状況などからすぐに見分けがつかなくなる。検出時の土の違いを記録してはいるが、長い調査期間の中で、見分ける基準を一定に保つことは困難であった。これらに対し、中世の遺構埋土は茶色がかった暗褐色で、比較的見分けがつきやすい。ただし、該当するのは SD225 とその周辺のいくつかの柱穴のみである。なお、土層観察では土色にあまり違いが認められず、主にロームの粒やブロックの混じり方の違いを基に分層を行った。

本調査区で検出された遺構は弥生時代前期後半～古墳時代前期の竪穴建物 58 軒、弥生時代中期～７世紀の掘立柱建物 25 軒、弥生時代後期の周溝状遺構と、７世紀および中世の溝４条、弥生時代中期・弥生時代終末期および７世紀の井戸が１基ずつ計３基、その他土坑と柱穴などである。非常に密に柱穴を検出したため、本来はもっと多くの建物が存在したと考えられる。特に弥生時代終末期～古墳時代前期の集落は多数の建物が密に存在する様相が伺え、『魏志倭人伝』に奴国には「二万余戸あり」と記された風景を想像させる。比恵遺跡群の中では近年稀に見る広い面積の調査であることから、集落の変遷を追える貴重な調査となった。遺構の変遷に関しては、「Ⅴ．まとめ」にて詳しく検討したい。

特筆される遺物は、弥生時代では銅戈の鋳型や青銅製鋤先、井戸から出土した衣笠の柄や臼などの木器、朝鮮半島の無文土器、古墳時代前期の肥後系・豊前系・山陰系・瀬戸内系・北近畿系・東海系・北陸系等の多様な外来系土器や鹿角装刀子などがある。また一部の住居では台石・叩き石・各種砥石・ミガキ石といった石器のセットが揃っており、簡易な鍛冶工房であったと考えられる。これに関連して、調査区内で多数の砥石や台石・叩き石、また小型の鏨もしくは鑿と考えられる鉄器等が出土したことは注目できよう。石錘や軽石といった漁労具、また紡錘車も一定数出土している。

なお、調査期間中の 2016 年 11 月 12 日に「歩いてみよう古代のムラ」と題して周辺住民を対象とした現地説明会を行った。記者発表等は行わなかったが、周辺の小学校を通して広報を行い、老若男女約 200 名の方々にご来場いただいた。地域の子供たちが多数参加してくれたことがとても印象的で、地域における遺跡の在り方を考えるひとつの機会となった。

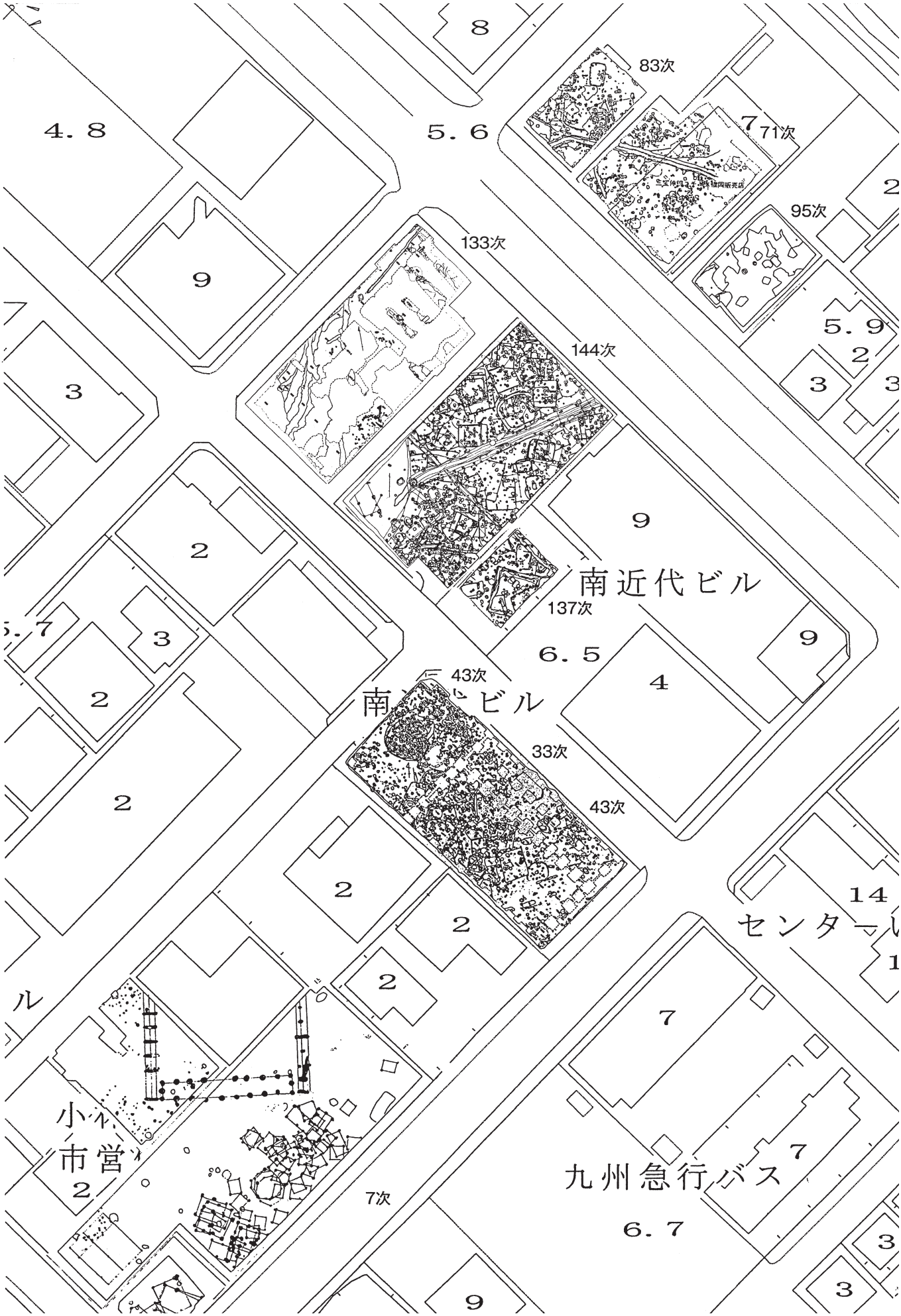


Fig.3　第 144 次調査区位置図（1/1000）

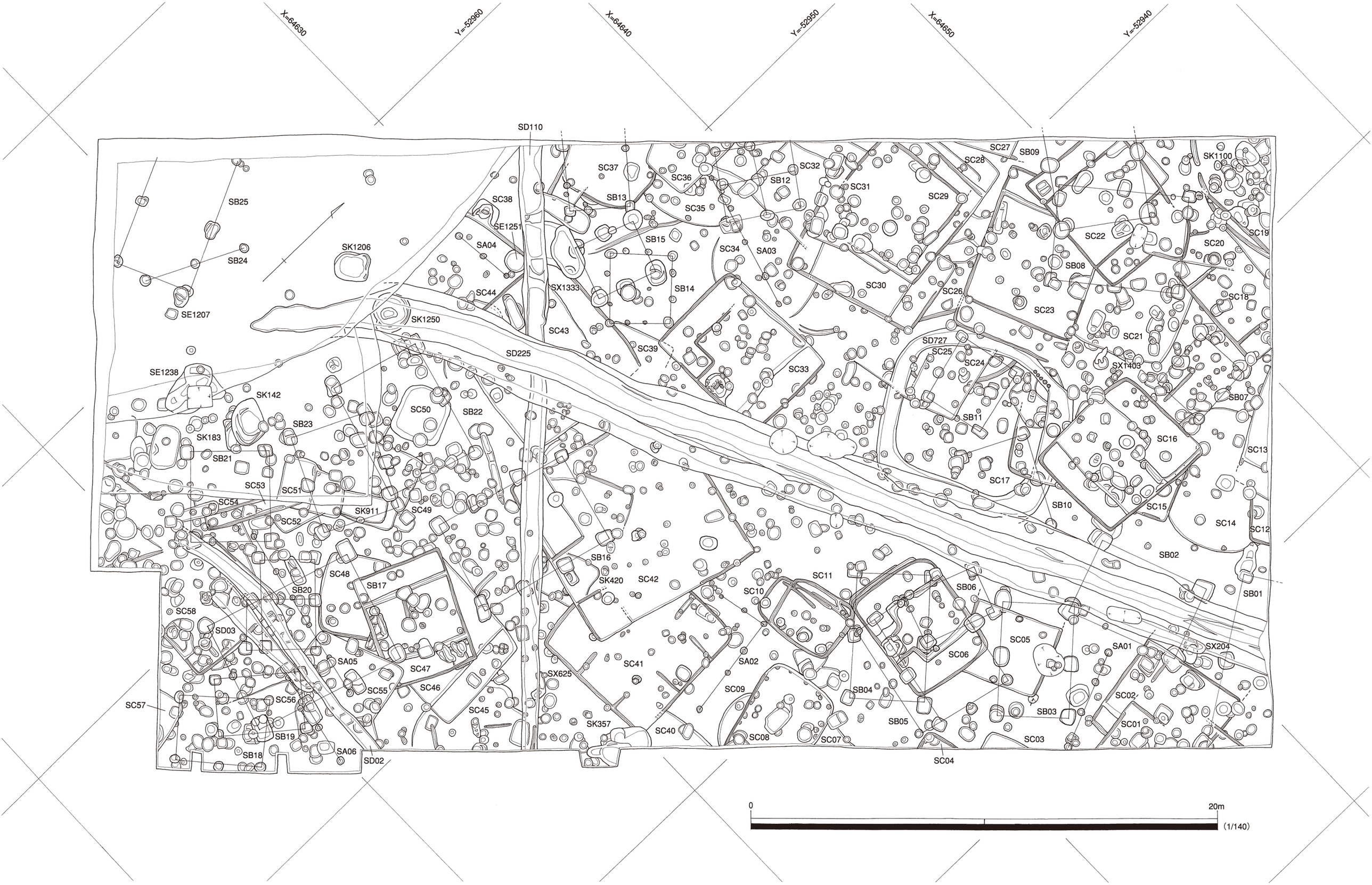


Fig.4　第144次調査区全体図

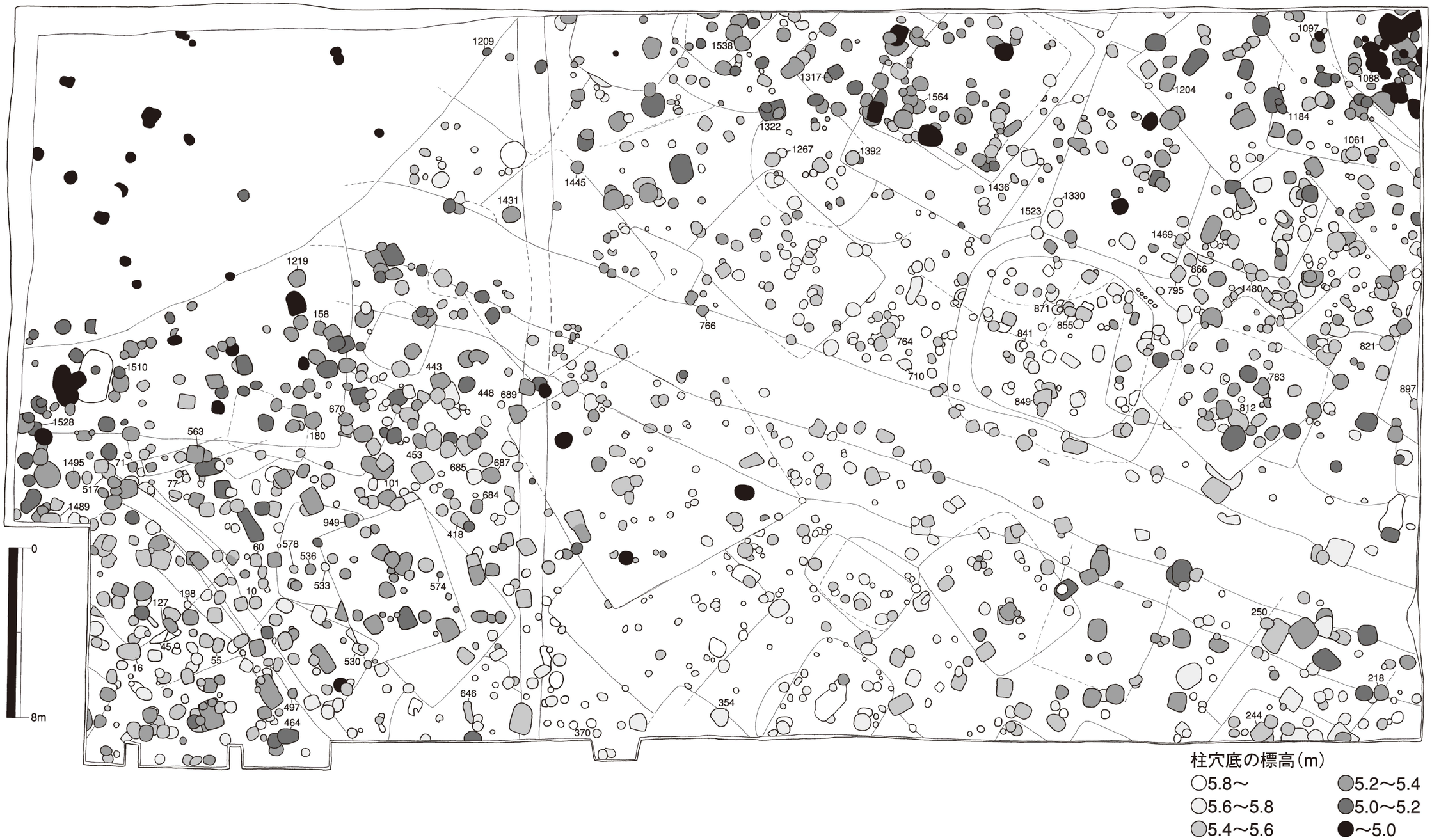


Fig.5　柱穴の深さと遺物出土柱穴の位置

２、竪穴建物

58 の遺構を竪穴建物と認定した。主に弥生時代前期後半の円形住居と中期末の小型方形住居、弥生時代終末期～古墳前期前半の方形住居に分けられる。当地は多くの削平を受けており、床面が辛うじて残るようなものも多い。また、Fig.77 ～ 81 で示すように大きめの土器の破片を出土するような柱穴も多数あるため、本来は認定した以上の数の竪穴建物が存在したことは間違いない。壁溝状の痕跡のみが残る部分もあり、少なくとも 70 軒は超えるものと思われる。なお、弥生時代中期末の小型住居に関しては床面で地山主体土がぼやっとした貼床状の痕跡がみられたため、竪穴建物と認定したが、本来は土坑かもしれない。また、弥生時代終末期から古墳時代前期前半の方形住居では、貼床盛土によるベッド状遺構がつくものが多いが、貼床は地山の黄褐色ローム土を主体とするとは限らず、埋土に近い暗褐色～黒褐色を呈する土を用いるものが多数存在する。おそらく、弥生時代前期から遺構が密に形成され､弥生時代終末期～古墳前期にその土を掘削して貼床として盛土したためであろう。よって、調査時にはっきりと明確に検出することは難しく、図化したベッドの高さも「検出できた高さ」を示すものであるため、本来はもっと高さがあっただろうと考えられる。

SC01（Fig. 6・7　PL. 3）

調査区東端で検出した方形住居で、調査区外に伸びる。SC02 を切ることは確実だが、切り合い部分の平面のラインはやや不明確で、多少遺物の混じりがあるかもしれない。SC02 の床面で壁溝状の痕跡を検出し、これを SC01 のものとみなし、図化している。また、SC02 の掘り方の外の東側で、地山の遺構検出面上に壁溝状の痕跡を検出した。これが SC01 に伴うとすれば、南北にベッド状遺構をもつ可能性が高い。

１は複合口縁壺。遺構の時期は SC02 を切ることから、古墳時代前期だろう。

SC02（Fig. 6・7　PL. 3）

調査区東端で SC01 に切られる方形住居。南側は地山ローム主体土の盛土によるベッド状遺構をもつ。北側も対称にベッドをもつと考えられるが、SD225 に削られる。中央炉は方形の掘り込みの底面がガチガチに焼けており、それを切り込むようにピット状の掘り込みがある。炉の方形の掘り込みの壁際の埋土は炭を多く含んでいた。主柱穴は２本と考えられる。SP205 の上層からは完形に近い複合口縁壺が出土したが、近接する SX204 の状況と似ており、複合口縁壺が入った浅い掘り込みと柱穴が別遺構になる可能性もある。SP205 の土層から、何度か柱を立て直したと考えられる。主柱穴や炉の配置から、SK229 が屋内土坑である可能性がある。SK229 からは人頭大の石材がいくつか出土した。

２は SP205 出土、４・８が SK229 出土、７が炉直上出土である。２～４は壺。４は小型丸底壺で、磨かれているが胎土は砂粒を含み、角閃石・輝石のような鉱物や白くきらきら光る鉱物を含む。５・６が甕。６は布留系甕の模倣で、口縁部外面に接合痕が残る。８は凸レンズ形の底部。９はミニチュア土器。10 は滑石製の石錘。7.4g。遺構の時期は古墳時代前期。

SC03（Fig. 7）

調査区東側で検出した。方形住居の端部と考えられる。

SC04（Fig. 7）

調査区東側で検出した。方形住居の端部と考えられる。

SC05（Fig. 7・8　PL. 3）

調査区東側で検出した方形住居。SC06 に切られる。東西の辺のみに壁溝が残る状況や、主柱穴と考えられる柱穴の配置から本来は南北に地山削り出しのベッド状遺構がつくが、削られていると考

Tab.1　竪穴建物一覧

報告 No.	整理 No.	奥行	幅	深さ	プラン	柱数	備考	時期
SC01	SC201	4.9+	3.9+	0.15	長方形	2?	削り出しベッド？	古墳前期
SC02	SC202	4.8	4.4+	0.15	長方形	2	盛土ベッド	古墳前期
SC03	SC209	1.8+	–	0.1	方形	?		?
SC04	SC210	1.5+	–	0.05	方形	?		?
SC05	SC206	3.8	3.1+	0.25	長方形	2	削り出しベッド	古墳前期ⅡA
SC06	SC208	3.9	5.0	0.15	長方形	2	L 字盛土ベッド　建て替え	古墳前期
SC07	SC253	1.6+	–	0.1	方形	?		弥生中期末？
SC08	SC251	3.4	4.4	0.15	長方形	?		弥生中期末？
SC09	SC252	2.7+	–	0.1	円形	?		弥生前期後半？
SC10	SC211	2.1	2.8	0.1	長方形	2?		古墳前期？
SC11	SC211	2.7	3.1	0.1	長方形	2?		弥生終末期？
SC12	SC950	0.9+	2.3+	0.1	方形	?		弥生後期か
SC13	SC744	1.7+	5.0+	0.3	長方形	?	削り出しベッド	弥生終末期？
SC14	SC701	6.2	–	0.15	円形	?		弥生前期後半
SC15	SC702	3.9	5.2	0.1	長方形	2		弥生終末期？
SC16	SC703	4.6	5.5	0.2	長方形	2	L 字？盛土ベッド　鍛冶？	古墳前期ⅡA
SC17	SC725	2.5+	5.1+	0.15	長方形	2	削り出しベッド	弥生終末期ⅠA?
SC18	SC1131	2.3+	5.2	0.2	長方形	2	盛土ベッド	古墳前期ⅡA
SC19	SC1133	–	–	0.15	?	?	住居の集合体？	?
SC20	SC1134	1.9+	3.5+	0.05	長方形か	2?	盛土ベッド	古墳前期
SC21	SC1132	4.3+	4.6+	0.15	方形	?		弥生終末期ⅠA?
SC22	SC1135	4.4	5.2	0.2	長方形	2	削り出しベッド	弥生終末期ⅠA
SC23	SC1136	4.9	7.2	0.2	長方形	2	削り出しベッド	弥生終末期ⅠA?
SC24	–	4.8+	–	0	円形	?		弥生前期後半？
SC25	SC726	3.0+	5.0+	0.1	方形	?		弥生終末期？
SC26	SC1465	3.5+	5.1+	0.15	長方形か	?		弥生終末期ⅠA?
SC27	SC1137	0.8+	2.9+	0.15	長方形か	?	削り出しベッド	弥生終末期？
SC28	SC1299	5.0	6.3	0.3	長方形	2	削り出しベッド	古墳前期ⅡA
SC29	SC1426	4.5	5.9+	0.4	長方形	2	削り出しベッド	古墳前期ⅡA
SC30	SC1138	3.6?	6.1	0.2	長方形	2	削り出しベッド	古墳前期ⅡA
SC31	–	2.4?	3.2?	0.1	長方形	2?		?
SC32	SC1301	3.0+	4.7+	0.1	長方形	2?	ベッド？	古墳前期
SC33	SC723	4.5	5.8	0.15	長方形	2	盛土ベッド　建て替え？	古墳前期ⅡA
SC34	SC1304	4.6	–	0.1	円形	4?		弥生前期後半か
SC35	SC1305	3.6+	–	0.1	円形	?		弥生前期後半？
SC36	SC1300	2.4	3.1+	0.3	長方形	?		弥生中期末か
SC37	SC1303	3.9	3.3+	0.4	長方形	?		弥生中期末
SC38	SC1302	4.2+	3.5+	0.1	長方形	2?	盛土ベッド？	古墳前期か
SC39	SC1306	2.9	0.7+	0.1	方形	?		弥生中期末か
SC40	SC213	3.0+	1.6+	0.1	方形	?		弥生中期末
SC41	SC212	6.0	6.0	0.05	正方形	4		弥生終末期か
SC42	SC407	7.6	7.6	0.15	正方形	4		古墳前期
SC43	SC617	6.1	6.4	0.2	正方形	4		古墳前期
SC44	SX1407	1.6	3.5	0.15	長方形	?		弥生中期？
SC45	SC169・650	?	?	0.1	?	?	住居の集合体？　炉あり	?
SC46	SC107	4.6	5.2+	0.3	長方形	2	盛土ベッド	弥生終末期ⅠB
SC47	SC109	3.9	5.1	0.25	長方形	2	盛土ベッド	古墳前期ⅡA
SC48	SC111	2.6	3.5	0.1	長方形	4?		弥生中期末
SC49	SC419	2.5+	3.5	0.35	長方形	?		弥生中期末？
SC50	SC624	2.1	2.5	0.4	長方形	?		弥生中期末か
SC51	SC178	2.1	2.8	0.25	長方形	?		弥生中期末
SC52	SC08	1.6+	1.0+	0.05	方形	?		弥生終末期？
SC53	SC06	4.1+	0.6+	0.15	方形	?		弥生終末期？
SC54	SC05	3.0+	0.8+	0.2	方形	?		弥生終末期？
SC55	SC114	3.0+	4.1	0.1	方形	?		古墳前期ⅡB?
SC56	SC04	2.7+	0.7+	0.05	方形	?		?
SC57	SC09	2.3+	1.4+	0.2	方形	?		弥生中期末か
SC58	SC11	4.6	4.0+	0.2	方形	4?	ベッド？	古墳前期ⅡBか

※奥行・幅・深さの単位は全て（m）。深さは残存での最大の深さ。+ はそれ以上であることを示す。

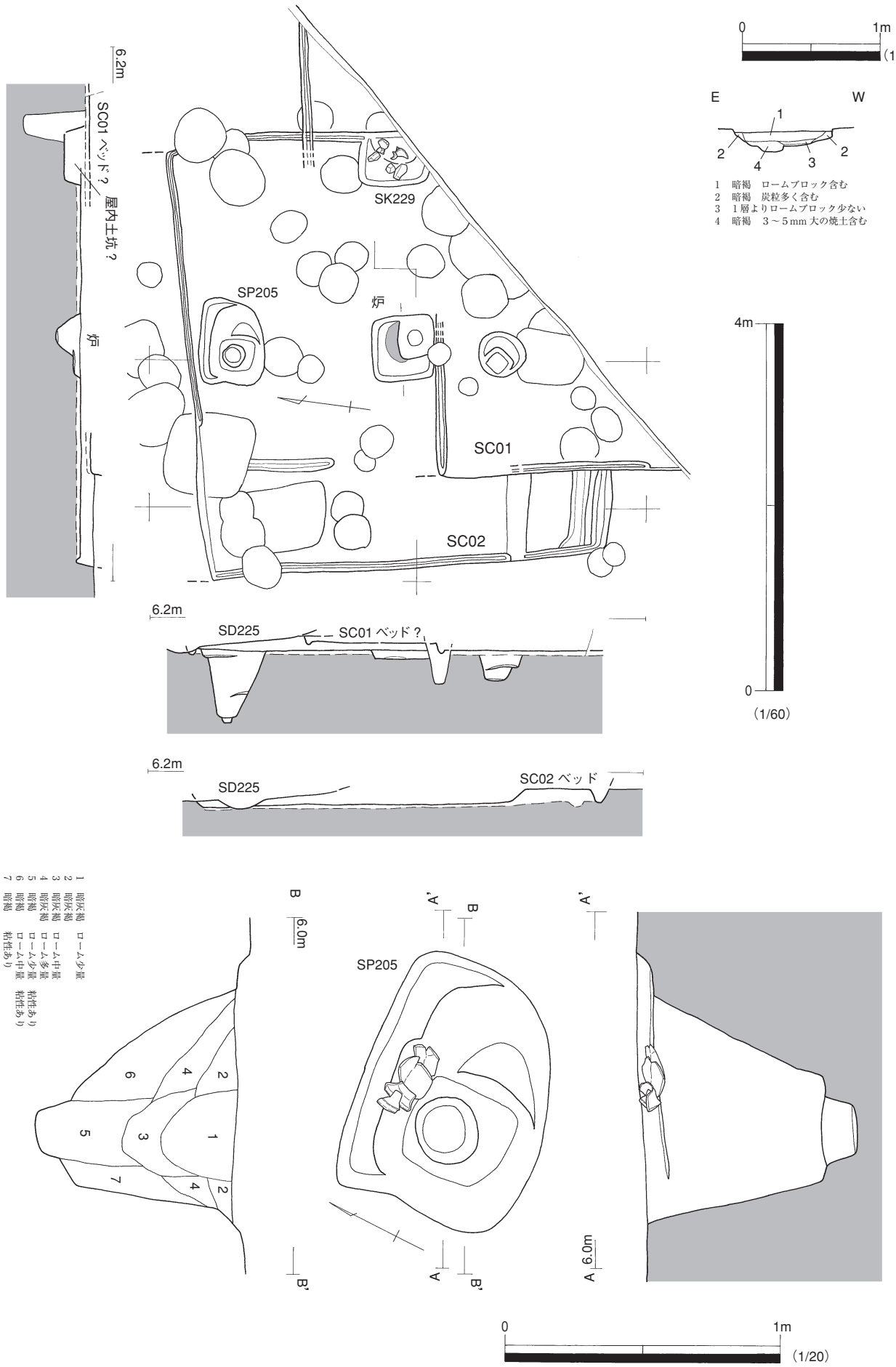

0
1m
(1/40)
E
W
1
2
4
3
2
1　暗褐　ロームブロック含む
2　暗褐　炭粒多く含む
3　1層よりロームブロック少ない
4　暗褐　3～5mm大の焼土含む
SK229
SP205
炉
SC01
SC02
6.2m
SC01ベッド？
屋内土坑？
炉
4m
0
(1/60)
6.2m
SD225
SC01ベッド？
6.2m
SD225
SC02ベッド
1　暗灰褐　ローム少量
2　暗灰褐
3　暗灰褐　ローム中量
4　暗灰褐　ローム多量
5　暗褐　ローム少量　粘性あり
6　暗褐　ローム中量　粘性あり
7　暗褐　粘性あり
B
6.0m
B'
A'
B
SP205
A
B'
A'
A
6.0m
0
1m
(1/20)

Fig.6　SC01・02

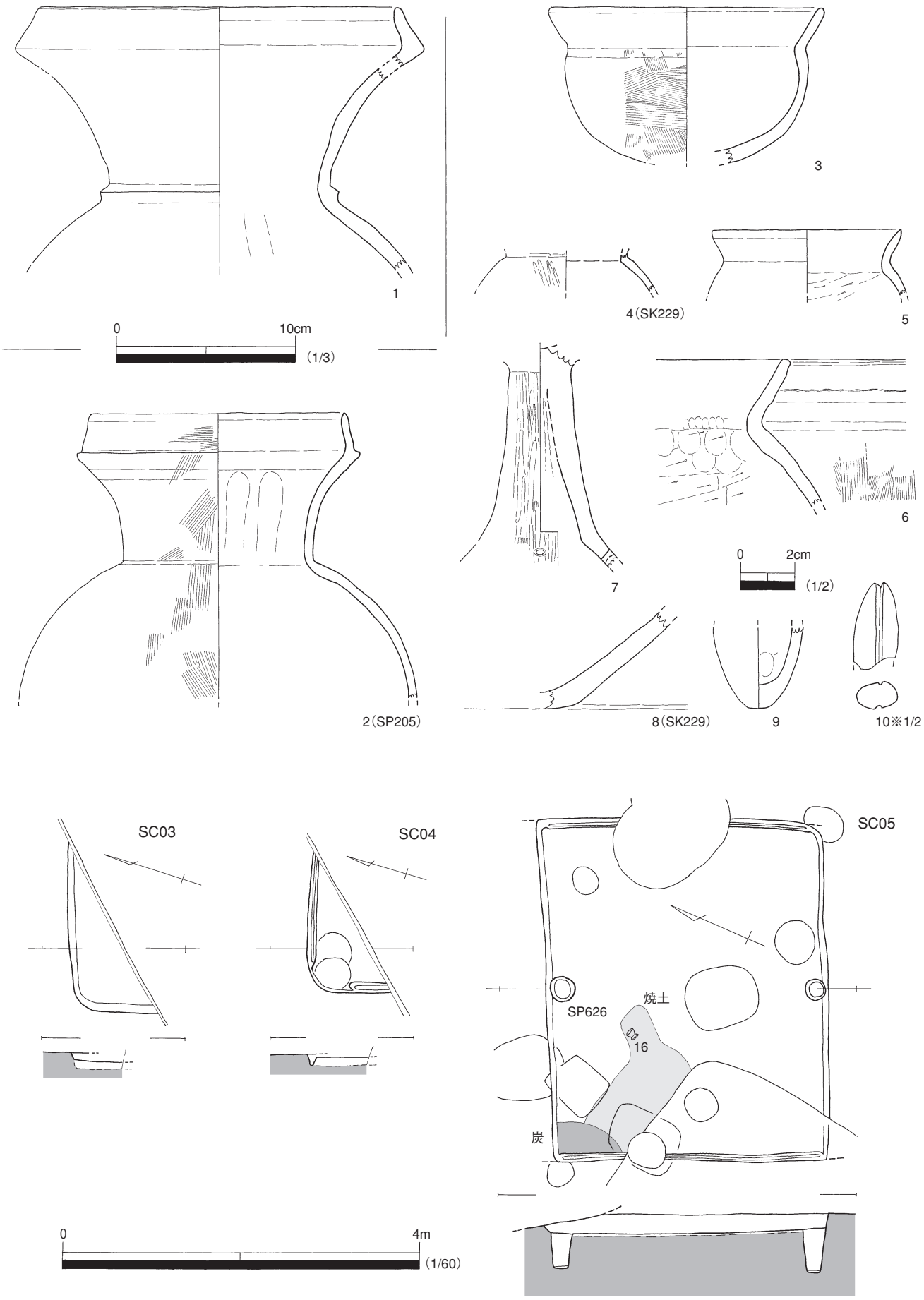


Fig.7　SC01・02 出土遺物および SC03・04・05

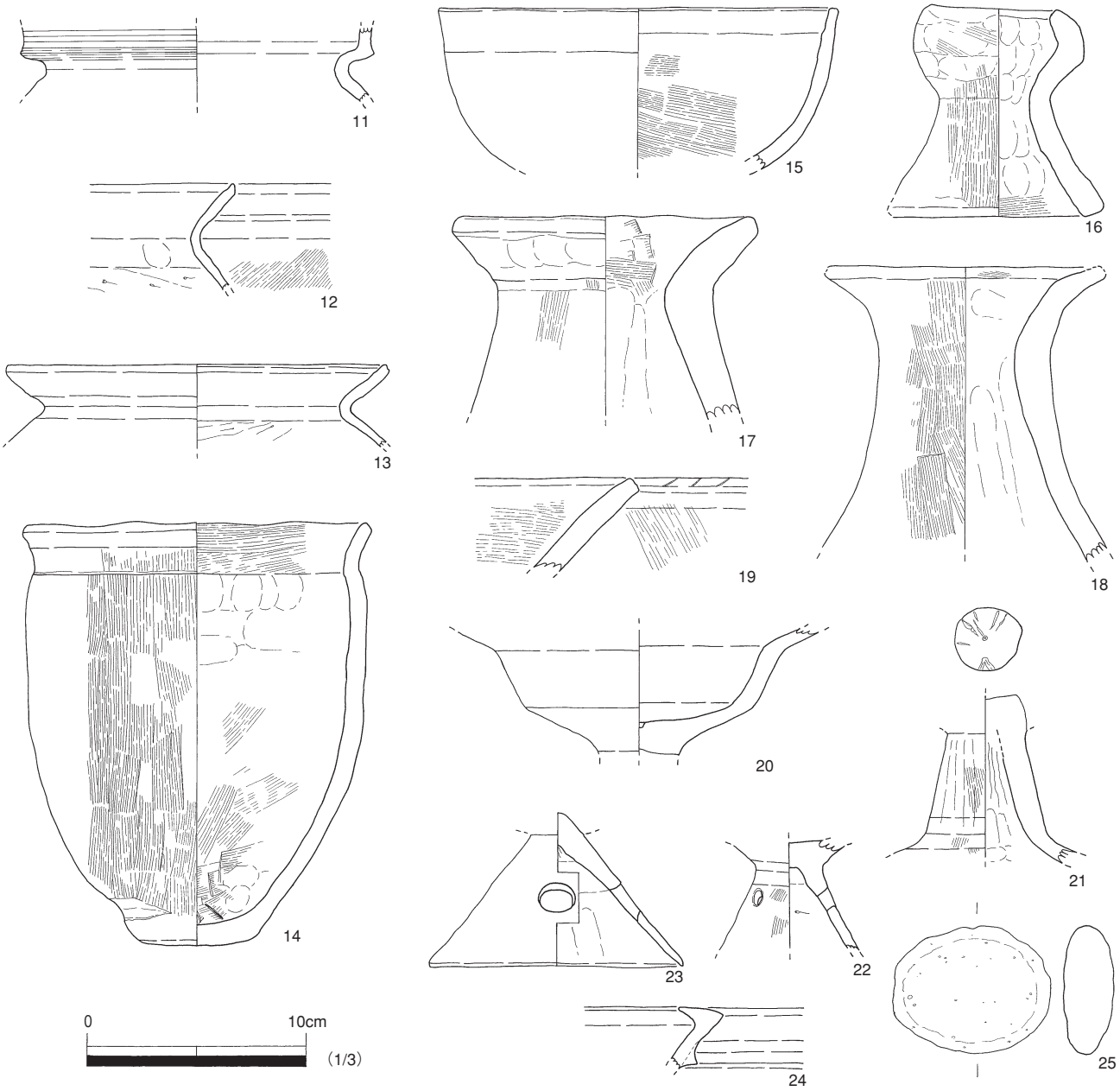


Fig.8　SC05 出土遺物

えられる。主柱穴は２本。SP626 は径いっぱいの大きさの土器が出土し、柱が抜き取られた後に入れられたものと考えられる。東側の一部が攪乱に切られ、本来はここに屋内土坑があった可能性がある。西側隅部付近に炭と焼土を多く含む土が面的に広がる。

11 ～ 14 は甕。11 は東部瀬戸内系か。14 は SP626 の柱痕より出土した。胎土に径３mm 以下の赤色粒を多く含む。韓半島南部系の土器の可能性がある。15 は鉢。西側の焼土分布範囲から出土。16 ～ 19 は器台。20 ～ 22 は高坏。22 は３方向に穿孔する。近江・東海系か。23 は小型器台。４方向に穿孔する。24 は弥生土器で壺か。内外面丹塗り。25 は軽石。遺構の埋没時期は古墳時代前期（Ⅱ A 期）だが、遺構の軸から掘削時期は弥生時代終末期に遡る可能性がある。

SC06（Fig. 9　PL. 3・4）

調査区東側で検出した方形住居。SC05 を切ることは確実だが、切り合い部分の掘り方のラインは明確でない。全体的に１段ずつ掘り下げる過程で、左右対称にＬ字に土の違いが観察され、貼床盛土に

よるベッド状遺構の存在を確認した。ベッド状遺構の土は地山ローム粒を多く含むが、暗灰褐色土でわかりづらく、本来は認識できた高さよりも高く盛土があったかもしれない。ベッド状遺構の内側に沿うように溝があり、屋内土坑に接続する。溝の埋土には粗砂が多く含まれ、排水溝的な役割が想定される。一部では砂を含む土を埋土とする溝の上に貼床の延長で地山ローム主体土が乗っており、暗渠状になっていた可能性がある。屋内土坑の中位から上位では、住居中央に向かって連続する溝状の掘り込みが確認され、この掘り込みの埋土にも粗砂が多く含まれていた。中央炉はいくつも浅い掘り込みが切り合い、赤くガチガチに固まる。西側では壁溝が３条ほど切り合う様子が観察され、また貼床を剥ぐと北側で壁溝の内側に別の壁溝が表れた。主柱穴は２本だが、対になる柱穴が３組あることなどからも、建物が２回以上建て直された可能性が高い。建て直しの目的として、床面積の拡張が想定される。

27・34 は屋内土坑から出土した。26・27 は壺で、26 は胎土に径２mm 以下の白色粒を多く含む。28 ～ 30 は高坏。28 は暗文がつく。30 は脚端部に向かって広がる部分に角がある。31 は玄武岩の円礫。32・33 は丸石で、砂岩か。34 は鉄製の鹿角装刀子で、刃部が欠損する。35・36 は SC06 を切る SP409 出土とみなしたが、もしかしたら SC06 か SP486（SB05）に伴うかもしれない。35 は鉢。庄内甕の製作技法で作られ、左上がりのタタキらしき痕跡が確認できる。輝石や流紋岩片とみられる鉱物を含み、摂津産の可能性がある。36 は高坏。SC06 の時期は SC05 を切ることからも、古墳時代前期であろう。

SC07（Fig. 9　PL. 4）

調査区東側で SC08 に切られ、調査区外に伸びる。方形住居と考えられる。

37 は壺で、床面直上から出土した。胎土に白色砂粒を多く含む。遺構の時期は弥生時代中期末か。

SC08（Fig. 9　PL. 4）

調査区東側で検出した SC07・09 を切るやや小型の方形住居。調査区外に伸びる。主柱穴は不明。貼床を掘り下げると壁に沿って連続する小穴を検出した。また、貼床掘削後、中央付近に地山ローム主体土を埋土とする土坑状の掘り込みを確認したが、SC08 に伴うかは不明。

出土した土器は小片ばかりだが弥生時代中期頃とみられる破片が多い。38 は SC07・08・09 いずれかに伴うもの。菫青石ホルンフェルス（頁岩質砂岩）製で、石包丁もしくは石鎌か。39 は鉄製品で、折り返しがある。鎌か。40 は SP385 出土で、竪穴建物に伴うかは不明。鉄素材か。52.7g。遺構の時期は弥生時代中期と考えておく。

SC09（Fig. 9　PL. 4）

SC08 に切られる円形住居と考えられ、調査区外に伸びる。主柱穴は不明。遺構の時期は他の円形住居の時期から、弥生時代前期後半か。

SC10・11（Fig.10　PL. 4）

調査区東寄りで検出した。小型の竪穴建物が２軒程度切り合っていると考えられる。主柱穴はそれぞれ２本と考えられ、長辺の片方の壁際に寄る。SP920 は貼床掘削後に検出し、また SP315 は壁溝に切られる柱穴に切られる状況から、想定図に示したように SC10 が SC11 を切ると考えられる。南側の壁際では焼土を面的に検出した。

遺構の軸から、時期は SC11 が弥生時代終末期、SC10 が古墳時代前期と考えている。小型であるので、他の住居に付属する物置のような建物だろうか。

SC12（Fig.10）

調査区北東側で検出した方形住居。SC13 に切られ、調査区外に続く。

床面直上で多くの土器片が出土した。41・42 は壺で、同一個体の可能性がある。43 は甕。遺構の時

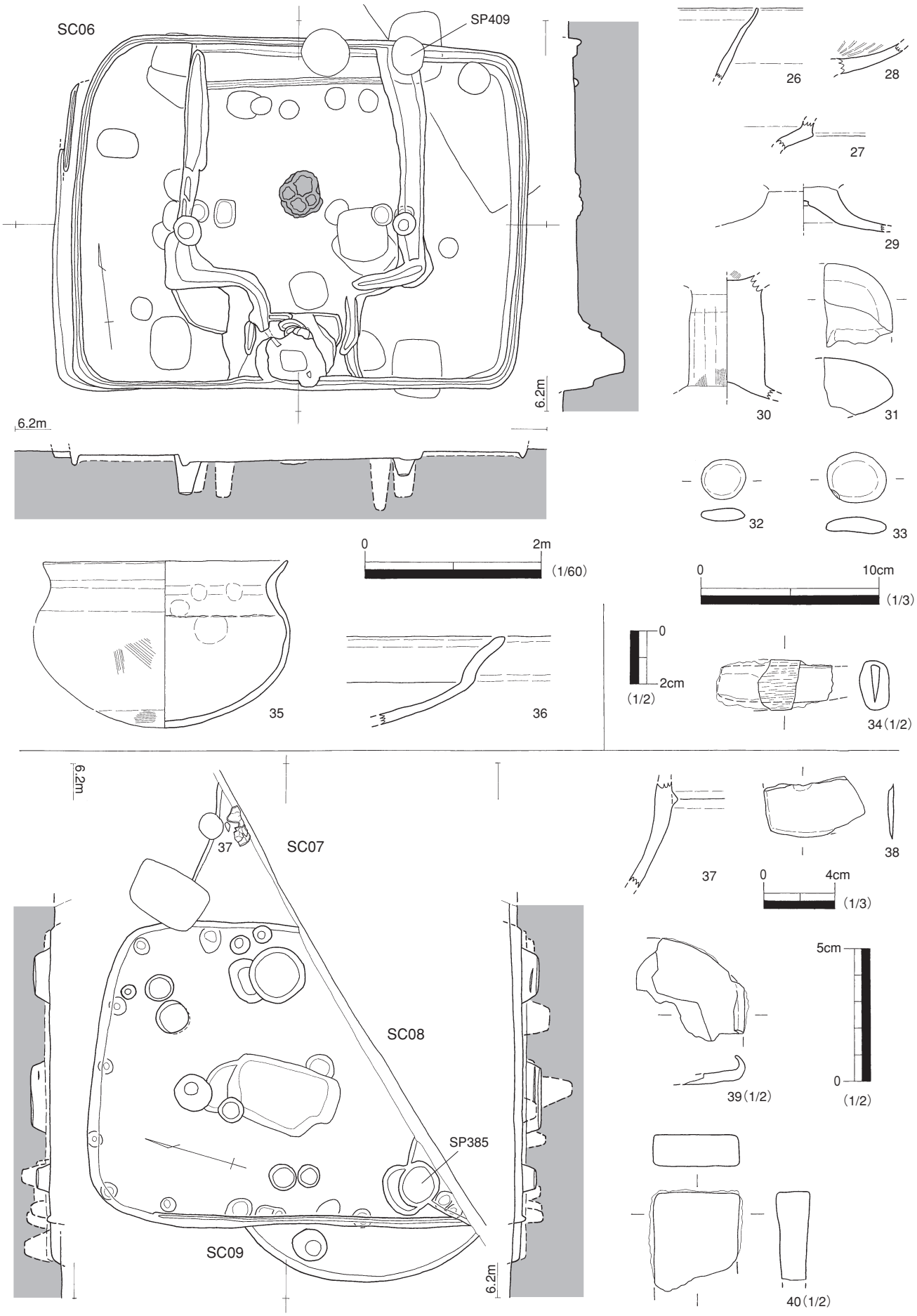


Fig.9　SC06・07・08・09

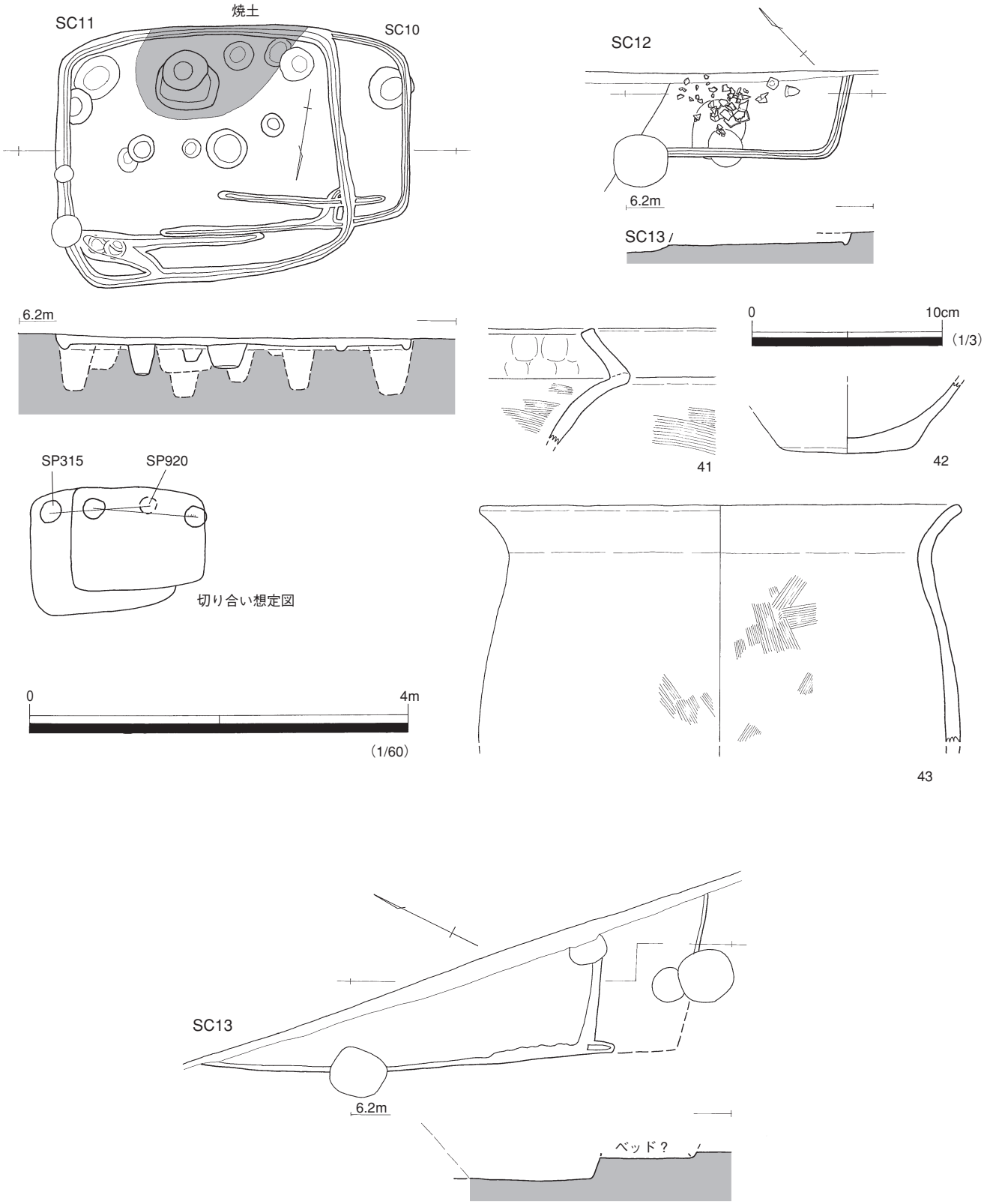


Fig.10　SC10・11・12・13

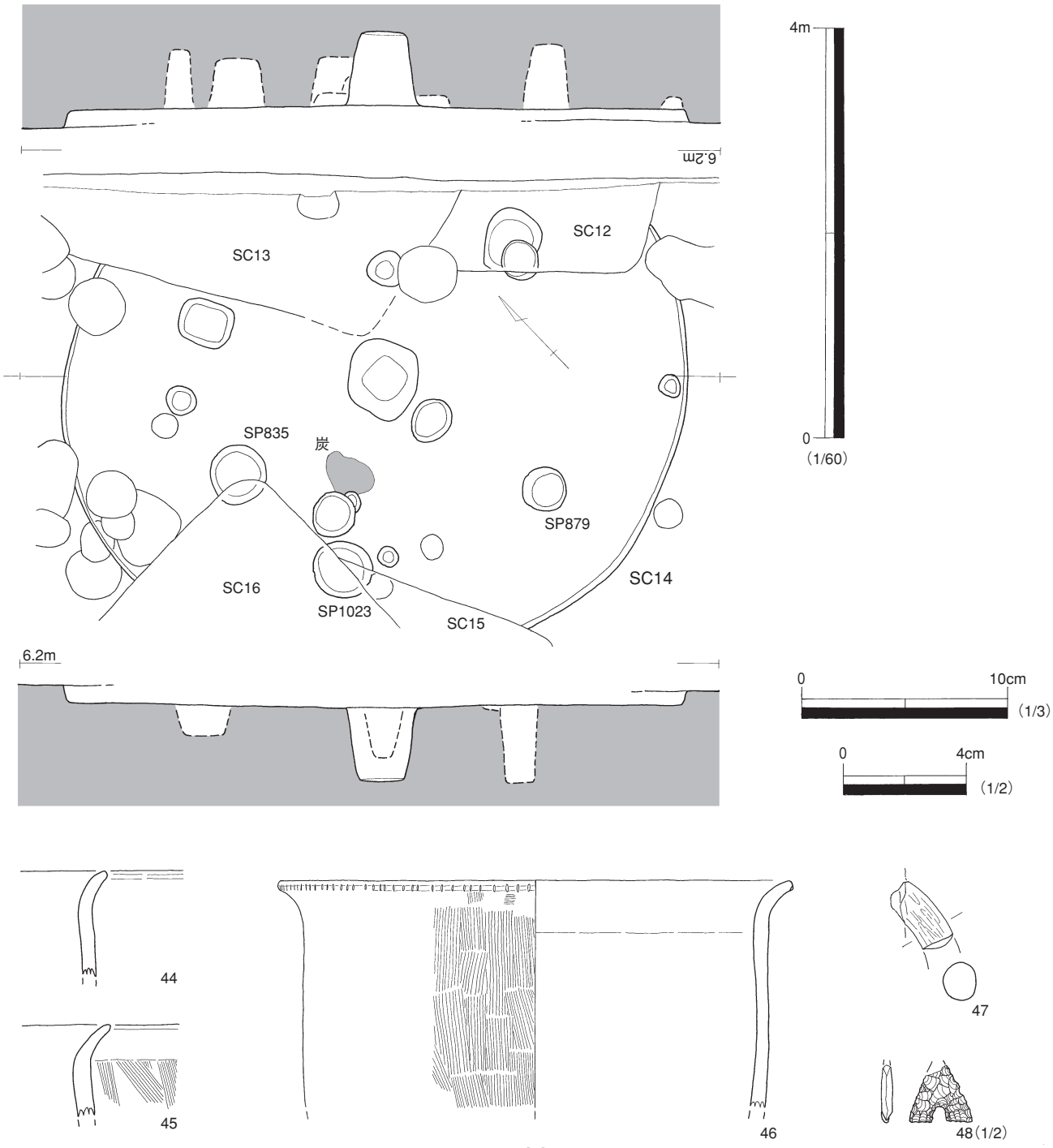


Fig.11　SC14

期は後期後半頃（下大隈式期）か。

SC13（Fig.10　PL. 4）

調査区北東側で検出した方形住居で、調査区外に伸びる。ベッド状遺構をもち、SC12を切ると考えられるが、ベッド状遺構の高さは遺構検出面に近く、南辺の掘り方のラインは不明確である。また、西辺壁面と床面との境が直角でなくだらっとしており、貼床を認識できずに掘りとばした可能性が高い。西部瀬戸内系土器（456）を出土したSP897との切り合いは不明確である。遺構の時期はSC12を切ることから弥生時代後期後半以降で、軸から弥生時代終末期と考える。

SC14（Fig.11　PL. 4）

調査区北東側で検出した円形住居で、周囲の４軒の竪穴建物に切られる。主柱穴は不明確で、可能性がありそうなものを図化した。その中でSP879は出土遺物から主柱穴にあたると考えられる。やや西寄りの床面の一部で炭化木材を面的に検出した。

44・45は甕。46も甕で、SP879から出土した。47・48は柱穴出土で、SC14に伴うものかは不明。47はSP1023出土の不明土器で、把手か。丹塗り。48はSP835出土の黒曜石製石鏃。その他、黒曜石の破片が多数出土した。遺構の時期は弥生時代前期後半だろう。

SC15（Fig.12）

調査区北東側で検出した方形住居。SC16に切られ、床面の大部分は残っていない。北西側の辺はSC16の貼床を掘削した後に検出し、やや形が不明確である。主柱穴は２本と考えられる。SP1044の一部が屋内土坑である可能性がある。

49はSP780（主柱穴）出土だが、SC16からの紛れ込みかもしれない。青灰色泥岩製の砥石。遺構の軸から、時期は弥生時代終末期と考える。

SC16（Fig.12・13　PL. 4）

調査区北東側で検出した方形住居で、SC15･17を切る。南北に貼床盛土によるベッド状遺構がつき、北側はＬ字状になる。ベッド状遺構に沿うように溝があるが、一部屈曲部では暗渠状になり、盛土の下を通る。暗渠部分の溝の埋土は粗砂を多く含む。南側のベッドもＬ字状になる可能性があるが、柱穴との切り合い等から明確に検出できなかった。東側壁際中央の柱穴状の掘り込みが、屋内土坑の可能性がある。主柱穴は２本と考えられる。ベッド状遺構の配置や主柱穴の大きさなどで、SC06と類似する。

50～54は壺。51は山陰系。53は二重口縁壺で内側に炭素を吸着させる。豊前～西部瀬戸内系。54は複合口縁壺で内面に炭素を吸着させる。西部瀬戸内系の可能性がある。55～57は甕。56は磨滅しているとはいえ、かなり薄い。58は泥岩製で、砥石か。石斧や磨り石の可能性もある。59～63は砥石。59は「SC16付近」として取り上げたもの。石英斑岩製で、部分的に黒色化がみられるため、青銅器鋳型の転用品だろう。60・61は青灰色泥岩製で、同一個体の可能性がある。60は部分的に破損面を使用する。62・63は砂岩製。64は赤色泥岩か。貝殻の生痕がみられる。石器ではなさそうだが、意図的に持ち込まれている可能性が高い。65･66はミガキ石で、65は軽石製、66は安山岩製か。66はSD727と切り合う部分からの出土。67は礫岩製で、叩き石。68は玄武岩製の台石。69は黒曜石製の使用痕剥片か。70は土製投弾。71は不明土製品。その他、小さな焼成粘土塊が少し出土した。SC16では台石･叩き石と、目が粗いものから細かいものまである砥石、またミガキ石といった石器セットが揃っており、近接する不明炉（SX1403）も合わせて、（鉄器？）工房的な様相を示す。遺構の時期は古墳時代前期（ⅡＡ期）。

SC17（Fig.14）

SC16に切られる方形住居で、西側のベッド状遺構の貼床が残っていたことから、認識できた。西側のベッド状遺構は地山削り出しの上に薄く貼床をする。東側にも対象にベッド状遺構があったと考えられるが、SC16により削られる。ベッド状遺構の段はSD727の掘り方と重なり、図化したラインがどちらの遺構のラインにより近いかは不明確である。主柱穴は２本と考えられる。主柱穴の中間に埋土に焼土を含む浅い掘り込みが残り、炉の痕跡だろうか。屋内土坑の有無は不明だが、あるとすれば北側か。

72・73はSP860出土の壺。72はわずかに平底がある。73は豊前～西部瀬戸内系か。74はSP758

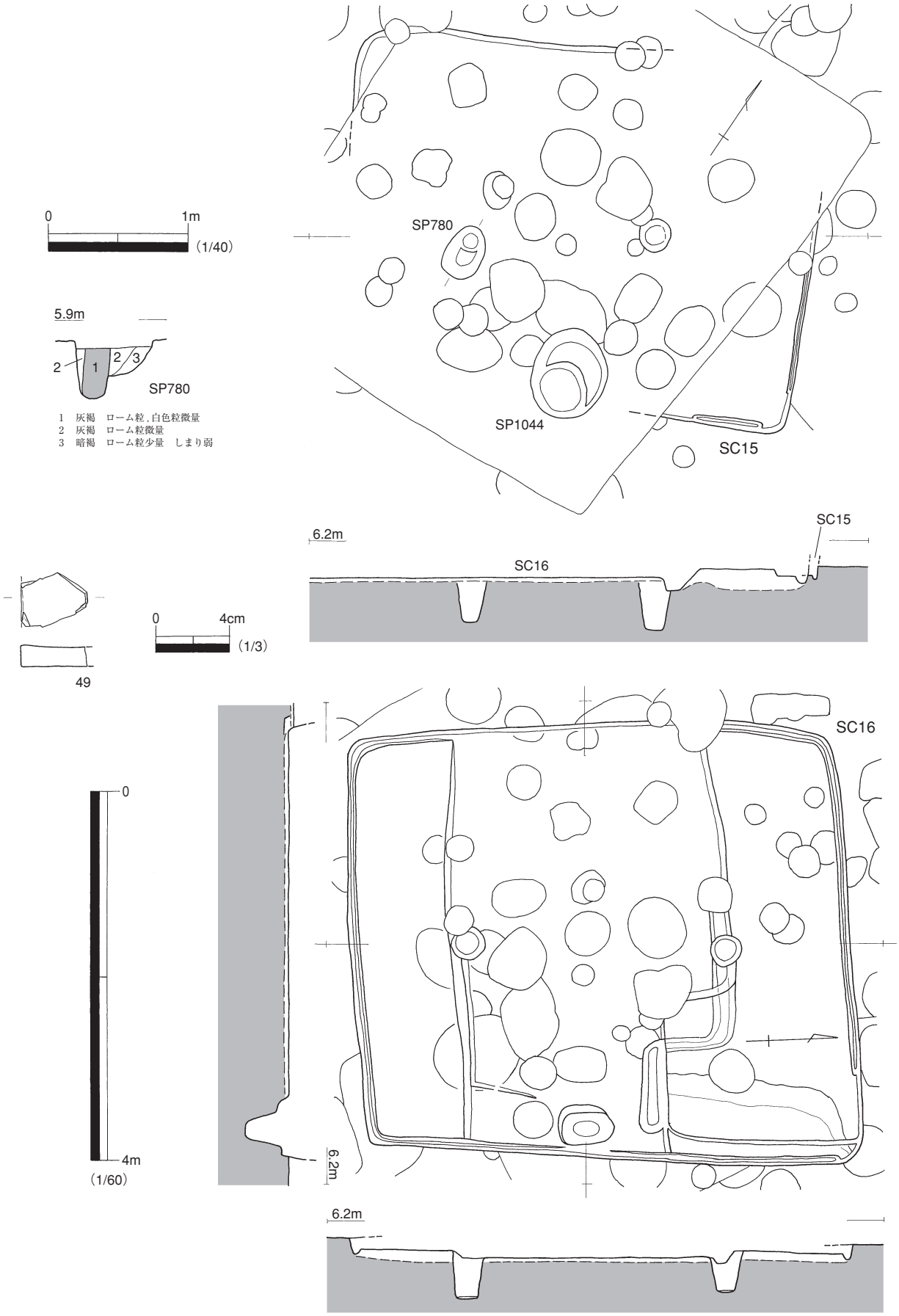


Fig.12　SC15・16

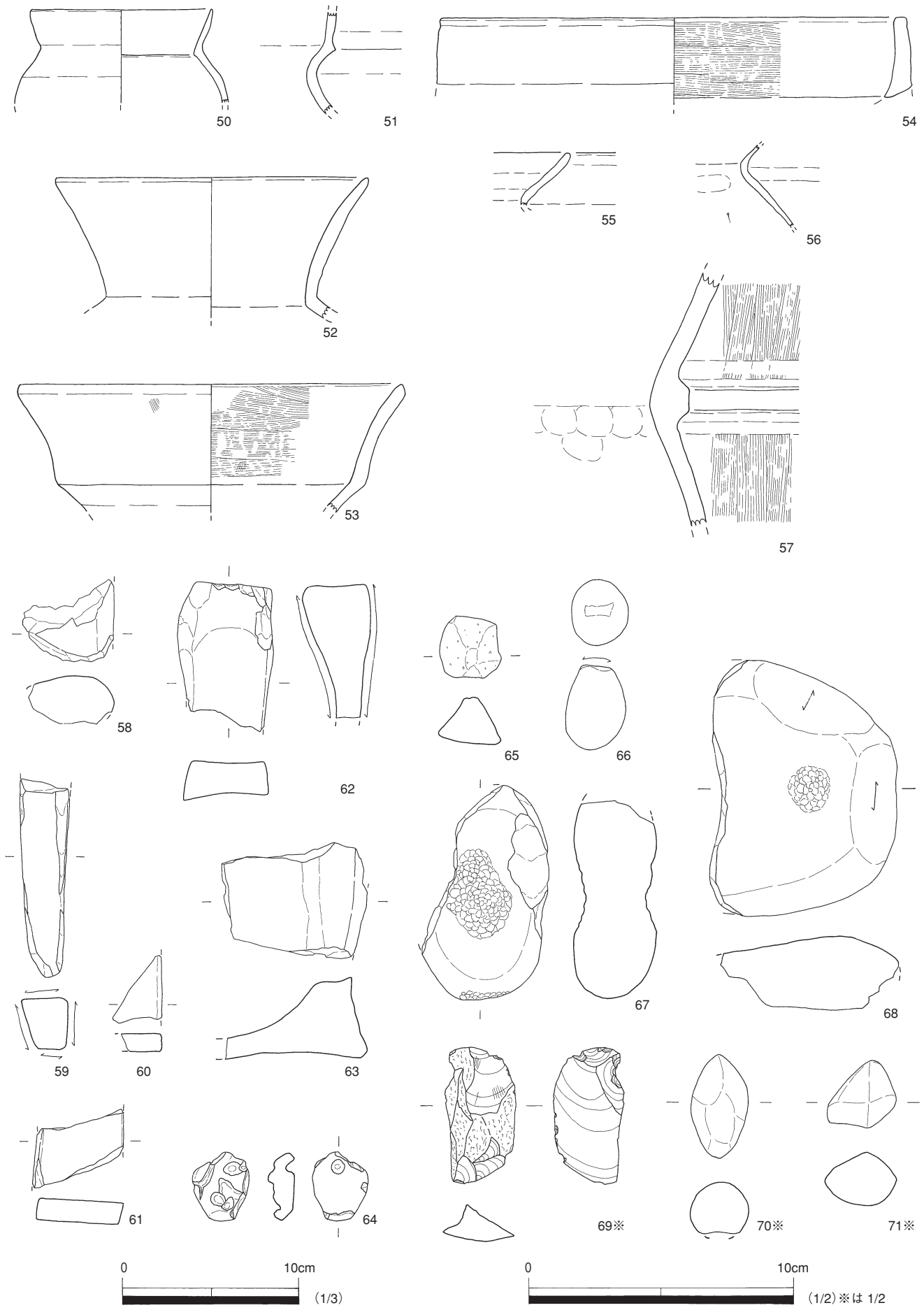


Fig.13　SC16 出土遺物

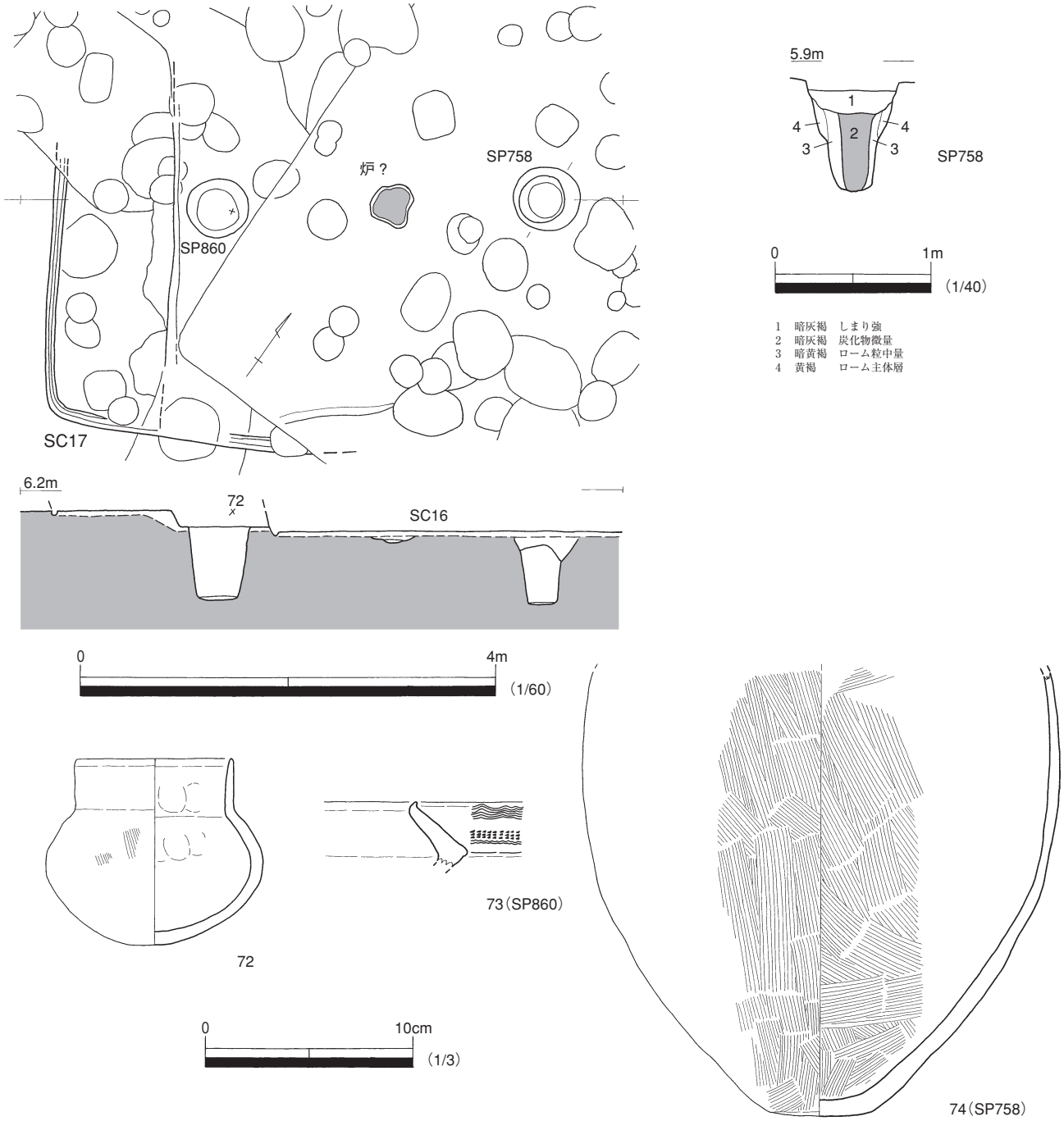


Fig.14　SC17

の柱痕から出土した。甕。遺構の時期は弥生時代終末期（ⅠＡ期?)。

SC18（Fig.15　PL. 5）

調査区北側で検出した方形住居で、調査区外に伸びる。北側は削られており、SC20 に切られる。東西にベッド状遺構がつくと考えられる。主柱穴は２本。屋内土坑があるとすれば、南側か。

75・76 は甕で、同一個体の可能性がある。完全に丸底化している。77 は高坏。78 は土製杓子か。遺構の時期は古墳時代前期（ⅡＡ期?)。

SC19（Fig.16）

調査区北側隅部で検出した壁溝状の掘り込みの集合体で、いくつかの住居が切り合っている可能性

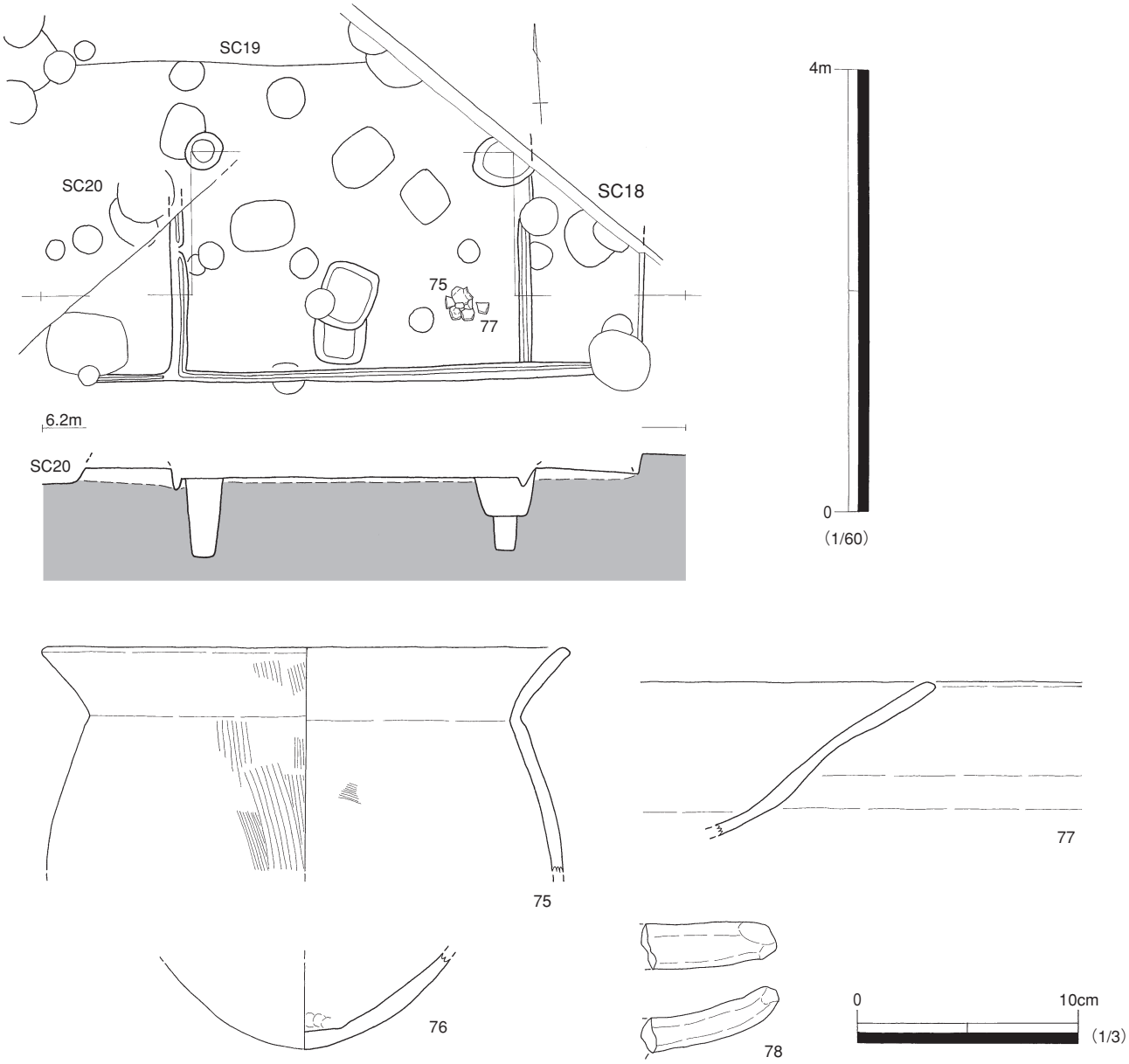


Fig.15　SC18

がある。ただし、調査区北側隅部は谷部に向かって落ちていくためか地山がぼやっとしており、遺構が不明確であった。79 は壺。80 は弥生土器甕で、底部穿孔がある。81 は須恵器系土師器の甑。外面は擬格子状のタタキの痕跡があり、内面に粗いハケ目のように見える平行当て具痕が残る。

SC20（Fig.16）

調査区北側で検出した。方形住居と考えられるが、貼床と壁溝・仕切り溝が辛うじて残る。貼床が SC18を切る。仕切り溝の痕跡から北東側と南西側に貼床盛土によるベッド状遺構がつく可能性が高い。

遺構の時期は SC18 を切ることから、古墳時代前期だろう。

SC21（Fig.17）

SC18・20・22、SX1403 などに切られる方形住居と考えられる。主柱穴は不明確で、可能性のあるものを図化した。

82 は泥岩製の砥石。鉄器を研いだ痕跡の可能性がある線状痕がみられる。遺構の軸から、時期は弥

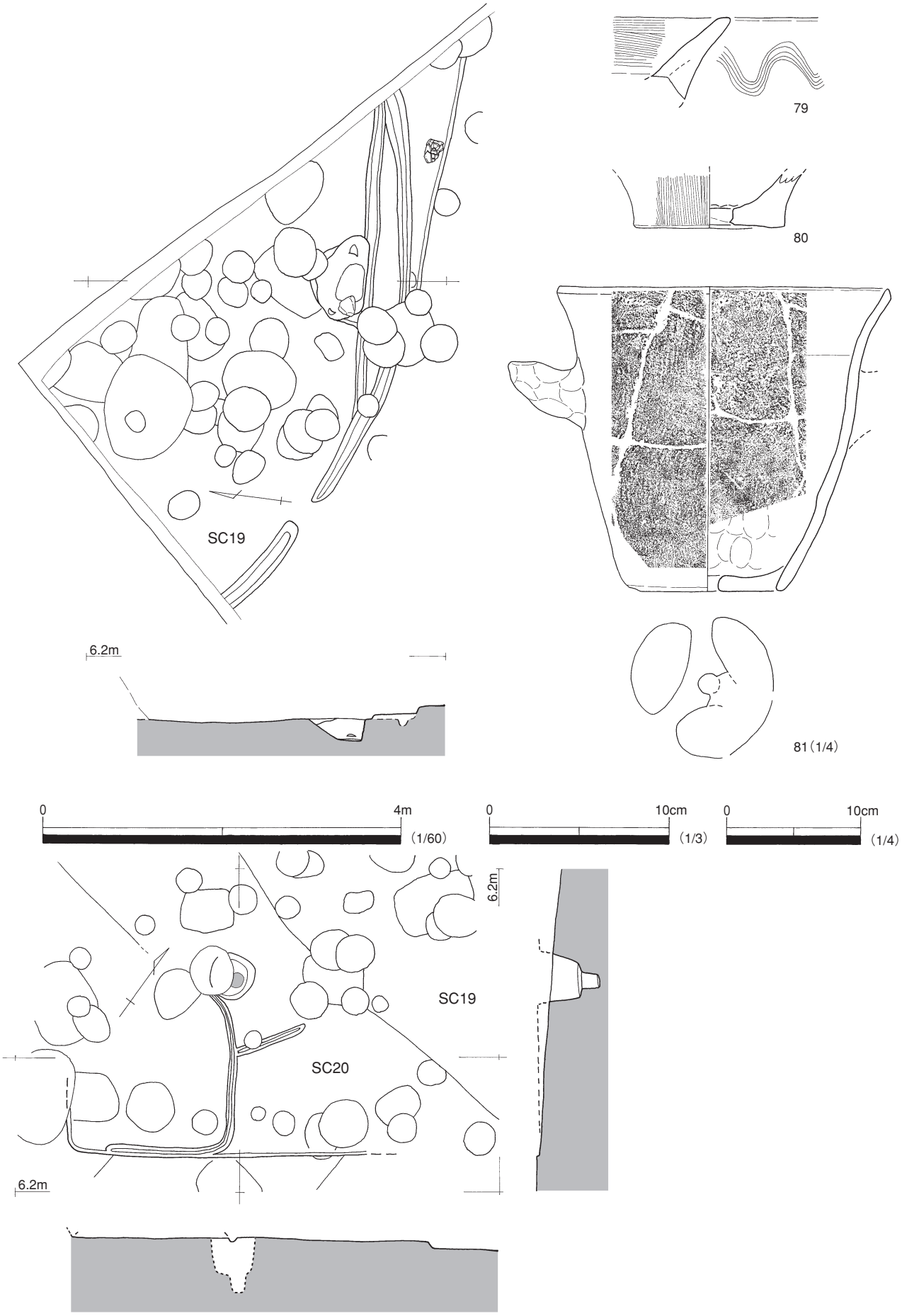


Fig.16　SC19・20

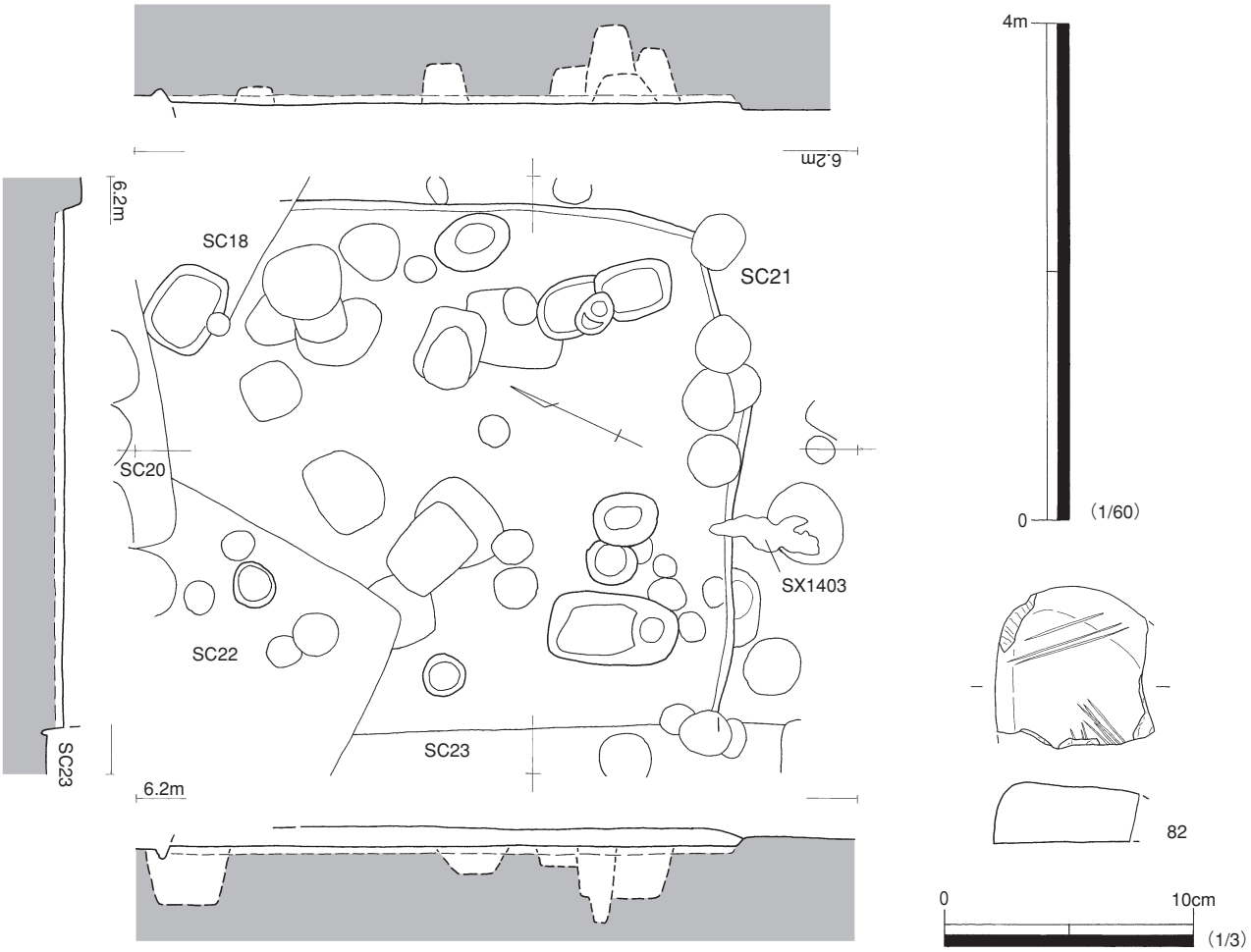


Fig.17　SC21

生時代終末期か。

SC22（Fig.18　PL. 5）

調査区北側で検出した方形住居で、SC20 に切られる。東西に地山削り出しによるベッド状遺構がつき、東側はＬ字状になる可能性がある。主柱穴は２つ。西側の主柱穴には柱痕が３つ確認できたため、柱を何度か立て直した可能性がある。中央炉は浅い掘り込みで、底面はガチガチに焼けており、埋土に炭を多く含む。南側の SP1120 に切られた掘り込みが、屋内土坑にあたる可能性がある。

83・84 はほぼ床面直上で出土、85 は SP1120 との切り合い部分で出土した。83 は甕。わずかに底が残る。84 は高坏。85 は脚付き鉢か。遺構の時期は弥生時代終末期（ＩＡ期?）。

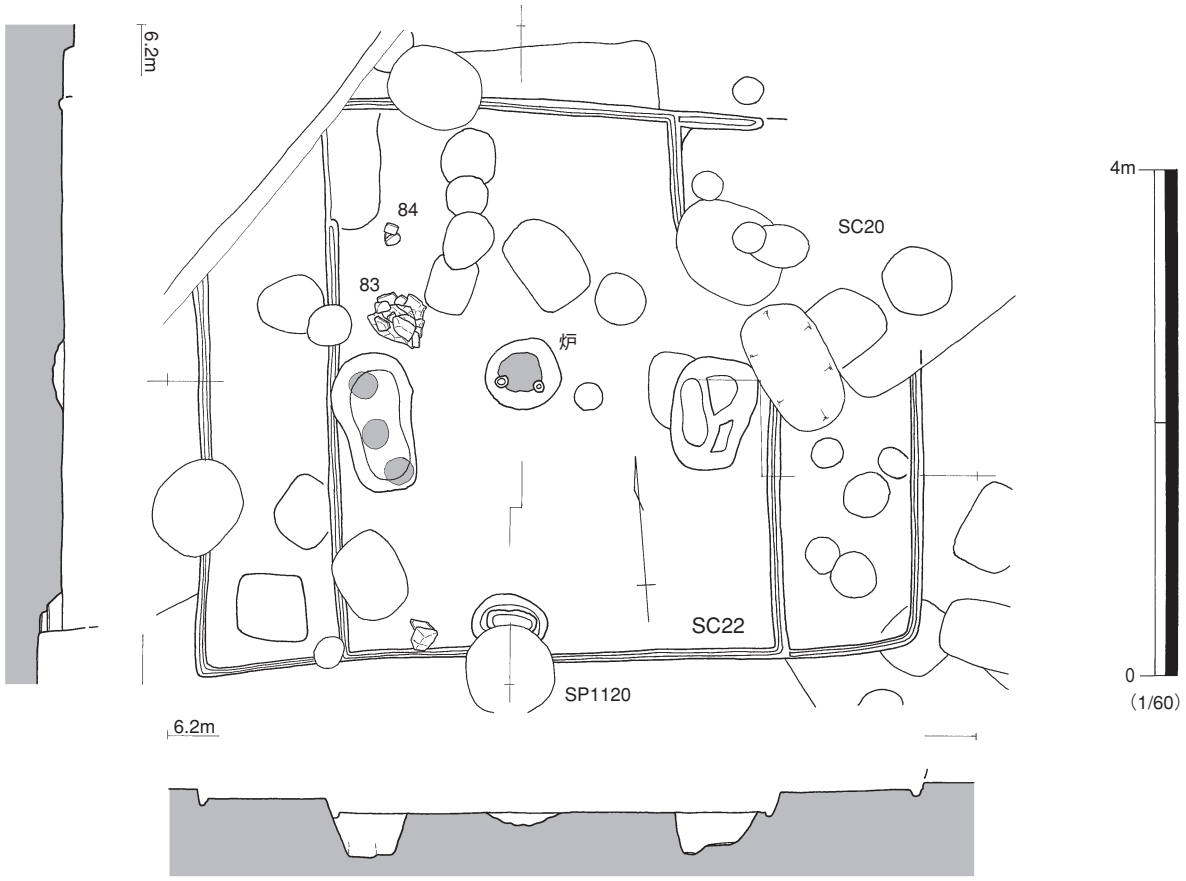
SC23（Fig.19　PL. 5）

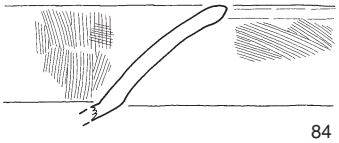
調査区北側で検出した方形住居で、SC22 に切られる。南北に地山削り出しによるベッド状遺構がつく。主柱穴は２本で、中央炉は浅い窪みが焼けて硬化する。東側の浅い掘り込みは屋内土坑だろうか。

86 は床直上で出土した器台。87 は壺か。内面のハケは雑で、くびれ部付近に帯状のミガキを施す。日向周辺系の土器の可能性がある。88 は石包丁で、砂岩製か。遺構の時期は SC22 に切られることから弥生時代終末期（ＩＡ期?）。

SC24（Fig.20）

調査区北寄りで検出した。ぼやっとした壁溝状の痕跡が円形に巡っており、円形住居の可能性がある。主柱穴は不明確である。円形住居ならば、時期は弥生時代前期後半か。





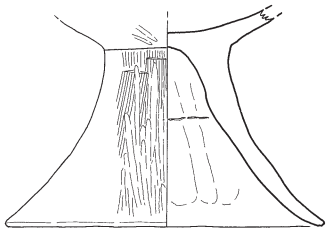


Fig.18　SC22

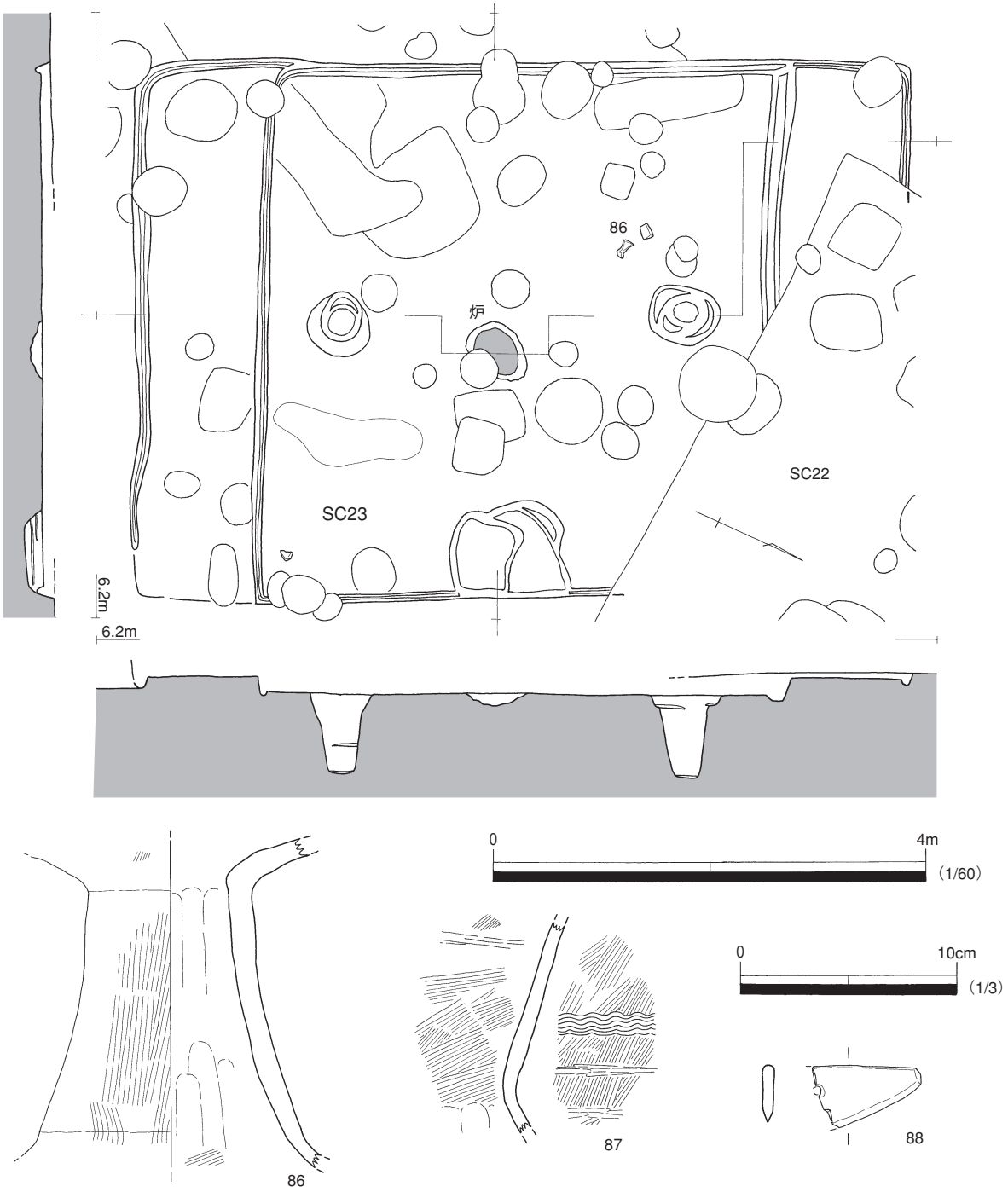


Fig.19　SC23

SC25（Fig.20）

調査区北寄りで検出した方形の掘り込みで、住居の可能性がある。北辺、西辺は削られてわからない。主柱穴は不明確で、可能性のありそうなものを図化した。

89 は砂岩製の砥石。砥石の形を整えるためのハツリの痕跡（?）が残る。ほぼ床面直上から出土。方形住居ならば、遺構の軸から時期は弥生時代終末期か。

SC26（Fig.21）

調査区北寄りで検出した方形住居。SC23・28・30 に切られ、全体の形は不明確である。SC23 の貼床掘削後に検出した不整形の掘り込みは、この住居に伴うものだろう。主柱穴は不明確で、可能性が

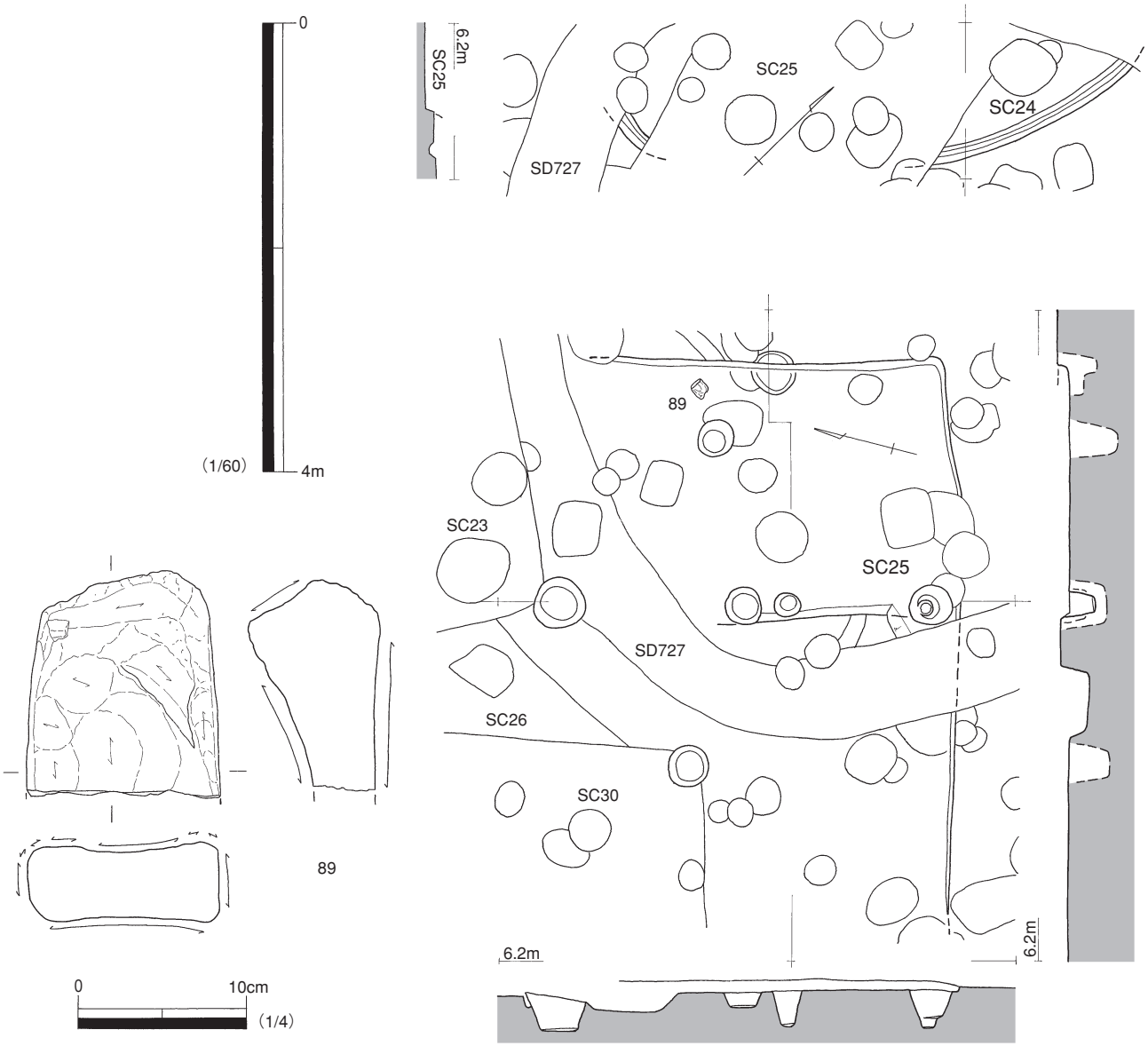


Fig.20　SC24・25

ありそうなものを図化した。SC30 に切られる方形の掘り込みの底面が焼けており、中央炉にあたると考えられる。北東辺の壁際の掘り込みが屋内土坑にあたる可能性がある。

SC23 に切られることから、遺構の時期は弥生時代終末期か。

SC27（Fig.21）

調査区北東側で検出した。方形住居の端部と考えられ、東西に地山削り出しによるベッド状遺構がつく可能性が高い。遺構の軸から、時期は弥生時代終末期か。

SC28（Fig.22　PL. 5）

調査区北寄りで検出した方形住居。南北に地山削り出しによるベッド状遺構がつく可能性が高いが、南辺および西辺は住居の切り合いが激しく、プランが不明確である。ただし、柱穴の位置から考えると、南側は図化した以上にはあまり広がらない。南側のベッド状遺構は、古い住居の埋土を削り出して造っているため、調査時に認識できなかったのだろう。西辺のラインは SC29 と重なり、どちらの住居のラインをより正確に表すかは不明確である。遺物は他の住居と多少混じっている可能性がある。

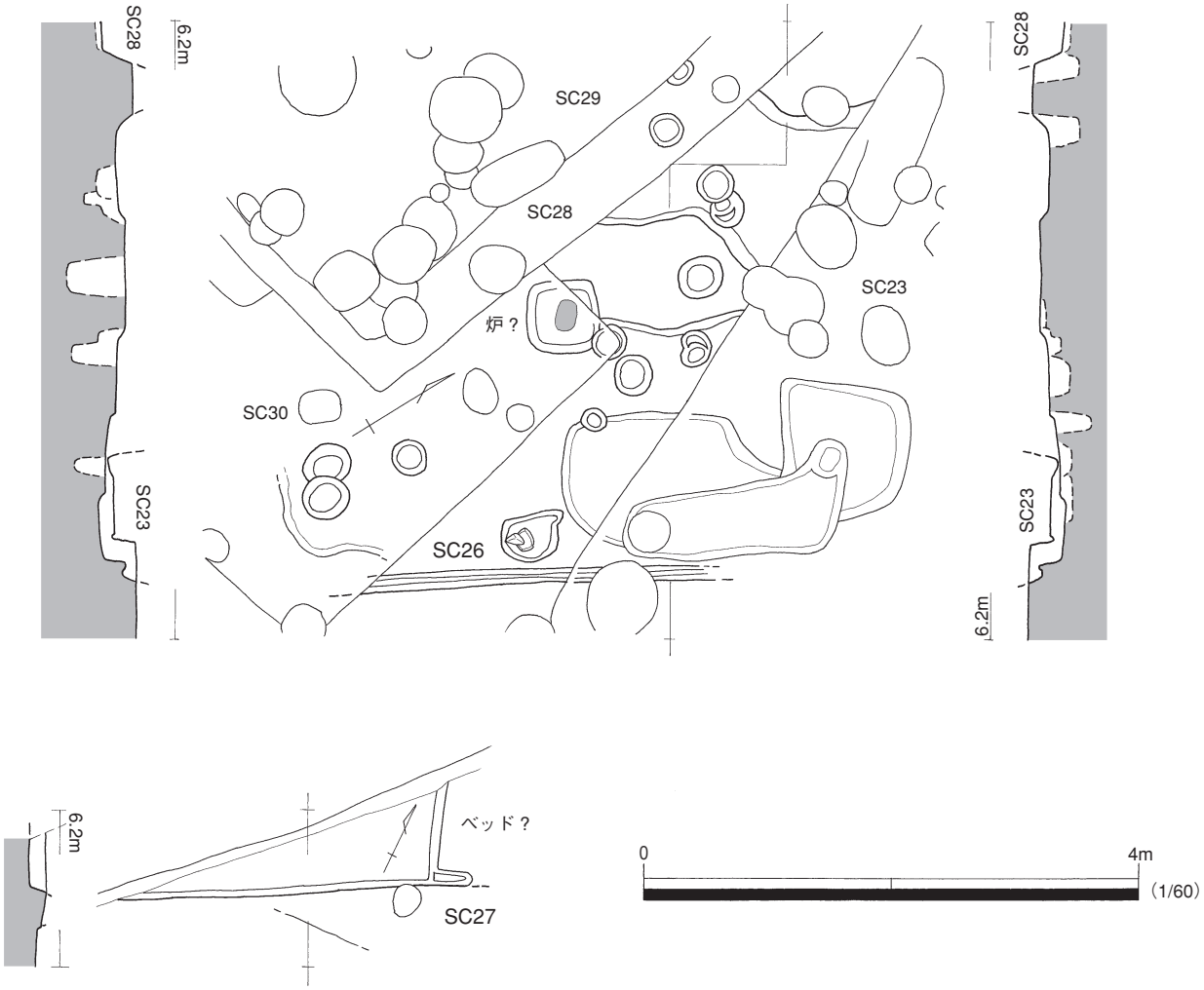


Fig.21　SC26・27

90 は壺。１本ずつ沈線で施文する。91 は甕。92・93 は高坏。93 は SC28 床面付近から出土した。３方向に穿孔する。近江～東海西部系。92 も東海系の可能性がある。94 は砂岩製で、石包丁か。95 は軽石。96 は土製で、投弾か。遺構の時期は古墳時代前期（Ⅱ A 期）。

SC29（Fig.22　PL. 5）

SC28 に切られる方形住居。SC28 と軸を同じくし、大部分が重なる。南北に地山削り出しによるベッド状遺構がつく可能性が高い。埋土に焼土を多く含む掘り込みが中央付近にあり、炉と考えられる。屋内土坑の有無は不明確だが、あるとすれば東側か。

97・98 は南側主柱穴出土。97 は甕。北近畿（丹波～但馬）系か。98 は底部で、線刻がある。99・100 は床直上で出土。99 は片岩製の石包丁。100 は石錘。しっかり磨き、上下に面がある。青灰色泥岩製で、砥石の再加工品の可能性がある。6.5g。101 は鉄器で、穿孔具か。遺構の時期は古墳時代前期（Ⅱ A 期）。

SC30（Fig.23 ～ 27　PL. 5 ・13・14）

調査区北寄りで検出した方形住居。SC28 に切られるが、SC29 との切り合いは不明。SC32 には切られる可能性が高い。東西に地山削り出しによるベッド状遺構がつく。主柱穴は２本。南側に屋内土坑とみられる掘り込みがある。床面直上で多数の土器群が出土し、土器群 A ～ F までに分けて取り上げたが、土器群 E の高さは SC30 床面よりもやや低く（PL.13・14）、土器群 E・F は SC28・29・

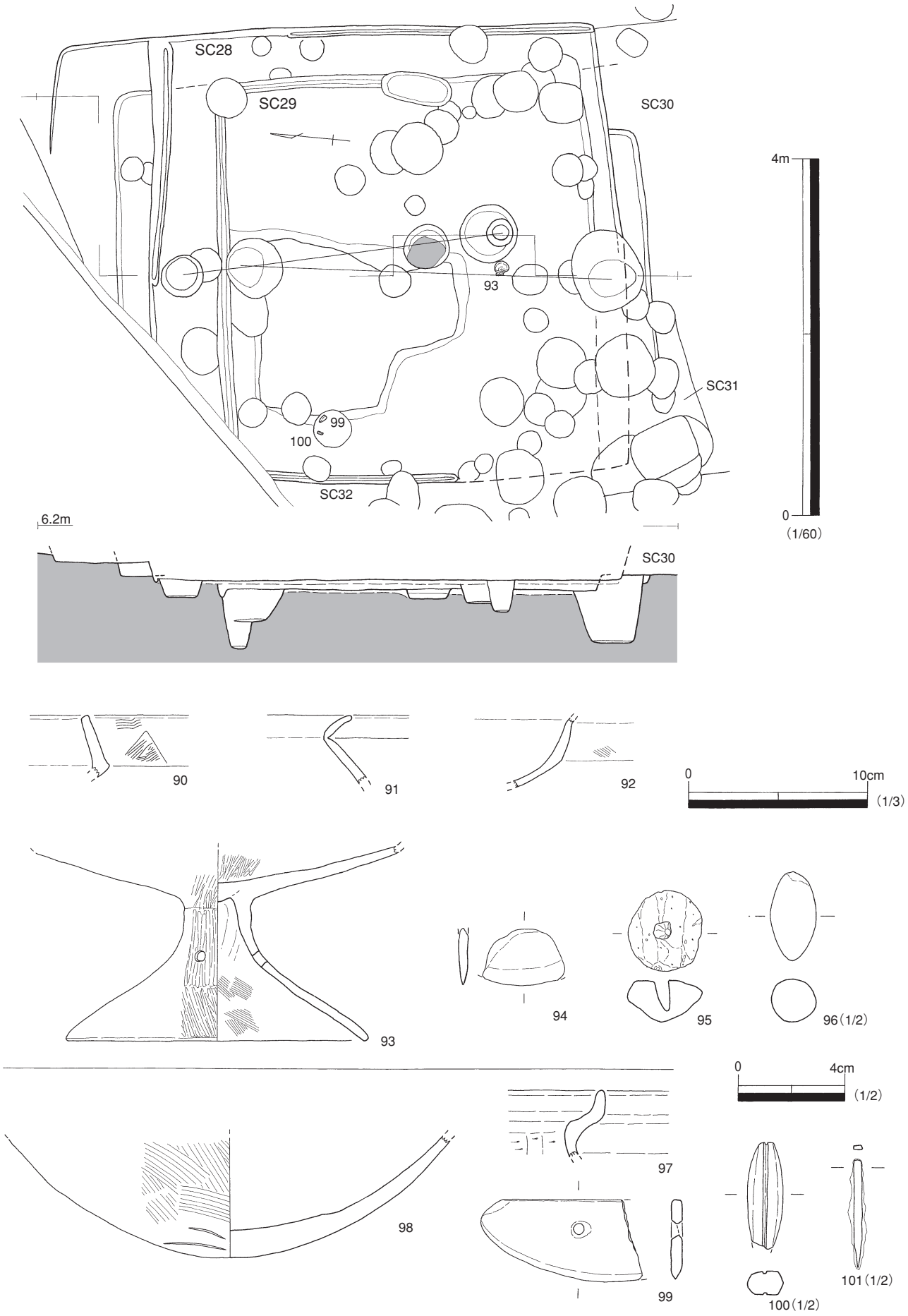


Fig.22　SC28・29

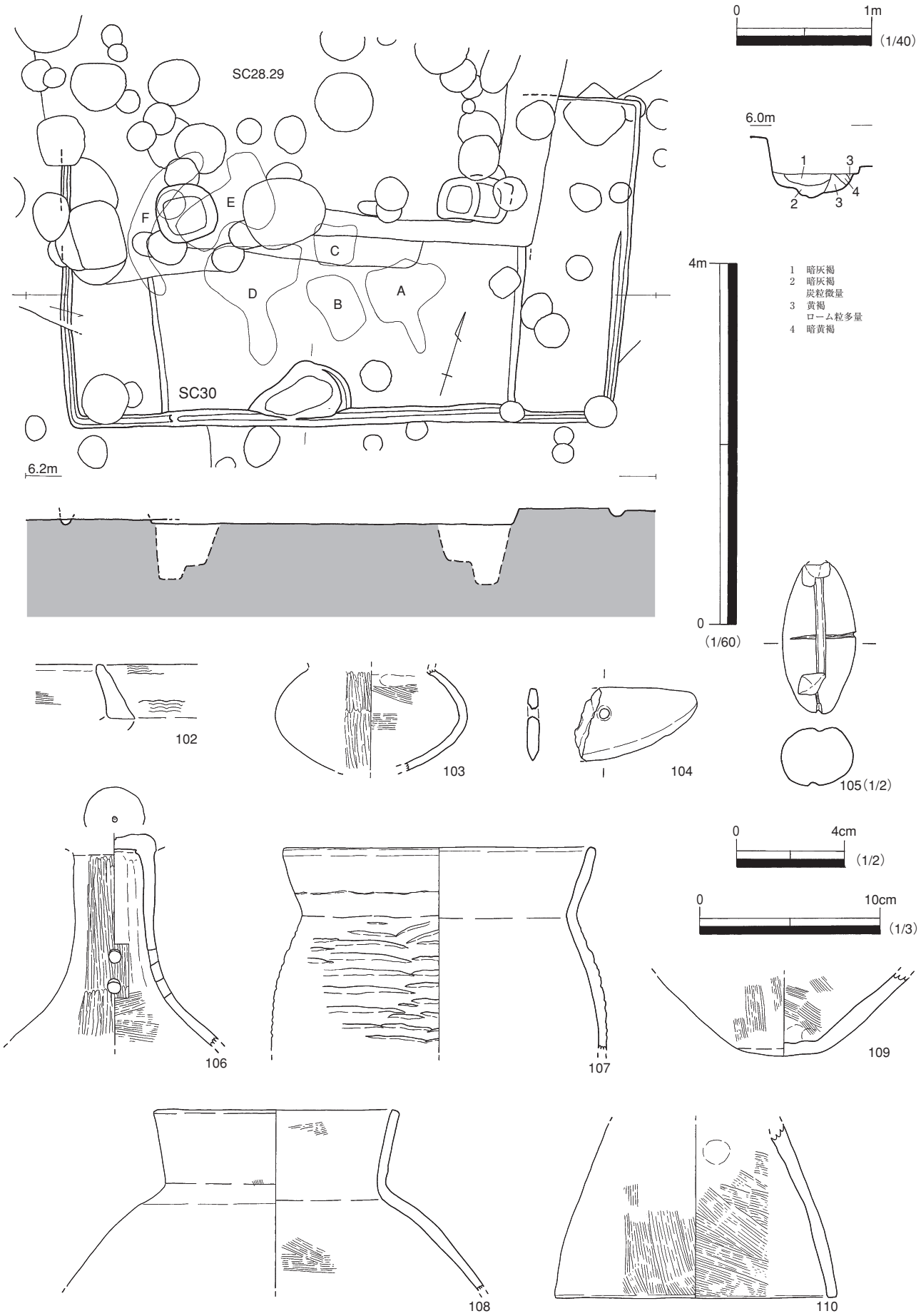

0
1m
(1/40)
SC28.29
6.0m
1
3
2
3
4
E
F
C
D
B
A
SC30
6.2m
4m
0
(1/60)
1 暗灰褐
2 暗灰褐
炭粒微量
3 黄褐
ローム粒多量
4 暗黄褐
102
103
104
105(1/2)
0
4cm
(1/2)
0
10cm
(1/3)
106
107
109
108
110

Fig.23 SC30

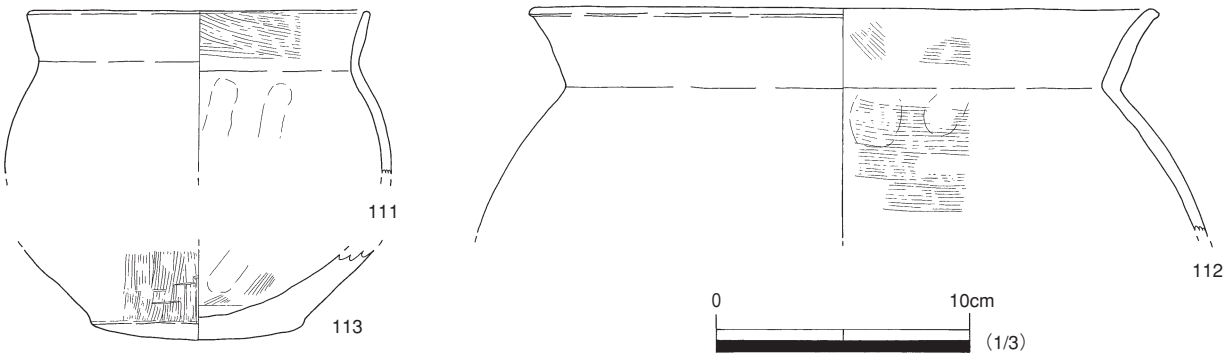


Fig.24　SC30 土器群 C

31 のいずれかに伴う可能性もある。

102・103 は壺。103 は胎土に角閃石と火山ガラスのような微細な白く光る鉱物を含む。肥後もしくは日田などの火山地帯の土器か。104 は片岩製の石包丁。105 は滑石製の石錘。35.8g。106 は土器群 A 出土の高坏。107 は土器群 A と B から出土した破片が接合した。甕で、口縁部に接合痕が残る。タタキが粗い。108 ～ 110 は土器群 B 出土。108 は壺。109 は底部。110 は器台。111 ～ 113 は土器群 C 出土。いずれも甕。114 ～ 122 は土器群 D 出土。114 ～ 116 が壺。114 は 111 と同一個体の可能性がある。117 ～ 119 が甕。117 は幅狭のタタキを施し、底部付近をミガく。118 はほぼ丸底。119 は口縁部がやや波打ち、接合痕が残る。120・121 は器台。122 は高坏。123 ～ 129 は土器群 E 出土で、SC30 に伴わない可能性がある。123 が壺。124・125 が甕。125 は口縁が 19.5cm ～ 20.5cm で楕円形に歪んでいる。胴下位に線刻がみられる。126 は底部。胎土に角閃石・輝石とみられる鉱物を含む。127 ～ 129 は器台で、接合する可能性はあるが、少なくとも 2 個体以上は存在する。130 ～ 132 は土器群 F 出土で、SC30 に伴わない可能性がある。130 は甕。口縁部と頸部が明確に接合せず、口縁部が図化したよりもやや伸びるかもしれない。頸部内面に接合痕が残る。胴中位にタタキとみられる痕跡がある。豊前系の可能性がある。131 は鉢。内面に簾状ハケがみられる。132 は高坏。SC30 の時期は古墳時代前期（Ⅱ A 期）。

SC31（Fig.28）

SC28・29・30・32 に重なる掘り込みで、小型の方形住居か。SC30 との新旧関係は不明だが、その他の住居からは切られる。主柱穴は不明確だが、長辺片側の壁際に 2 本になる可能性がある。

SC32（Fig.28）

調査区北寄りで検出した方形住居で、SC30・31 を切る可能性が高い。掘り込みが浅く、プランが不明確だが、中央付近に円形に焼けた面があり、これを中央炉と考えた。主柱穴も不明確で、可能性のあるものを図化した。北側の浅い段がベッド状遺構の痕跡である可能性がある。

133 は鉄器で、鉄鏃もしくはヤスか。遺構の時期は切り合い関係から古墳時代前期だろう。

SC33（Fig.29　PL. 5・6）

調査区中央付近で検出した方形住居。SC39 との切り合いは不明確である。東西にベッド状遺構が付き、西側は L 字状になる。東側のベッド状遺構のラインは不明確で、こちらも L 字状だった可能性がある。主柱穴は 2 本で、それぞれ二つずつ重なるような状況と、北西側の壁溝が 2 条重なることから、1 回程度の建て直しが想定できる。中央炉は浅い掘り込みの底面が赤くガチガチに硬化する。屋内土坑は南側につき、底面に短い溝状の掘り込みがいくつかみられる。

134 ～ 136 は全て屋内土坑上層から出土した一括遺物である。134 は壺。135 は高坏。136 は脚付き

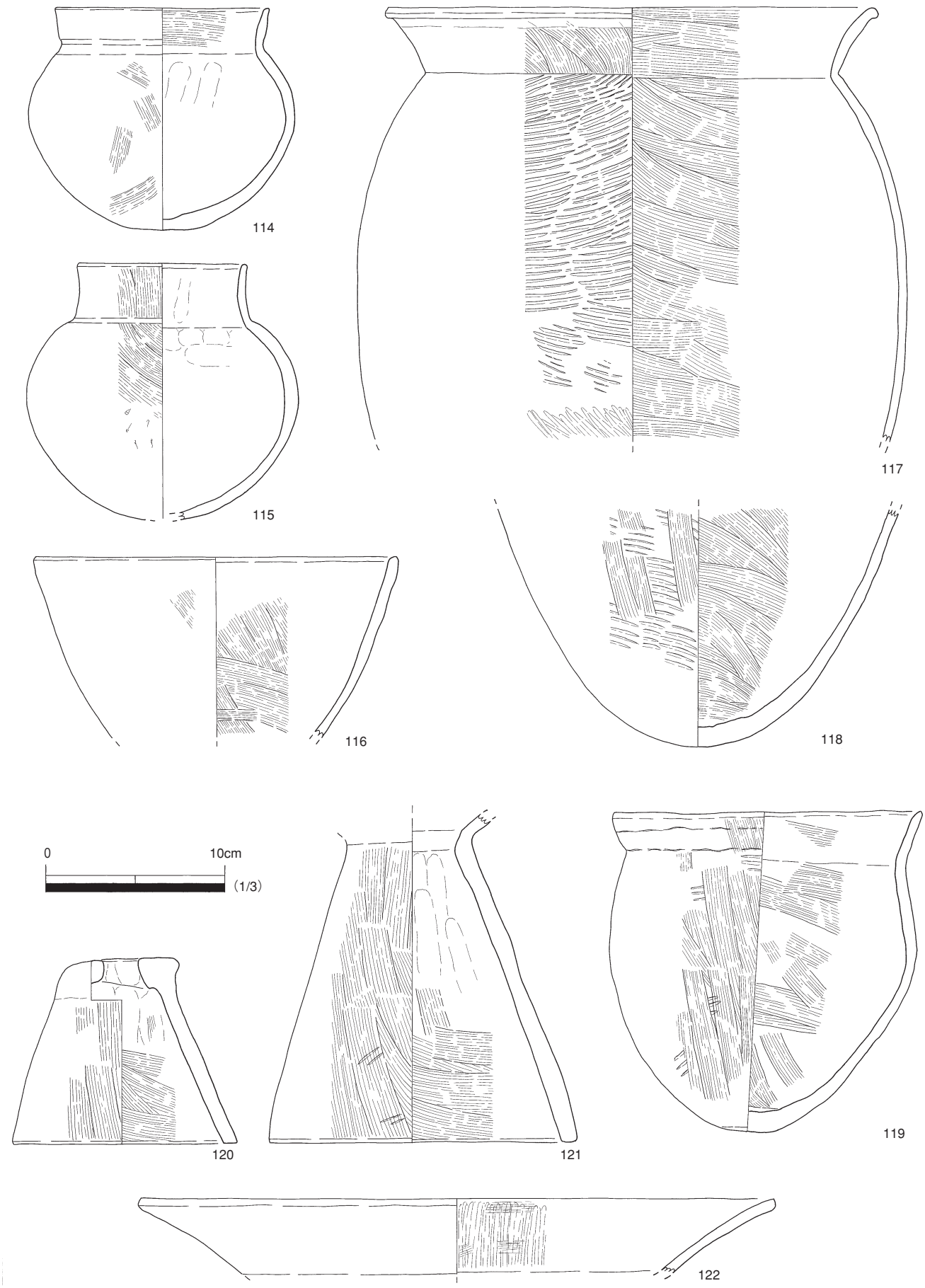


Fig.25　SC30 土器群 D

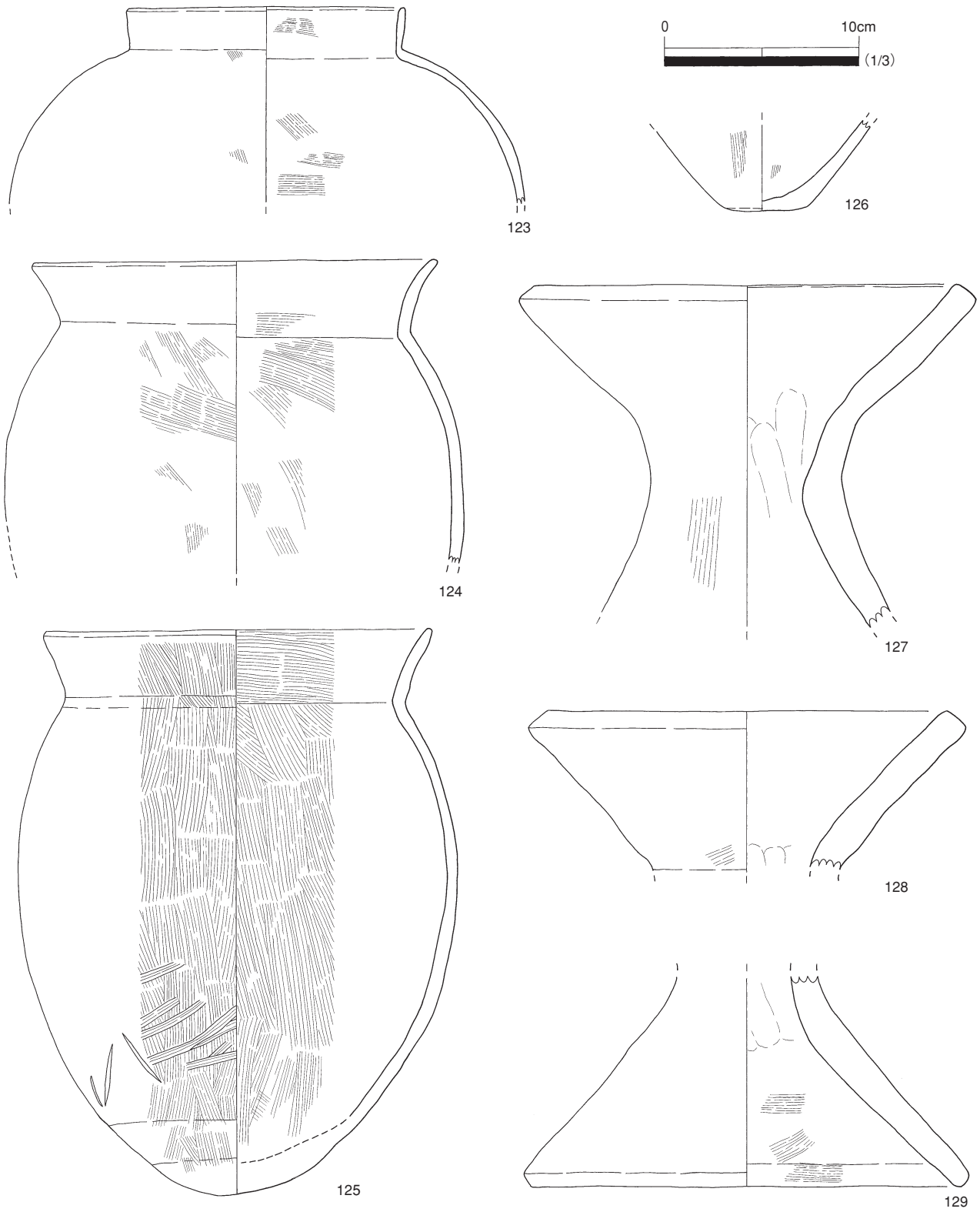


Fig.26　SC30 土器群 E

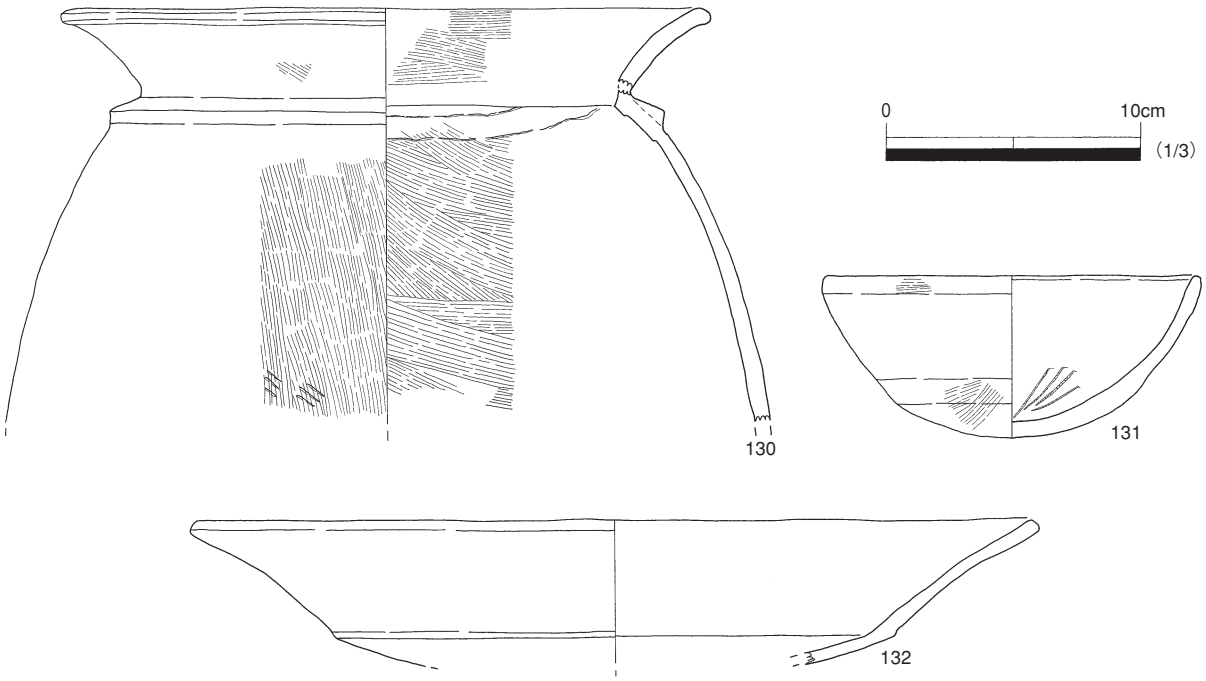


Fig.27　SC30 土器群 F

鉢。遺構の時期は古墳時代前期（Ⅱ A 期 ?）か。

SC34（Fig.29　PL. 6）

調査区北寄りで検出した円形住居で、周囲の方形住居に切られる。北側は削られるため、SC35 との切り合いは不明である。主柱穴は 4 本と考えられる。

137 は床面直上出土で、弥生土器甕。遺構の時期は弥生時代前期後半だろう。

SC35（Fig.30）

調査区北寄りで検出した円形住居で、周囲の方形住居に切られる。東側は削られるため、SC34 との切り合い関係は不明である。主柱穴は不明確で可能性のありそうなものを図化した。

138 は礫岩製で、端部が被熱により激しく赤変する。遺構の時期は他の円形住居と同様に弥生時代前期後半だろう。

SC36（Fig.30）

調査区北寄りで検出した。主柱穴は不明確だが、床面にぼやっとした貼床状の痕跡があるため、小型の方形住居と判断する。

139・140 は甕。139 は底部を打ち欠く。141 は鉢。内外面に丹塗り。142 は器台。143 は安山岩で、単なる石片か。144 は玄武岩の丸石。145 は砂岩製の砥石。146 は礫岩製の台石か。被熱を受け、表面が剥がれる。遺構の時期は弥生時代中期末。

SC37（Fig.31　PL. 6）

SC36 に切られる。SC36 同様に床面にぼやっとした貼床状の痕跡があるため、小型の方形住居と判断する。遺構の形態や出土遺物から SC38 に切られると考えられるが、それを調査時に認識できずに掘ってしまっている。床面に全体的に薄く砂が敷かれる。

147・148 は甕。149 は蓋。外面丹塗り。遺構の時期は弥生時代中期末。

SC38（Fig.31　PL. 6）

調査区西寄りで検出した方形住居で、東側は SD110・SX1333 などに切られ、西側も大きな攪乱に削られる。仕切り溝の存在から、東西に貼床盛土によるベッド状遺構がつくと考えられる。主柱穴は

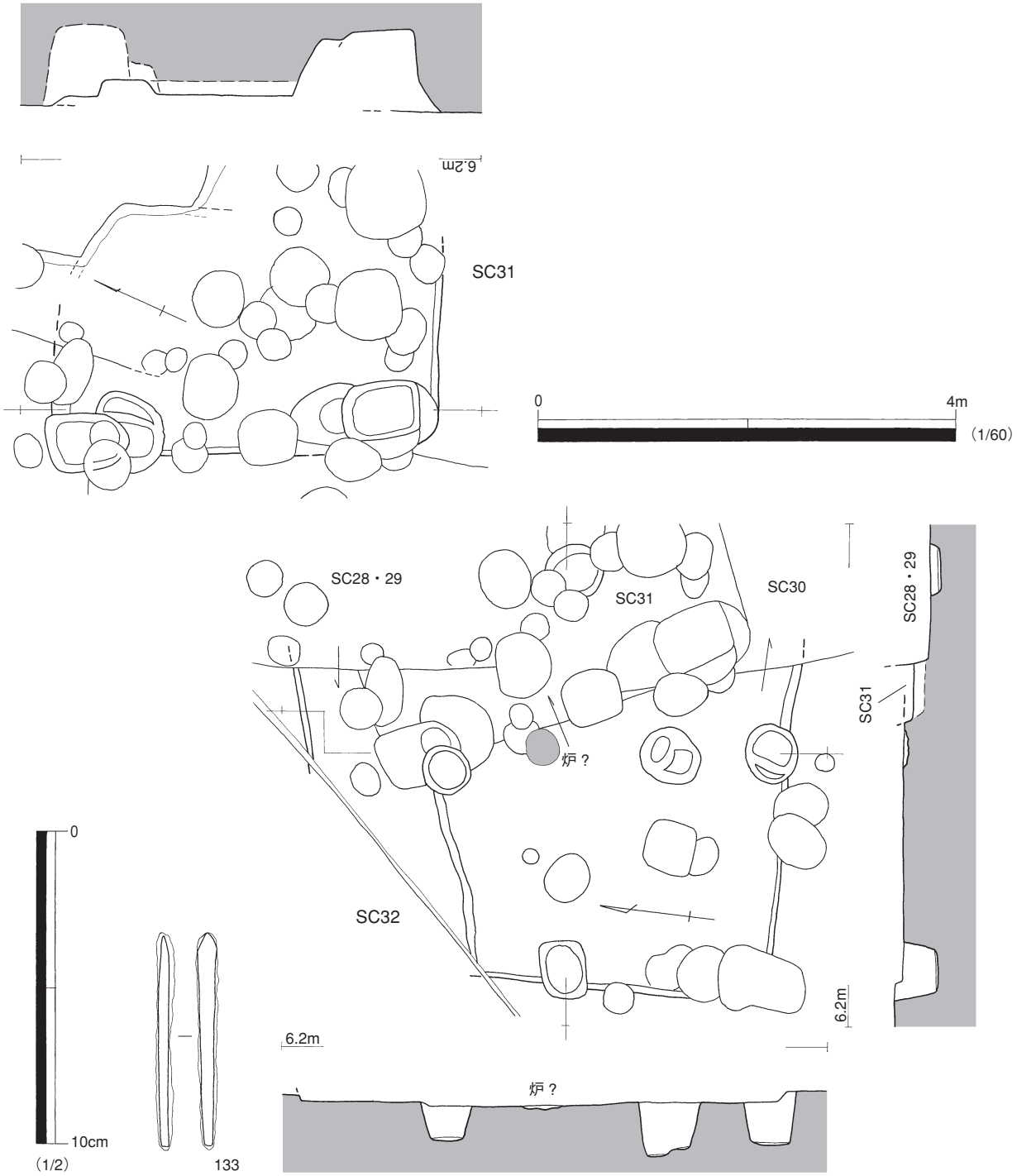
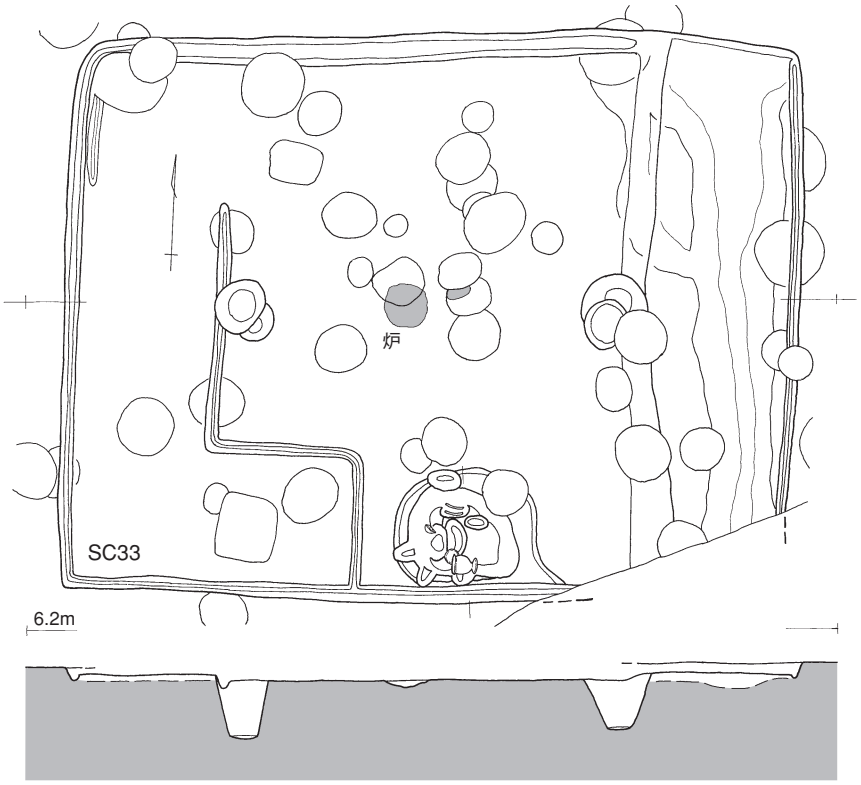
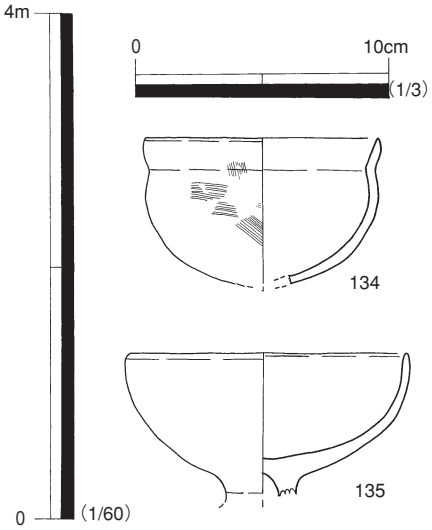
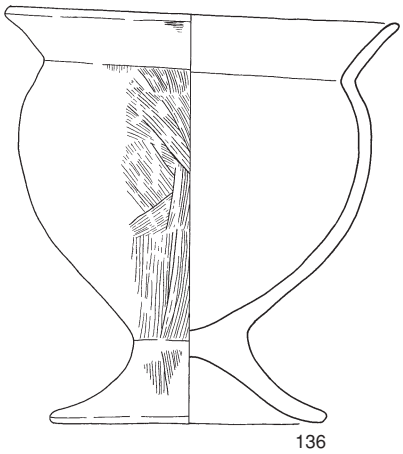
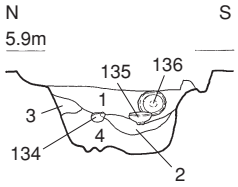


Fig.28　SC31・32

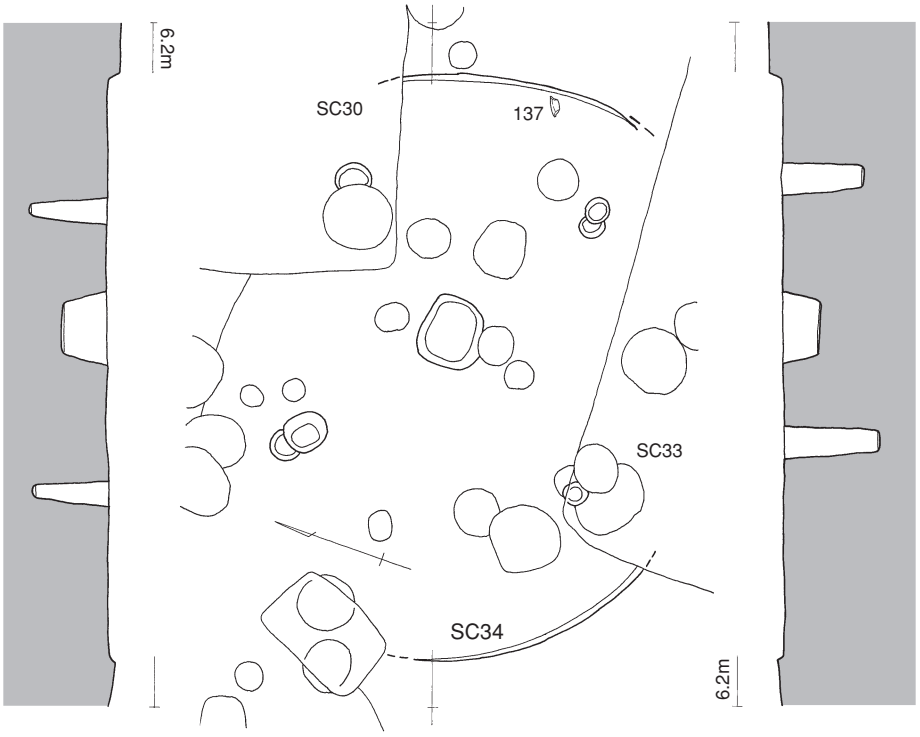








1　灰褐
2　暗黄褐ローム中量
3　ローム主体
4　灰褐



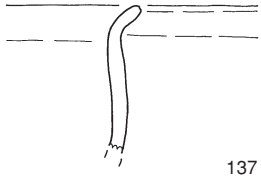
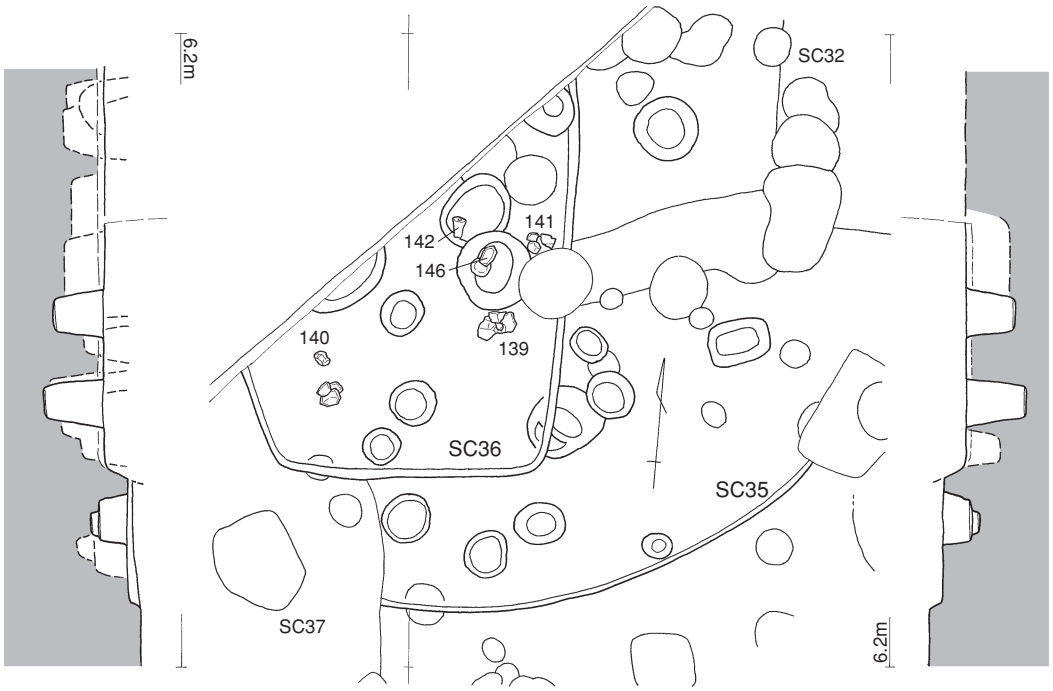


Fig.29　SC33・34



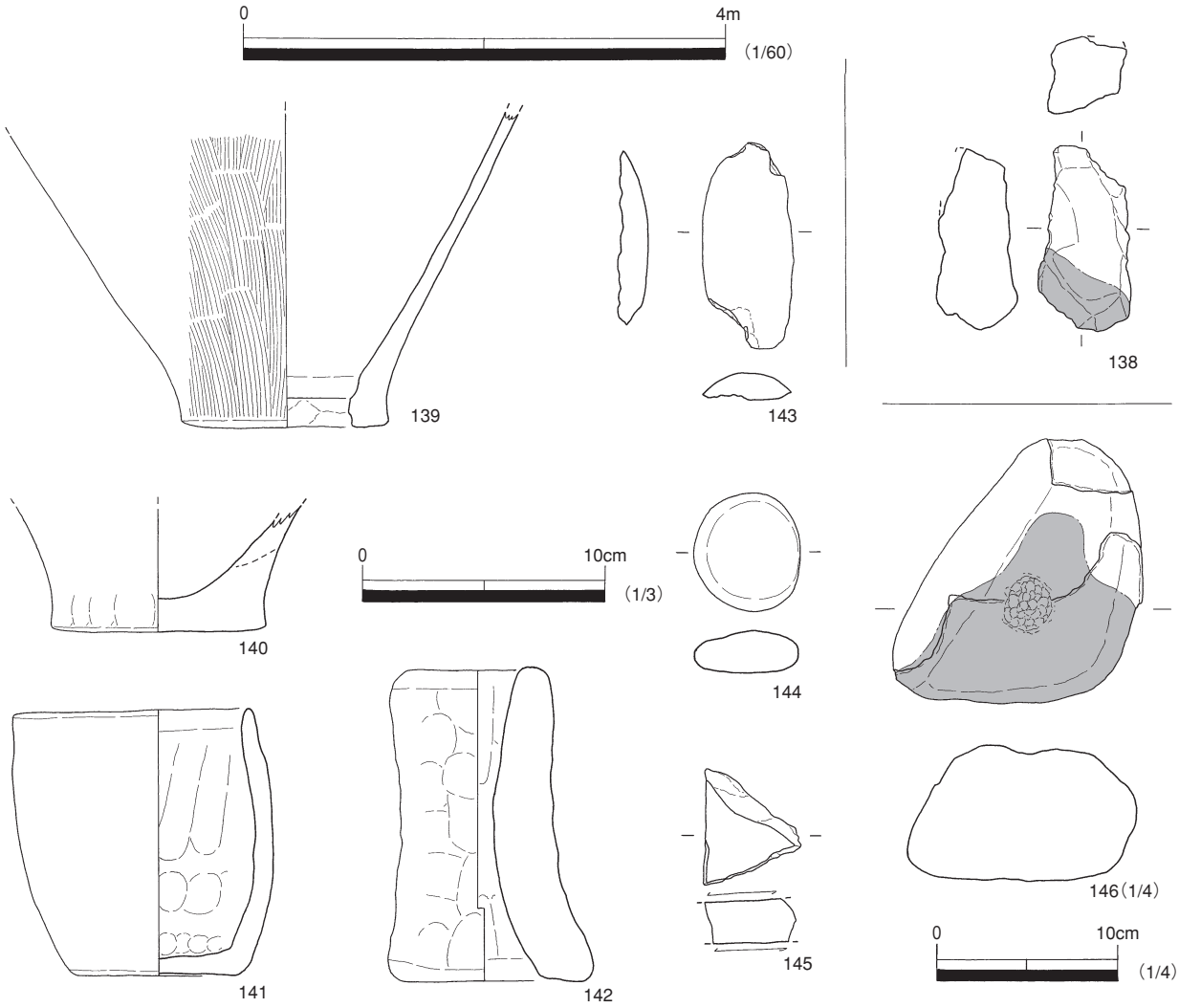


Fig.30　SC35・36

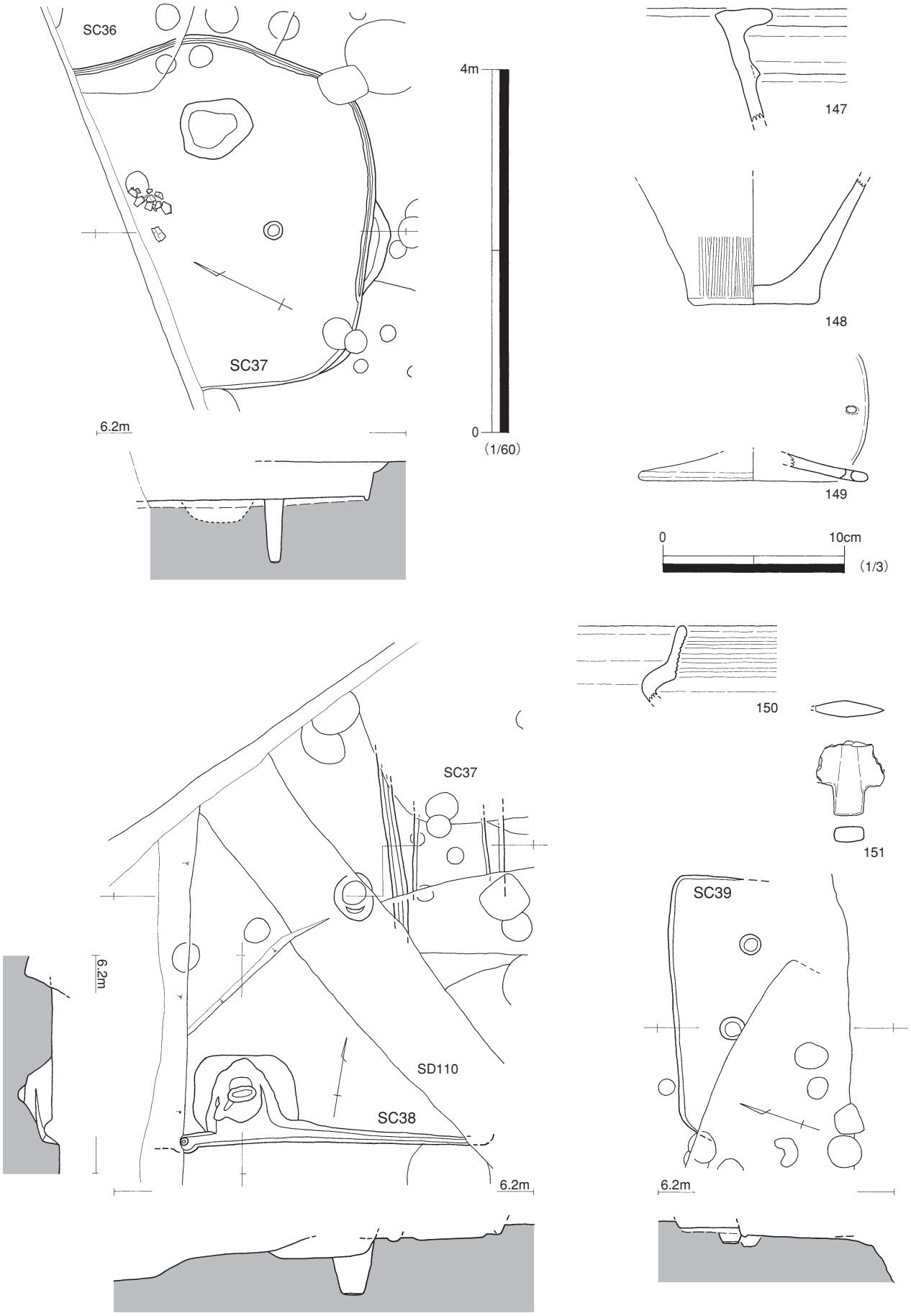


Fig.31　SC37・38・39

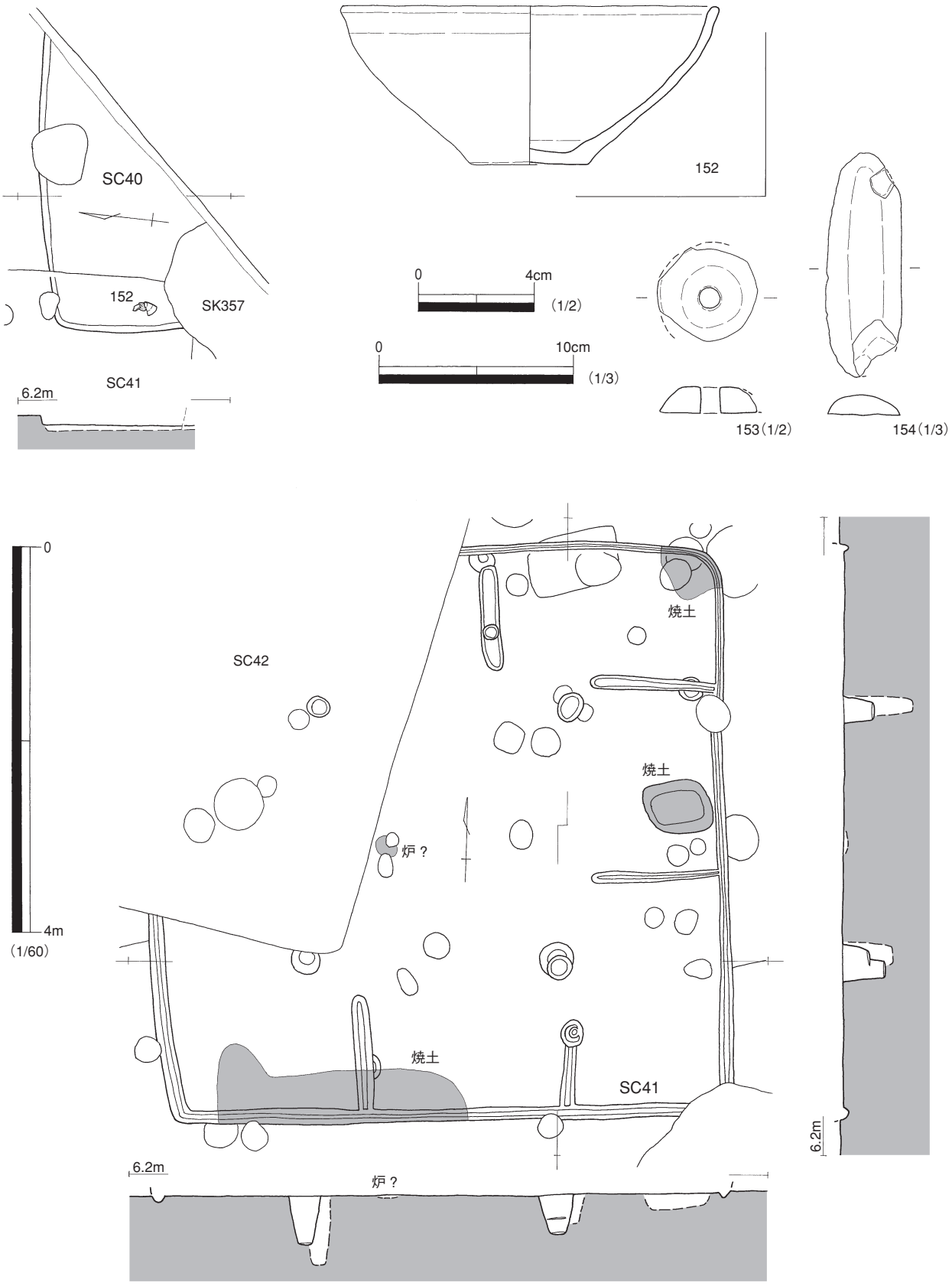


Fig.32　SC40・41

0
4m
(1/60)
SD225
SC42
160
炉
SD110
159
6.2m
6.2m
(1/2)
4cm
※は1/2
0
155
156
157
158
159
160
161
162
163※
164※
165※
0
10cm
(1/3)

Fig.33　SC42

２本か。南側に屋内土坑がつく。屋内土坑がつく壁面の西側の壁溝がやや広がり、その中央に小穴を検出した。扉などの痕跡である可能性があろう。

150 は甕で、北陸西部系。遺構の時期は古墳時代前期か。

SC39（Fig.31）

調査区中央付近で検出した。直線的な掘り方を検出したことと、底面が平坦に近くなることから、小型の方形住居と考える。SC43 に切られる。

151 は砂岩製の有茎式磨製石剣。石戈の可能性もある。遺構の時期は弥生時代中期末か。

SC40（Fig.32）

調査区東寄りで検出した。方形住居の端部と考えられる。

152 は床直上から出土した弥生土器の鉢。その他の破片も弥生土器が主体である。須恵器が少し混じるが、SK357 からの紛れ込みだろう。遺構の時期は弥生時代中期。

SC41（Fig.32　PL. 6）

調査区東寄りで検出した正方形住居。床面が辛うじて残っていた。SC42 に切られる。多数の仕切り溝があり、本来はベッド状遺構が存在した可能性が高い。中央西寄りの床面にわずかに円形の焼土面があり、炉の痕跡だろう。東側中央壁際には埋土に焼土を多く含む土坑状の掘り込みがある。また南西側壁際に広く、北東側隅部に少し焼土が面的に広がる範囲がある。

153 は土製の紡錘車。154 は玄武岩の不明石器。住居の形態と遺構の軸から、時期は弥生時代終末期か。

SC42（Fig.33　PL. 6・7）

調査区中央付近で検出した正方形住居。北西側は SD225 に削られる。南西側に貼床盛土によるベッド状遺構があり、南東側にも同様にあった可能性が高い。主柱穴は４本で深い。南東側主柱穴では底部で湧水し、柱材がわずかに残っていた。屋内土坑は南側につく。中央炉は浅い掘り込みがいくつも切り合い、底面が赤く硬化する。貼床を掘削すると、北東側から南東側の掘り方が深くなった。なお、中央部西寄りで壁溝とそれに対応する貼床状の痕跡を検出し、SC42 に切られる方形住居が存在するようだが、大きさなどは不明である。この SC42 に切られる住居からは弥生時代中期頃の土器の破片が多く出土した。

155 は壺。山陰系。径が広く、大型。156 は底部か。穴が開いている。157・158 は高坏。159 は屋内土坑出土の脚付き鉢。160 も脚付き鉢。161 は丸石。162 は菫青石ホルンフェルス製の石包丁。163・164 は石鏃。163 は黒曜石製の石鏃。164 は安山岩（サヌカイト）製の石鏃。165 は棒状の鉄器。遺構の時期は古墳時代前期。

SC43（Fig.34）

調査区中央付近で検出した正方形住居で、SC42 と軸を揃え、並ぶ。中央部は SD225 に削られる。主柱穴は４本だろう。南側壁際中央にやや方形を呈する掘り込みがあり、屋内土坑だろうか。その対面北側壁際の一部の範囲で焼土を検出した。SC43 に伴うかは不明だが、西側に長楕円形の掘り込みを検出した。当初柱穴との切り合いを認識できずに掘ってしまったが、SC43 中央に向かって深くなる。底部からやや浮いて面的に炭の層があり、その上の埋土には焼土ブロックを多く含む。

166 は高坏で、屋内土坑の脇の床面直上から、屋内土坑に向かって流れ込むような状態で出土した。胎土は精良で、径２～３mm の白色粘土粒が混じる。167 は器台。遺構の時期は古墳時代前期か。

SC44（Fig.35）

調査区西寄りで検出した。大部分を SD225 に切られる。図化した平面プランは正確でないと思わ

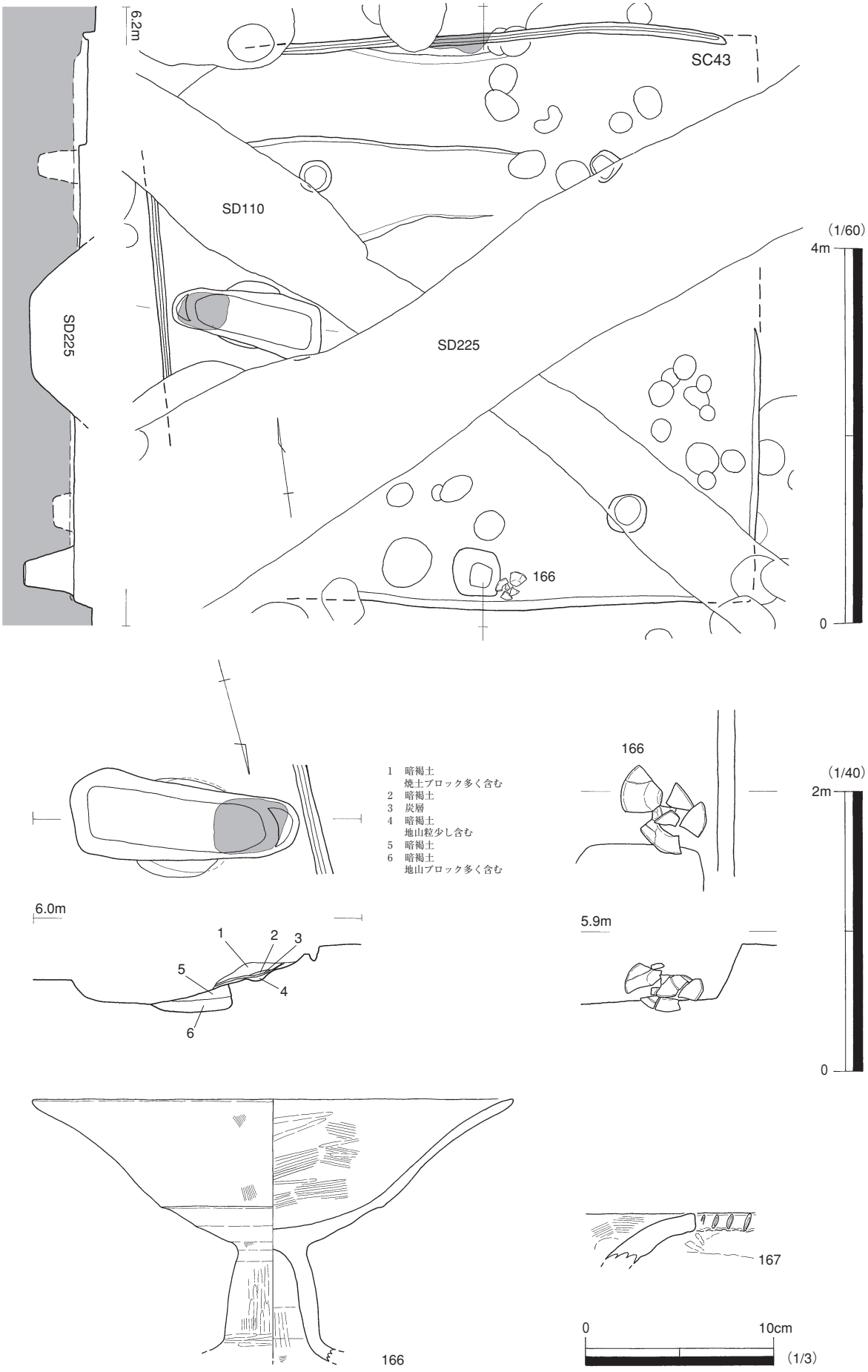

6.2m
SC43
SD110
SD225
SD225
166
(1/60)
4m
0
1　暗褐土
焼土ブロック多く含む
2　暗褐土
3　炭層
4　暗褐土
地山粒少し含む
5　暗褐土
6　暗褐土
地山ブロック多く含む
166
(1/40)
2m
0
6.0m
1
2
3
4
5
6
5.9m
166
167
0
10cm
(1/3)

Fig.34　SC43

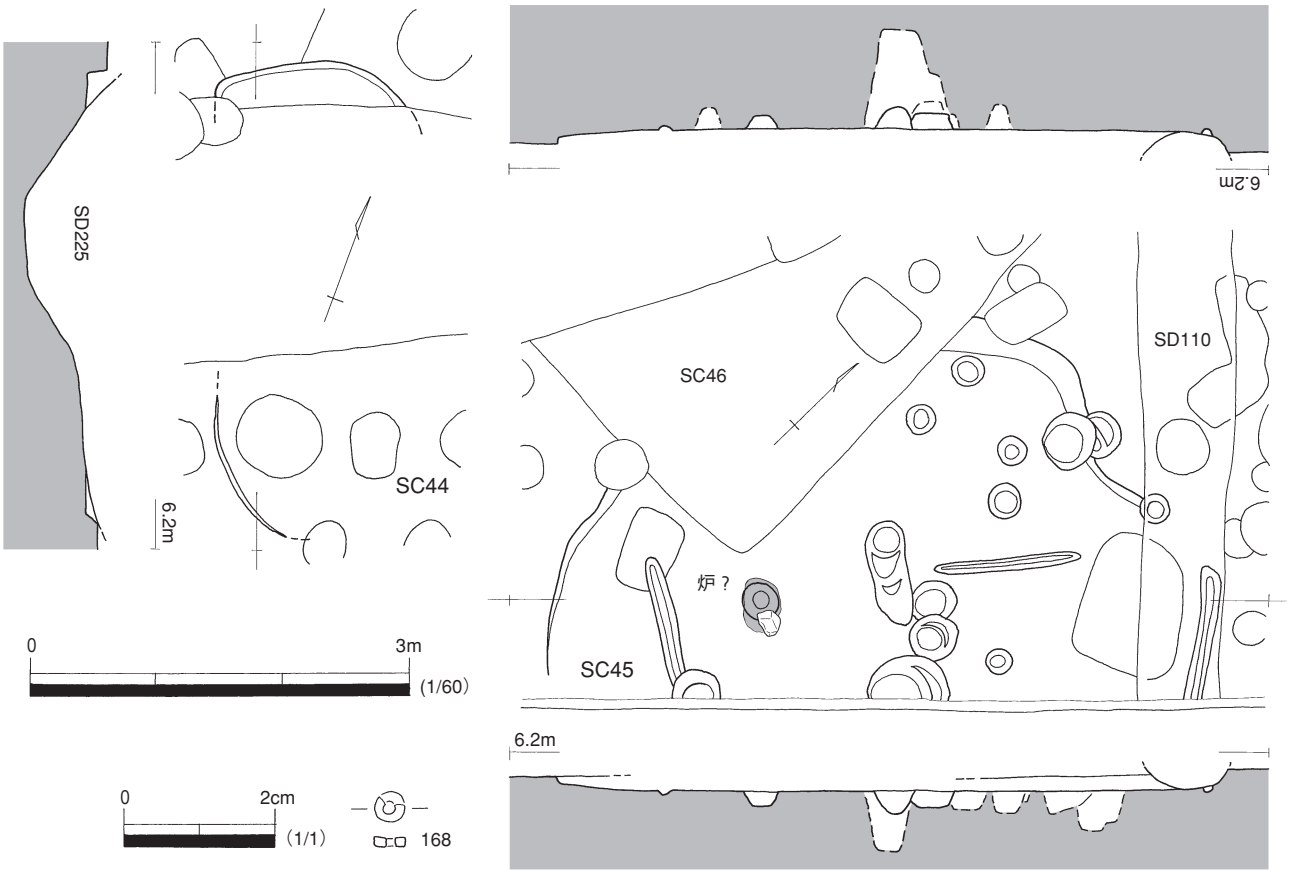


Fig.35　SC44・45

れるが、床面が平坦に近いことから、住居と考える。遺構の軸から、時期は弥生時代中期と考える。

SC45（Fig.35　PL. 7）

調査区南寄りで検出した浅い窪みで、壁溝や貼床状の痕跡や炉跡などから、住居があったと考える。２軒以上が切り合っているかもしれない。

168 は炉跡脇で出土した滑石製の臼玉。径４ｍｍ、高さ 1.5mm。

SC46（Fig.36　PL. 7）

調査区南寄りで検出した方形住居。SC47 に切られる。東西に貼床盛土によるベッド状遺構がつくと考えられる。東側は壁と床面がだらっとして直角にならず､また壁溝が検出できなかったことから、貼床を認識できずに多少掘りとばしている可能性が高い。主柱穴は２本。北側中央付近に床面直上で土器が集中する部分があった。

169 は壺。波状文はハケ目ではなく、１本ずつつけられる。傾き不明確。豊前系の可能性がある。170 は甕。筑前型。171 は床面直上出土の甕。わずかに平底が残る。172 は高坏。173・174 は砥石。173 は青灰色泥岩製。174 は泥岩製で、SC47 との切り合い部分で出土した。175 は凝灰岩製の不明石器で、表裏に一か所ずつ径７mm 程の窪みがあり、その窪みの中は被熱して鉄分が付着する。遺構の時期は弥生時代終末期（ＩＢ期)。

SC47（Fig.37・38　PL. 7）

調査区南寄りで検出した方形住居。東西に貼床盛土によるベッド状遺構がつく。主柱穴は２本。中央炉は浅い円形の掘り込みの底面が赤く焼けて硬化し、その周囲にごく薄い炭化物層が広がる。南側に隅丸長方形の土坑があり、屋内土坑か。屋内土坑の住居中央側の長辺底面は連続する小穴状を呈す

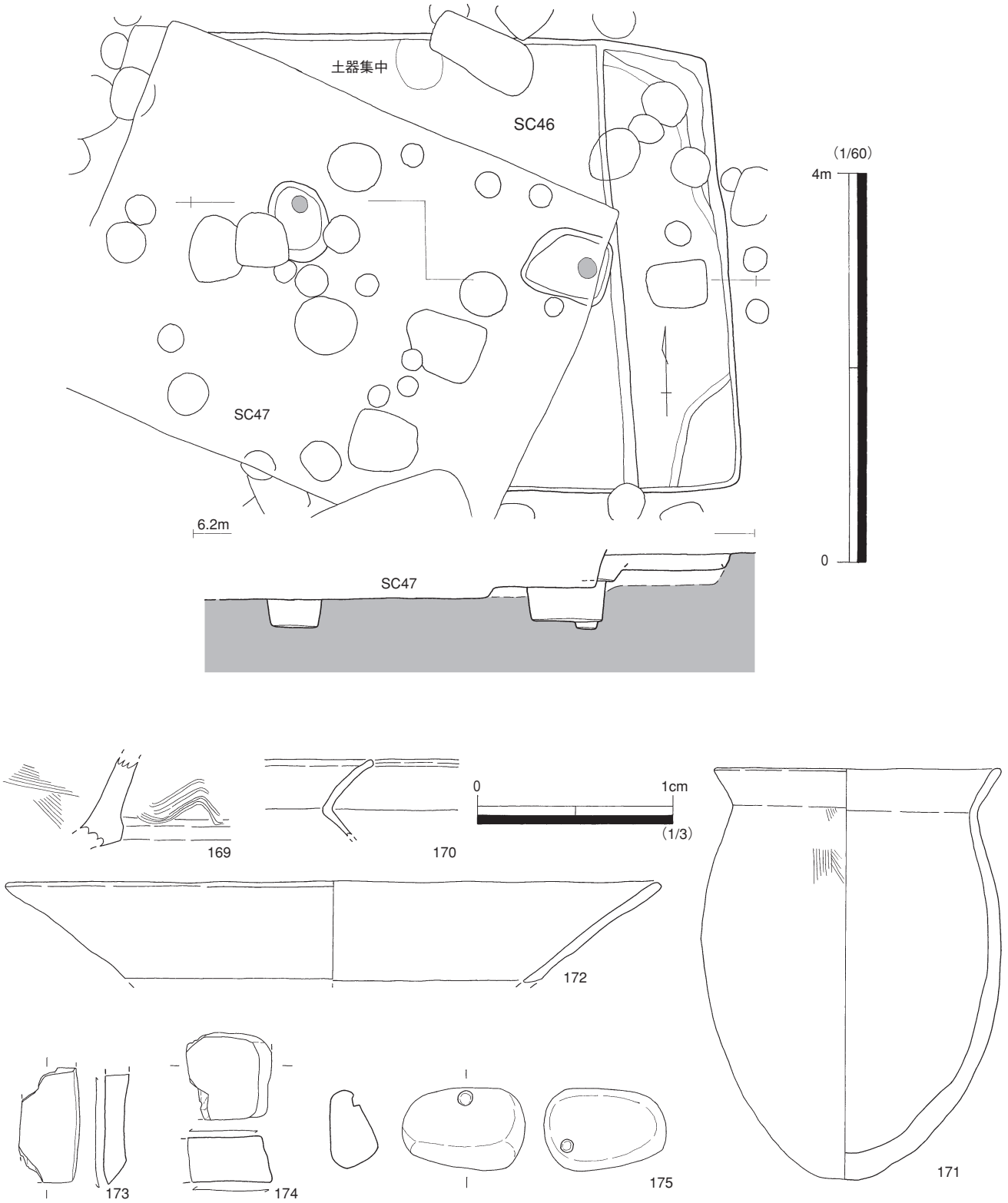

土器集中
SC46
SC47
6.2m
SC47
(1/60)
4m
0
169
170
0
1cm
(1/3)
172
171
173
174
175

Fig.36　SC46

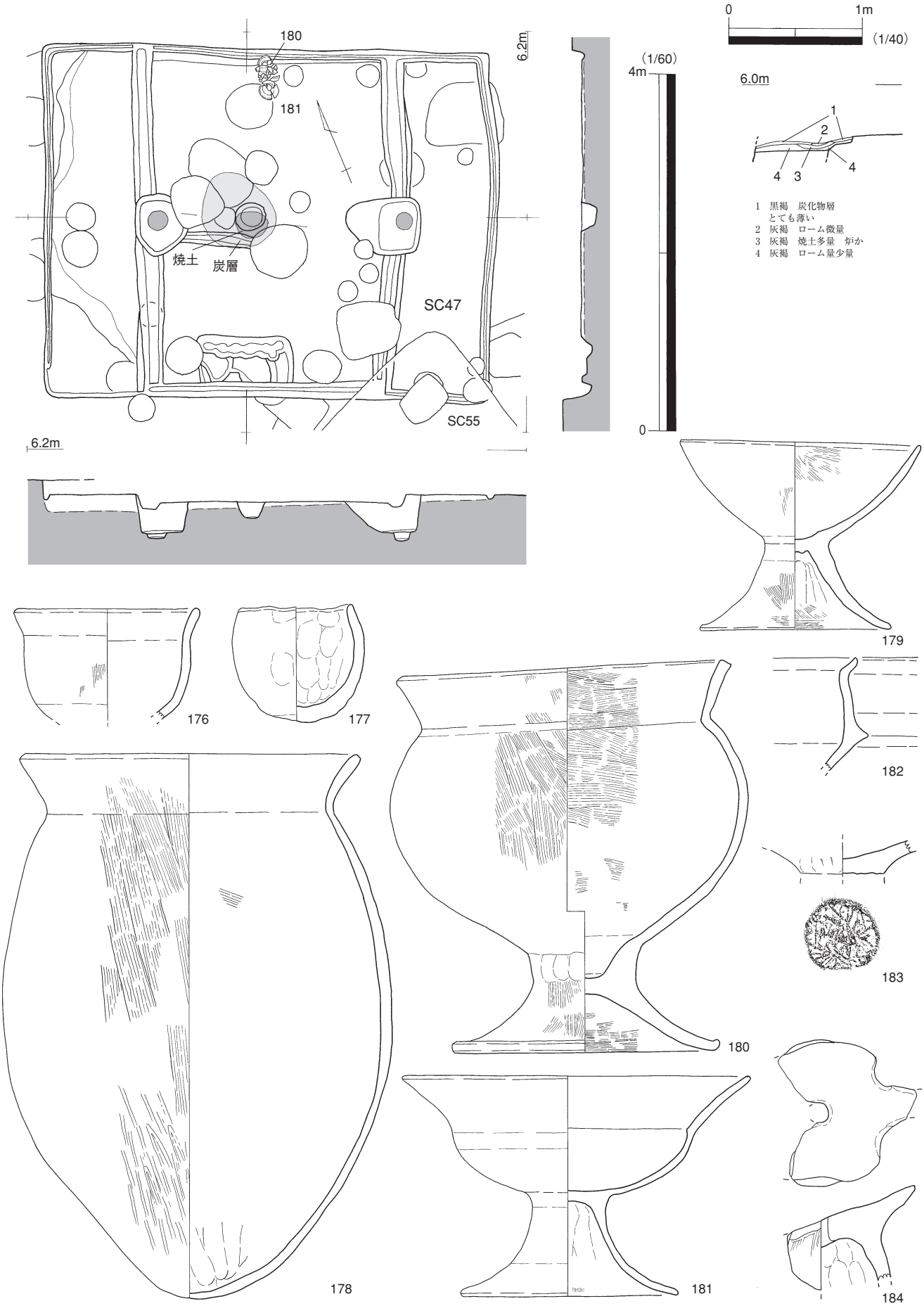

180
181
6.2m
焼土
炭層
SC47
SC55
6.2m
(1/60)
4m
0
0
1m
(1/40)
6.0m
1
2
4
3
4
1 黒褐 炭化物層
とても薄い
2 灰褐 ローム微量
3 灰褐 焼土多量 炉か
4 灰褐 ローム量少量
179
176
177
182
183
180
178
181
184

Fig.37 SC47

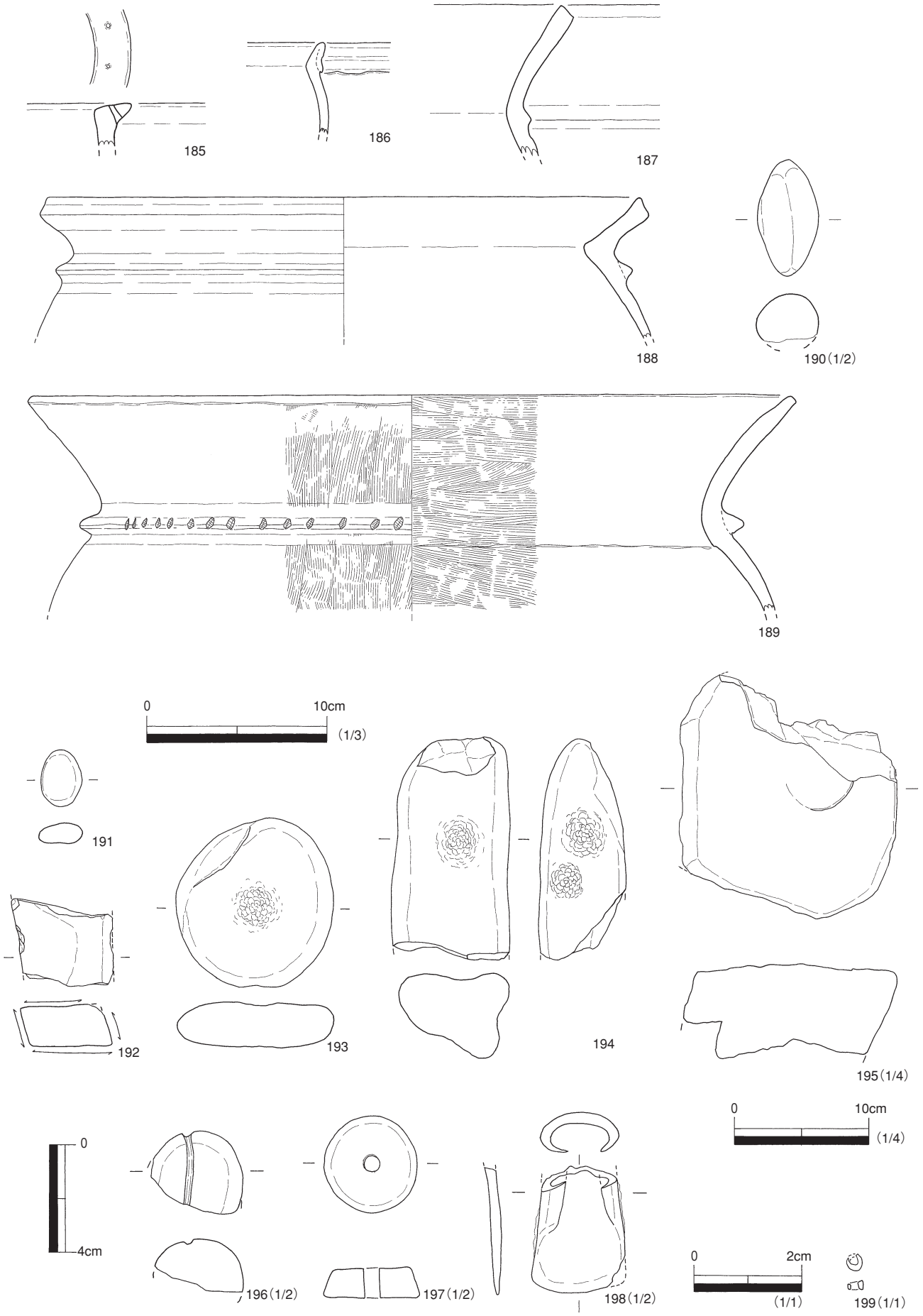


Fig.38　SC47 出土遺物

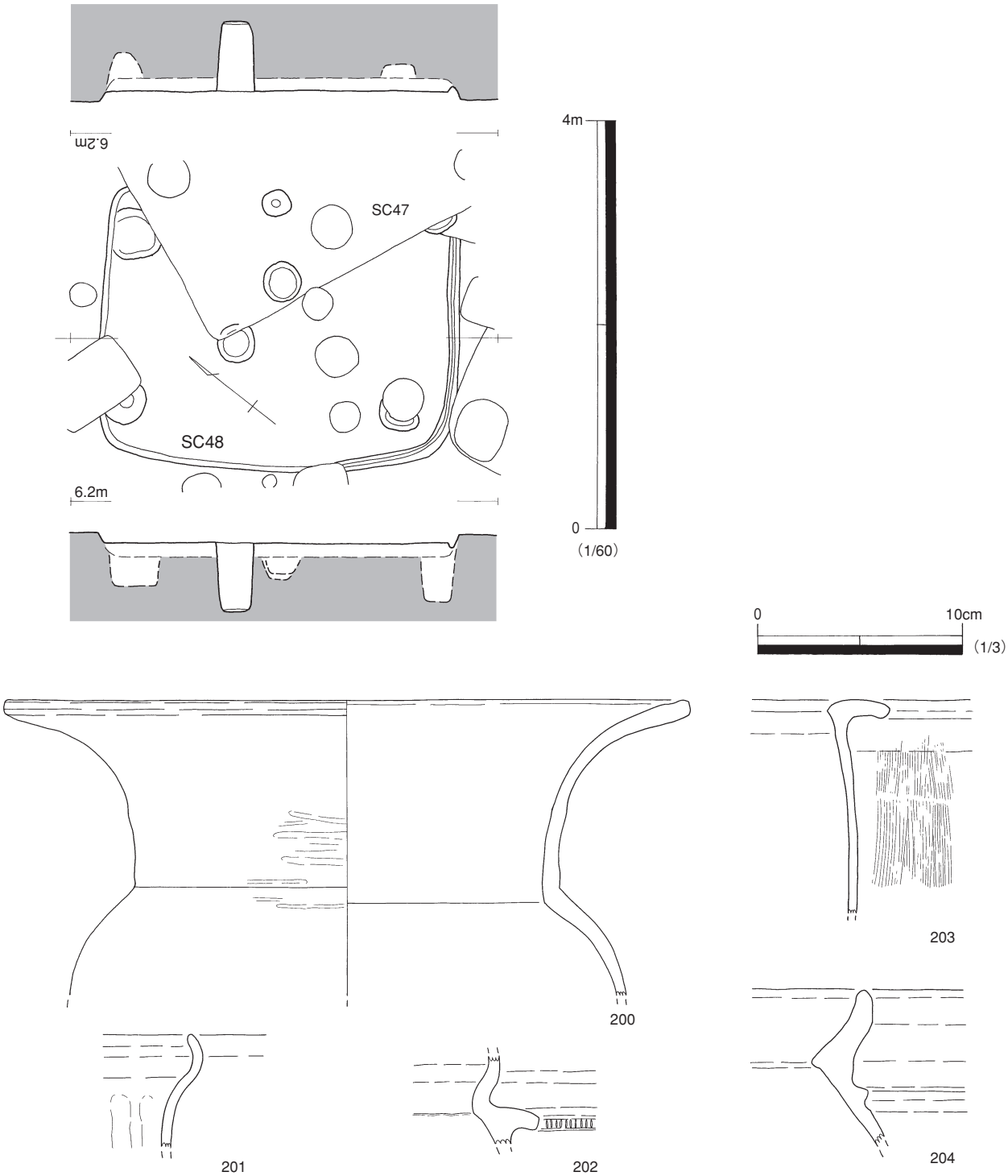


Fig.39　SC48

る。

177 は南側壁溝から、180・181 は北側壁際中央付近の床直上から出土した。176 は壺。径 4 mm 以下の白色砂粒を多く含む。177 は鉢。178 は甕。わずかに平底が残る。179･180 は脚付き鉢。181 は高坏。182 は壺。183 は高坏。184 は支脚。185 ～ 189 は紛れ込みと考えられる。185 は弥生土器壺。丹塗り。186 は無文土器で三角形粘土帯土器。187 ～ 189 は甕。190 は土製投弾。191 は砂岩の丸石。192 は砂岩製の砥石。193 は玄武岩製の叩き石。194 は凝灰岩製の叩き石。195 は凝灰岩製の台石。196 は「SC109

周辺」として取り上げた遺物。砂岩製の石錘。21.5g。197 は滑石製の紡錘車。198 は鉄斧。199 は緑色のガラス小玉。径３ｍｍ、高さ１～1.5mm。顕微鏡観察の結果、引き伸ばし法で製作されたと考えられる。また、蛍光Ｘ線分析の結果、基礎ガラスはカリガラス、着色材にコバルト Co が関与していると推定される。遺構の時期は古墳時代前期（ⅡＡ期）。

SC48（Fig.39　PL. 7）

調査区南寄りで検出した小型の方形住居。SC47 に切られる。貼床は地山ロームが主体とならない暗褐色土であったが、黒褐色土を埋土とする壁溝が検出できた高さから下は貼床がされていると判断した。主柱穴は不明確だが、４本になる可能性がある。

200・201 は壺で、いずれも丹塗り。200 は床面直上出土の可能性がある。202 は甑形土器。203・204 は甕。204 は SC47 との切り合い部分から出土した。遺構の時期は弥生時代中期末頃であろう。

SC49（Fig.40）

調査区南寄りで検出した。底面の貼床状の痕跡から小型の方形住居と考える。主柱穴は不明確で、可能性がありそうなものを図化した。

205・206 は壺。206 は頸部内面に接合痕が残る。207 は甕。その他、弥生時代終末期～古墳時代前期とみられる土器の破片を多数含む。遺構の軸から、時期は弥生時代中期と考える。205・206 などは切り合う柱穴を認識できずに掘った際に紛れ込んだものと考えたい。

SC50（Fig.40　PL. 7）

調査区西寄りで検出した。底面の貼床状の痕跡から小型の方形住居と考える。柱穴は不明確である。

208 は壺。209 は丸石で、砂岩か。その他、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器の破片も混じるが、紛れ込みだろうか。遺構の軸から時期は弥生時代中期と考えておく。

SC51（Fig.40　PL. 8）

調査区南寄りで検出した。小型の方形住居と考える。２軒が切り合う可能性がある。SP521 は SC51 の埋土掘削時は柱痕のみ検出し、床面まで掘り下げた段階で掘り方を検出した。

210 は鉢か。丹塗り。遺構の時期は弥生時代中期末か。

SC52（Fig.40）

調査区南側で検出した。攪乱に大きく削られるが、貼床状の痕跡があり、方形住居の隅部と考える。SC53 に切られる可能性が高い。遺構の軸から、時期は弥生時代終末期と考える。

SC53（Fig.40）

調査区南側で検出した。攪乱に大きく削られるが、方形住居の隅部と考える。

211･212 は SC53･54 のいずれかから出土した。211 は鉄器で、刀子か。212 は壺。胎土は精良だが、径 3mm 程の白色砂粒を少し含む。遺構の軸から、時期は弥生時代終末期と考える。

SC54（Fig.40）

調査区南側で検出した。攪乱に大きく削られるが、方形住居の隅部と考える。

袋状口縁壺の破片が出土しているが、紛れ込みだろう。遺構の軸から、時期は弥生時代終末期と考える。

SC55（Fig.41　PL. 8）

調査区南側で検出した。SC47 の埋土を地山ローム主体土が切る状況を確認し、方形住居のベッド状遺構の貼床盛土が SC47 を切っていると判断したが、住居のプランを明確におさえることはできなかった。主柱穴は不明確だが、２本柱だろうか。SC58 と軸を揃える。

213 は赤色砂岩製の砥石。SC58 と軸を揃えることからも、時期は古墳時代前期か。

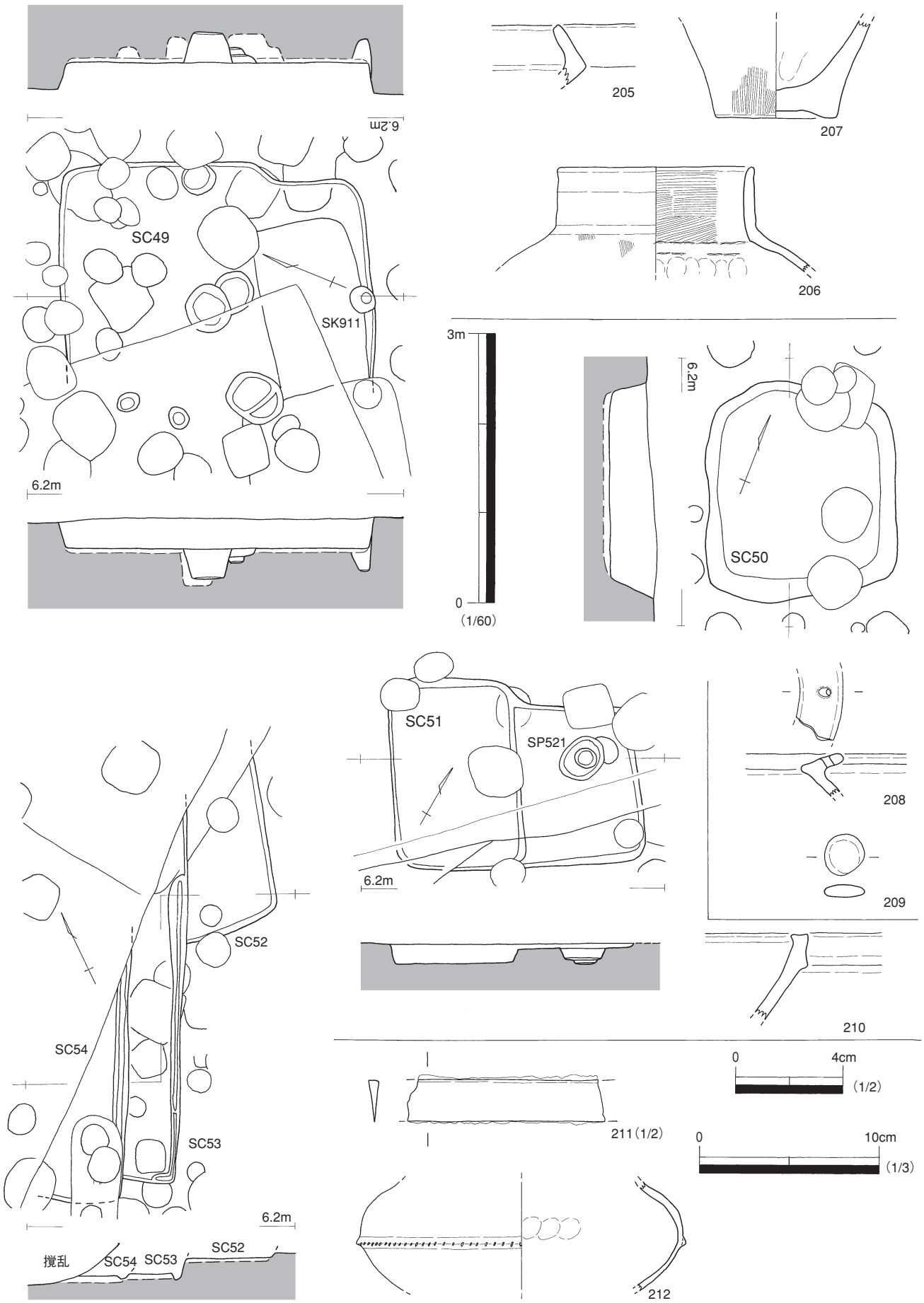


Fig.40　SC49・50・51・52・53・54

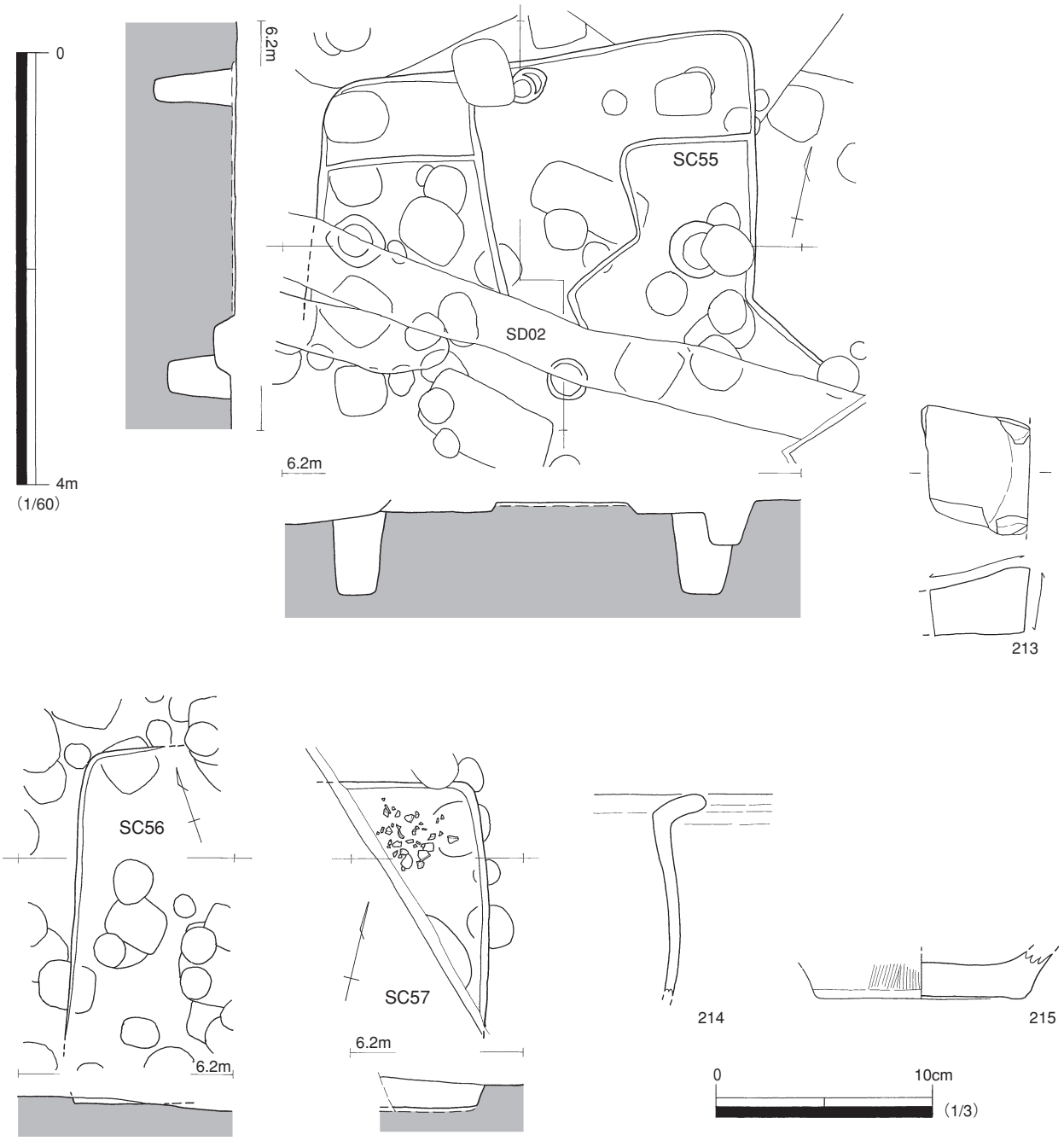


Fig.41　SC55・56・57

SC56（Fig.41）

調査区南側で検出した。東側および南側はゆるやかに削られ残っていないが、方形住居の隅部と考えられる。

SC57（Fig.41　PL. 8）

調査区南端で検出した。方形住居の隅部と考えられ、床面からやや浮いた状態で多くの土器片が出土した。壁溝のような痕跡もあったが、図化できなかった。

214・215 は甕。遺構の時期は弥生時代中期末だろう。

SC58（Fig.42　PL. 8）

調査区南側で検出した方形住居。西側は緩やかに削られており、壁が明確でない。中央炉は焼土や炭の検出はないが、何度も掘り直している。南側に屋内土坑とみられる掘り込みがある。主柱穴は不明確で、可能性のあるものを図化した。東側に貼床盛土によるベッドの痕跡のようなものがあったが、

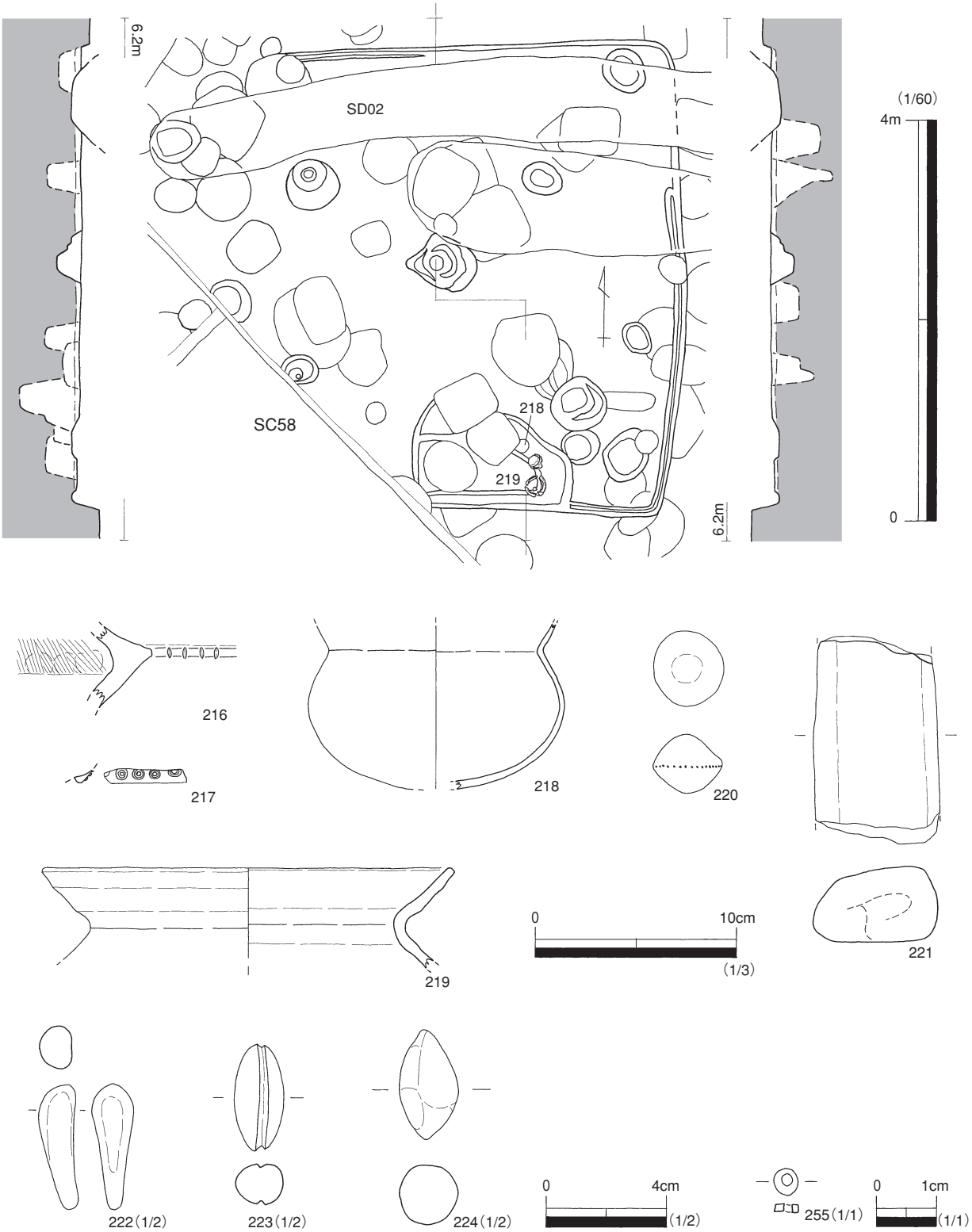

6.2m
SD02
SC58
218
219
6.2m
(1/60)
4m
0
216
217
218
220
221
219
0
10cm
(1/3)
222(1/2)
223(1/2)
224(1/2)
0
4cm
(1/2)
255(1/1)
0
1cm
(1/1)

Fig.42　SC58

プラン等は不明確であった。SC55 と軸を揃える。

218・219 は屋内土坑脇の床面直上から出土した。216・217・218 は壺。217 は二重円を凸で施文する。219 は甕。220 は不明土製品。鈴形カステラのような形をしており、側面周囲に針で刺したような穴が無数に空いている。羽根か何かを付けたのだろうか。221 も不明土製品。出汁巻卵のような形をしており、粘土板を巻いて成形している。砂粒を多く含み、弥生土器のような胎土である。222 は泥岩製の不明石器。表面がスベスベしており、土器等のミガキに用いられたものだろうか。223 は石錘。片岩製か。10.9g。224 は土製投弾。225 は屋内土坑付近から出土した滑石製臼玉。径 4 mm、高さ 1.5mm。その他、床面直上でかなり薄手の土師器甕の破片が出土した。遺構の時期は古墳時代前期（Ⅱ B 期 ?）。

3、掘立柱建物

25 軒を掘立柱建物と認定したが、竪穴建物同様に本来はそれ以上の数が存在すると考えられる。特に調査区の南側は密に柱穴が存在する。Fig. 5 で全ての柱穴の大まかな深さを図示したので、それを基に再検証できるようにした。

SB01（Fig.43　PL. 8）

調査区東側で検出した。深い柱穴が 3 基並び、少し強引だが調査区外に続く建物と判断した。北西側の SP863 は隅丸方形で、柱の抜き取り坑とみられる階段状の掘り方がつく。柱痕から柱の径は 20 ㎝程度と考えられる。SP222 も土層から柱が抜き取られた可能性が高い。

遺物は全ての柱穴で弥生時代中期の遺物が主体となる。226･228 が SP222 出土。227 が SP863 出土。229・230 が SP309 出土。226 は壺か。ハケ目工具による刺突で羽状文を施文する。227 ～ 229 は甕。230 は礫岩製の叩き石。鉄らしき粒が付着し、一部に被熱を受ける。遺構の時期は弥生時代中期か。

Tab.2　掘立柱建物一覧

No.	間	長さ	幅	柱径	長軸柱間	短軸柱間	総 / 側	時期
SB01	1 × 2+	7.6+	–	0.2	3.8	–	?	弥生中期か
SB02	1 × 1	4.8	3.2	0.25	4.8	3.2	–	弥生終末期
SB03	1 × 2	4.6	3.0	0.35	2.3	3.0	–	弥生後期か
SB04	1 × 2	5.4	3.3	?	2.7	3.3	–	弥生後期か
SB05	2 × 2	5.3	3.4	0.15	2.65	1.7	側	古墳前期か
SB06	1 × 1	3.3	2.1	?	3.3	2.1	–	弥生終末期か
SB07	1 × 2	2.8	2.4	?	2.8	2.4	–	古墳前期か
SB08	1 × 2	5.6	4.0	?	2.8	4.0	–	弥生後期か
SB09	1 × 1+	–	3.9	0.25	2.7	3.9	–	古墳前期か
SB10	1 × 2 か	4.1	2.9	?	2.05	2.9	–	弥生終末期か
SB11	1 × 1	3.0	2.7	0.15	3.0	2.7	–	古墳前期か
SB12	2 × 2	3.2	3.1	0.2	1.6	1.55	総	7 世紀
SB13	1 × 1+	–	2.6	?	2.6	2.6	–	?
SB14	1 × 1	3.0	2.7	?	3.0	2.7	–	7 世紀
SB15	1 × 2	2.8	2.4	0.25	1.4	2.4	–	7 世紀
SB16	1 × 3	6.2	4.1	0.2	2.1	4.1	–	古墳前期
SB17	1 × 3	6.7	5.1	0.2	2.2	5.1	–	古墳前期
SB18	1 × 2	3.8	2.7	?	1.9	2.7	–	弥生中期 ?
SB19	1 × 1	3.8	2.4	0.15	3.8	2.4	–	弥生後期か
SB20	2 × 2?	4.0	3.0	?	2.0	2.3	側	弥生後期か
SB21	1 × 1	3.7	3.3	?	3.7	3.3	–	弥生後期か
SB22	1 × 2	5.4	4.0	?	2.7	4.0	–	古墳前期か
SB23	1 × 2	4.0	3.4	0.2	2.0	3.4	–	古墳前期か
SB24	1 × 2+	4.4	–	?	2.2	–	–	?
SB25	1 × 2+	5.9	3.3	?	2.95	3.3	–	弥生中期 ?

※単位は m。+ はそれ以上になる可能性があることを示す。

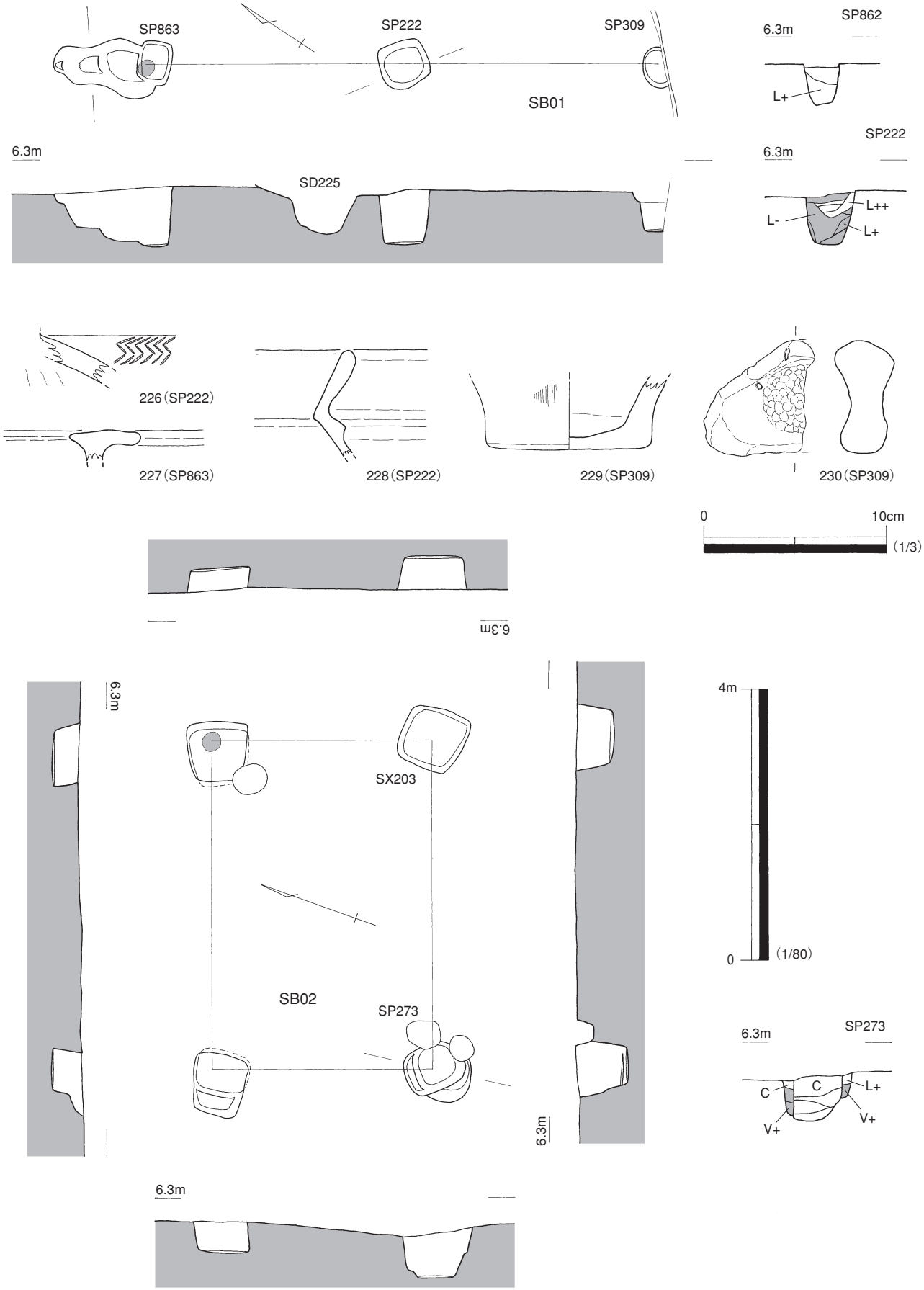


Fig.43　SB01・02

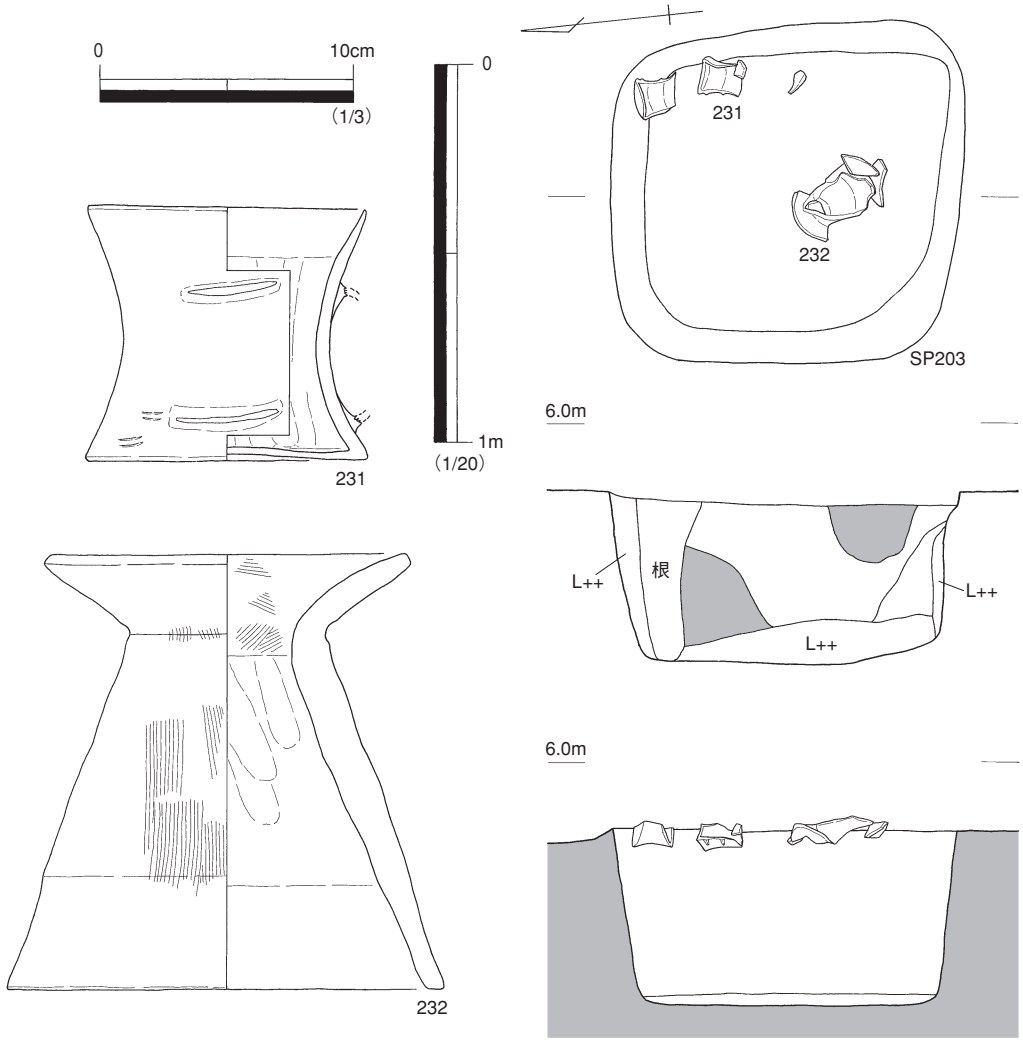


Fig.44　SP203

SB02（Fig.43・44　PL. 8・9）

調査区東側で検出した１×１間の建物。柱穴は方形だが、柱穴の主軸は必ずしも建物の主軸に一致しない。SP273 は SB03 の柱穴と切り合う。SP809 の柱痕から柱の径は 25㎝程度と考えられる。長軸の柱間の距離が広く、「門」などの遺構になる可能性がある。

弥生時代中期の遺物が多いが、終末期頃の破片もある。231・232 は SP203 上層から出土。231 は肥後系のジョッキ形土器。底部付近にタタキのような痕がある。角閃石らしき鉱物をわずかに含むが、口縁端部や底の薄さ、またやや上げ底になる等の特徴は、熊本出土のものにはあまりみられない。232 は器台。遺構の時期は弥生時代終末期か。

SB03（Fig.45　PL. 9）

調査区東側で検出した１×２間の建物。SB04 と軸を揃え並ぶ。柱穴は歪な隅丸方形を呈し、柱痕から柱の径は他の建物よりも明らかに大きく、35㎝程度と考えられる。SP273 は SB02 の柱穴と切り合う。SC05 に切られる。

遺物は弥生時代中期～終末期頃の破片が混じり、明確な古墳時代前期の遺物は含まない。凸レンズ底の破片を含む。233 は SP274 出土の土製投弾。234 は SP488 出土の鉄器で、鑿もしくは鏨か。遺構の時期は弥生時代後期～終末期で、軸から後期か。

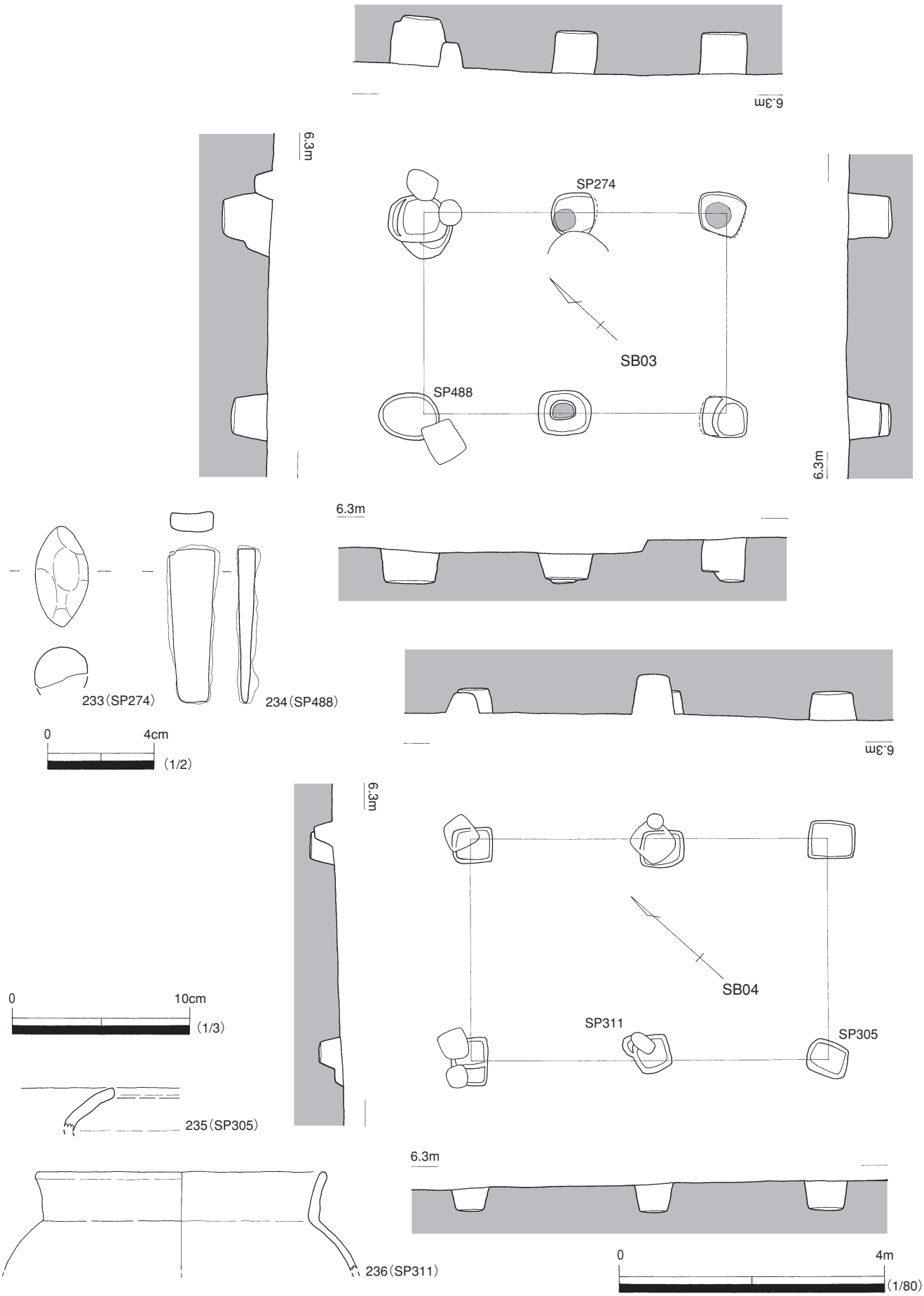


Fig.45　SB03・04

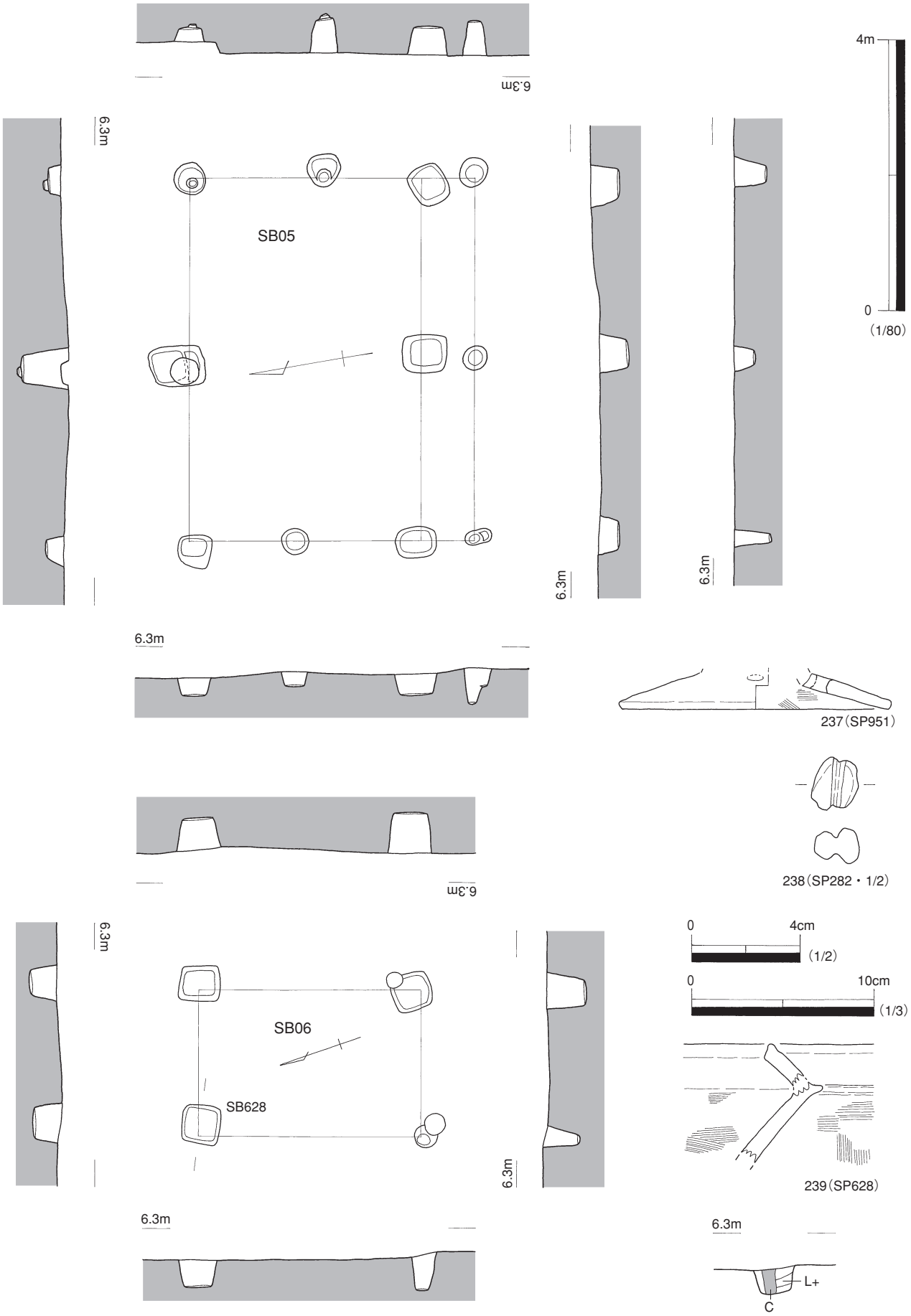


Fig.46　SB05・06

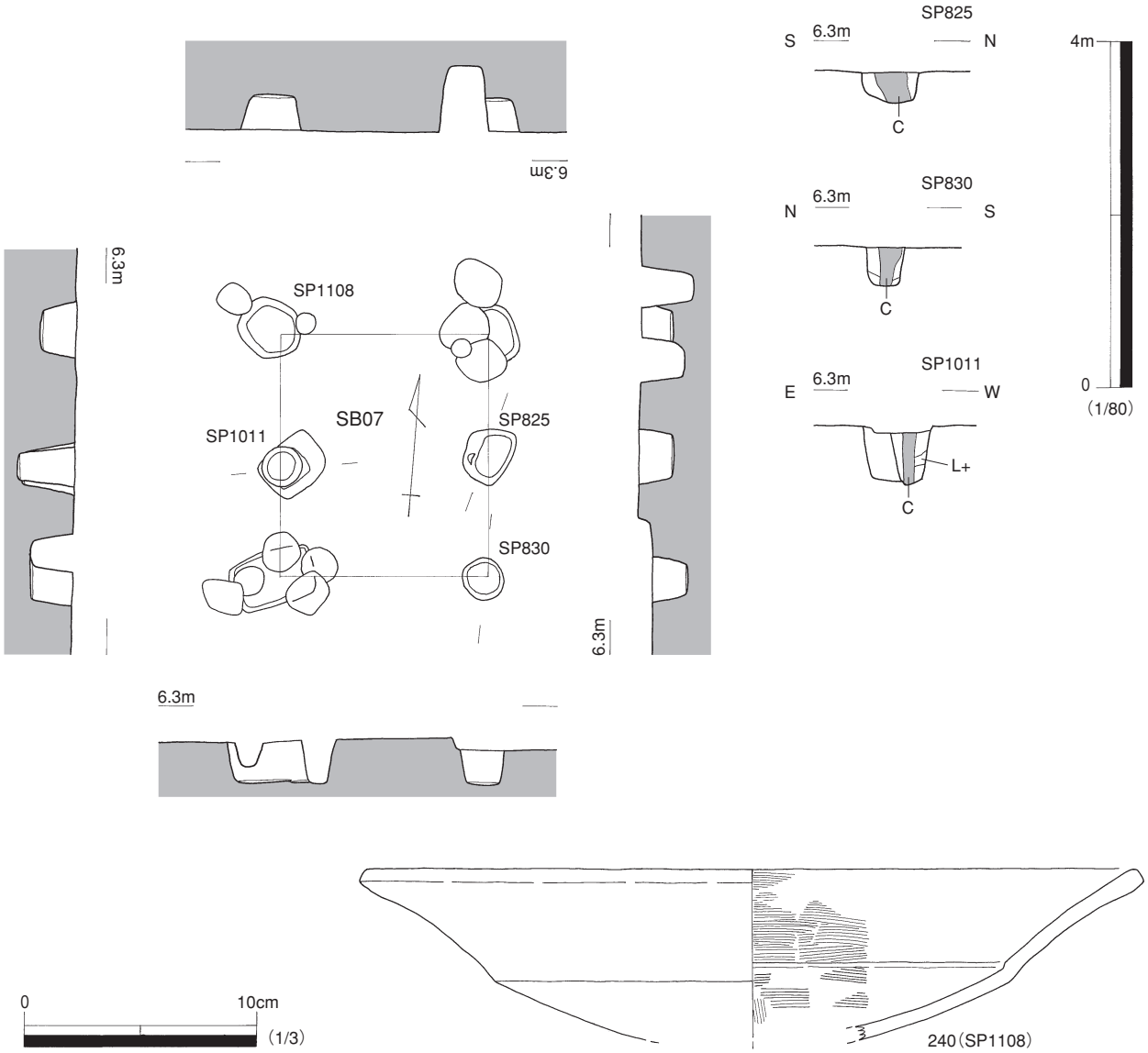


Fig.47　SB07

SB04（Fig.45）

調査区東側で検出した１×２間の建物。SB03と軸を揃え並ぶ。柱穴は隅丸方形を呈する。SC06に切られる可能性が高い。

遺物はSB03同様に弥生時代中期～終末期頃の破片が混じる。235はSP305出土の甕。236はSP311出土の壺。遺構の時期はSB03と同じく弥生時代後期か。

SB05（Fig.46）

調査区東側で検出した２×２間の建物。柱穴は隅丸方形を呈する。柱痕から柱の径は15～20cm程度か。南側に庇のようなものがつく可能性がある。SB04を切る。SC05･06との関係はやや不明確だった。

237はSP951出土の高坏。238はSP282出土。石英質で、石錘か。4.9g。遺構の時期は古墳時代前期か。

SB06（Fig.46）

調査区東側で検出した１×１間の建物。柱穴は隅丸方形を呈する。SB04を切る。

239はSP628出土の壺。傾きが不明確だが、口縁部は内傾する。遺構の時期は弥生時代後期～終末期で、軸から終末期か。

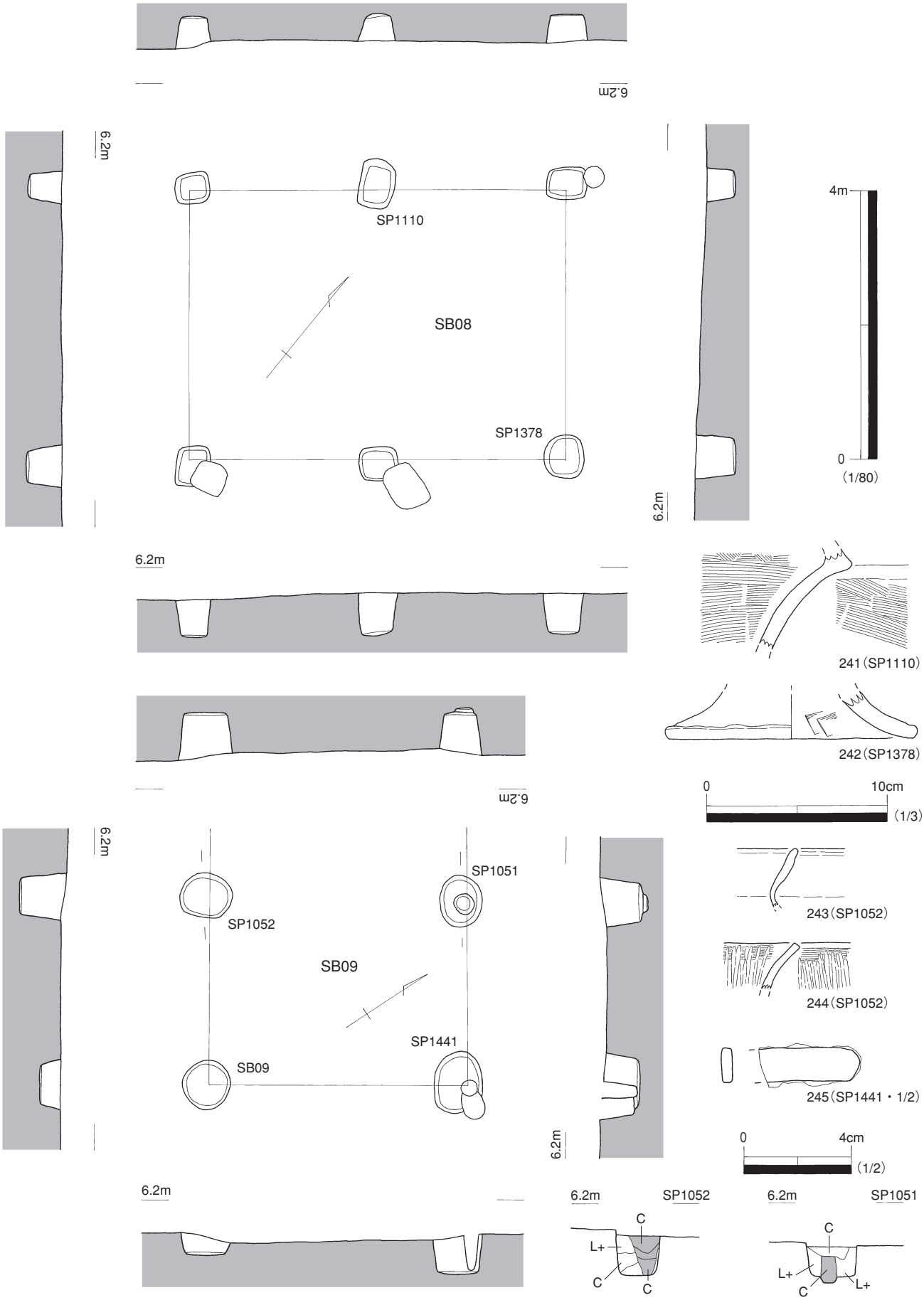


Fig.48　SB08・09

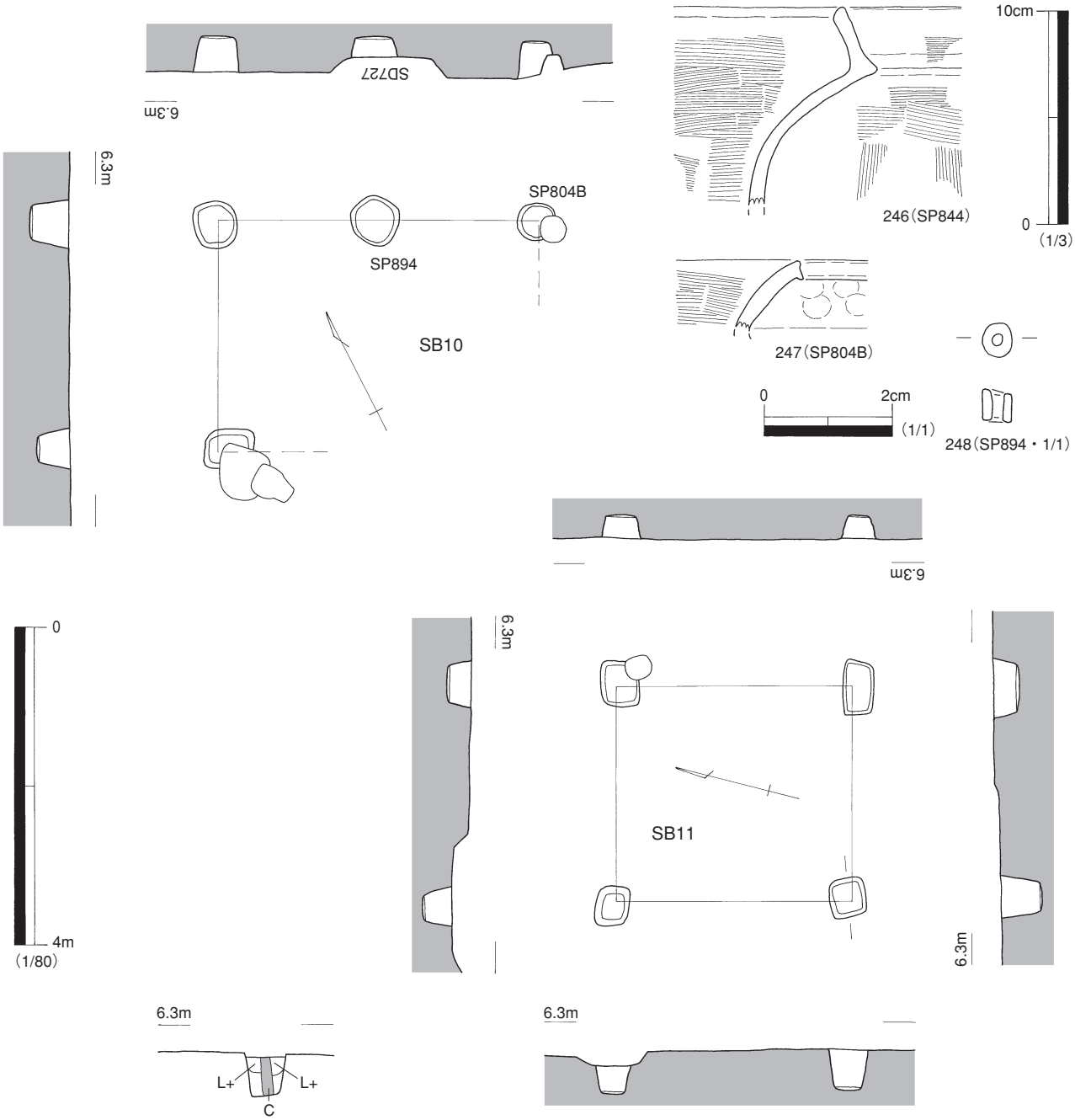


Fig.49　SB10・11

SB07（Fig.47）

調査区北側で検出した１×２間の建物。SC14 を切る。

遺物は混じりが多いが、弥生時代中期の破片は少なく、また須恵器の破片はない。240 は SP1108 出土の高坏。遺構の時期は古墳時代前期か。

SB08（Fig.48）

調査区北側で検出した１×２間の建物。柱穴は隅丸方形を呈する。SC22 に切られる。

241 は SP1110 出土の壺。242 は SP1378 出土の脚部。遺構の軸からも、時期は弥生時代後期か。

SB09（Fig.48）

調査区北側で検出した１×１間以上の建物で、調査区外に伸びる可能性がある。柱穴は円形を呈する。

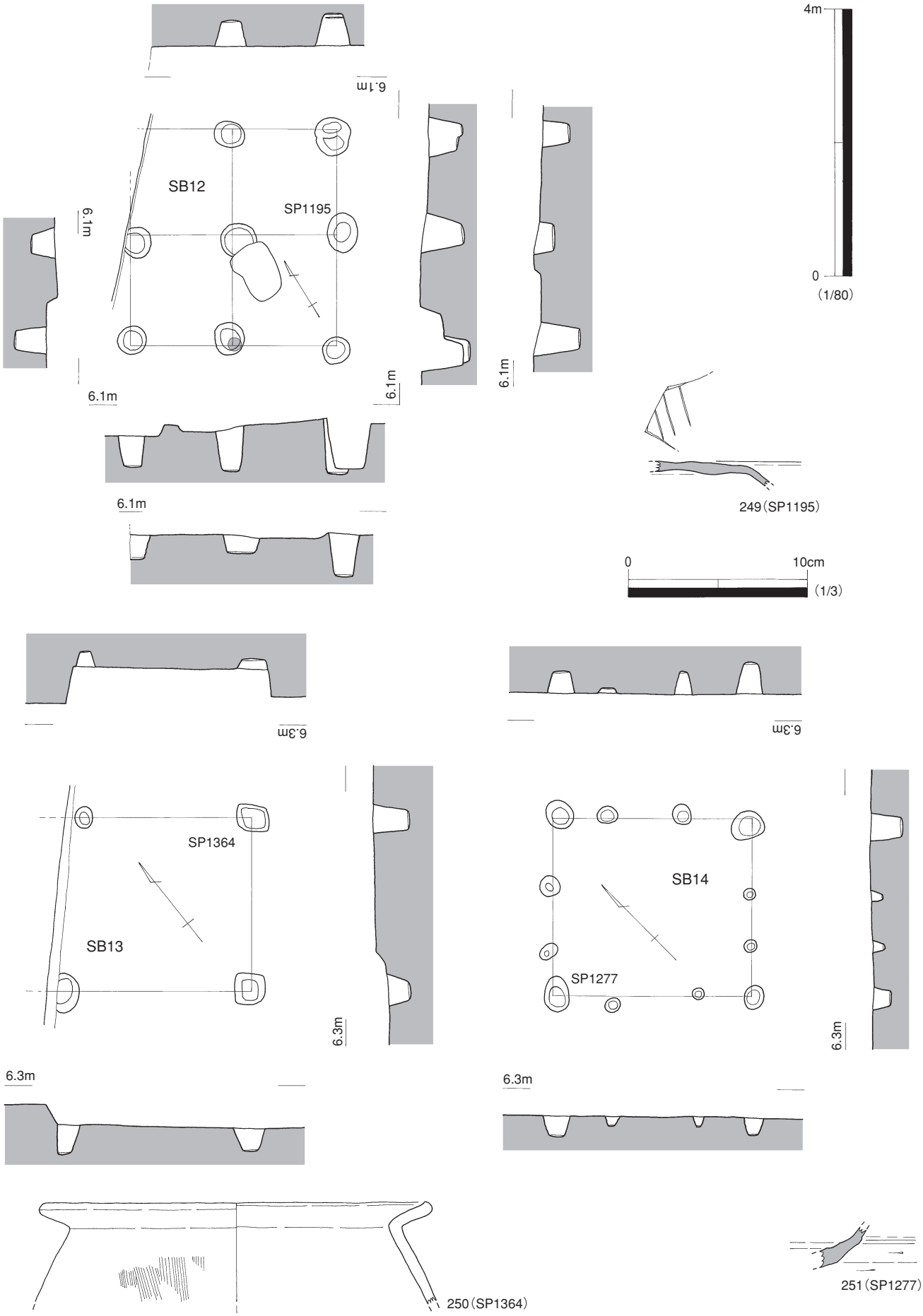


Fig.50　SB12・13・14

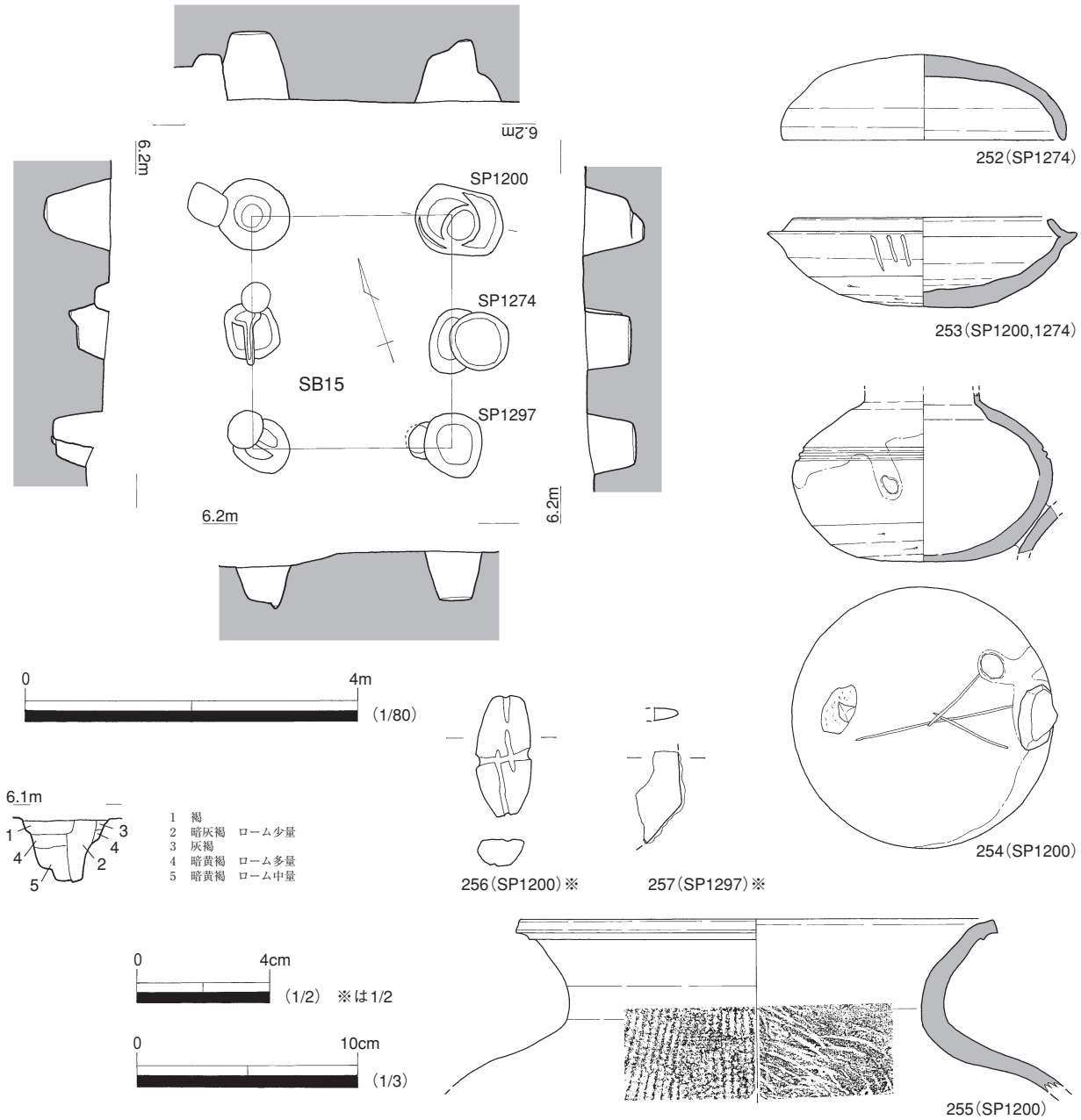


Fig.51 SB15

SC22を確実に切る。柱痕から柱の径は25cm程度か。

遺物は混じりがあるが、須恵器の出土はない。243・244はSP1052出土。243は甕。244は壺か。245は鉄器で、刀子か。SC22を切り、遺構の時期は古墳時代前期か。

SB10（Fig.49）

調査区北側で検出した1×2間と考えられる建物。SD225に切られる。SD727との切り合いは不明確だが、SD727の遺物の出土状況から、SD727を切る可能性が高い。

246・248はSP894出土だが、SD727の遺物である可能性もある。247はSP804出土。246は壺。247は甕。248は青色のガラス小玉。径4.5㎜～5.5㎜のやや楕円形を呈し、高さは4～5㎜。で引き伸ばし法で製作されたと考えられる。蛍光X線分析で調査した結果、基礎ガラスは高アルミナソーダ石灰ガラス、着色材に鉛Pbと銅Cuが関与していると推定される。遺構の時期は弥生時代後期～終末期で、

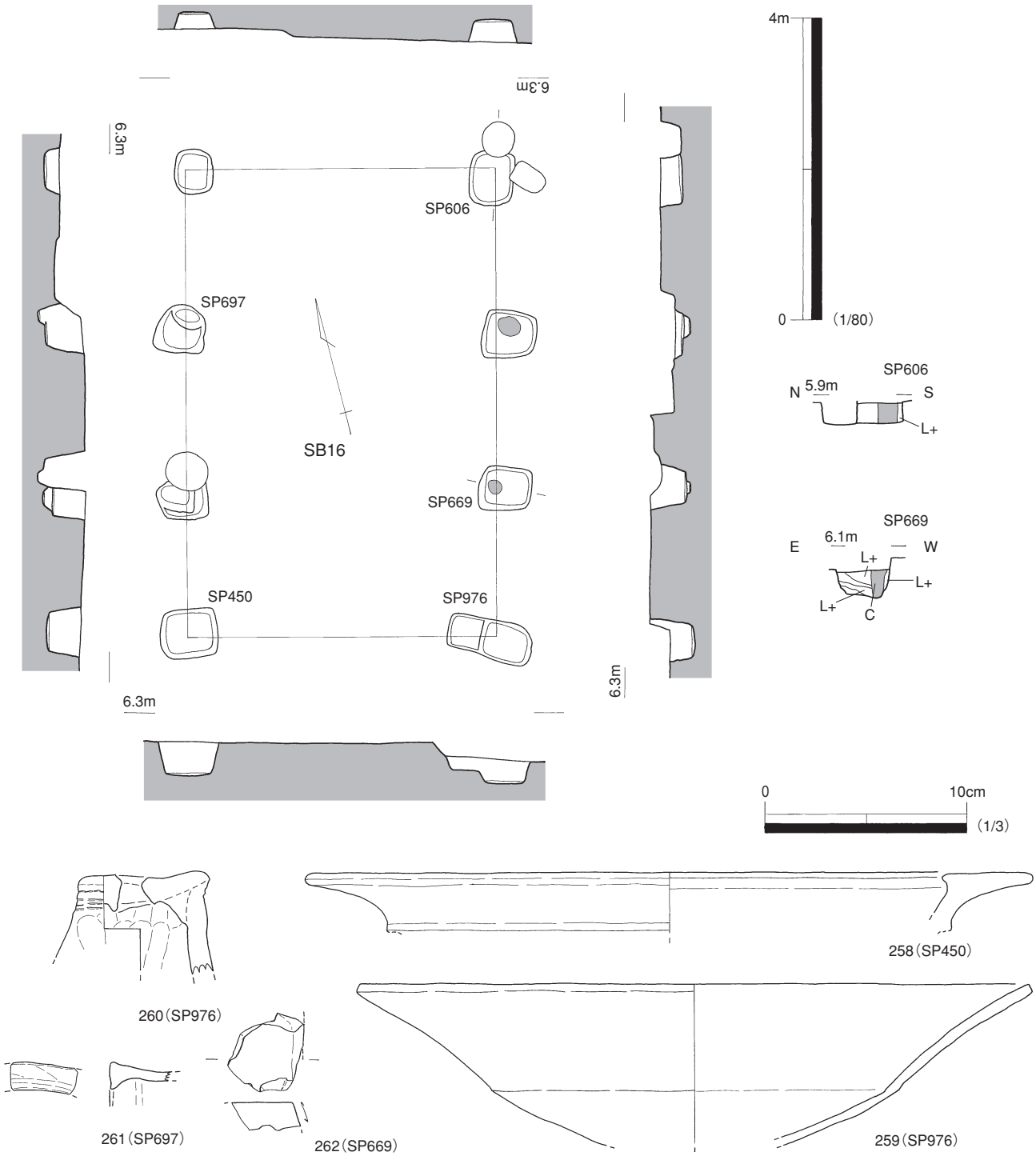


Fig.52　SB16

軸から終末期か。

SB11（Fig.49）

調査区北側で検出した１×１間の建物。柱穴は方形を呈する。SD727 を切る。柱痕から柱の径は 15 ㎝程度か。

遺物は混じりがあるが、弥生時代中期の破片は少なく、須恵器の出土もない。遺構の軸から時期は

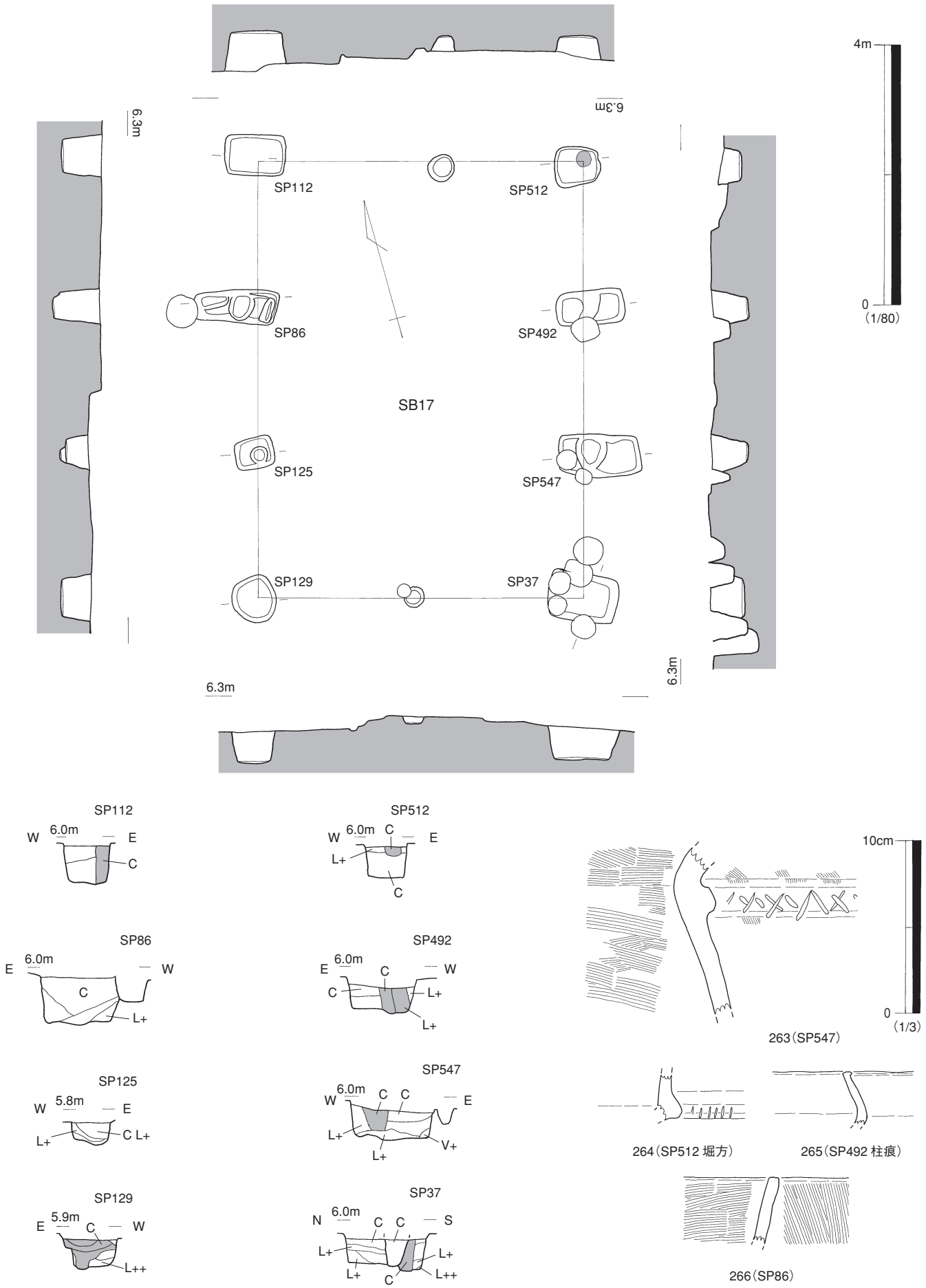

4m
0
(1/80)
6.3m
6.3m
SP112
SP512
SP86
SP492
SB17
SP125
SP547
SP129
SP37
6.3m
6.3m
SP112
W 6.0m E
C
SP512
W 6.0m C E
L+
C
SP86
E 6.0m W
C
L+
SP492
E 6.0m C W
C
L+
L+
SP125
W 5.8m E
L+ C L+
SP547
W 6.0m C C E
L+
L+
V+
SP129
E 5.9m C W
L++
SP37
N 6.0m C C S
L+
L+
L+
C
L++
10cm
0
(1/3)
263(SP547)
264(SP512 堀方)
265(SP492 柱痕)
266(SP86)

Fig.53　SB17

古墳時代前期か。

SB12（Fig.50）

調査区西側で検出した２×２間の総柱建物。SC32・36を切る。柱痕から柱の径は20㎝程度か。

249はSP1195出土の須恵器で、蓋か。焼け歪みがある。遺構の時期は７世紀だろう。

SB13（Fig.50）

調査区西側で検出した１×１間以上の建物で、調査区外に伸びる可能性がある。柱穴は一部歪な隅丸方形を呈する。

遺物は弥生時代中期を主体とするが、SC37からの紛れ込みの可能性もある。250はSP1364出土で、甕。口縁端部をわずかに跳ね上げる。

SB14（Fig.50）

調査区西側で検出した１×１間の建物で、柱の間に等間隔に２つずつ小穴がある。SD110と軸を揃える。

251はSP1277出土の須恵器で、鉢か。遺構の時期は７世紀だろう。

SB15（Fig.51）

調査区西側で検出した１×２間の建物。SX1333に切られる可能性が高い。柱痕から柱の径は25㎝程度か。

252がSP1274出土、254・255・256がSP1200出土、257はSP1297出土、253はSP1200と1274で出土した破片が接合した。252～255は須恵器。252は坏蓋。焼成不良のためか軟質で、ケズリの範囲が不明瞭。口径12.6cm。253は坏身で、３条の刻線がみられる。口径11.6cm。254は壺。釉だれと灰かぶりが激しい。融着する破片は割れ口や内面に灰が被らず、焼台ではない。反対側の底外面にも融着したものをはがしたような跡がある。ヘラ記号あり。255は甕。口縁部外面に泡状の灰かぶりがみられる。256は砂岩製の石錘。7.7g。257は鉄器片。遺構の時期は７世紀。

SB16（Fig.52　PL. 9）

調査区南側で検出した１×３間の建物。SB17と軸を揃え、軒を連ねる。柱穴は隅丸方形を呈し、柱痕から柱の径は20～25㎝程度か。SC42･46との切り合いは不明確だが、SB17がSC47を切ることから、SC42・SC46を切ると考える。

遺物は混じりが多いが、SD110からの紛れ込み以外に須恵器の出土はない。258はSP450出土の弥生土器壺。内外面に丹塗り。259・260はSP976出土。259は高坏。260は器台。261はSP697出土で手焙形土器か。262はSP669出土の珪質頁岩（チャート）製の砥石。遺構の時期は古墳時代前期だろう。

SB17（Fig.53　PL. 9）

調査区南側で検出した１×３間あるいは２×３間の比較的大型の建物。SB16と軸を揃え、軒を連ねる。柱穴は隅丸方形を呈し、柱痕から柱の径は20～25㎝程度か。SC47・48を切る。

遺物は混じりが多いが、須恵器の出土はない。263はSP549出土の甕。264はSP512掘り方出土の壺。豊前系か。265はSP492柱痕出土の高坏。266はSP86出土の壺か。外面に炭素を吸着させる。遺構の時期は古墳時代前期だろう。

SB18（Fig.54）

調査区南側で検出した１×２間の建物。柱穴は円形を呈する。

267はSP32出土の弥生土器鉢。遺構の時期は弥生時代中期～後期か。

SB19（Fig.54）

調査区南側で検出した１×１間の建物で、調査区外に伸びる可能性がある。柱穴は隅丸方形を呈し、

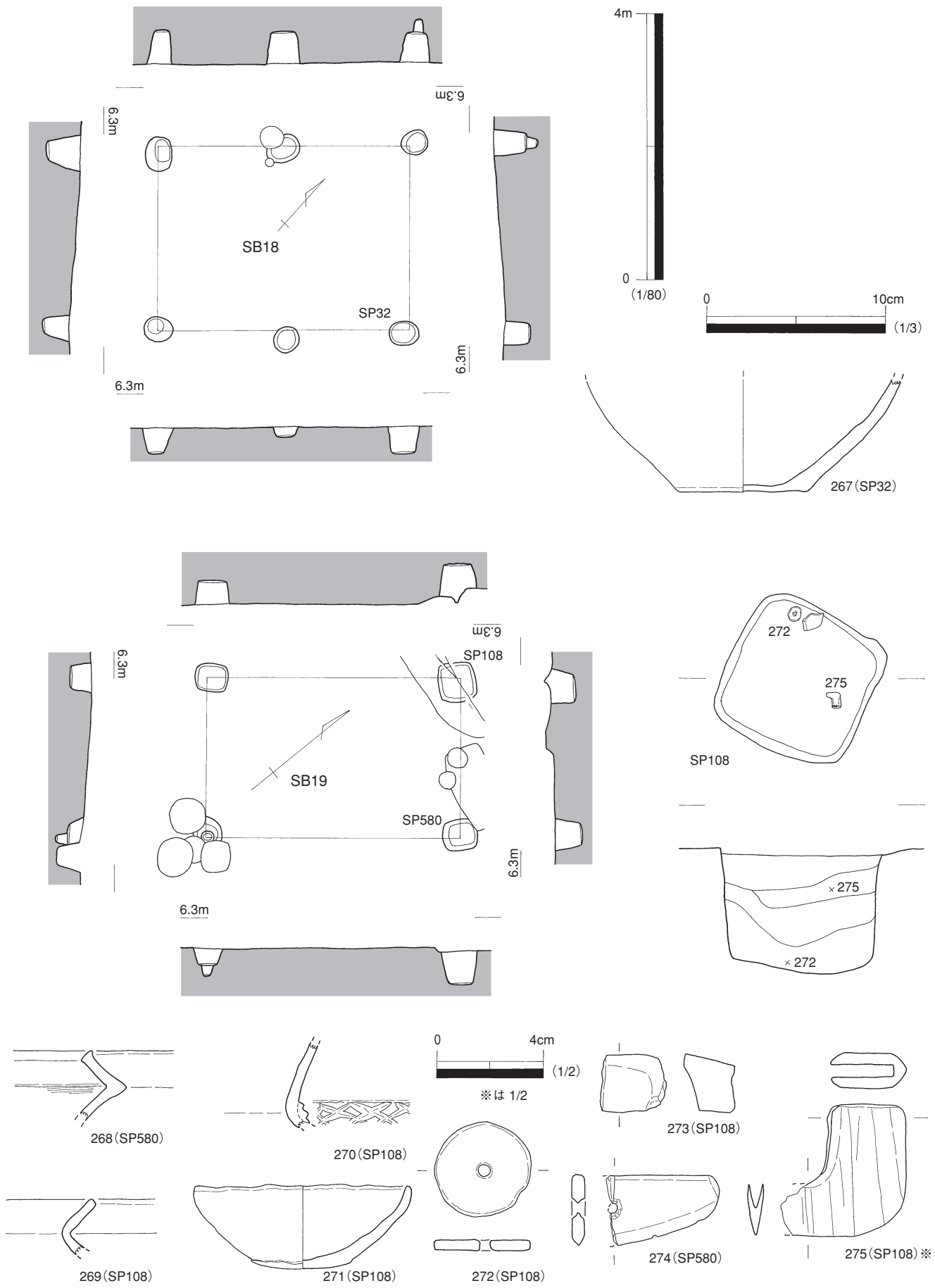


Fig.54　SB18・19

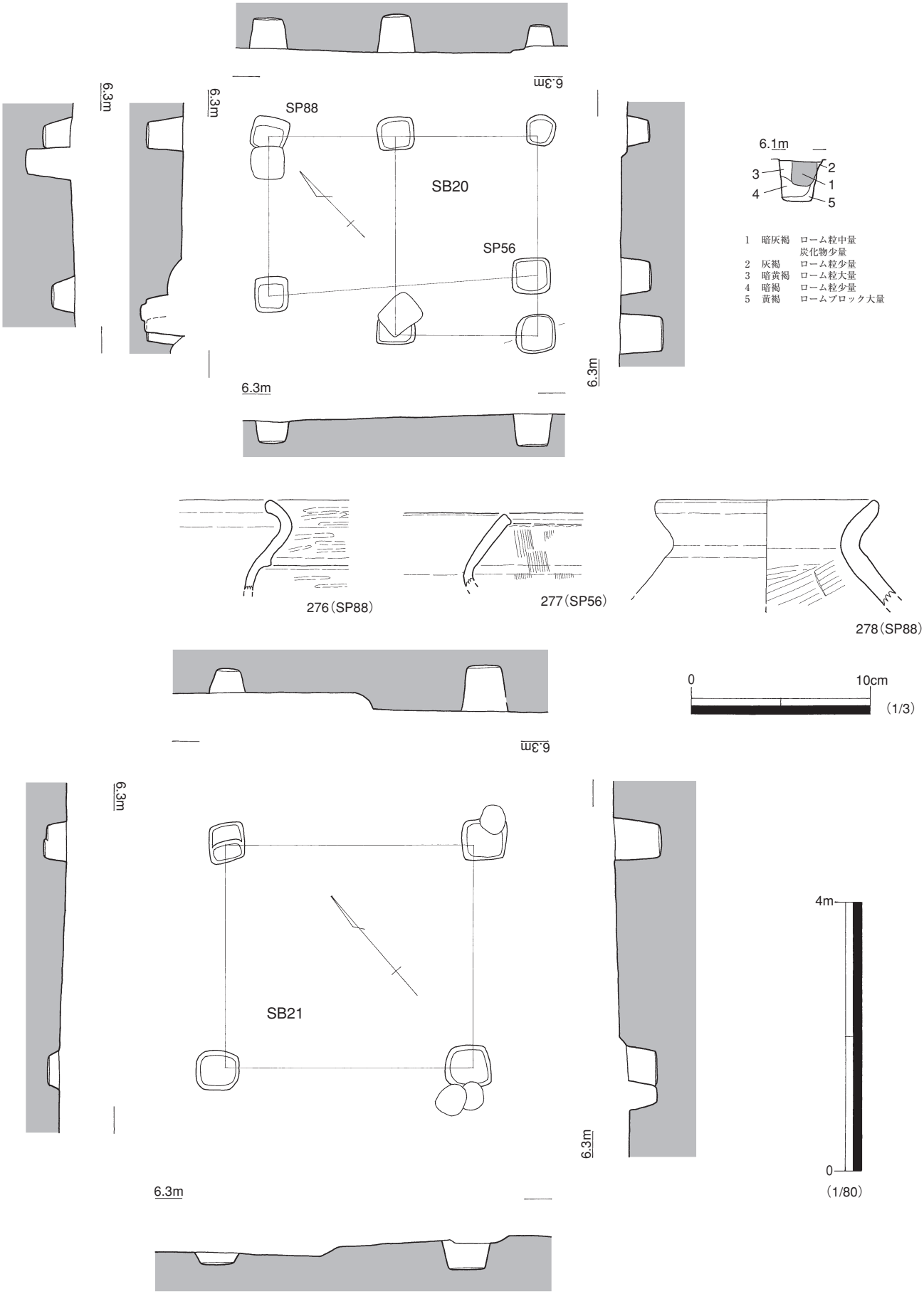


Fig.55　SB20・21

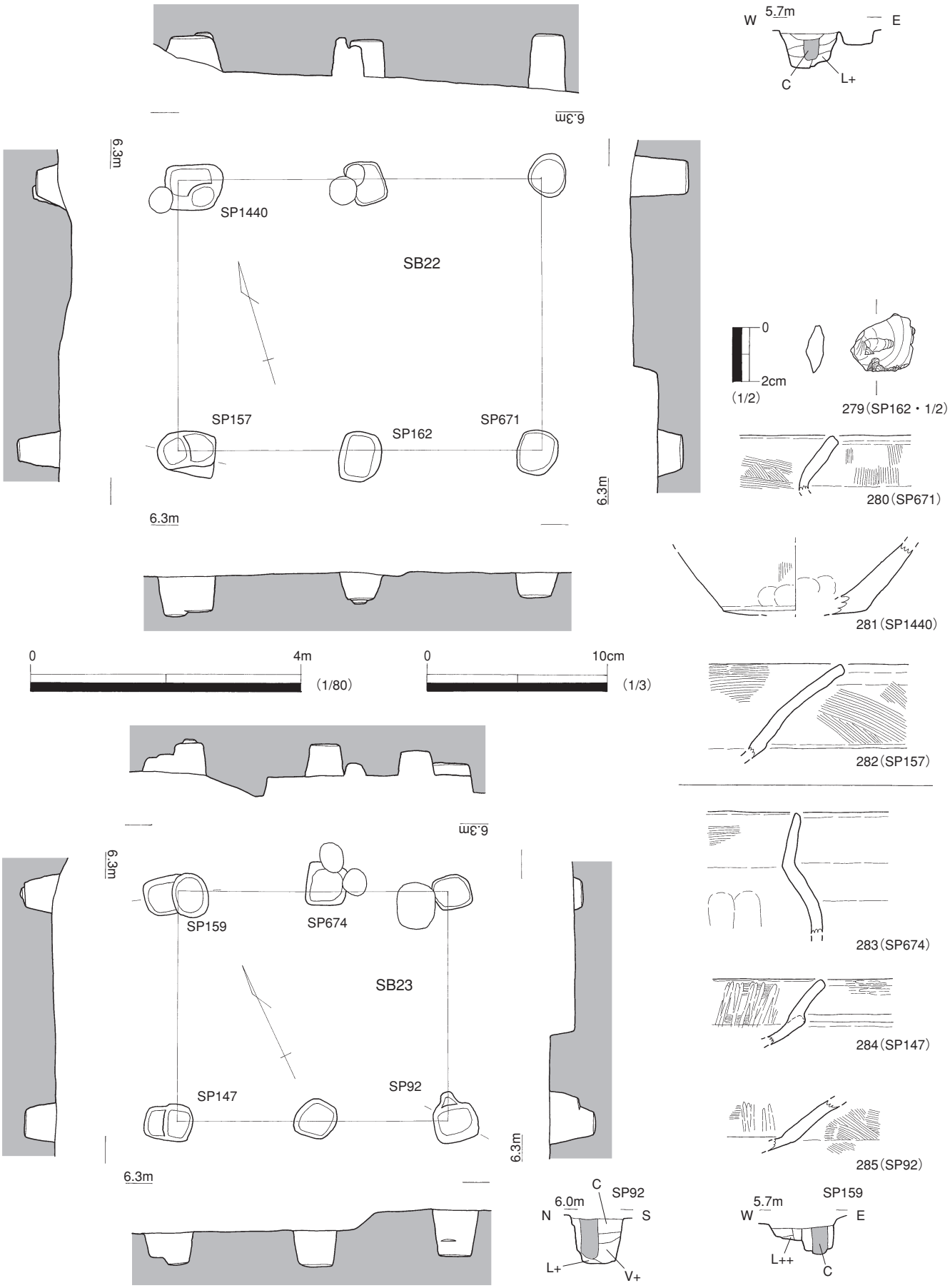


Fig.56　SC22・23

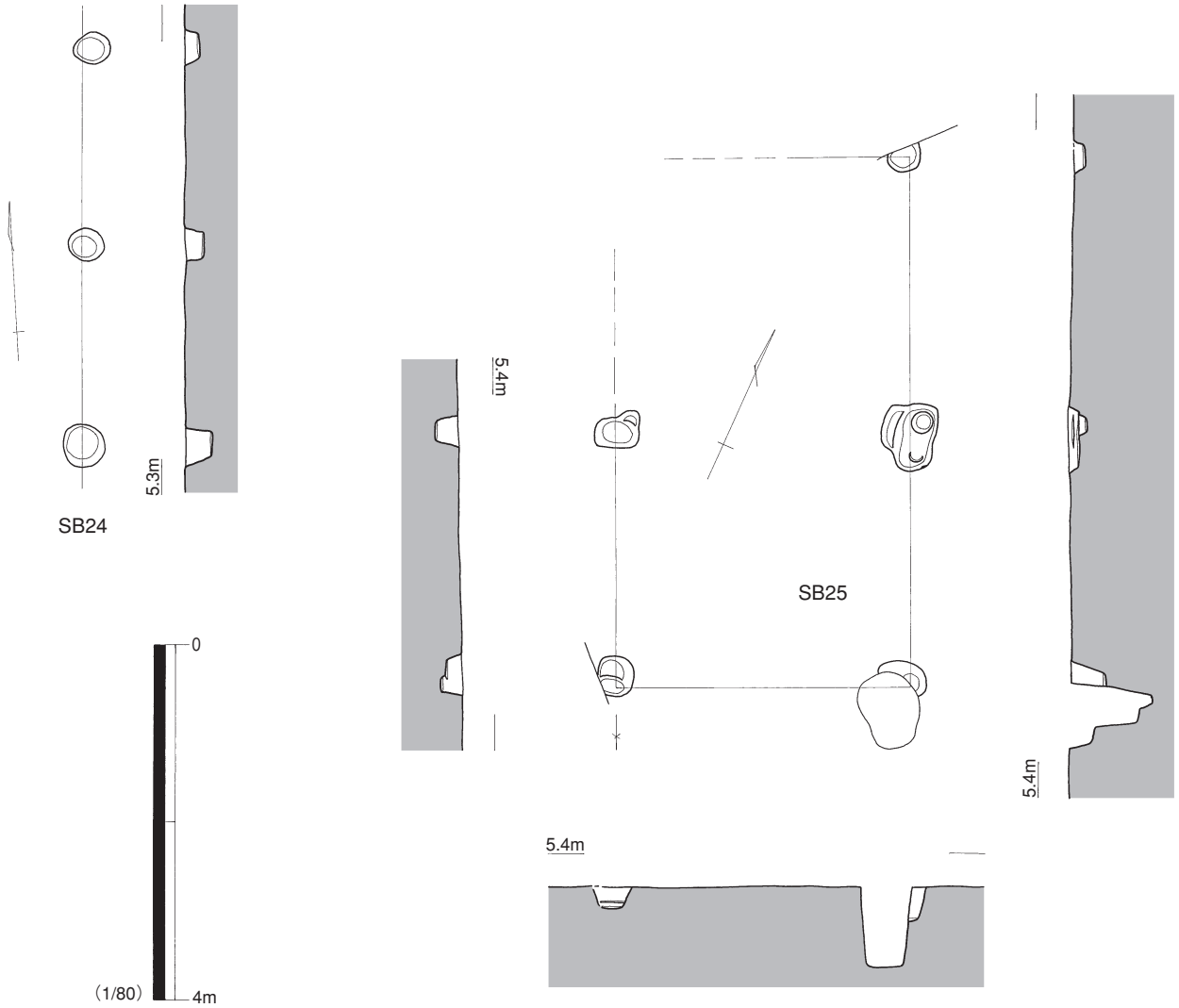


Fig.57　SC24・25

柱痕から柱の径は15cm程度か。

遺物は混じりが多いが、須恵器の出土はない。268･274がSP580出土、その他がSP108出土。268が壺。269・270が甕。271が鉢。口縁が波打つ。272が滑石製の紡錘車。273は不明石器で、安山岩製か。274はSP580底付近で出土した赤紫色泥岩（立岩）製の石包丁。敲打後穿孔がみられ、弥生時代中期頃か。275は青銅製鋤先で、半分に折れている。直線状の傷が入る。遺構の軸から、時期は弥生時代後期か。

SB20（Fig.55）

調査区南側で検出した建物。L字状を呈し、建物が重なっているか、復元が間違っているかもしれない。柱穴は隅丸方形を呈する。

遺物は混じりが多いが、須恵器の出土はない。276･278がSP88出土、277がSP56出土。276は壺。外面丹塗り。277は甕。278は壺。胎土に赤色土粒と黒色鉱物（輝石?）を含む。遺構の軸から、時期は弥生時代後期か。

SB21（Fig.55）

調査区南側で検出した1×1間の建物。柱穴は隅丸方形を呈する。

遺物は混じりが多いが、須恵器の出土はない。遺構の軸から時期は弥生時代後期か。

SB22（Fig.56）

調査区南側で検出した１×２間の建物。柱穴は隅丸方形を呈する。

遺物は古墳時代前期頃の破片を多く含み、須恵器の出土ない。279 は SP162 出土の黒曜石製使用痕剥片。280 は SP671 出土の甕。281 は SP1440 出土の底部。282 は SP157 出土の高坏。遺構の軸が SB16・17 と揃うことから、時期は古墳時代前期か。

SB23（Fig.56）

調査区南側で検出した１×２間の建物。柱穴は隅丸方形を呈し、柱痕から柱の径は 20㎝程度か。

283 は SP674 出土の壺。284 は SP147 出土の高坏。285 は SP92 出土の高坏。遺構の軸から時期は古墳時代前期か。

SB24（Fig.57）

調査区西側で検出した３基の柱穴列。周辺は大きく削平されており、本来は１×２間程度の建物で、東側の柱穴が削平されたものと考えられる。柱穴は円形を呈するが、わずかにしか残っていないので、本来の形は不明である。

SB25（Fig.57）

調査区西側で検出した１×２間の建物で、調査区外に伸びる。遺構の軸から時期は弥生時代中期と考えておく。

４、柵列遺構（Fig.58）

等間隔に並ぶ小穴列を柵列と認定した。竪穴建物や掘立柱建物同様に、本来は認定した以上の数が存在したと考えられるが、柱穴の数が多すぎてはっきりしない。建物を囲むようにみられるものや、並列するものがある。

５、溝

SD02（Fig.59　PL.10）

調査区南側を東西方向に伸びる溝。長さ 12m 以上、幅 0.8m、深さ 0.3m 程。東西の調査区外に伸びると考えられるが、東側はごく浅くなり、西側も不明確になるので、調査区内で完結する可能性もある。旧地形に沿ってか、底の標高は西側がやや深い。埋土はロームブロックの混じりが少なく、周辺の SC58 等に比べやや灰色っぽい。遺構検出時に土器が集中する部分があり、当初土坑だと考えた（SX01）が、調査が進み SD02 の存在が明らかになると、SD02 上層の遺物集中と捉えることにした。

287・291 は土器集中部（SX01）からの出土。286 ～ 289 は須恵器。286・287 は坏身。286 は復元口径 12.2cm。287 は復元口径 11.8cm。288 は蓋。289 は甕。290 は把手。291 は軽石。紐のようなもので縛ったような跡があり、浮子か。292 は細粒砂岩製の磨り石。図化した他に須恵器系土師器の甕や、小さな焼成粘土塊が多数出土した。293 は付近からの出土で、SD02 に伴うか不明確である。鉄器片で、木質が付着する。遺構の時期は７世紀代だろう。

SD03（Fig.59）

SD02 と並んで伸びる溝。長さ 6.2m、幅 0.9m、深さ 0.15m 程。中程では比較的明確に溝として捉えられたが、端部の掘り方は他の遺構との切り合いで不明確になり、図化したよりも伸びる可能性がある。埋土は SD02 に近い。遺構の時期は７世紀代だろう。

SD110（Fig.60・61　PL.10）

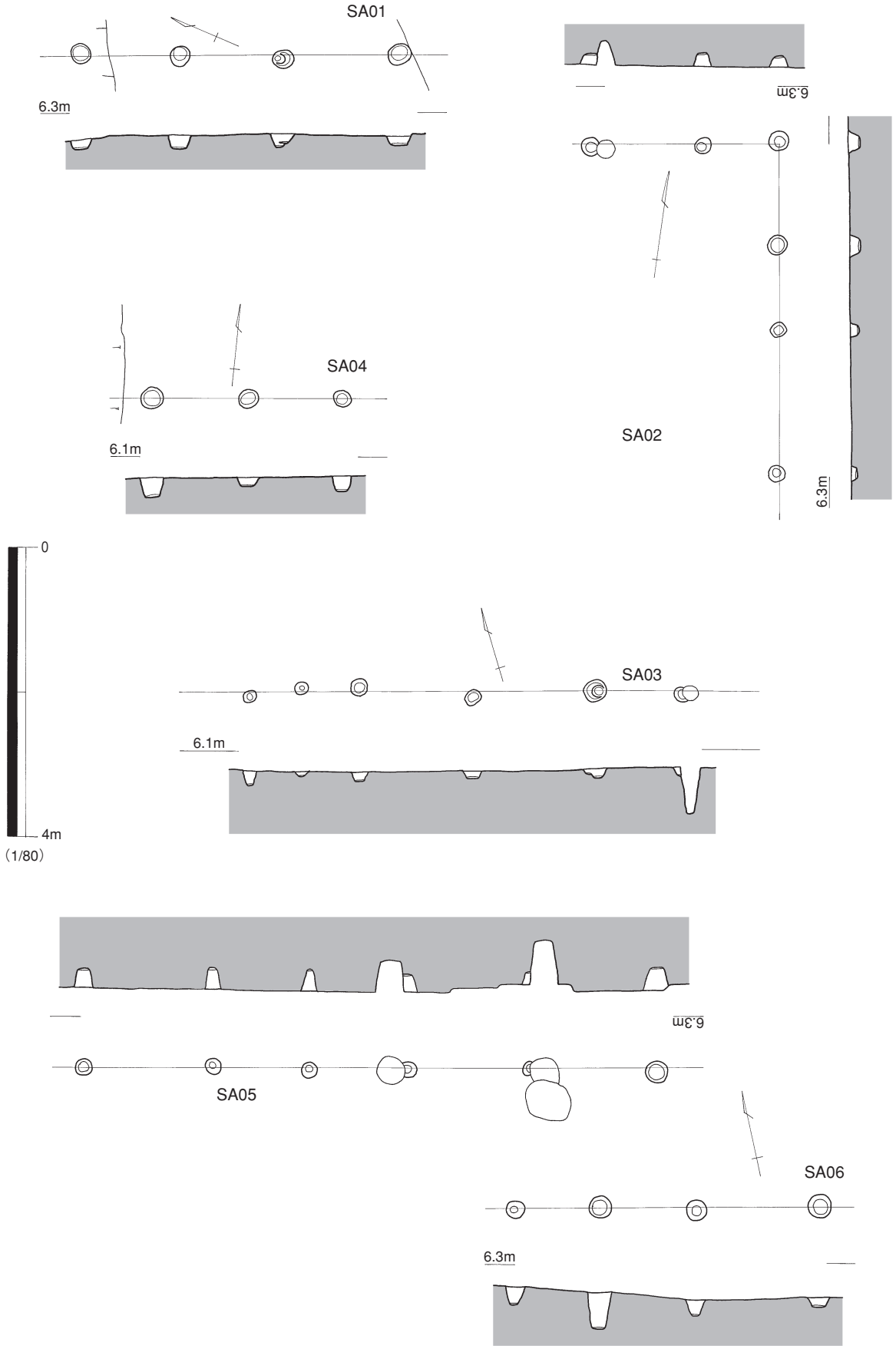


Fig.58　SA01 ～ 06

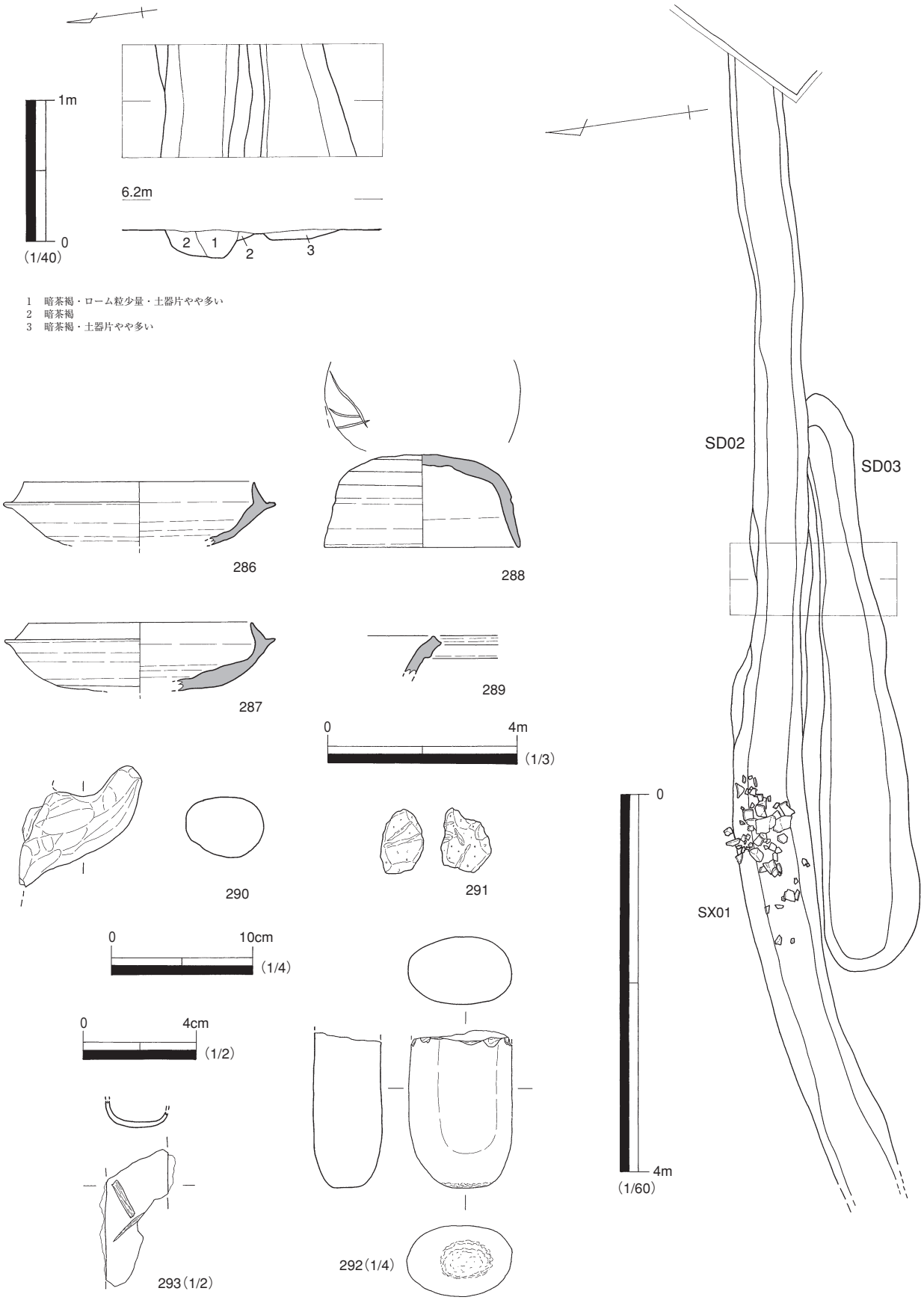


Fig.59　SD02・03

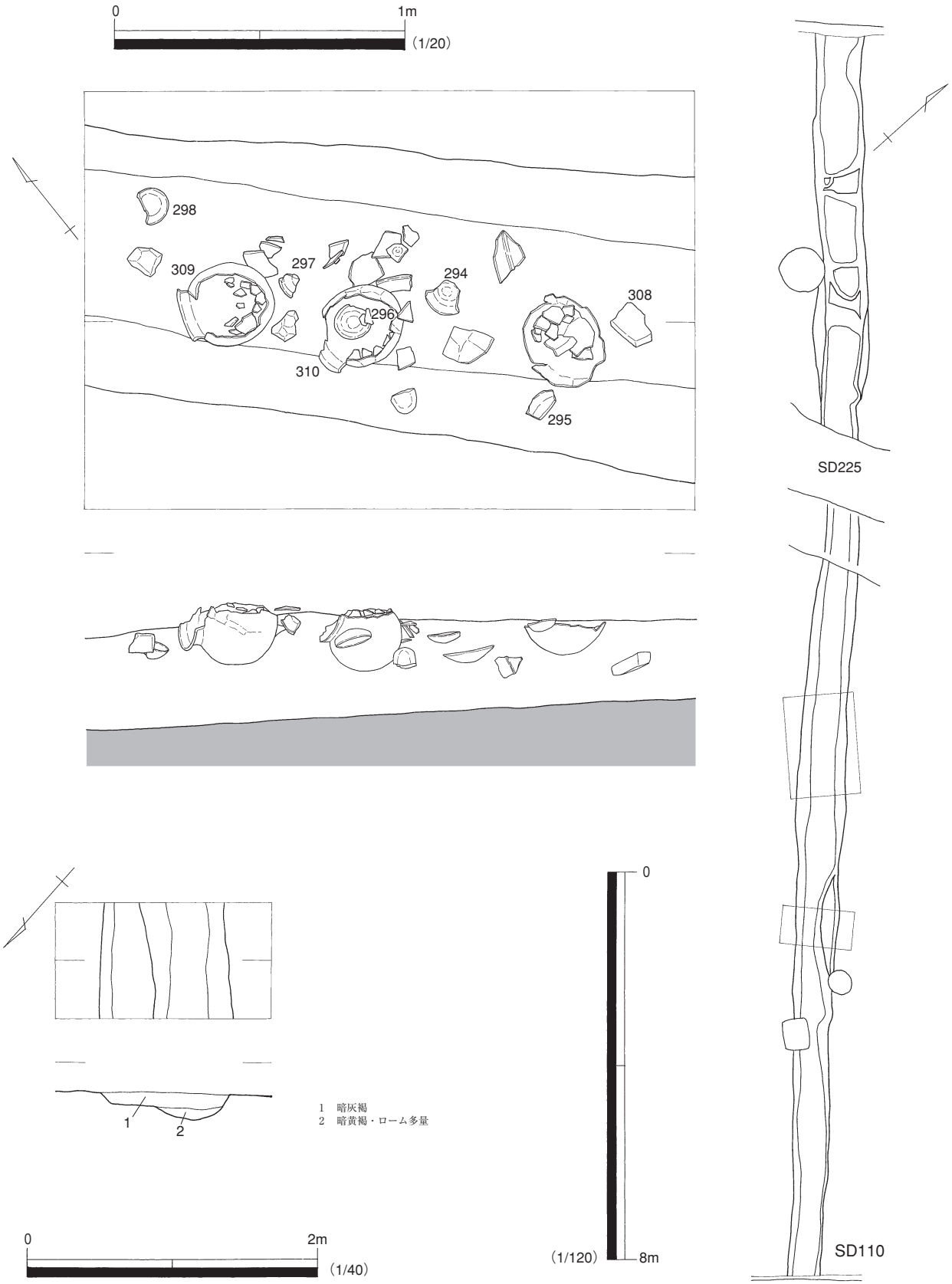

0
1m
(1/20)
298
309
297
294
308
296
310
295
SD225
1
2
1 暗灰褐
2 暗黄褐・ローム多量
0
2m
(1/40)
0
(1/120)
8m
SD110

Fig.60 SD110

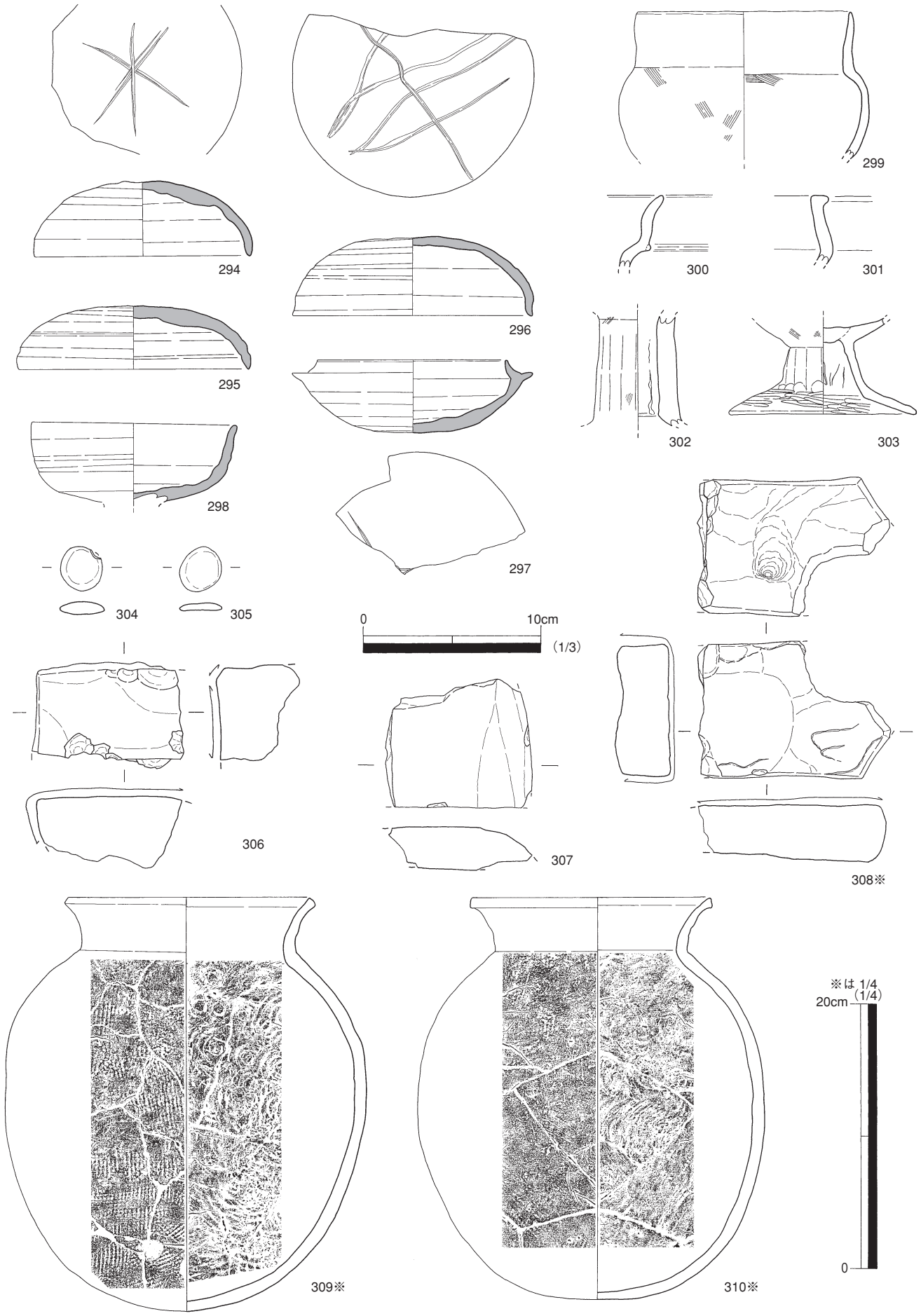


Fig.61　SD110 出土遺物

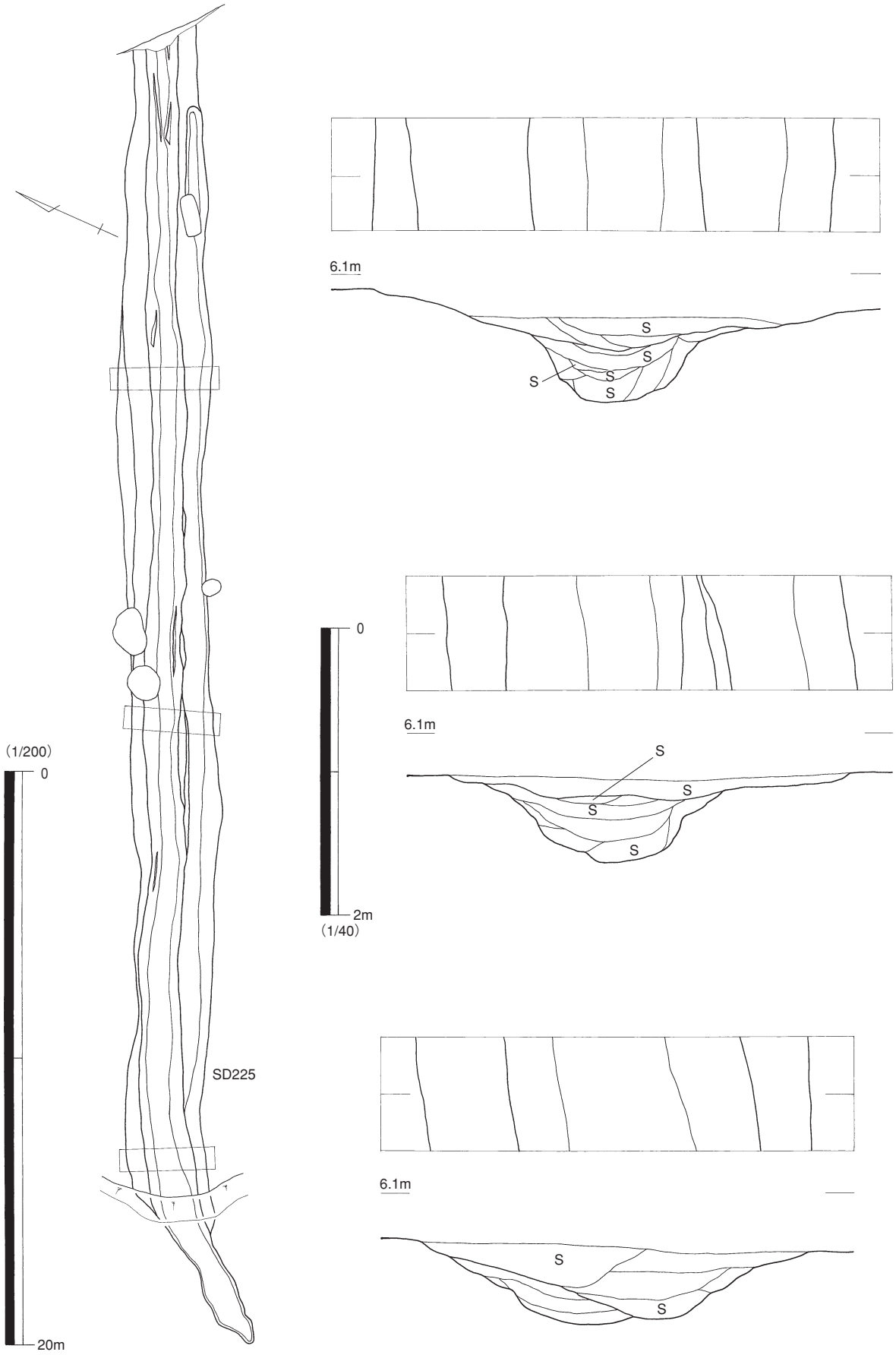


Fig.62　SD225

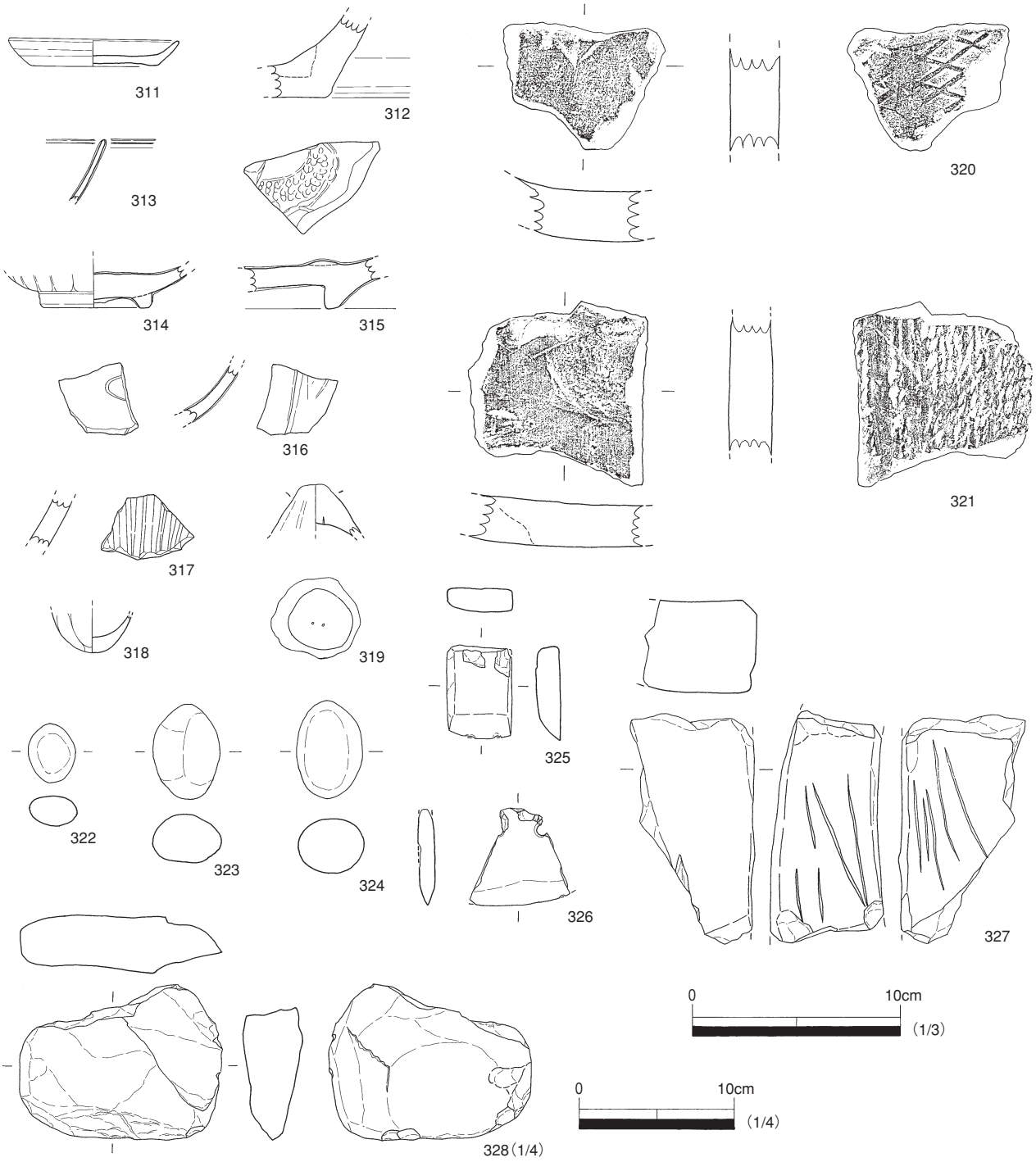


Fig.63　SD225 出土遺物

調査区南寄りで検出した溝。検出した長さ 25.8m、幅 0.9m、深さ 0.25m 程。北西－南東方向にまっすぐ伸び、137 次調査の SD035 に続く。埋土は SD02 等と似ており、やや灰色っぽい。底の標高は旧地形に沿ってか西側がやや深い。調査区中程で、遺物が集中して出土した。

294 ～ 298・308 ～ 310 が土器集中部からの出土で、比較的一括性が高い。294 ～ 298 が須恵器。294 ～ 296 が坏蓋。294 はヘラケズリの範囲が広い。復元口径 12.0cm。295 は焼け歪みがあり、口径等がやや不明確。復元口径 12.9cm。296 は口径 13.6cm。297 が坏身。復元口径 10.6cm。298 が高坏。

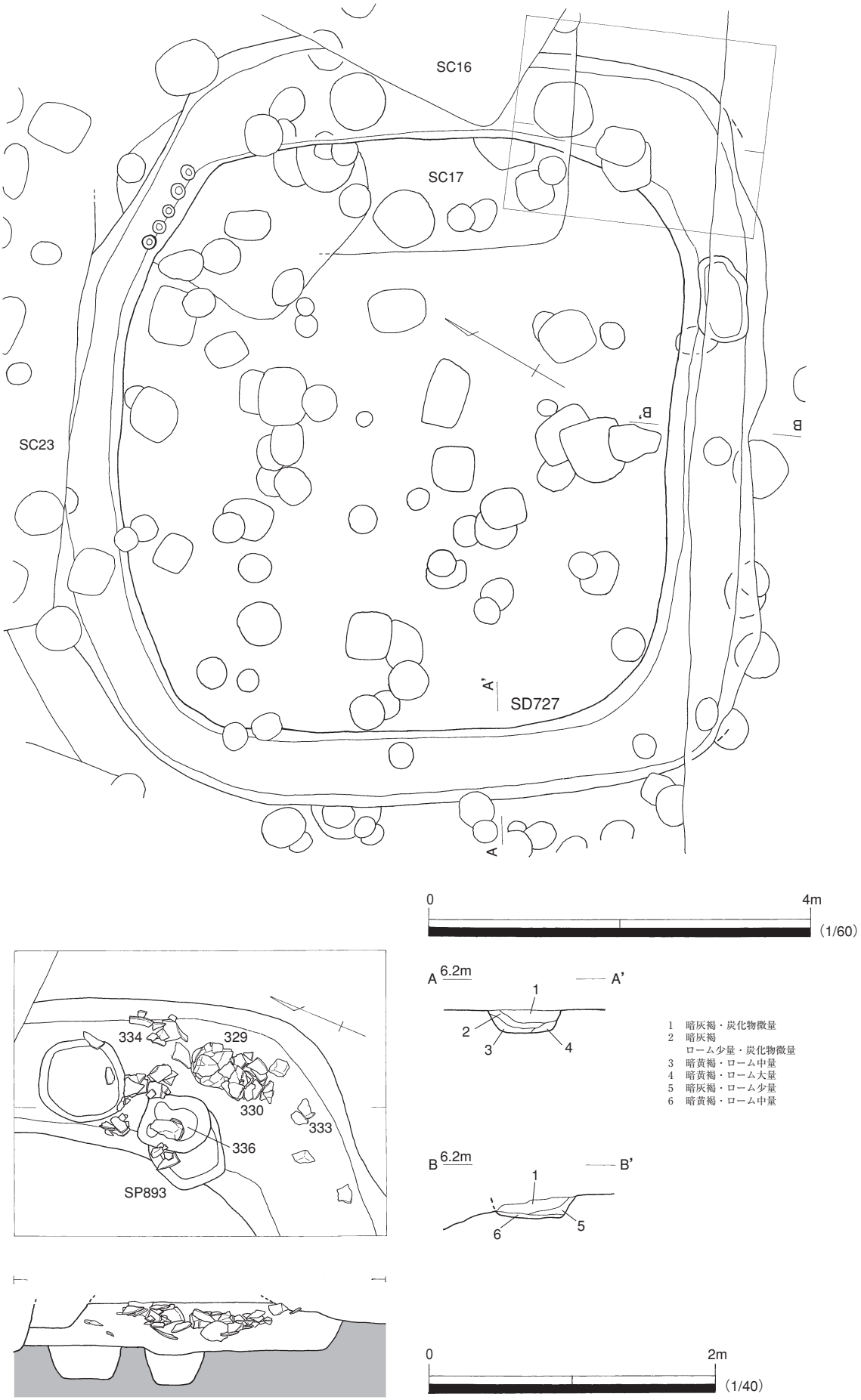

SC16
SC17
SC23
SD727
A
A'
B
B'
0
4m
(1/60)
334
329
330
333
336
SP893
A 6.2m
A'
1
2
3
4
1　暗灰褐・炭化物微量
2　暗灰褐
　ローム少量・炭化物微量
3　暗黄褐・ローム中量
4　暗黄褐・ローム大量
5　暗灰褐・ローム少量
6　暗黄褐・ローム中量
B 6.2m
B'
1
5
6
0
2m
(1/40)

Fig.64　SD727

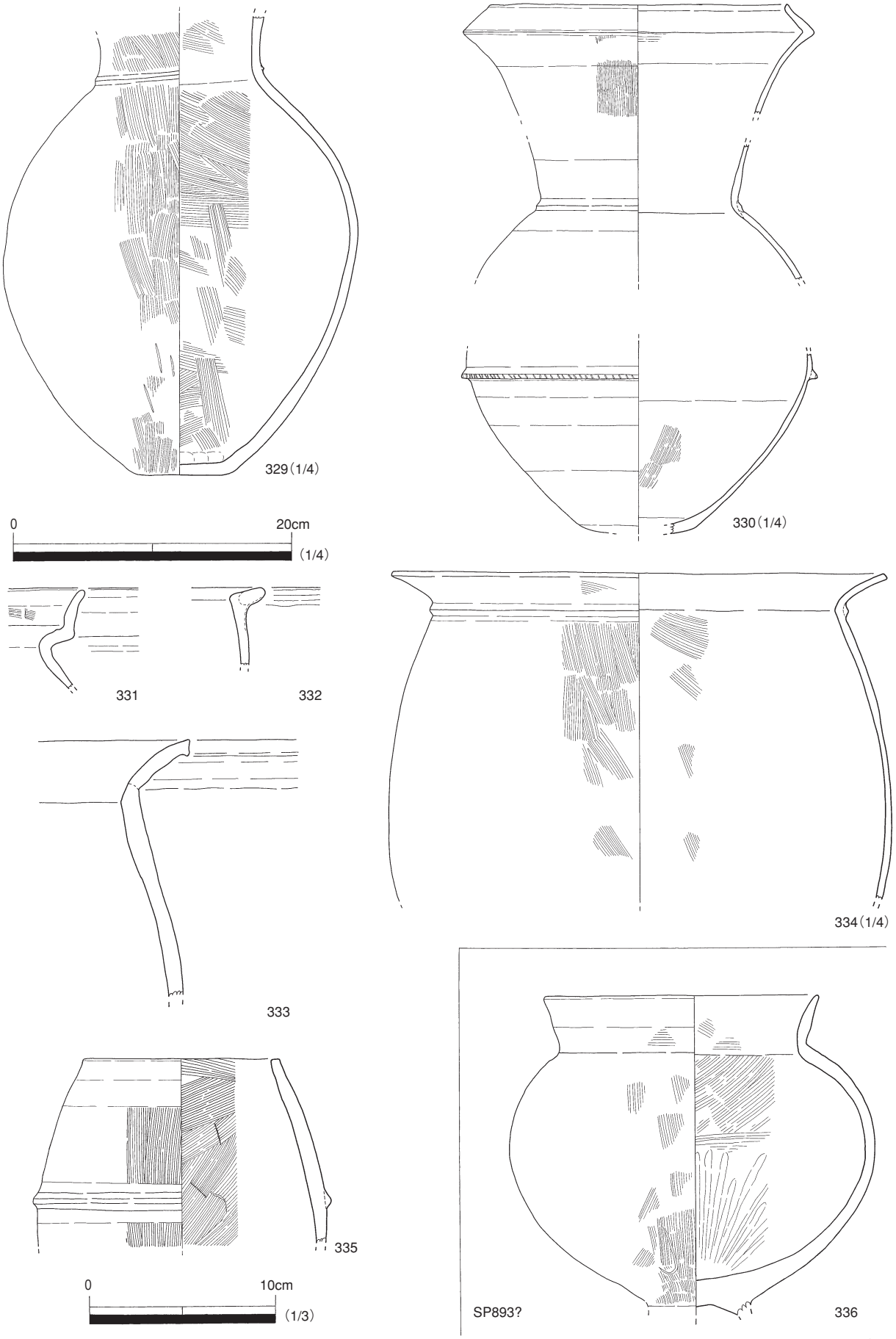


Fig.65　SD727 出土遺物

299・300 が壺。300 は山陰系。301 ～ 303 は高坏。302 は内面に縦の接合痕が残る。304・305 は丸石。306 は砂岩製の砥石。307 は砂岩の石片。308 は砂岩製の砥石。309・310 は須恵器系土師器の甕。外面に擬格子状のタタキ痕が、内面に同心円状の当て具痕が残る。309 は胴下部に煤が付着する。遺構の時期は 7 世紀代だろう。

SD225（Fig.62・63　PL.10）

調査区を貫く溝で、検出した長さ 45m、幅 3 m、深さ 0.8m の大溝。Fig.62 では最も深くなる部分を示しているが、南側はダラダラと浅く伸び、多くの遺構を削平する。底の標高はほぼ平坦。西側は大きな攪乱で削られるが、少し南方向へ曲がって伸びる可能性が高い。埋土は茶色がかっており、7 世紀以前の他の遺構とは明らかに異なる。

311 は土師皿で口径 8.2㎝。312 は陶器の底部。313 は染付。発色は薄い。314 ～ 316 が青磁。314 は蓮弁文がつき、畳付きに釉がつかない。315 は魚？の凸文を有し、畳付き～高台内面に釉がつかない。317 は須恵器甕の口縁部か。318･319 は土師器。318 はミニチュア土器。319 は小型器台。内面に二つ、針で刺したような穴がある。320・321 は平瓦。320 は格子目タタキがみられ、321 は桶巻づくりの継ぎ目が観察される。322 は丸石。323・324 は花崗岩製でつぶて石の可能性がある。325 は層灰岩製の扁平片刃石斧。326 は赤紫色泥岩（立岩）製の石包丁。327 は安山岩製の砥石で、被熱のためか一部赤変する。鉄器を研いだ痕跡とみられる線状痕がある。328 は安山岩製で、叩き石か。様々な時期の遺物が混ざっており、掘削時期の想定は難しい。瓦はやや古い様相を示すが伝世もあるので、土師皿と一定数出土した青磁の時期（13 世紀後半～ 14 世紀中頃？）を掘削年代とするのが妥当か。上層では染付なども出土し、完全に溝が埋まるのは中世末以降だろう。

また上層で長さ 38㎝、幅 28㎝、厚さ 4 ㎝程の板状の石材が出土した。赤色顔料が付着しており（「Ⅳ．自然科学分析」の項を参照）、弥生時代～古墳時代の石棺等の石材が紛れ込んだ可能性がある。

SD727（Fig.64・65　PL.10・11）

調査区北東寄りで検出した周溝状遺構。溝は幅が 0.6 ～ 1.0m、深さ 0.25m で、溝で囲まれた範囲は方形に近いがやや歪で、北東－南西方向で 7.9m、北西－南東方向で 7.3m を測る。北西側の辺の溝の埋土は他の辺と明らかに異なり、黒っぽい。北側の溝の底部内側には連続する小穴がみられる。溝で囲まれた範囲に盛土が存在した可能性は不明で、中心主体部のようなものは認められない。

332 は北側隅部上層からの出土、それ以外は東側隅部の土器集中部からの出土である。ただし、336 は遺物出土状況図に一緒に図化したが、SP893 に伴う可能性が高い。329 ～ 331 は壺。329 は胴下部に線刻らしきものがある。330 は底部中央付近の破片がなく、底部穿孔の可能性もある。332 ～ 334 は甕。335 は鉢。336 は脚付き鉢。胴下部に釣り針状の線刻らしきものがある。遺構の埋没時期は弥生時代後期中頃（下大隈式古相）だろう。

6、井戸

SE1207（Fig.66　PL.11）

調査区南西側で検出した井戸。上を大きく削平され、中位以下が残存する。径は 0.7m 程で、湧水による抉れなどは確認できなかった。底の標高は 4.1m。

337 ～ 341 は壺。338 は口縁部に歪みがある。339 は口縁部に 2 条の線刻のようなものがみられる。内面に接合痕が残る。341 はナデ消されてはいるが、明確にタタキの凹凸が残る。342・343 は甕。342 は口縁部外面にタタキの痕跡らしきものがある。343 は粗くタタキが残る。344 は底部。凸レンズ形。345・346 は高坏。347・348 は器台。遺構の時期は弥生時代終末期。

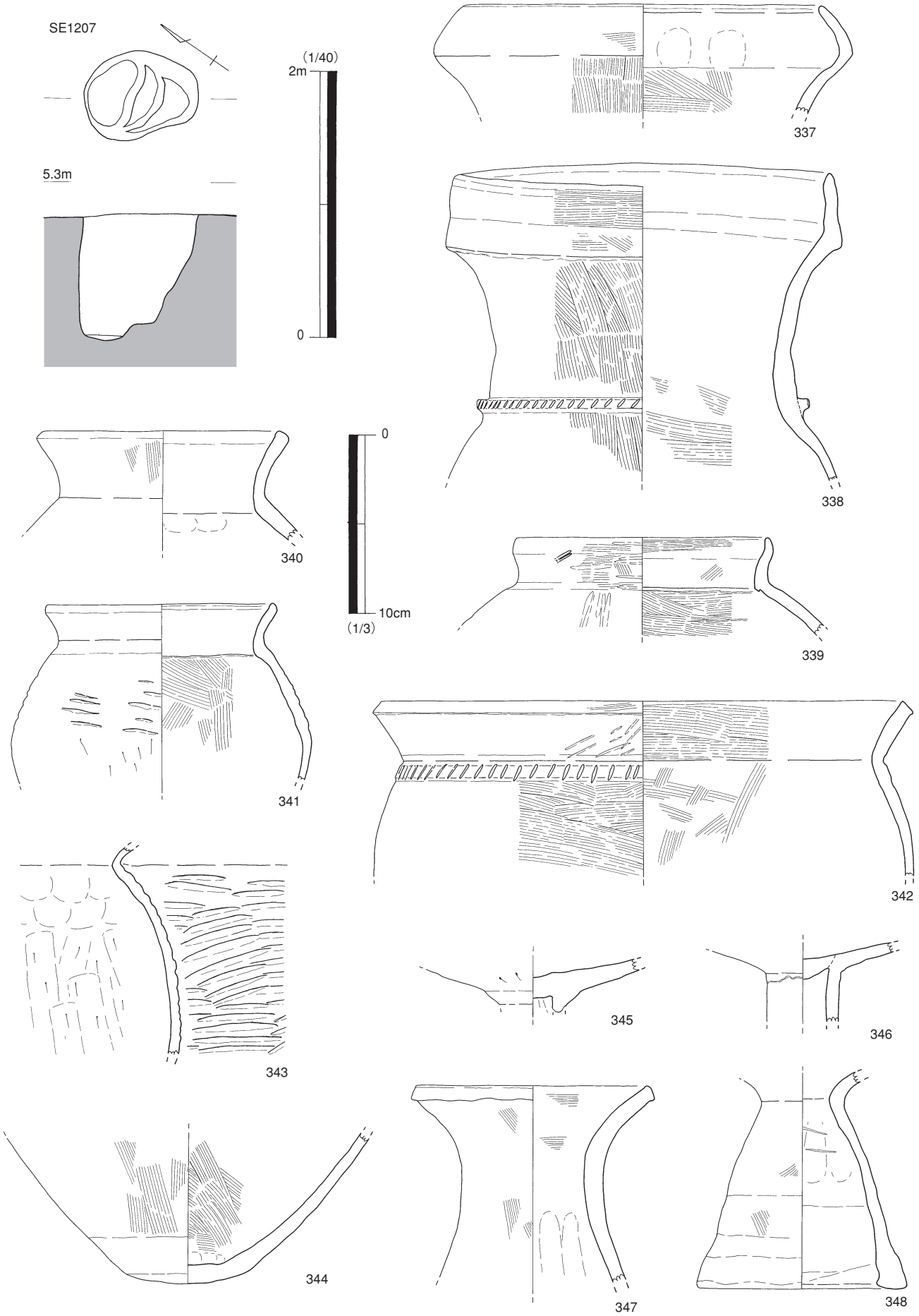


Fig.66　SE1207

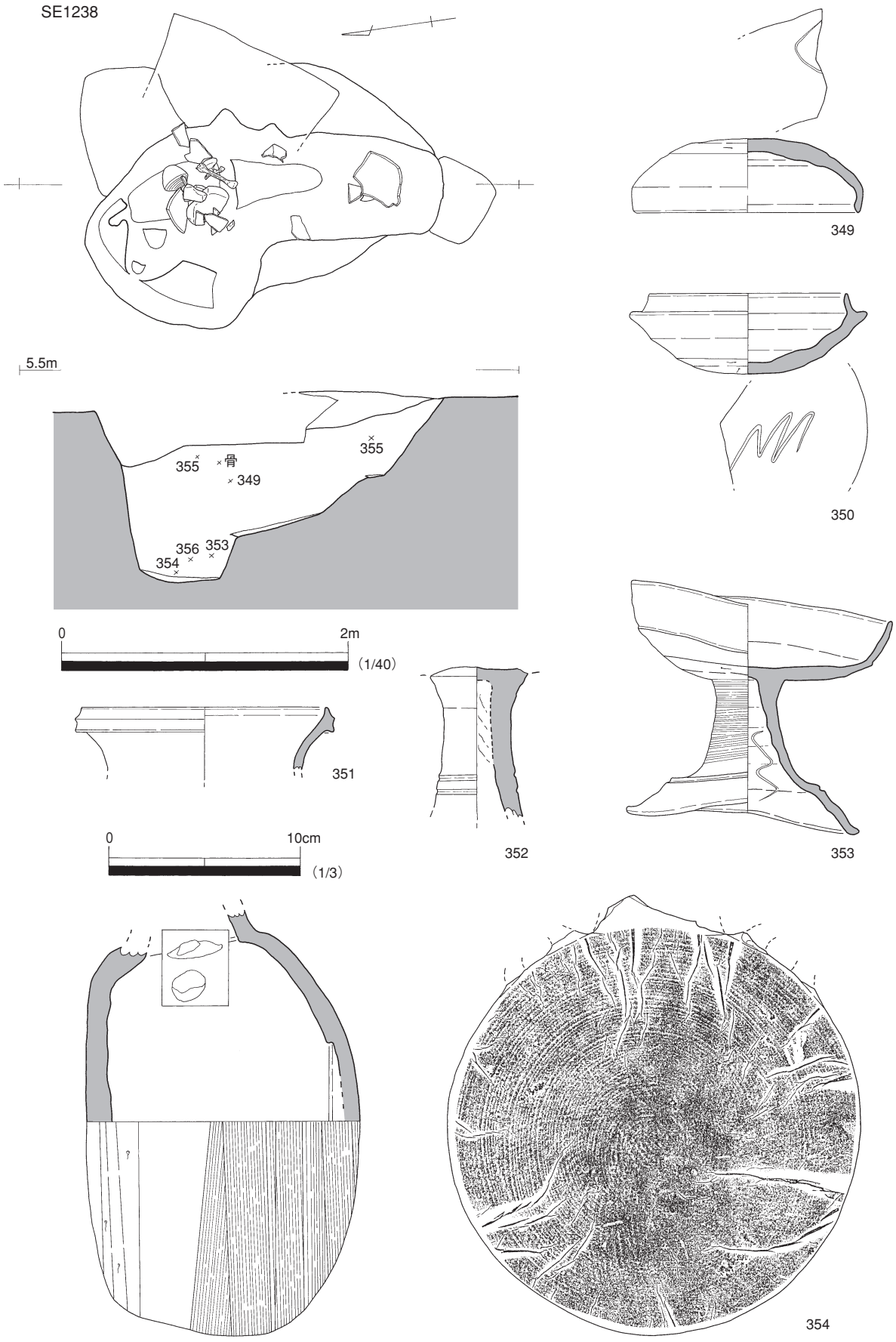


Fig.67　SE1238

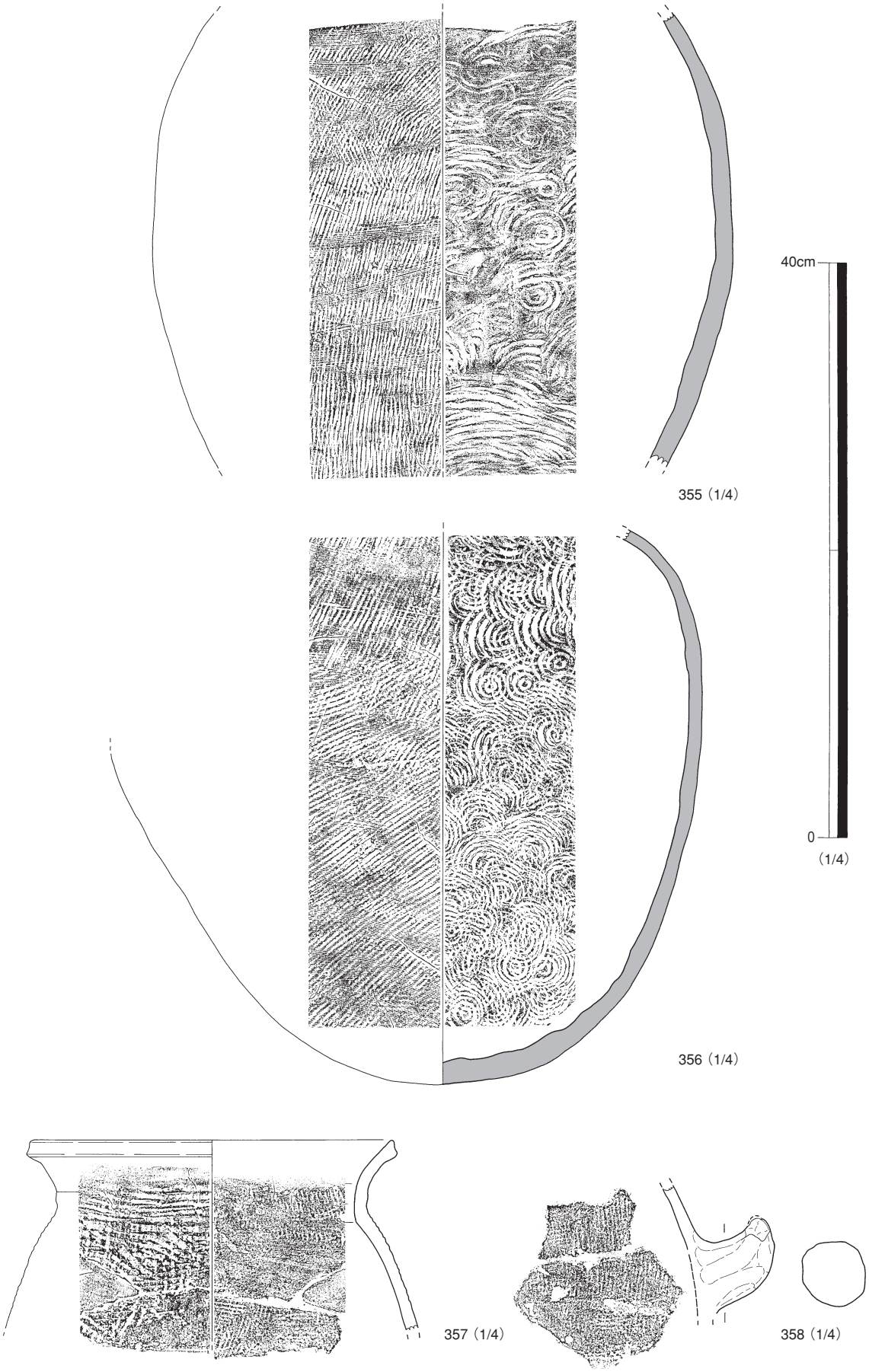


Fig.68　SE1238 出土遺物

SE1238（Fig.67・68　PL.11）

調査区南西側で検出した不整形の井戸。長さ 2.5m、幅 1.5m。当初は土坑と考え調査を進めたが、底で激しく湧水し、井戸と考える。南側から北側に向かって階段状に深くなる。北側および南側に切り合う柱穴を図化したが、SE1238 の一部かもしれない。底の標高は 4.0m。

349 ～ 356 は須恵器。349 は坏蓋。ヘラ記号あり。復元口径 11.7cm。350 は坏身。底部回転ヘラケズリの後､手持ちでヘラケズリをしたような痕がある。ヘラ記号あり。復元口径 10.3cm。351 は口縁部。352・353 は高坏。353 は焼け歪みが激しく、脚内面にヘラ記号あり。脚内面に灰がかぶり、逆さでの焼成が想定される。354 は提瓶。風船技法で成形し、把手は輪状になる。355・356 は甕。357・358 は須恵器系土師器で、同一個体の可能性がある。357 は外面に擬格子状のタタキ痕が、内面に平行当て具痕が残る。358 も内面に平行当て具痕が残る。その他、上層で骨が出土した。遺構の時期は７世紀代か。

SE1251（Fig.69　PL.11）

調査区西側で検出した円形の素掘り井戸。径 0.9m。最上層の埋土は SD225 に近い茶色味がかった色だったので、当初新しい遺構と考えたが、掘り進めるうちに黒色化した。標高 3.4m 付近で、地山が鳥栖ローム層から八女粘土層に変化して激しく湧水し、付近が大きく抉れる。底の標高は 2.7m。底部付近および「抉れ」は人力掘削に危険を伴うため、重機により掘削し、掘り上げた土の中から遺物だけを回収した。よって、Fig.69 に提示した図は略図に近いものである。

遺物は重機により掘削した底部付近から多く出土した。368 のみ上層出土、その他は中層以下の出土である。359 ～ 363 は壺。360 は外面のみ丹塗り。361 は外内面に丹塗り。364 は高坏。外面および坏内面に丹塗り。365 ～ 367 は甕。368 は器台。369 は砂岩製の砥石。370 は菫青石ホルンフェルス製の石包丁。その他、底部付近から多数の木器が出土しており、表および写真（PL.21・22）に示すとおりである。遺構の時期は弥生時代中期末だろう。

Tab.3　SE1251 出土木器一覧

No.	器種	備考
木 1	三又鍬	方形孔。残存長 49cm。孔６×３cm。厚さ２cm。
木 2	網枠	タモ網（漁労具）。残存長 38cm。最大の太さ 1.8 × 1.3cm。
木 3	箱	２ヵ所孔のある板材。残存長 21cm。幅８cm。厚さ 0.8cm。
木 4	蓋（きぬがさ）柄か	３方向に枝が伸びる。残存長 14cm。
木 5	鍋蓋	外周が焼けている。長さ 27cm。幅 22cm。厚さ２cm。
木 6	一木鋤	グリップ部分。小型。残存長９cm。幅７cm。径 2.5 ～３cm。
木 7	固定具（鍬）	残存長７cm。幅３cm。
木 8	高坏脚	残存長 17cm。幅 2.7cm。厚さ 1.7cm。
木 9	容器底部	盤などの容器。残存長 20cm。残存幅 23cm。厚さ 1.5cm。
木 10	臼	胴部にくりこみが付くもの。
木 11	板	井戸底の濾過用？丸木舟の可能性も。長さ 40cm。幅 31cm。
木 12	加工板材	鉈？の加工痕が明確にみられる。長さ 64cm。幅８cm。
木 13	杭材	残存長 24cm。径８cm。

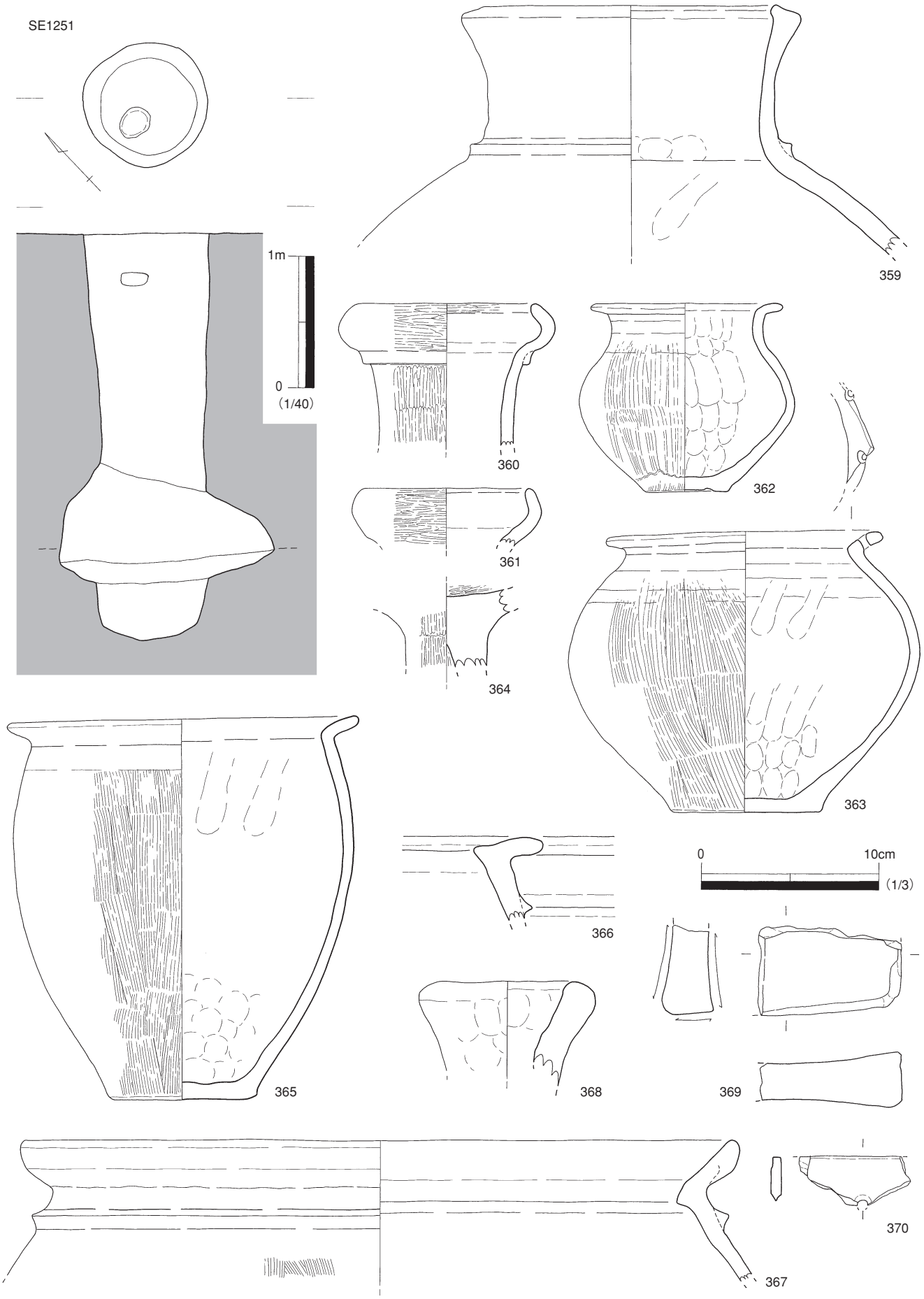


Fig.69　SE1251・

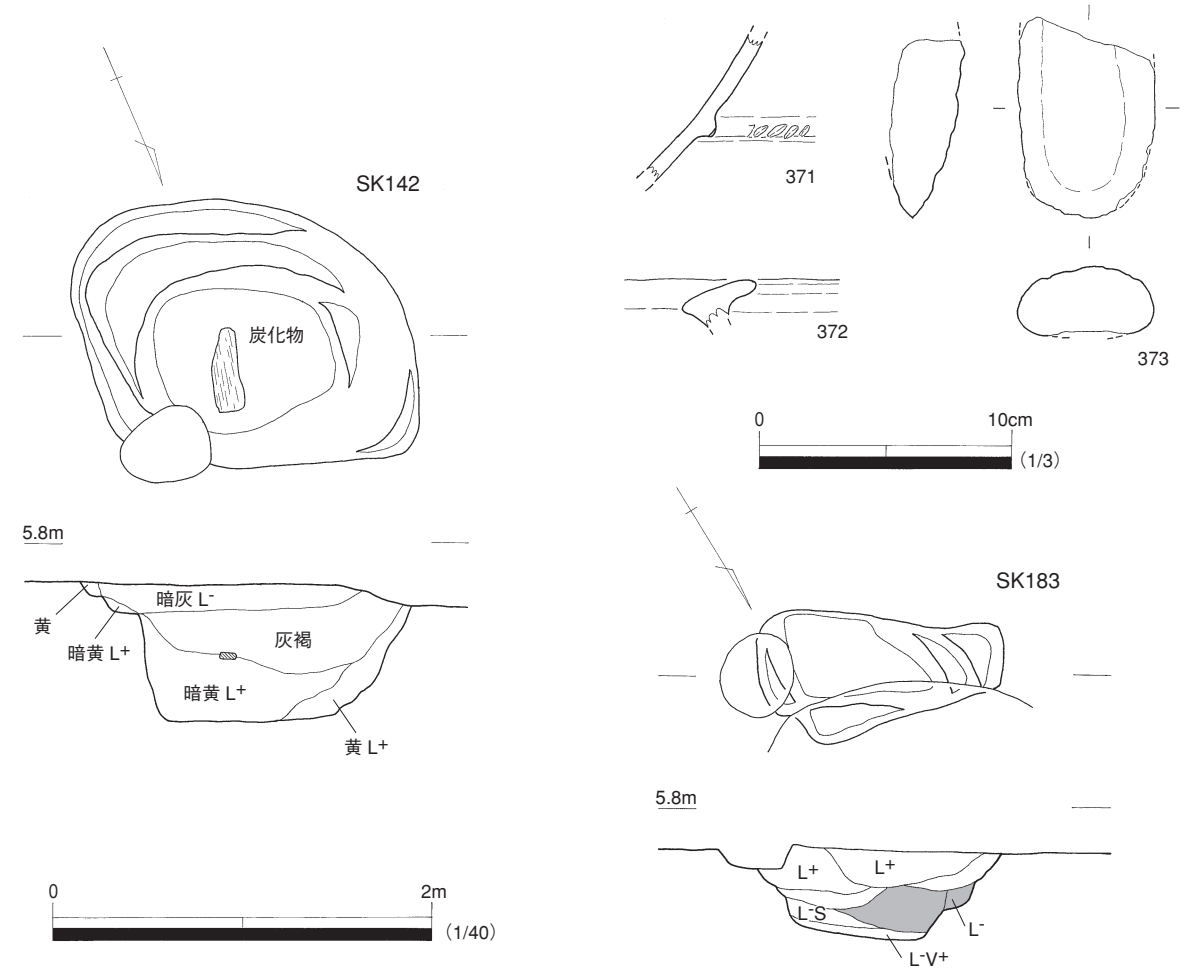


Fig.70　SK142・183

7、土坑

SK142（Fig.70　PL.11）

調査区南西側で検出した長さ 1.8m、幅 1.4m、深さ 0.7m の土坑。底部付近で湧水するが、顕著でなく、土坑とした。上部が段状になる。下層は遺物をほとんど含まない。中位付近に炭化物（木材 ?）が出土した。

371・372 は壺。373 は安山岩質凝灰岩製で、高槻型の蛤刃石斧。図化した以外に丹塗り土器が少量あるが、鋤先形口縁はわずかである。瓢形土器のような破片もある。胎土に砂粒を多く含むものが多く、遺構の時期は弥生時代中期末か。

SK183（Fig.70）

SK142 に切られる長さ 1.3m、幅 0.7m、深さ 0.5m の土坑。SB17 の柱穴の法量に近く、柱穴の可能性もあるが、土坑としておく。埋土には地山ブロックが多く混じる。

SK357（Fig.71）

調査区南東側で検出した土坑で、調査区外に伸びる。長さ 2.8m、幅 1.6m 以上、深さ 0.6m。

374 ～ 377 は須恵器。374・375 は坏身。ヘラ記号あり。374 は復元口径 11.2cm。375 はヘラケズリの範囲が狭い。口径 11.4cm。376 は高坏。復元口径 11.3cm。377 は壺。口径 7.2cm の蓋が融着した痕跡がある。ヘラ記号あり。378 は甑。遺構の時期は 7 世紀代だろう。

SK420（Fig.72　PL. 7）

調査区南寄りで検出した隅丸正方形の土坑。長さ 2.2m、幅 2.1m、深さ 0.3m で、底面は平坦に近い。

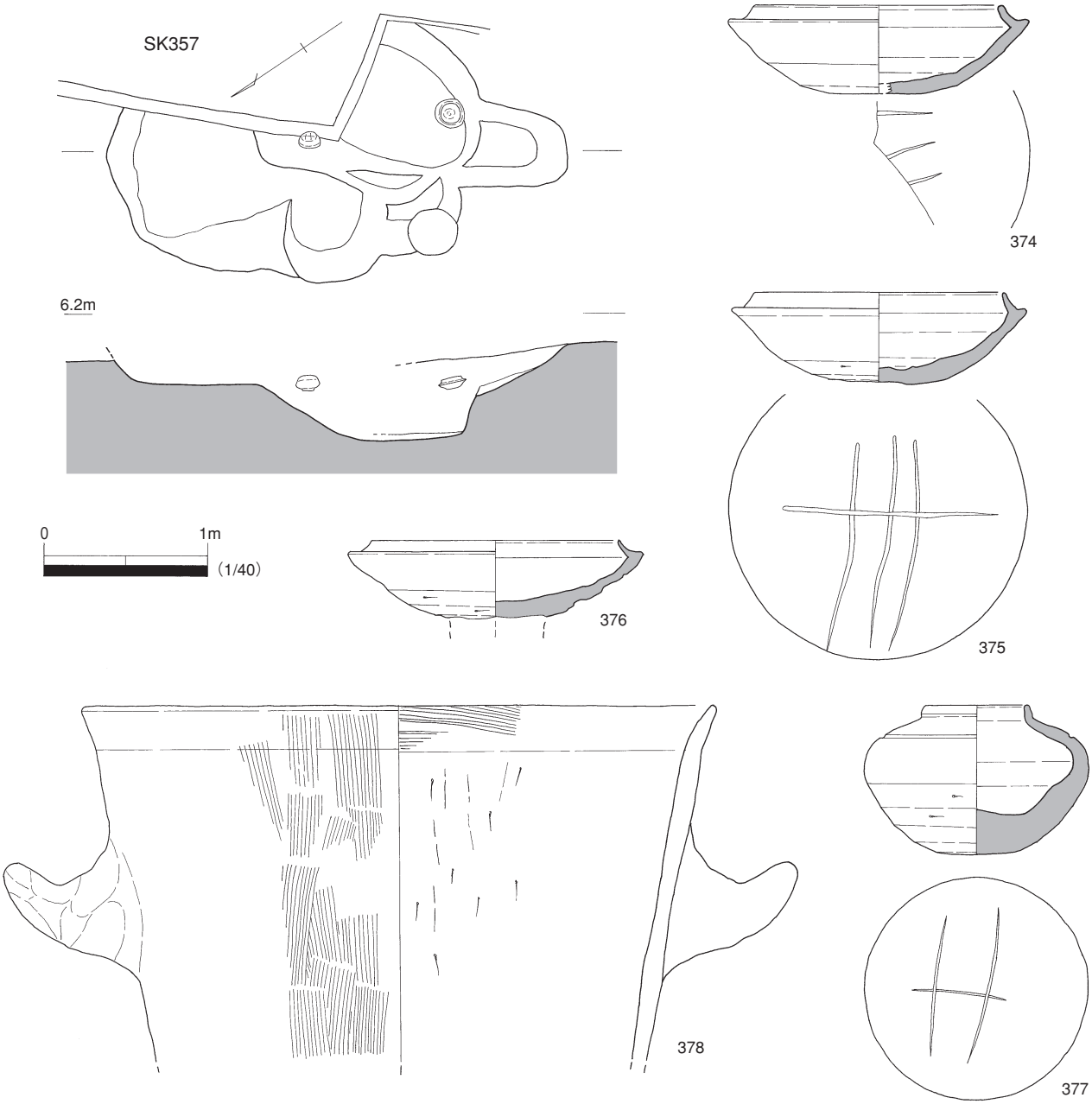


Fig.71　SK357

SC42 等に切られる。床面の一部に炭の層や焼土粒を多く含む部分がある。SC42 の西側で、SC42 に切られて床面がわずかに残る住居の痕跡を検出しており、これに伴う可能性もある。

当初、SP679 や SC42 屋内土坑との切り合いを認識できずに掘削したため、遺物が多く混じったと考えられるが、切り合いのない部分の遺物などをみると、弥生時代中期の遺物が主体である。379 は壺か。380 は高坏か。381 は甕。図化資料の他、袋状口縁壺片とみられる破片等も出土した。遺構の時期は弥生時代中期末だろう。

SK911（Fig.72）

調査区南寄りで検出した長さ 2.2m、幅 1.1m、深さ 0.6m の長方形土坑。SC49 等に切られ、底面付近のみが残る。

382 は器台か。図化した他、弥生時代中期末頃とみられる破片が主体である。遺構の時期は弥生時

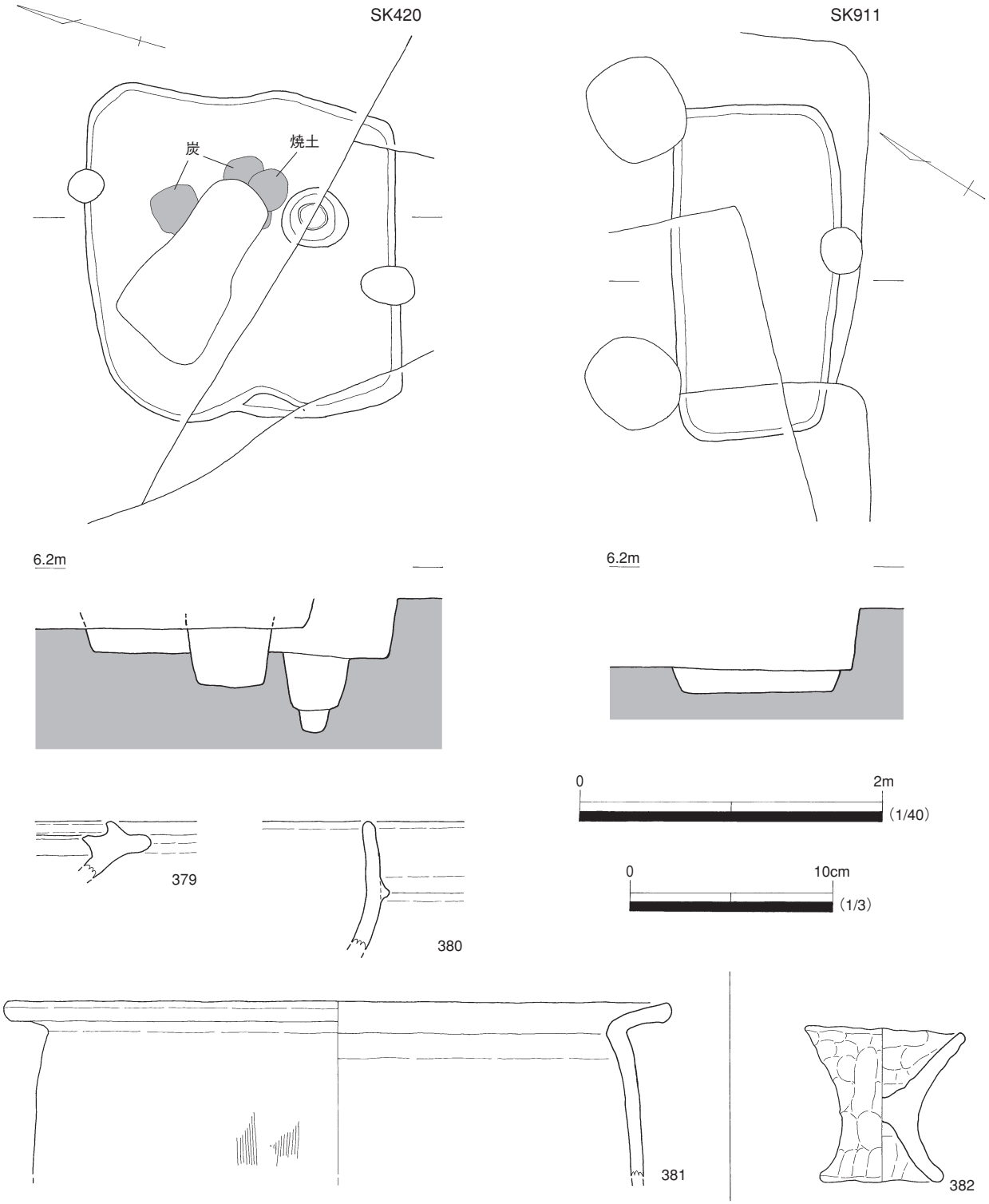


Fig.72　SK420・911

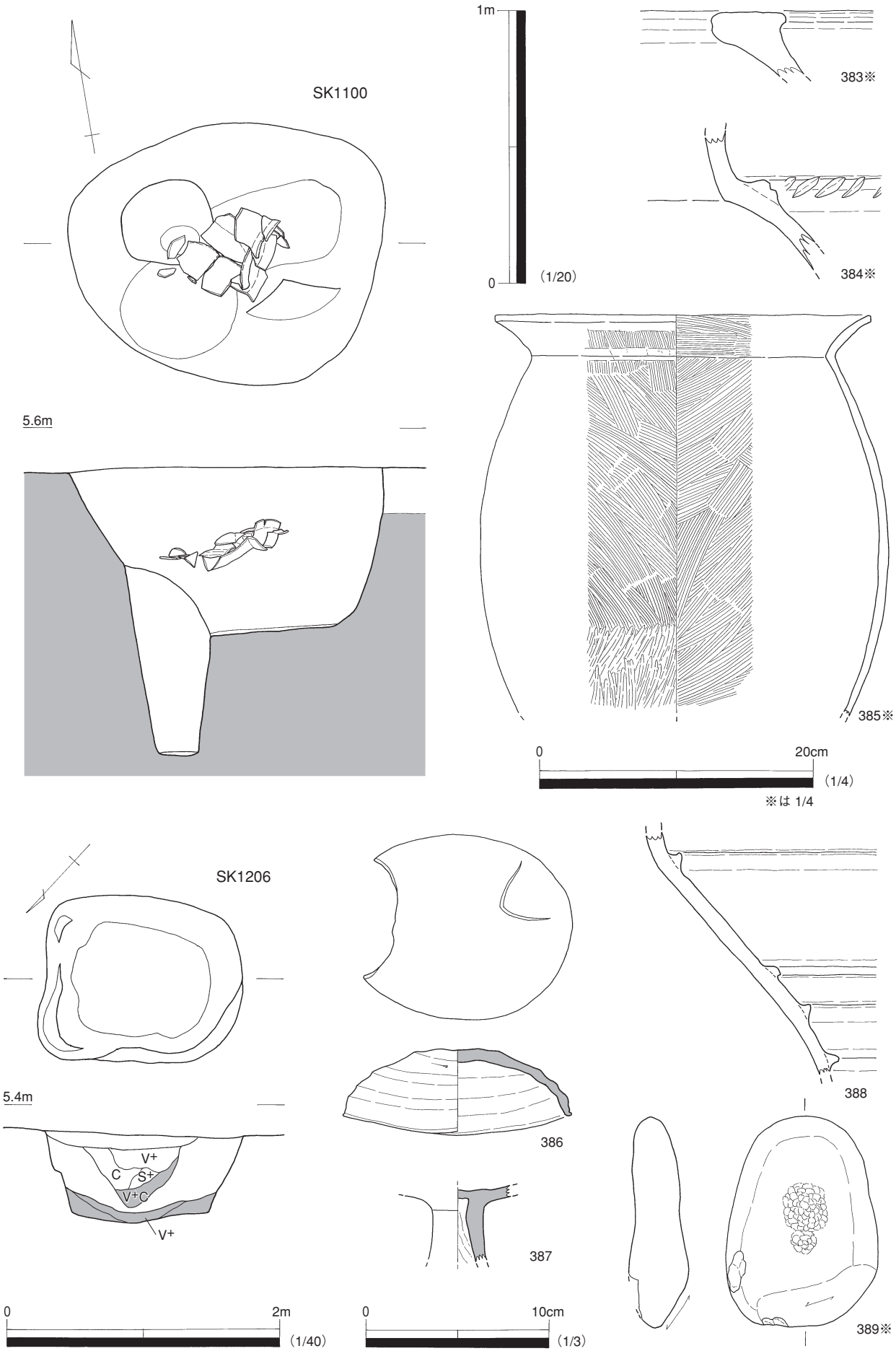


Fig.73　SK1100・1206

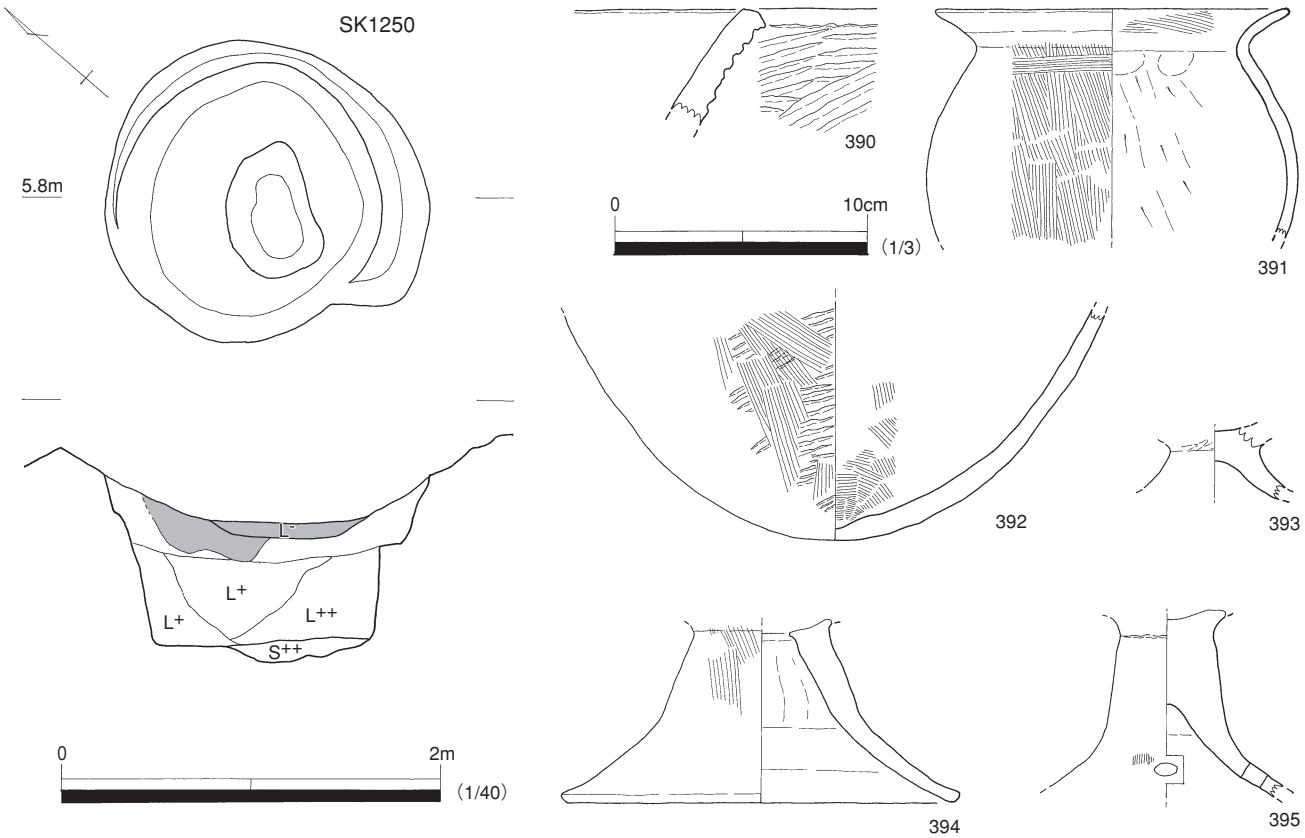


Fig.74　SK1250

代中期末だろう。

SK1100（Fig.73　PL.12）

調査区北端で検出した長さ 1.15m、幅 0.95m、深さ 0.6m の土坑。中層で完形に近い甕が横向きでひしゃげた状態で出土し、その甕の内部に入った状態で甕棺の小片（383・384）が出土した。

383・384 は甕棺。385 は甕。遺構の時期は後期後半頃か。

SK1206（Fig.73　PL.12）

調査区南西側で検出した長さ 1.4m、幅 1.2m、深さ 0.6m の土坑。埋土はロームブロックを多く含むが、中央付近にはロームの混じりが少ない暗灰褐色が入り、そこから多くの土器が出土した。

386･387 は須恵器。386 は坏蓋で焼け歪んでいる。ヘラ記号あり。387 は高坏。388 は弥生土器壺で、紛れ込み。外面に丹塗り。389 は玄武岩製の台石。遺構の時期は 7 世紀代か。

SK1250（Fig.74　PL.12）

調査区南西側で検出した径 1.5m 程のきれいな円形を呈する土坑。深さ 1.2m で、底の標高は 4.4m。SD225 に切られており、かなりの深さがある。少し湧水する。底部の一部が窪み、灰色砂が溜まっており、そこから多くの土器が出土した。

390 ～ 392 は甕。390 は粗くタタキ痕が残る。391 は赤みを帯びる。392 は完全な丸底。内面に簾状ハケがみられる。393・394 は脚付き鉢か。395 は高坏。遺構の時期は古墳時代前期。

8、その他の遺構

SX204（Fig.75　PL.12）

調査区東側で SC02 と切り合って検出した。浅い窪みに完形に近い複合口縁壺が出土した。SC02 の SP205 もこのような遺構と柱穴が切り合っているかもしれない。切り合いは不明確だが、遺物等から SC02 に切られると考える。SP271 と一連の可能性もある。

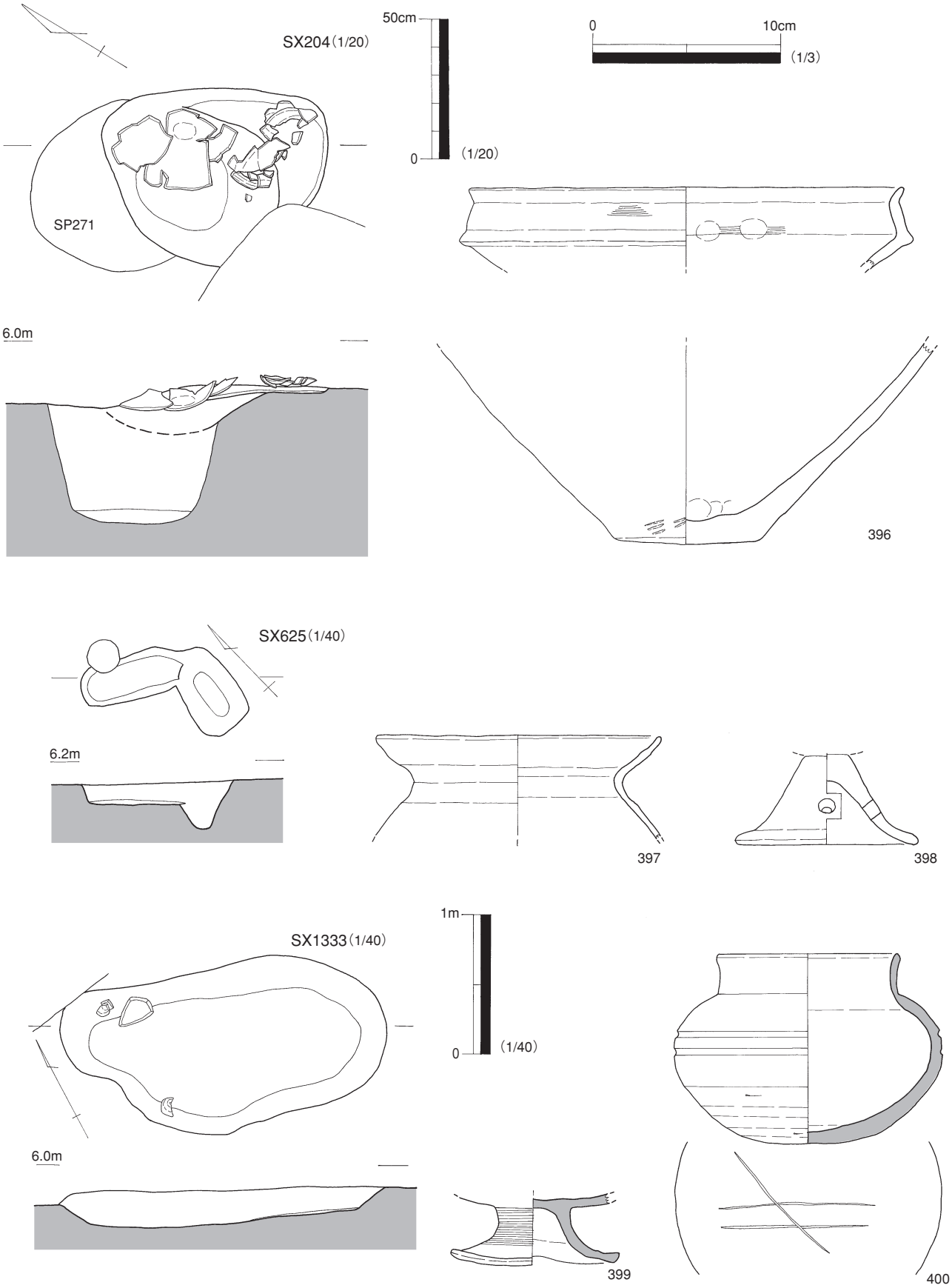


Fig.75　SX204・625・1333

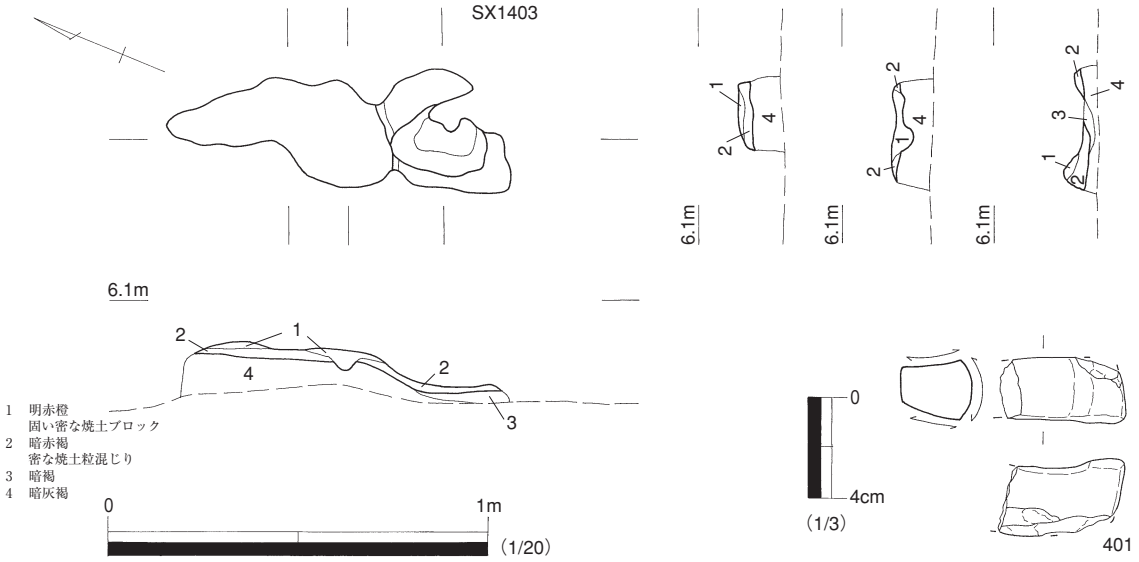


Fig.76　SX1403

396 は複合口縁壺。底部付近にタタキの痕跡らしきものがある。遺構の時期は弥生時代終末期か。

SX625（Fig.75　PL.12）

調査区南東側で検出した。SD110 に切られる。長さ 1.0m、幅 0.8m、深さ 0.3m 程の L 字状の掘り込みに大量の土器片が入っている。薄くて壊れやすい破片が多く、図化できるものは少なかった。

397 は甕。398 は高坏。２方向に穿孔する。遺構の時期は古墳時代前期。

SX1333（Fig.75）

調査区西側で検出した。長さ 2.3m、幅 1.2m、深さ 0.25m の浅い窪み状の遺構で、SD110 と一連である可能性もある。

399 は高坏で、焼け歪みがある。脚内面と坏部外面に灰が被り、逆さでの焼成が想定される。400 は壺。ヘラ記号あり。遺構の時期は７世紀。

SX1403（Fig.76　PL.12）

調査区北側で検出した長さ 0.9m、幅 0.35m、厚さ 0.05m 程の焼土の集中で、炉と考えられる。鍛冶炉の可能性も考え、土を水洗し磁石を近づけてみたが、明確な鍛造剥片などは見つけられなかった。周囲は竪穴建物が激しく切り合っており、当遺構も認定できなかった竪穴建物に付属する可能性がある。その場合、当遺構は SC21 の掘り方に被っており、SC21 よりも新しい住居に付属するものとなろう。調査では焼土集中範囲を残し、周囲を掘削し、図化した。SX1403 は２層までであり、３・４層は SX1403 よりも古い住居の埋土などである可能性が高い。近接する SC16 では、金属器加工を彷彿させるような石器群が出土しており、示唆的である。

401 は周辺での出土。抉入石斧の可能性も考えたが、石材等から砥石の可能性が高い。砂岩製。

9、柱穴出土の遺物（Fig.77 ～ 81）

建物を復元できなかった柱穴の遺物を報告する。遺物番号の横に（ ）付きで記したのが、柱穴の遺構番号である。Fig. 5で、柱穴の位置が確認できる。大きめの破片が出土する柱穴も多く、本来建物を構成する柱穴も多いのだろう。

402は鉢。403は弥生土器甕。如意形口縁。404・405は器台。風化が進み、脆い。406は砂岩製の不定形砥石。407は甕。408は土製紡錘車。409は壺。胎土は精良で、径２～３mmの白色砂粒が少し混じる。410は弥生土器甕。如意形口縁。411は壺。弥生時代前期後半～末か。412は鉄器で、刀子か。413は壺。口縁部がやや波打つ。414は土製投弾。415は壺か。416は甕。如意形口縁。417は銅製品。中に芯のようなものを入れて、鋳造されている。418は土師器の高台付き皿。419は層灰岩製の扁平片刃石斧。弥生時代中期以降。420は高坏。421は滑石製で、石包丁か。刃部が磨滅する。422は菫青石ホルンフェルス製の磨製石剣。423は弥生時代前期の壺か。424は黒曜石製の石鏃。姫島産か。ぬるっとしていて、調整は明確でない。425は銅戈の鋳型。「内」の端部で、刃部との境部を造る切り込みの部分で折れている。石英斑岩製。426は壺。底部付近にタタキの痕跡らしきものがある。427は青灰色泥岩製の砥石。428も青灰色泥岩製の砥石で、貝の生痕がみられる。429は手焙形土器か。430は製塩土器か。431は手焙形土器か。432は砂岩の丸石。433は底部。胎土に角閃石を含む。434は泥岩製の砥石。435は弥生時代前期の壺か。436は高坏。外面および坏内面に丹塗り。437は手焙形土器か。438は叩き石か。石材は砂岩か。439は手焙形土器か。437と同一個体の可能性がある。440は高坏。441は石包丁か。石材は頁岩か。442は甕か。443は赤色砂岩の丸石。444は青灰色泥岩の砥石。445は鉢。446は青灰色泥岩で、石錘未製品か。石材から、砥石の再加工品の可能性がある。3.9g。447は軽石。448は甕。449は黒曜石製の使用痕剥片。450は壺。451は甕。452は支脚。453は壺。454は不明土製品。455は泥岩製の磨製石剣。一部破面に再研磨がみられる。456は脚付鉢。西部瀬戸内系。457は鉄の塊。鉄滓か。29.7g。458は壺か。上面と側面に波状文を施す。傾き不明確。459は黒曜石製の石鏃。かなり小型だが、連続する剥離で抉り部を作り出す。460は鉄器で刃部の有無は不明確である。鎌か。461は壺か。ハケ目工具で施文する。462は甕か。外面に粗いタタキの跡が残る。463は壺。464は脚付き鉢。ナデ消してはいるが、タタキの跡が残る。465は菫青石ホルンフェルス製。刃部を作っておらず、石包丁の未製品か。466は甕。467は珪質頁岩（チャート）で、割れて剥片状を呈するが、砥石か。468は安山岩（多孔質）の台石。砥石としても使用している可能性がある。469は壺。470は壺。471は甕。472は壺。内面に接合痕が残る。473は高坏。474は壺。わずかに平底がある。475は砂岩製の砥石。476は壺。477は器台。478は壺。内面に接合痕が残る。胎土は角閃石・輝石を含み、赤色土粒・黒雲母を多く含む。479は壺。二重円を凸文で施文。217と同一個体か。480は砂岩製の砥石。481は砂岩製の叩き石で、被熱がある。482は甕。口縁部がやや波打ち、外面の口縁端部付近に接合痕がある。外面底部付近にタタキらしき痕跡がある。483は軽石。484は青灰色泥岩の砥石で、貝の生痕がみられる。

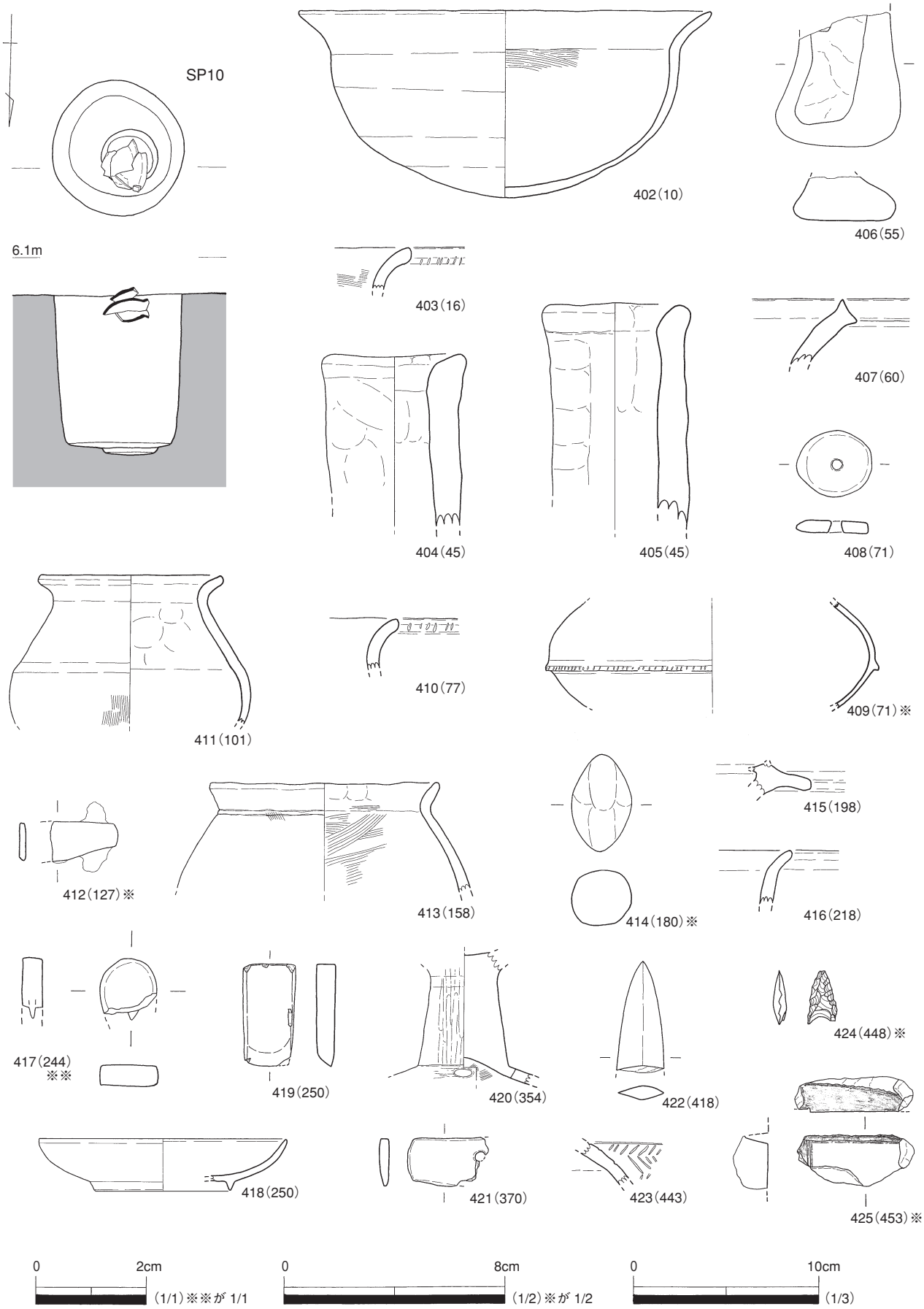


Fig.77　ＳＰ出土遺物①

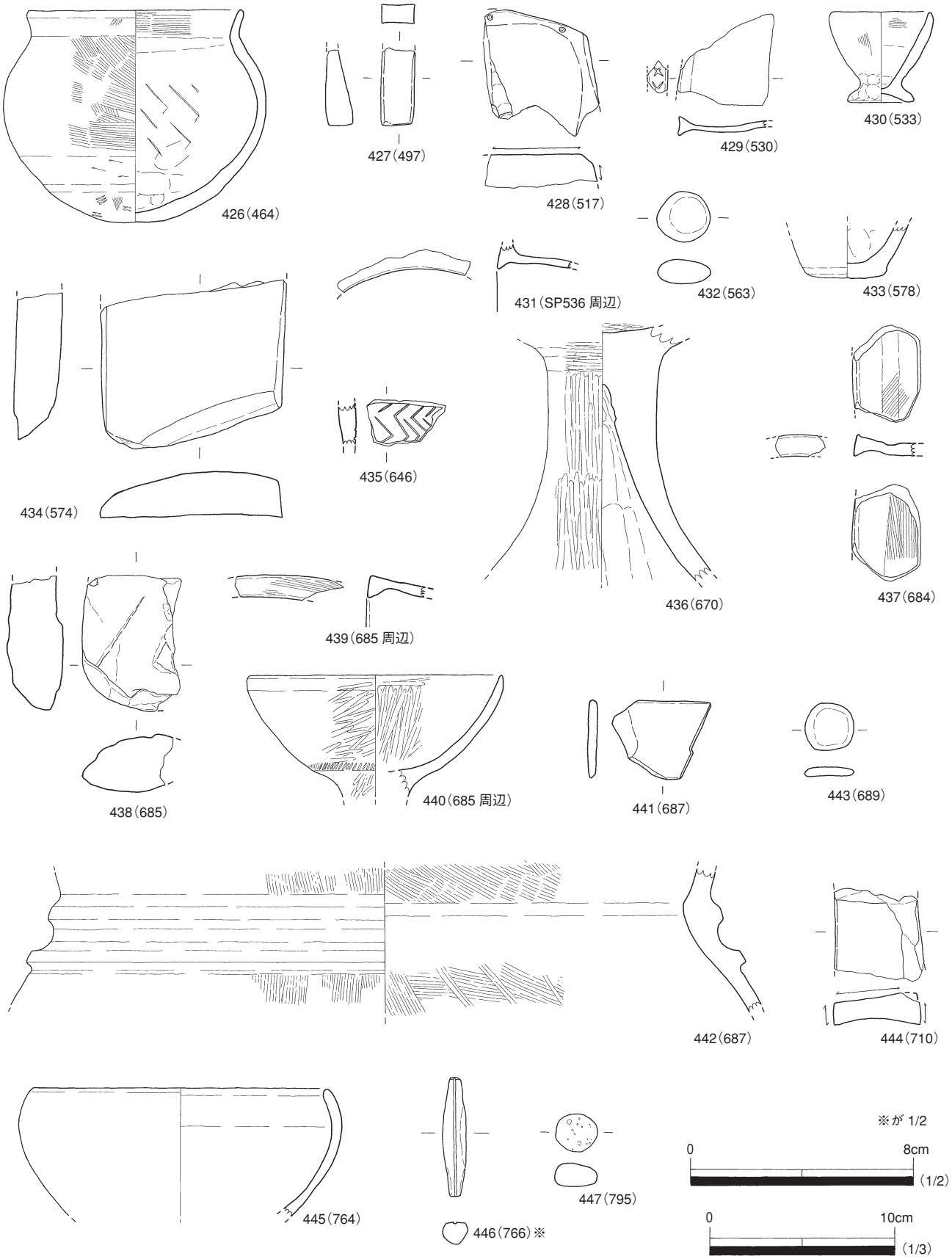


Fig.78　SP 出土遺物②

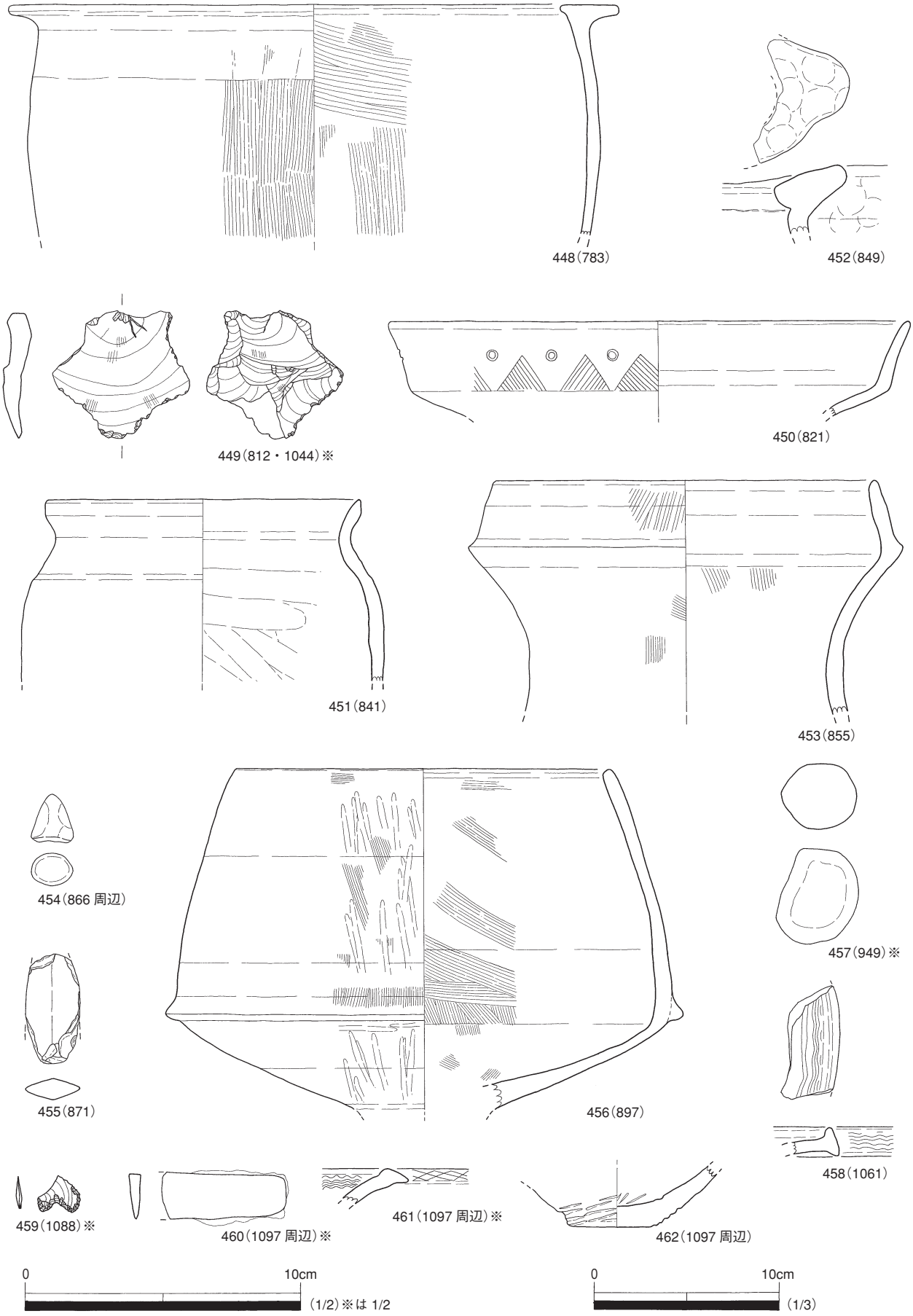


Fig.79　ＳＰ出土遺物③

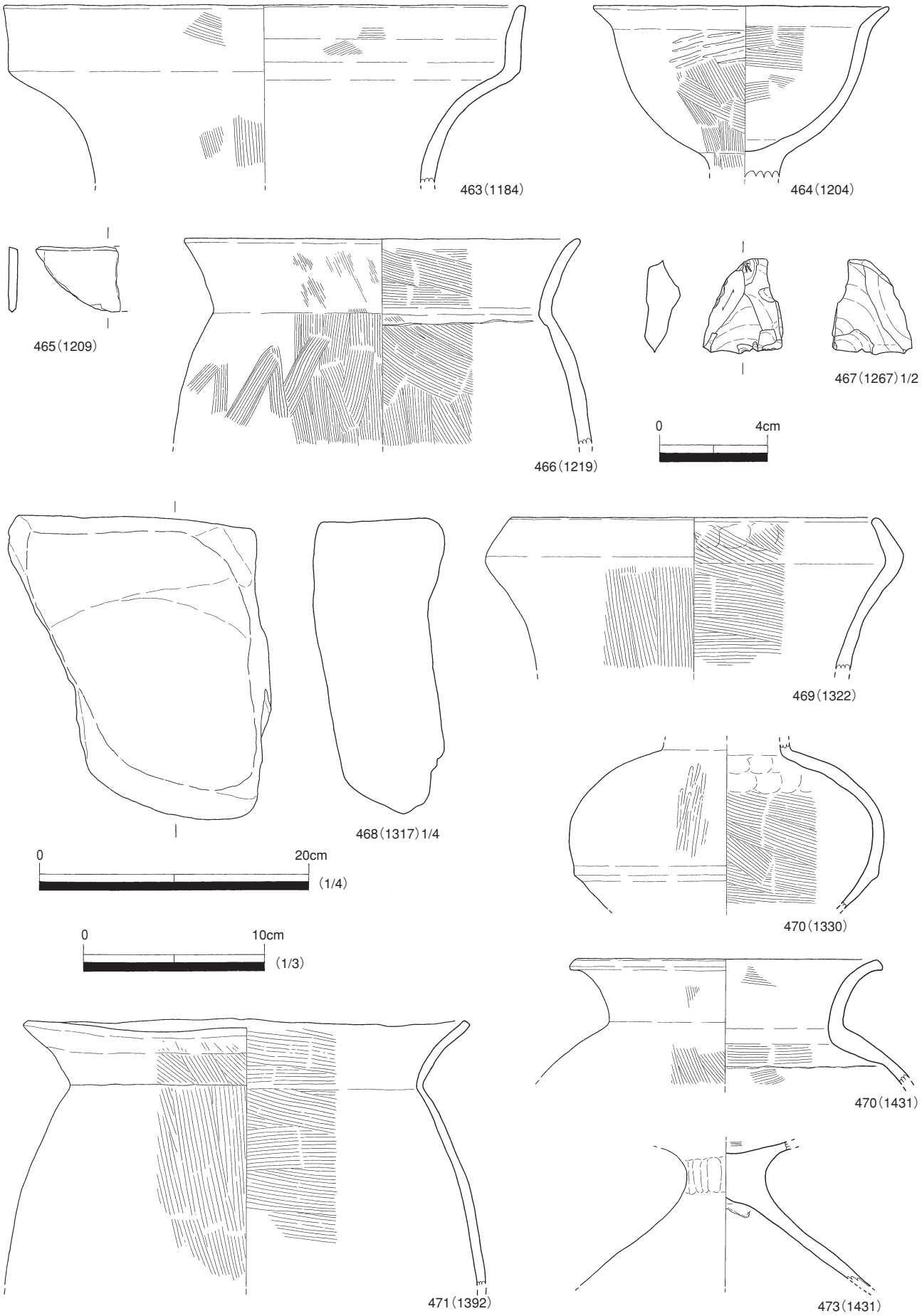


Fig.80　SP 出土遺物④

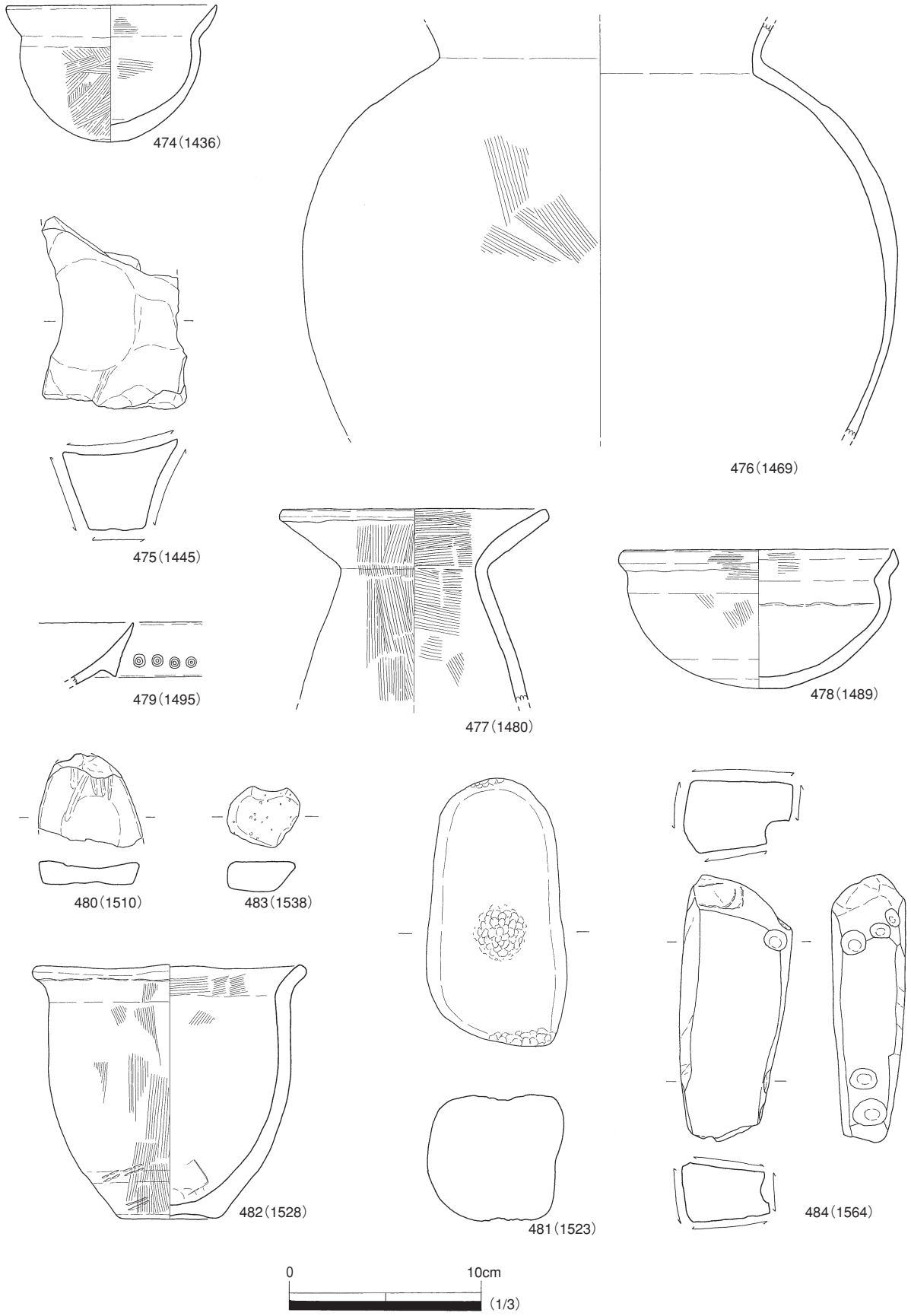


Fig.81　ＳＰ出土遺物⑤

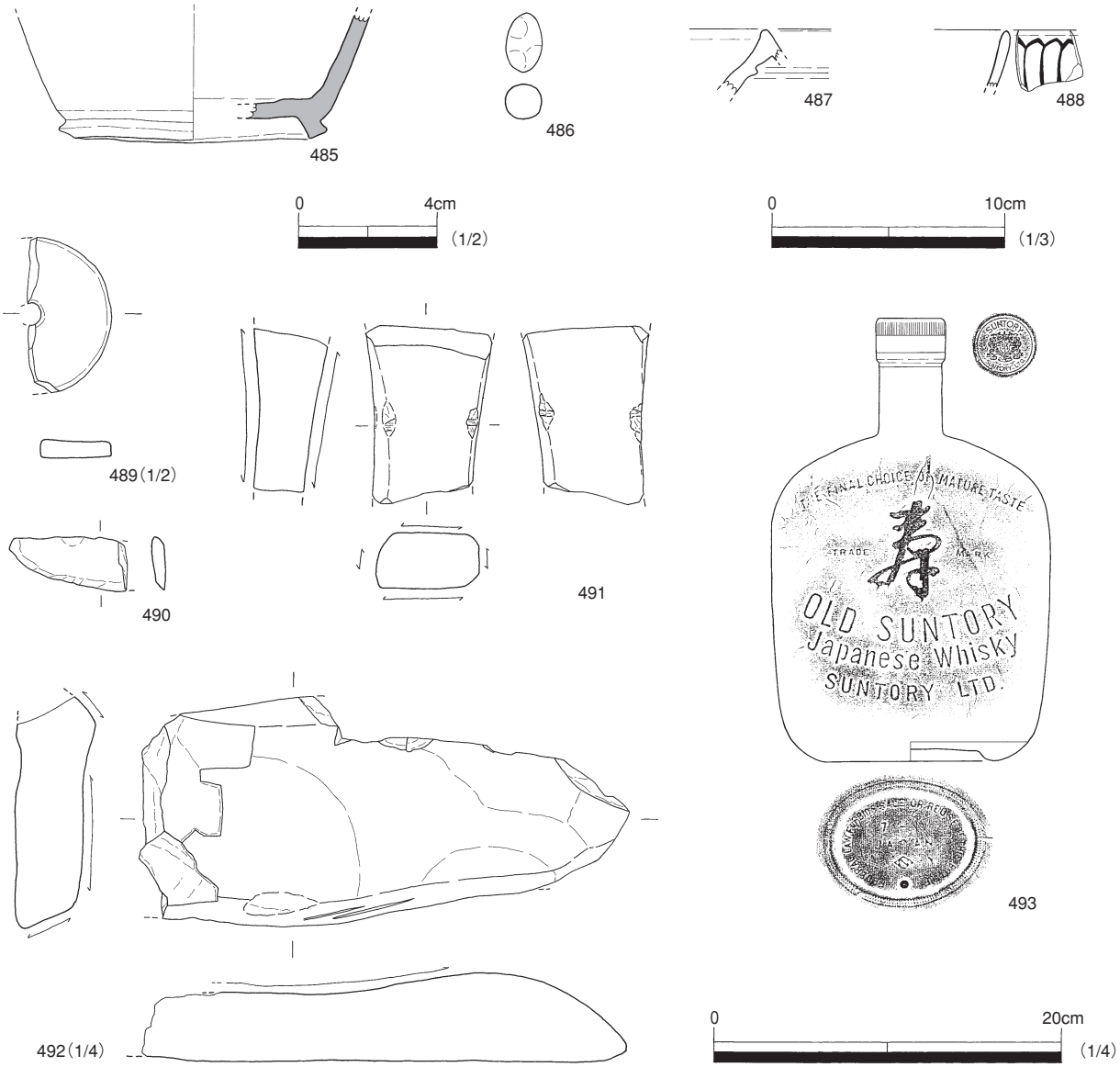


Fig.82　その他出土の遺物

10、その他の遺物（Fig.82）

表土や攪乱出土した遺物である。

485 は須恵器の坏。焼け歪みがある。7 世紀末～ 8 世紀前半か。486 は土製品。投弾にしては少し小さい。487 は不明陶器の口縁部。488 は連弁文をもつ青磁碗で、15 世紀後半～ 16 世紀前半か。489 は片岩製の紡錘車。490 は片刃の刃部を持ち、石包丁の可能性がある。菫青石ホルンフェルス製。491 は砂岩製の砥石。中央付近に対角線上 4 か所に紐で縛ったようなあとがある。492 はⅢ区で出土した安山岩製の砥石。493 はウイスキーボトル。遺構面の上に乗る耕作土中から出土。伝世の可能性もあるが、遺構が削られた後、客土された時期を示すと考えられる。「KOTOBUKIYA　LTD.」ではなく「SUNTORY　LTD.」と表記され、1963 年以降。

Ⅳ．自然科学分析

比恵 144 次出土石材に付着した赤色物質について

福岡市埋蔵文化財センター　　比佐　陽一郎

比恵 144 次調査のⅠ区 SD-225 から出土した大型の板石には、一部が赤色に発色している。その原因物質の推定を目的とした非破壊調査を行った。

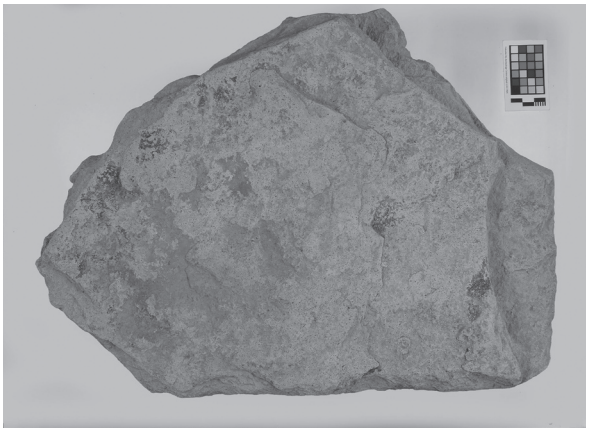
実体顕微鏡による観察では、石材の上に赤色の微粒子が凝集して付着した状況が認められる。赤色の部分が石材の変色によるものではないことが分かる。

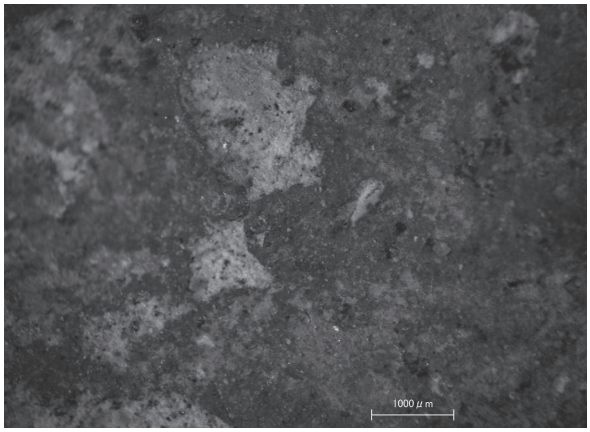
次に赤色付着物部分の X 線回折分析[註)] では、Hematite（Fe_2O_3）のピークが認められ、この部分に赤鉄鉱が含まれることが推定された。しかし、同時に Jarosite（$KFe^{3+}{}_3(OH)_6(SO_4)_2$）のピークも検出されている。赤鉄鉱は赤色顔料ベンガラの成分として知られているが、Jarosite は古代の赤色顔料分析では管見に触れる範囲で検出事例が無く、人為的なものか否かなどを含め、現時点で評価することができない。

註）

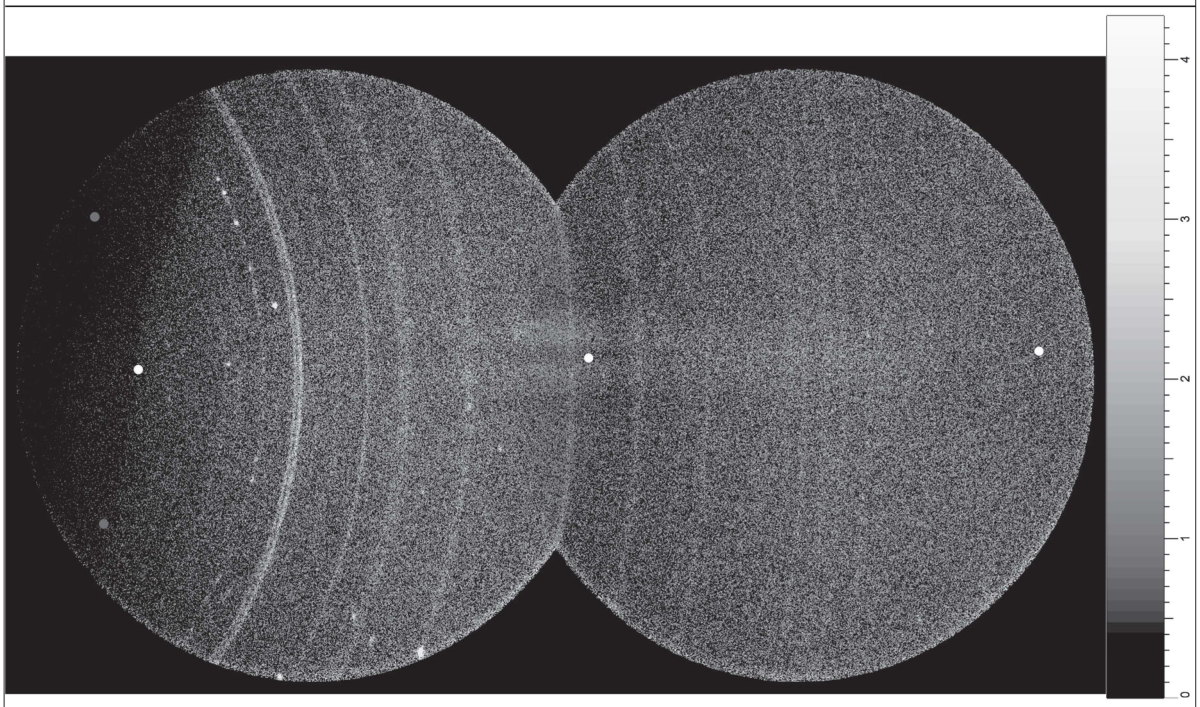
X 線回折分析は、試料に X 線を照射することで、試料を構成する結晶から得られる回折 X 線を検出器で捉え、ピークとして表すものである。ピークの同定は既知試料のデータベースと照合することで行う。調査に用いた装置は Bruker-AXS 社製の D8-DISCOVER で、分析条件は次のとおり。

対陰極：銅（Cu）/ 検出器：リアルタイム二次元検出器 / 印加電圧：40kV・電流値 :40 μA / 測定角度 13 ～ 77° / 測定範囲 0.3mm φ / 測定時間 2,400 秒 / Ni フィルター使用

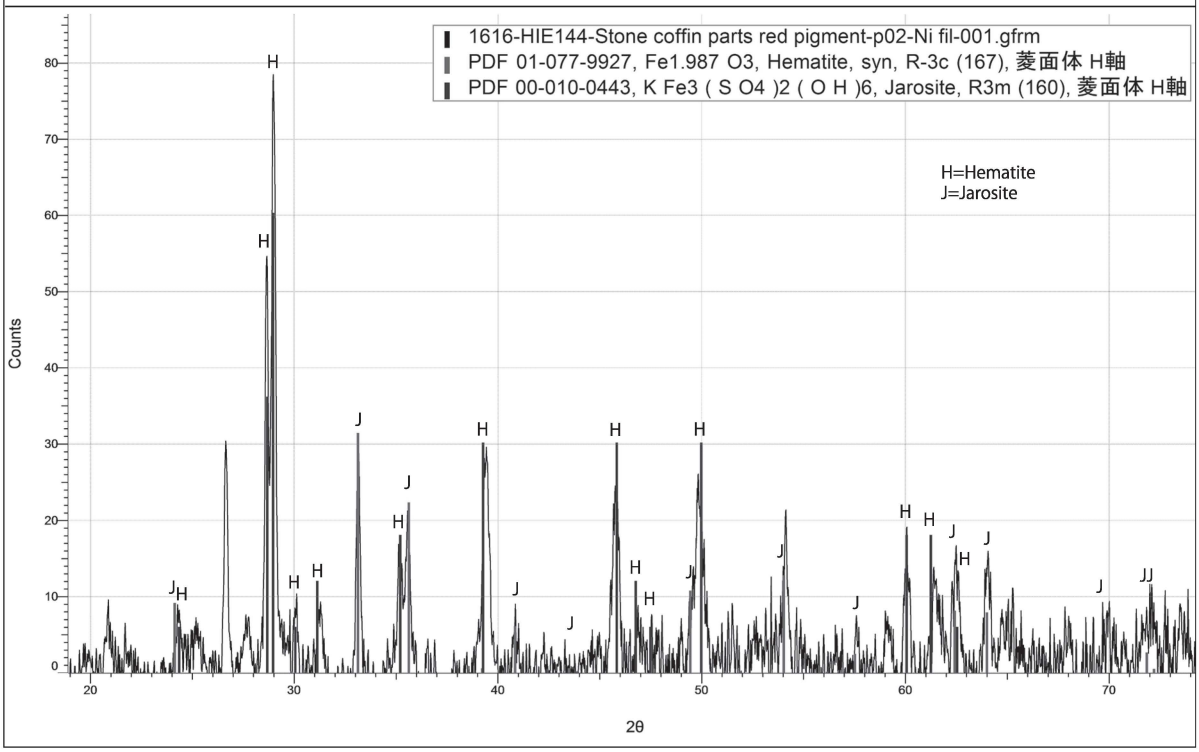




2


0
1
2
3
4

(2Theta)


1616-HIE144-Stone coffin parts red pigment-p02-Ni fil-001.gfrm
PDF 01-077-9927, Fe1.987 O3, Hematite, syn, R-3c (167), 菱面体 H軸
PDF 00-010-0443, K Fe3 (S O4)2 (O H)6, Jarosite, R3m (160), 菱面体 H軸
H=Hematite
J=Jarosite
Counts
2θ
0
10
20
30
40
50
60
70
80
20
30
40
50
60
70

Ⅴ．まとめ

時期別に遺構の変遷を述べながら、調査についてまとめる。

【弥生時代前期後半（Fig.83）】

調査区の北側を中心に円形住居が建てられる。明確なものはSC14・34・35であるが、SC24やSC09、またSC19の一部なども円形住居になる可能性が高い。SC34・35などは上部が大きく削られていること、調査区南側にも弥生時代前期の遺物が出土する柱穴が広く存在すること、積極的に認定はしていないが、円形に柱穴が巡るような部分がいくつかあることなどを考慮すれば、本来は調査区全体に円形住居が広がっていた可能性が高い。

遺物を見ると積極的に前期前半まで上ると判断できるものはない。集落の盛行は前期後半と考えられ、周辺の状況とも一致する（久住2009）。その後、前期末～中期前半までは遺構・遺物が極めて希薄であるが、北西側隣接する133次調査では金海式の甕棺が検出された。

【弥生時代中期末（Fig.84）】

調査区の西側を中心に小型の方形竪穴建物が建つ。これらは主柱穴が不明確で、単なる土坑の可能性もあるが、いくつかで貼床状の痕跡が認められ、竪穴建物としておく。おおよそ軸を揃えて並ぶため、遺物が乏しいいくつかの竪穴建物および掘立柱建物のSB25は軸によりこの時期と想定した。東側に単独で存在するSB01もこの軸に沿い、柱穴からは弥生時代中期の遺物が主体的に出土する。SB01は深さ80㎝程の深い柱穴をもち、一部の柱穴に柱の抜き取りと考えられる階段状掘り方（水ノ江・秦2002）がつく。柱間の距離が長すぎるのが不安要素だが、単独の立地からも特別な建物の可能性があろう。建物群が盛行する時期は、弥生時代中期後半の中でも中期末を中心とする時期だろう。

この時期の井戸にSE1251がある。下層は重機により掘削したため完全な一括とは言い難いが、底付近より土器のセットと多種の木器（鋤・鍬のほか、タモ網枠・蓋（きぬがさ）柄・高坏脚・臼など）が出土した。また、SK142からは北九州の高槻型石斧が出土した。SK142の性格は不明確で、湧水は少しするが顕著でなく、井戸ではないだろう。遺構の時期も不明確だが、石斧の出土からこの時期と考える。竪穴建物群の中に位置するSP453からは銅戈（中細～中広形か）の鋳型が出土した。また、古墳前期の住居で、青銅器鋳型を転用した砥石（59）も出土した。

【弥生時代後期（Fig.85）】

後期に認定できる竪穴建物は少なく、床面で集中して土器が出土したSC12のみである。SC12の時期は後期後半と考えており、軸は調査区の軸に近い。SB03・04は軸を揃えて並び、太い柱を持つ高床の建物と考えられる。古墳前期の竪穴建物に切られること、弥生時代終末期に同じ軸をもつ遺構がなく、SC12の軸に近いことなどから、弥生時代後期と考えられる。SB08も終末期の建物に切られ、後期であろう。SB19～21はSD110とも軸を揃えるから7世紀の可能性も考えたが、須恵器が欠片も出土せず、弥生時代後期と考えた。SB19を構成するSP108からは青銅製鋤先が出土した。

SD727は方形に溝が巡る周溝状遺構である。北側隅部で溝の幅が狭くなり、底面に連続する小穴がみられるから、ここに「入口」があったのだろうか。「入口」側に存在するSB08を挟んで反対側には、完形に近い甕の中に、2つの甕棺の破片が入れられた状態で出土したSK1100がある。よって、これらSB08・SD727・SK1100がセットとなって「何らかの空間」を構成する可能性があろう。

なお、古墳時代前期のSC46の埋土から、韓半島の無文土器（三角形粘土帯土器）が出土した。

【弥生時代終末期～古墳前期前半（Fig.86・87）】

第144次調査区で最も集落が盛行する時期で、多くの建物が建てられる。以下、久住猛雄氏の編年（例

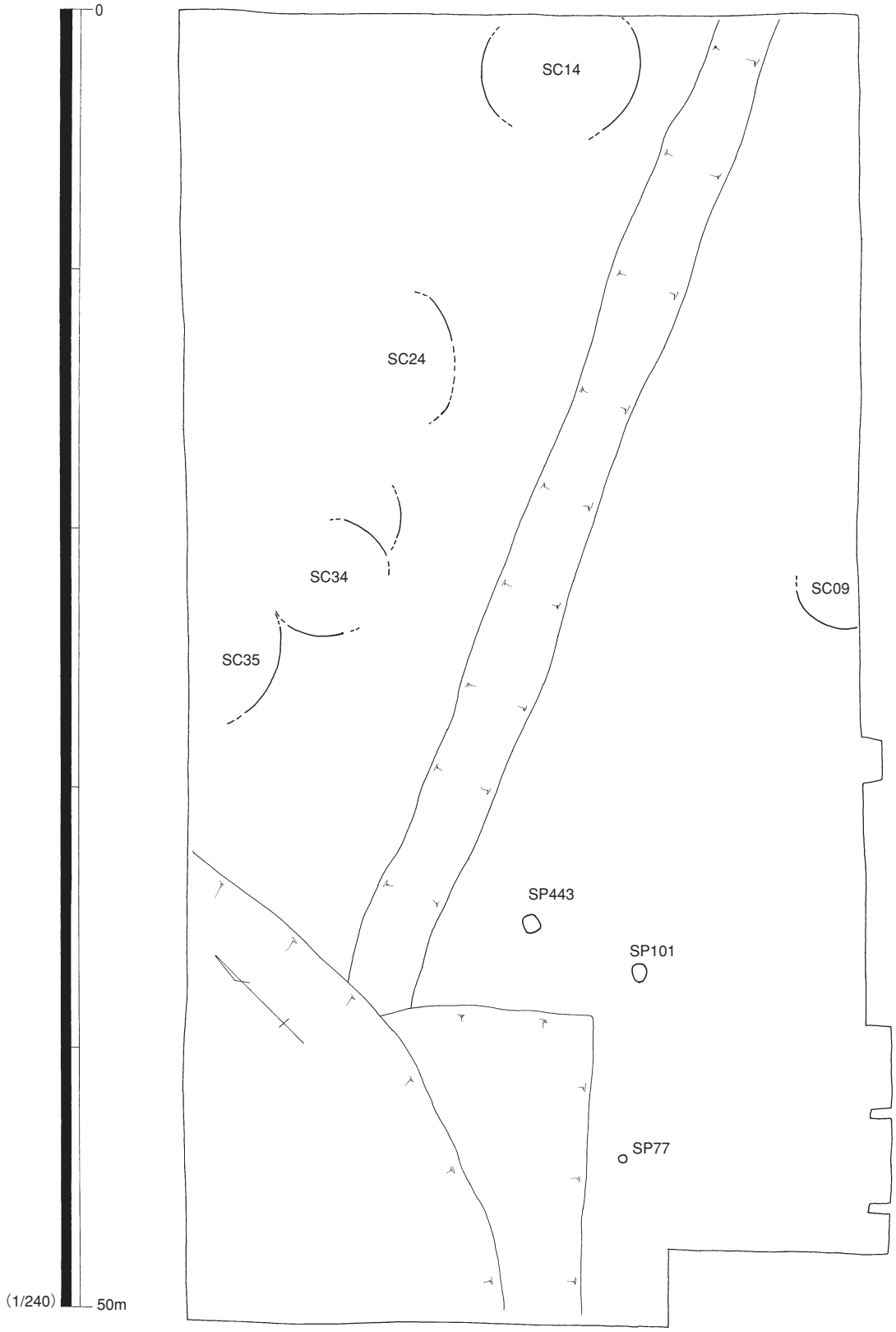


Fig.83　弥生時代前期後半の遺構配置

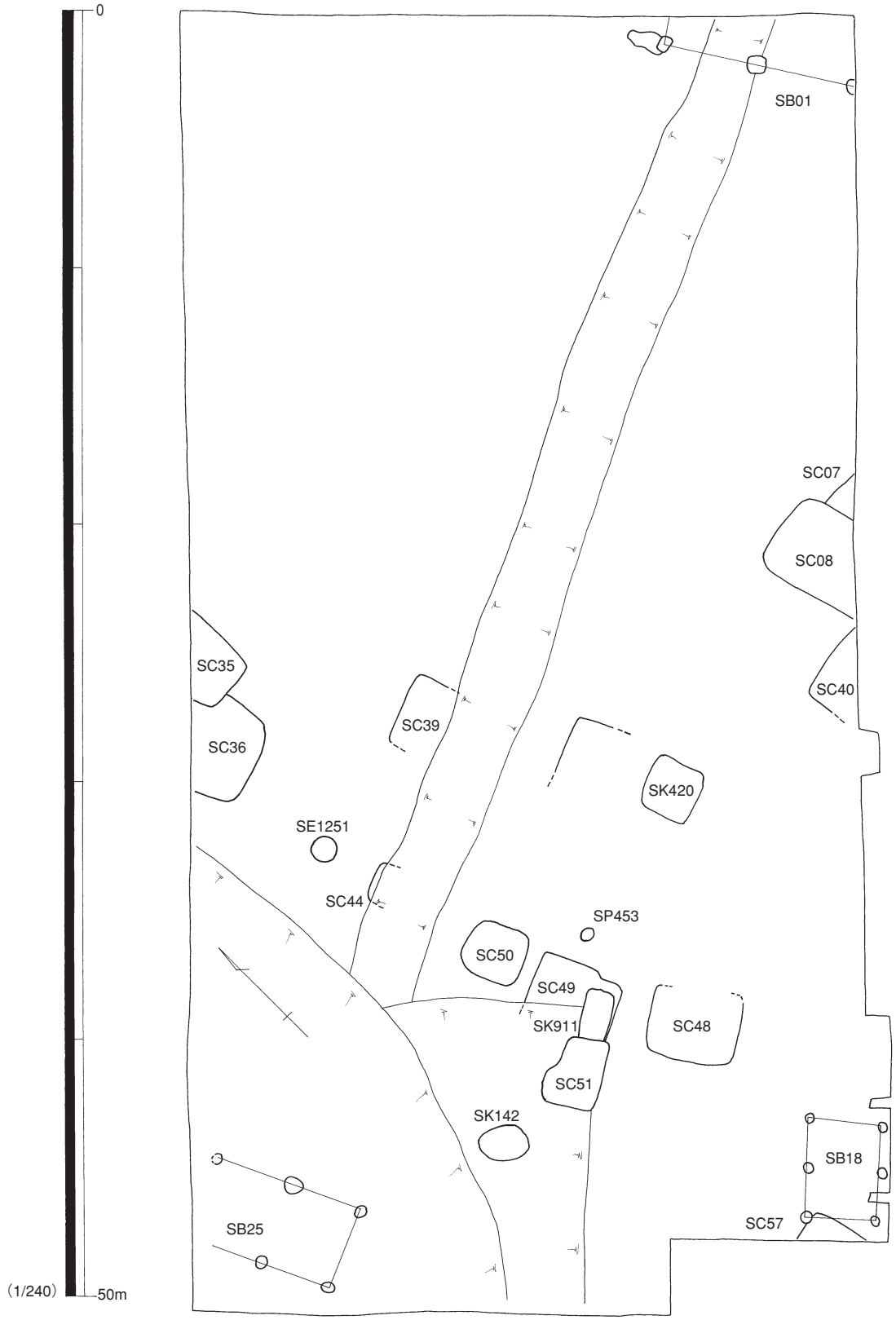


Fig.84　弥生時代中期末の遺構配置

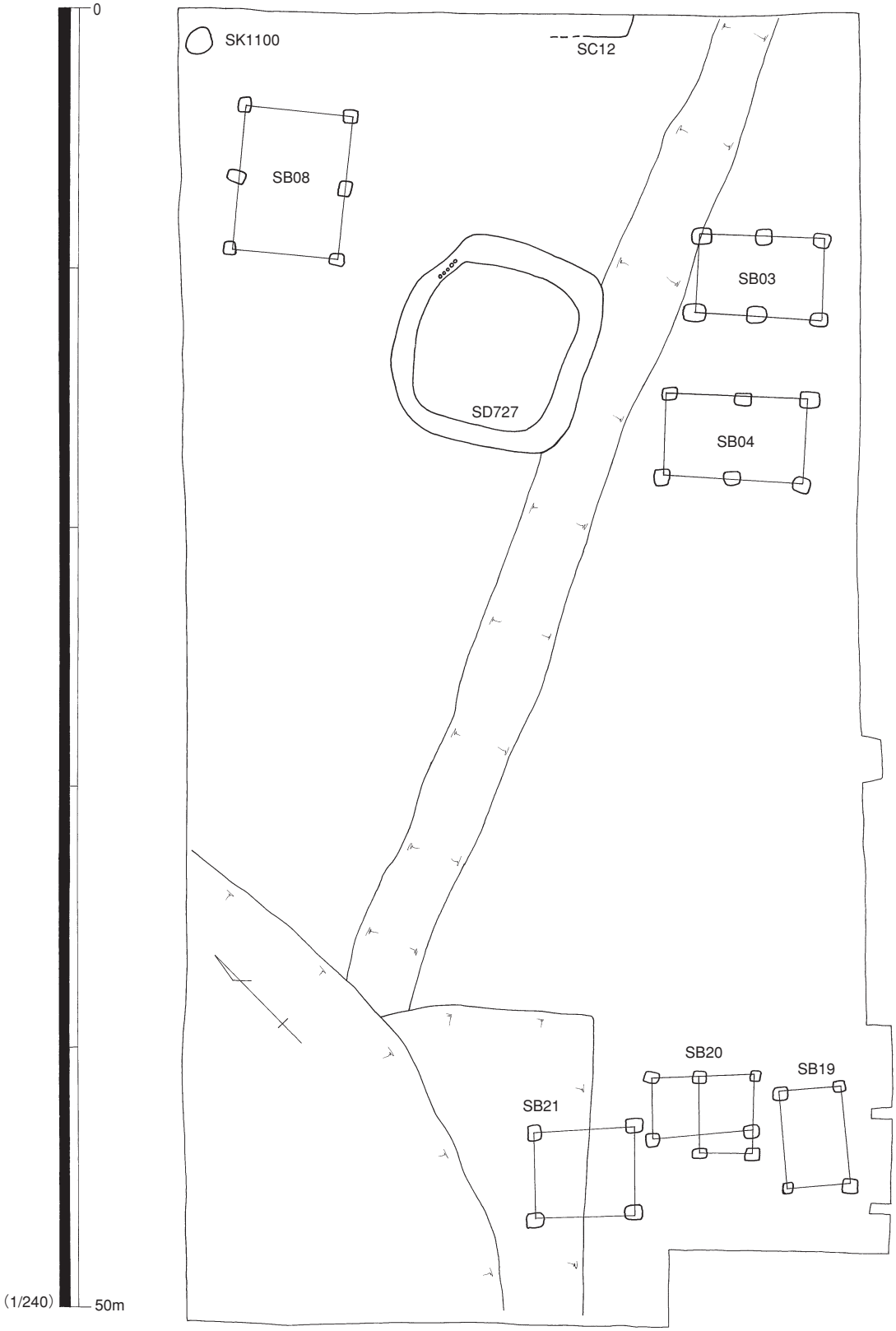


Fig.85　弥生時代後期の遺構配置

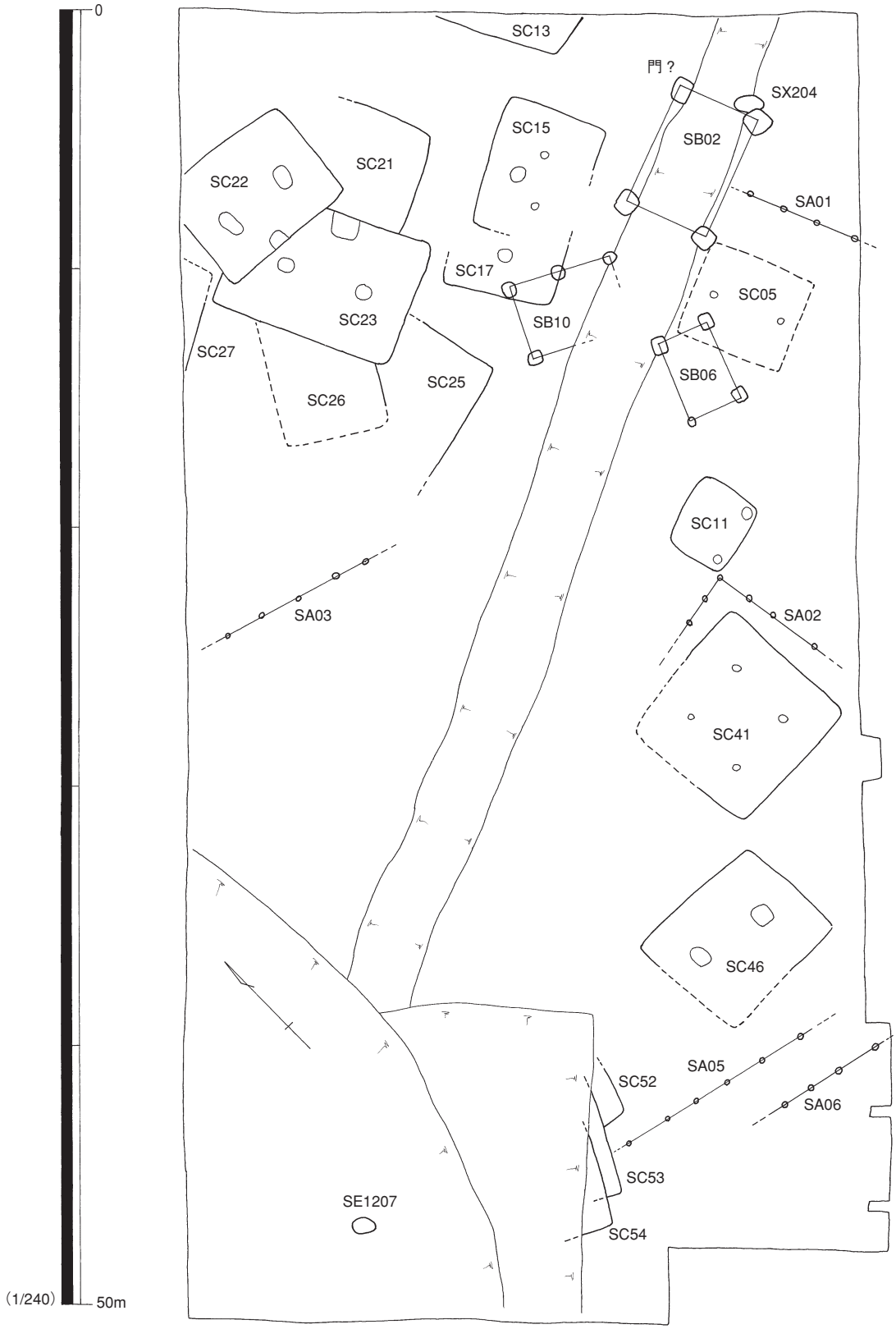


Fig.86　弥生時代終末期の遺構配置

言参照）に従って時期を細分しながら集落の変遷を述べるが、前提として注意しなければならないのは、竪穴建物の時期の認定についてである。竪穴建物は通常、床面直上や柱穴・屋内土坑から出土した完形に近い土器を基に時期を認定する。しかし、これらが示すのは建物の埋没（廃棄）年代であり、掘削年代ではない。よって、ⅡＡ期と認定する建物であっても、建てられたのはＩＢ期であるかもしれない。本調査区ではＩＡ期やⅡＡ期の竪穴建物に比較して「ＩＢ期の建物」が少ないが、それはＩＢ期に建物が存在していなかったわけではなく、ＩＢ期に「建て替え」が少なかった（集落が安定していた？）ことを示すのだろう。つまり、多少の時期（＝埋没時期）のズレがあったとしても、「同時存在」がありうるということを頭に入れておかねばならない。

弥生時代終末期には、調査区北側に密に建物が存在する。この中で、切り合い関係と遺構の軸からSC22が一番新しいと想定されるが、同じく弥生時代終末期と考えられる住居を切っており、ＩＡ期に建てられてすぐに廃棄された住居であろう。SC22に切られるSC23は、SC13・15・17・21・25・27と軸を揃えている。これらはＩＡ期に建てられた住居だろう。「ⅡＡ期の住居」であるSC05も同じ軸であり、ＩＡ期に掘削されてⅡＡ期まで長く使われた住居である可能性が高い。柱穴から肥後系のジョッキ形土器を出土したSB02も同じ軸である。

SB02は１×１間の掘立柱建物だが、長辺の柱間の距離が4.8mと広く、通常の建物とは考え難い。そこで可能性として挙がるのは「門」のような施設である。調査区北側の住居の集中に比べ、南側は住居の数が少ない。SA03がこの時期の北側と南側を区画する施設だったとすれば、SB02がそれに対応する門となる。

SC41は他の住居よりも大きい正方形の住居で、SA02はこれに伴うとすれば、「目隠し塀」のような施設となる。SC11は竪穴建物だが、小さいので住居ではなく、「物置小屋」か何かだろう。南側のSA05・06は時期不明だが、並列する柵列の可能性があり、囲まれたSC41・46・11が北側の住居群よりもややランクの高い住居だろうか。なお、この時期の井戸として、調査区西側で検出したSE1207があるが、井戸の周囲は大きく削平を受けており、建物との関係は不明確である。

古墳時代前期になると、SC41はさらに大きな正方形住居であるSC42に建て替えられたと想定でき、さらにSC42は比較的大型の掘立柱建物であるSB16に建て替えられる可能性が高い。SC46もSC47に建て替った後、最も大きな掘立柱建物であるSB17に建て替えられる。SB16・17への建て替えの時期はSC42・47の時期＝埋没時期であるⅡＡ期である。SC10もSC11の建て替えだろう。SC06はSB05に、SC43はSB22に建て替えられた可能性も考えられる。

弥生時代終末期にみられたような南北での住居の密度の差は薄くなるが、南東側に隣接する137次調査で検出したSC033（弥生時代中期と報告されているが、今回の調査を踏まえれば、古墳時代前期に属するとみて間違いないだろう）も１辺8.4mを測る大型の正方形住居であり、また外来系土器の出土が南側よりも北側に多いことを合わせて考えると、南側が北側よりもややランクの高い空間を維持しているのだろう。

なお、出土遺物や切り合い等から、SC55・58はSB16・17の時期よりも後出すると考えられる。SC01・02なども同様の時期だろうか。これらの住居の廃棄時期はⅡＢ期と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期前半にかけてめまぐるしく集落が変遷していく様相が伺える。

さて、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、建物の建て替えに際し、座標北からやや西に振る軸から座標北からやや東に振る軸への変化が伺える。遺構毎に軸が変化した時期をおさえていくと、まずSC46からSC47への建て替えは、SC46の埋没時期であるＩＢ期である。SC05とSC06は建て替えでないかもしれないが、切り合って軸が変化しており、その時期はSC05の埋没年代であるⅡＡ

期である。最も早く新しい軸を採用するのはⅠＡ期のSC22で、ⅠＡ期の住居を切るから、軸の変化もやはりⅠＡ期である。

比恵・那珂遺跡群では弥生時代終末期南北に貫く1.5kmの道路が成立し、この道路を一つの基準軸として「土地区画整理」がなされたと想定されており（久住2009）、道路の存在を前提とした土地の規制はⅠＡ期から認められる（久住1999）から、本調査区でみられた建物の軸の変更もこれに伴うものと考えられる。ただし、今回の調査区の事例をもとにすれば、「土地区画整理」による建物の軸の変化は一時期に一斉に行われたのではなく、ゆるやかに漸移的に行われた様相がみてとれる。規制の方法としては、「今すぐ建物の軸を変更すること」といったものではなく、「建物の建て替えに際しては、新しい軸を採用すること」といった感じだろうか。そうした「御触」が出されたならば、ⅠＡ期の中でも新しい時期と考えられる。

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての特筆される遺物を挙げると、肥後系・豊前系・日向系・山陰系・東西瀬戸内系・北近畿系・東海系・北陸系などの各地の外来系土器がある。またSC06からは鹿角装刀子が出土した。SC16からは台石・叩き石・各種砥石・ミガキ石といった石器のセットが揃っており、簡易な鍛冶工房であったと想定できる。近接して帰属が不明な炉であるSX1403がある他、調査区内からは多数の砥石や台石・叩き石の他、時期は不明確だが小型の鑿もしくは鏨と考えられる鉄器（234）や鉄素材の可能性があるもの（40・457）も出土し、注目できる。SC58出土の不明土製品にも注目しておきたい（220・221）。

【飛鳥時代（７世紀）以降（Fig.88）】

７世紀の遺構として挙げられるのは掘立柱建物３軒・溝３条・土坑２基・井戸１基である。遺物としては多数出土した須恵器系土師器（81・309・310・357・358の他、SD02からも破片が出土）や焼け歪み須恵器（249・295・353・386・399・485）が注目できる。

中世の遺構はSD225のみで、13世紀後半から14世紀中頃に掘削されたと想定した。溝の底はほぼ平坦であり、溝の性格は今のところ不明としておきたい。

【その他の遺物】

その他、細かな時期を特定しづらい遺物等で、特筆すべきものを挙げておく。石器では石包丁12点（38・88・94・99・104・162・274・326・370・421・441・490）、扁平片刃石斧２点（325・419）、石錘８点（10・100・105・196・223・238・256・446）、軽石５点（25・95・291・447・483）、磨製石剣３点（151・422・455）、石鏃５点（48・163・164・424・459）、石製紡錘車３点（197・272・489）が出土した。土製紡錘車は２点（153・408）出土。紡錘車が多く出土することから、石錘の中には漁労用でなく、編み物用の錘なども存在するかもしれない。鉄器は刀子３点（211・245・412）、鉄斧（198）、鉄鎌（39）、穿孔具（101）、鉄鏃（ヤス？）（133）、鉄片・不明鉄器（165・257・293・460）が出土した。その他、不明青銅製品（417）、ガラス小玉２点（199・248）、滑石製臼玉２点（168・225）、土製投弾６点（70・96・190・224・233・414）が出土した。SD225からは赤色顔料が付着した板状の石材が出土し、付近に石棺墓等が存在した可能性を示唆する。

【参考文献】

久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出―比恵・那珂遺跡群における並列する二条の溝の性格と意義―」『九州考古学74』　／　久住猛雄2009「比恵・那珂遺跡群～弥生時代後期の集落動態を中心として～」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会／水ノ江和同・秦憲二2002「大型竪穴住居跡内における「柱抜き取り排土」について―柱穴に付帯する階段状掘り方の性格―」『福岡考古20』

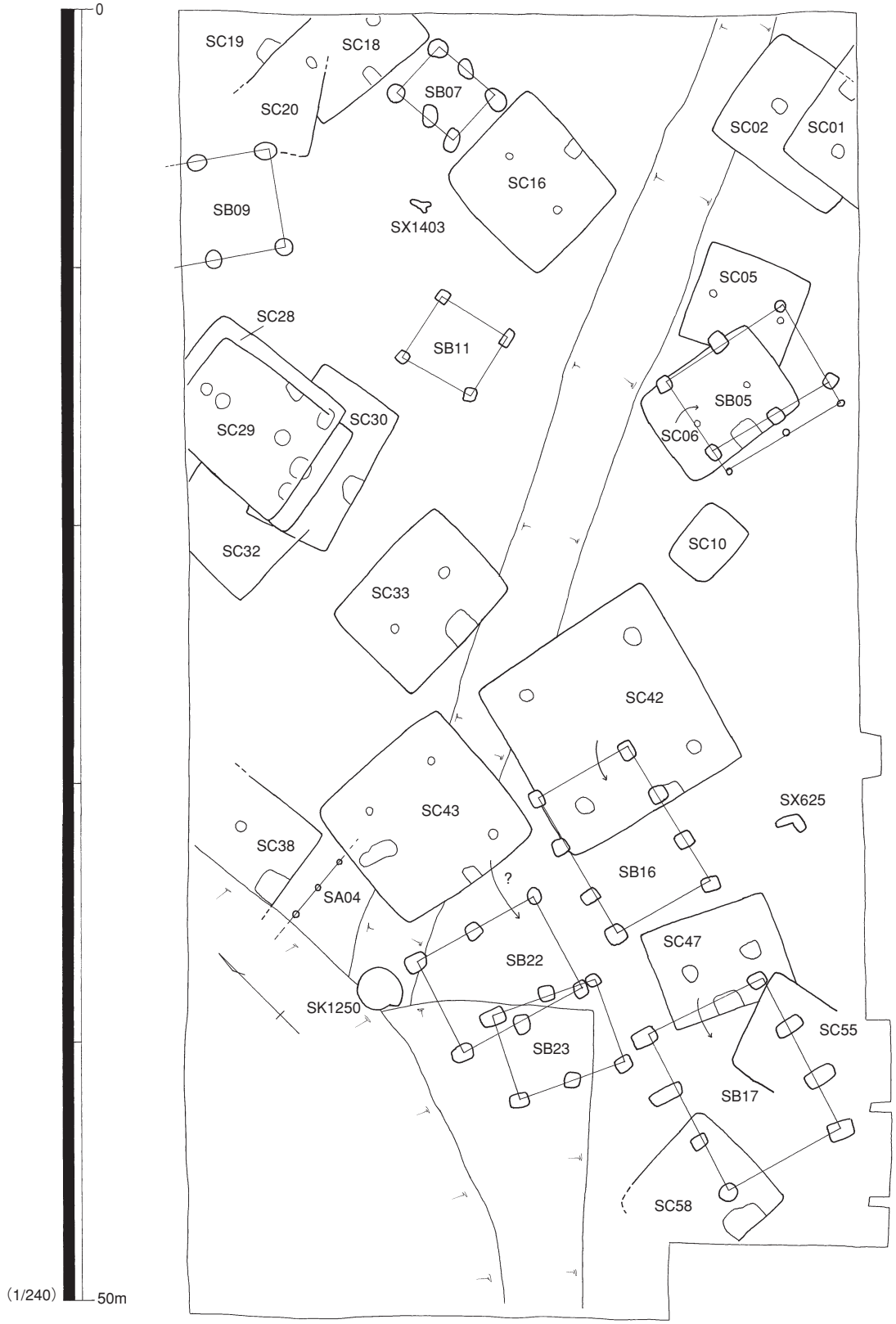


Fig.87　古墳時代前期の遺構配置

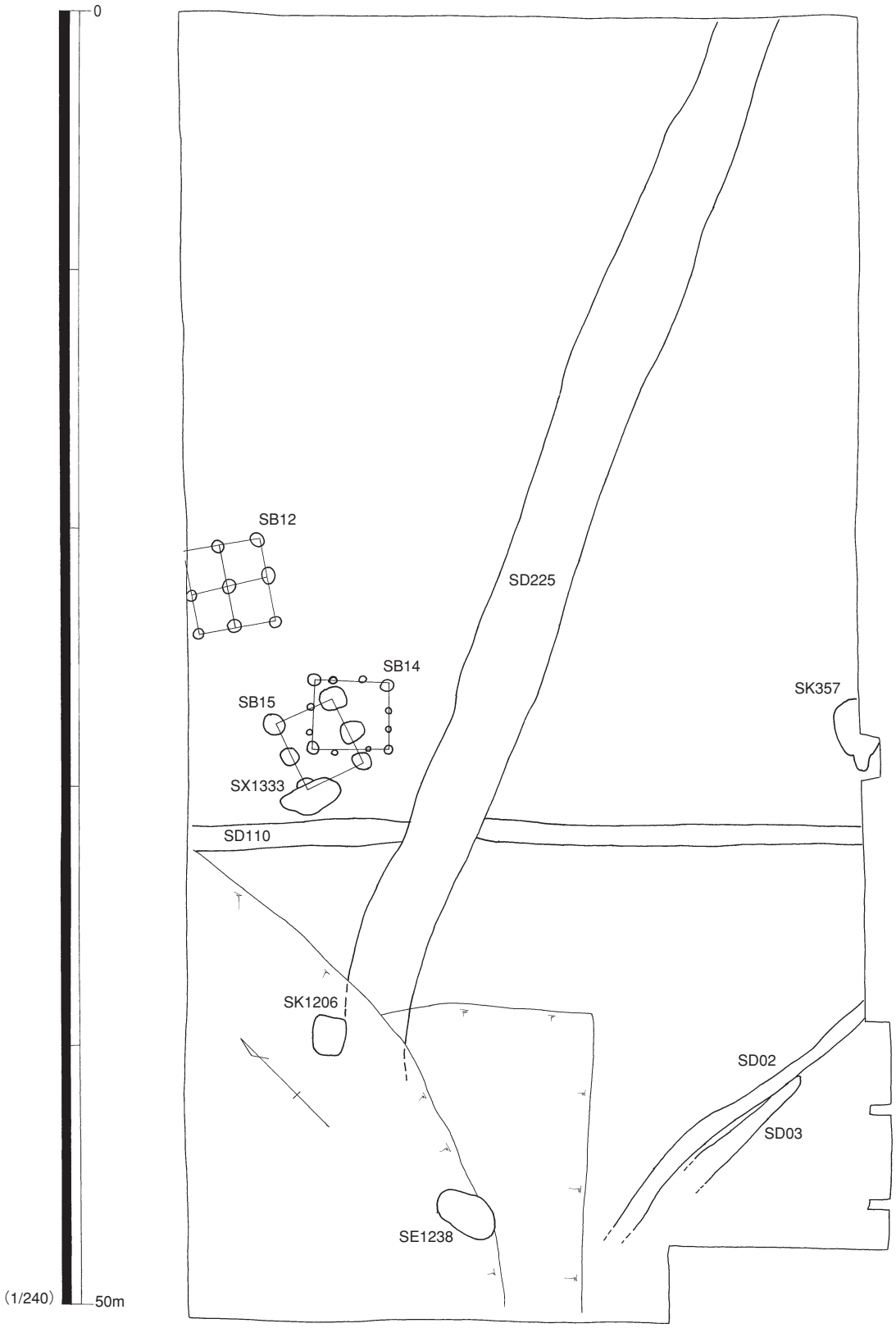


Fig.88　７世紀以降の遺構配置

（1）調査区全景合成（東より）

（1）Ⅱ区全景（東より）

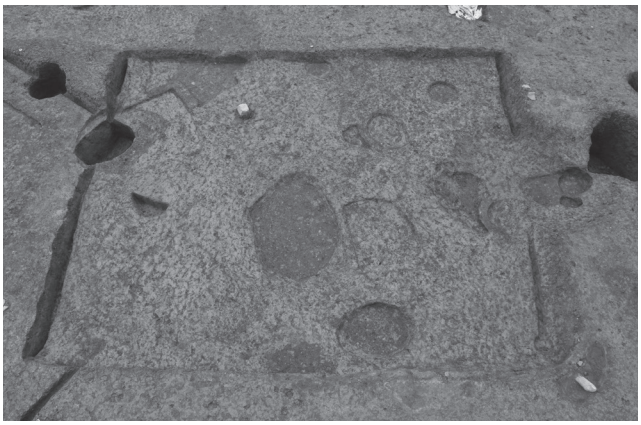
（1）Ⅰ区全景（東より）

（1）SC01・02

（2）SP205（SC02）土器出土状況

（3）SC02 炉土層

（4）SC02 炉

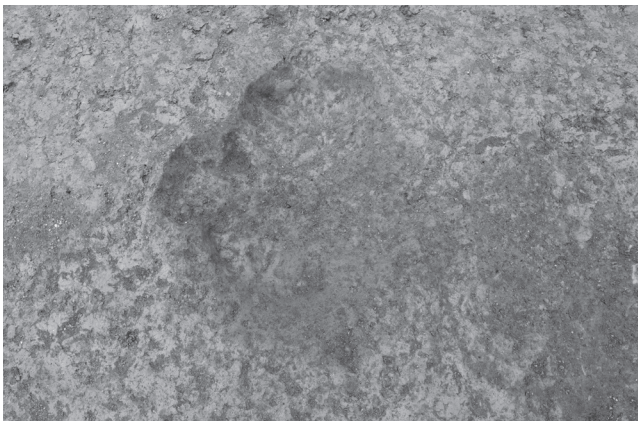


（5）SC05

（6）SC06

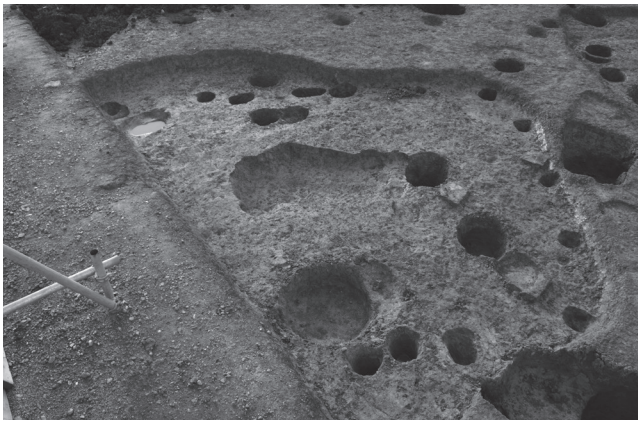
（7）SC06 屋内土坑土層

（8）SC06 西側排水溝土層



（1）SC06 炉

（2）SC07・08・09



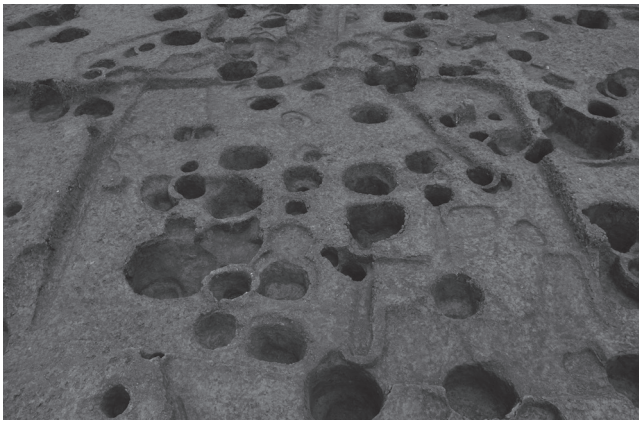
（3）SC08 完掘

（4）SC10・11

（5）SC13

（6）SC14

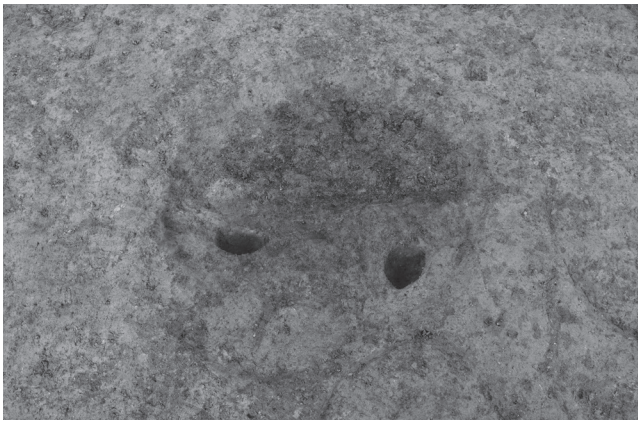
（7）SC16



（8）SC16 完掘

（1）SC18

（2）SC22

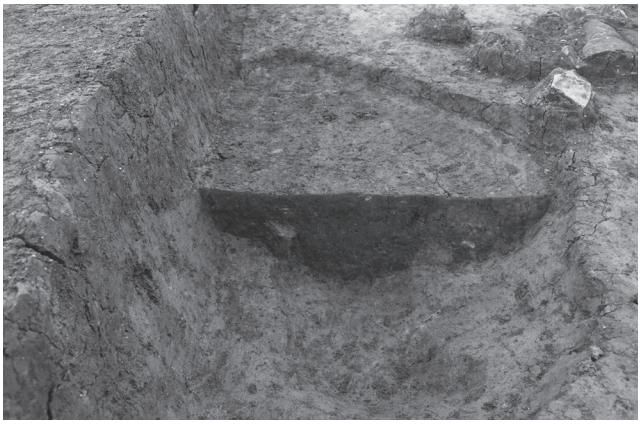


（3）SC22 炉土層

（4）SC23

（5）SC28・29・30

（6）SC28・29・30 完掘



（7）SC30 屋内土坑土層

（8）SC33

（1）SC33 屋内土坑

（2）SC33 屋内土坑土層

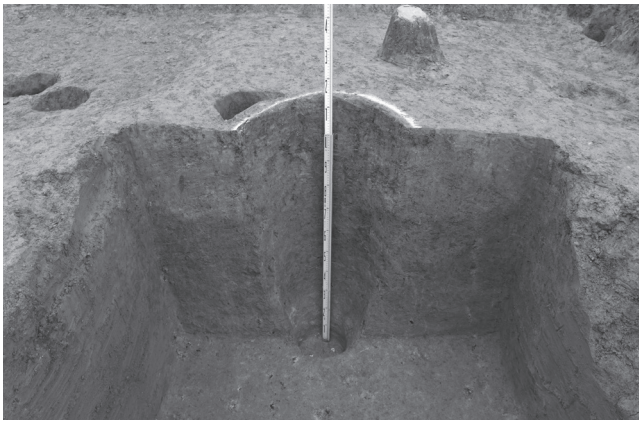
（3）SC34

（4）SC37

（5）SC38 屋内土坑

（6）SC41

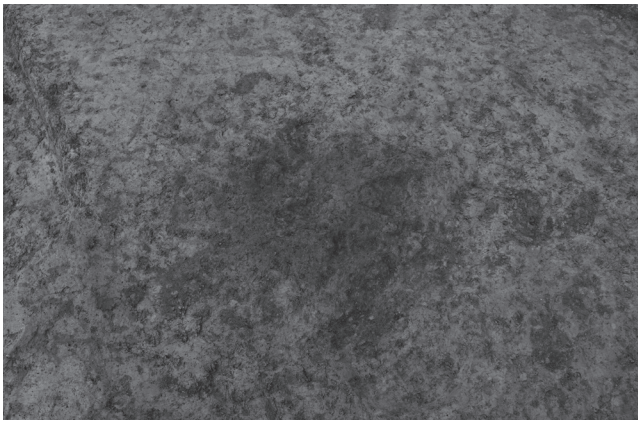
（7）SC42



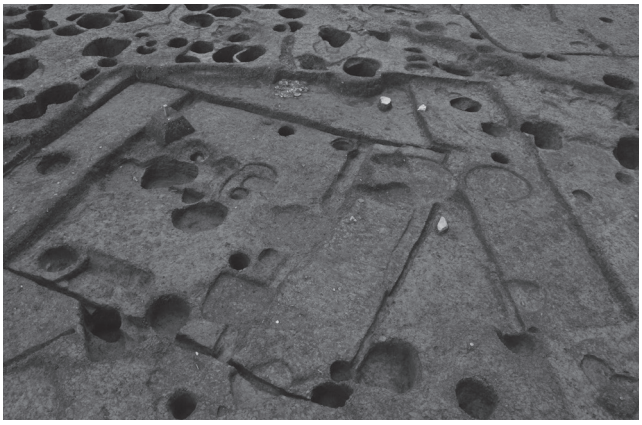
（8）SP987（SC42）断ち割り

（1）SC42 中央炉

（2）SC42 屋内土坑・SK420

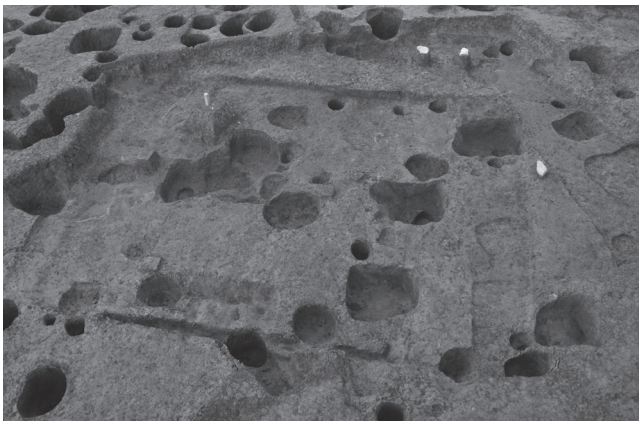


（3）SC45 炉

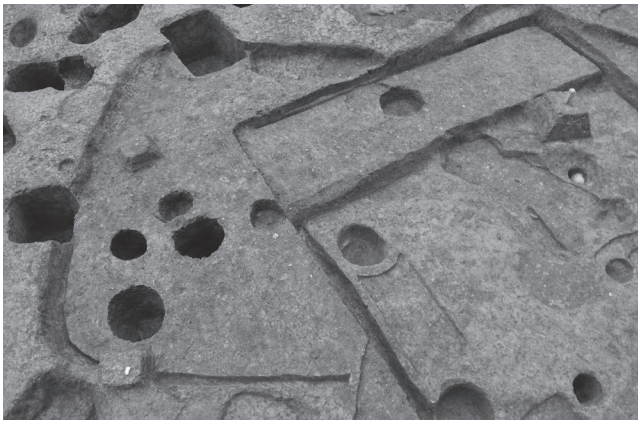


（4）SC46

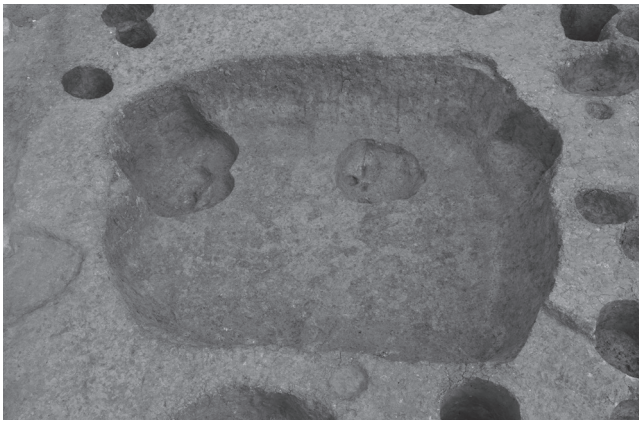
（5）SC47



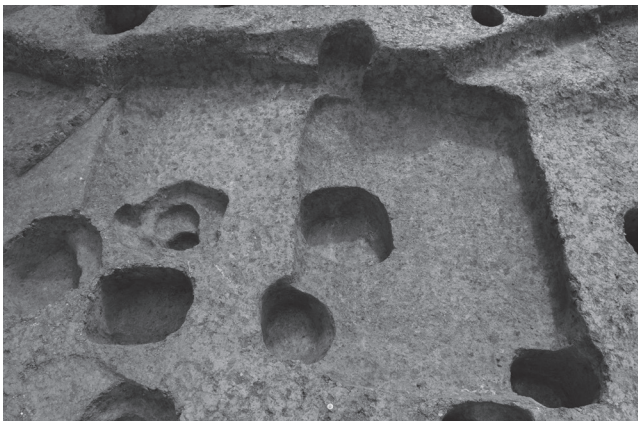
（6）SC47 完掘



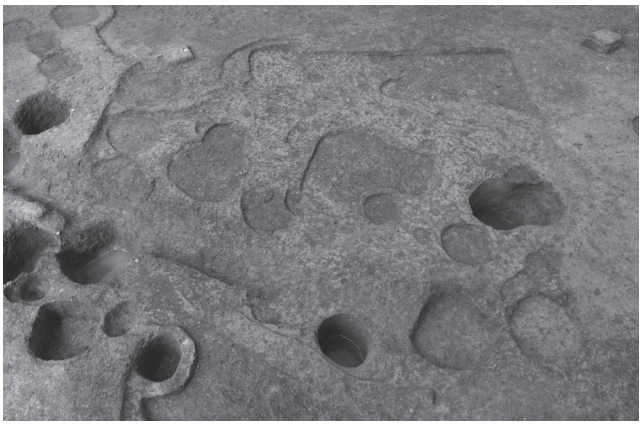
（7）SC48



（8）SC50

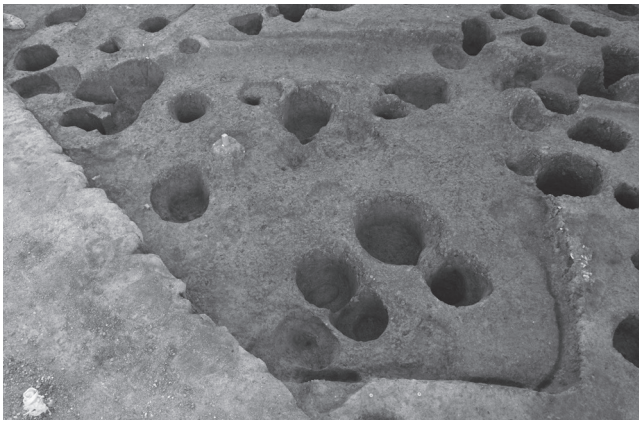


（1）SC51



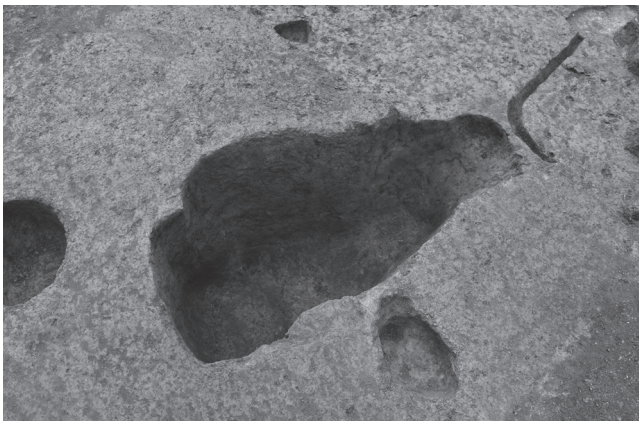
（2）SC55

（3）SC57 土器出土状況



（4）SC58

（5）SC58 屋内土坑？土層



（6）SX862（SB01）

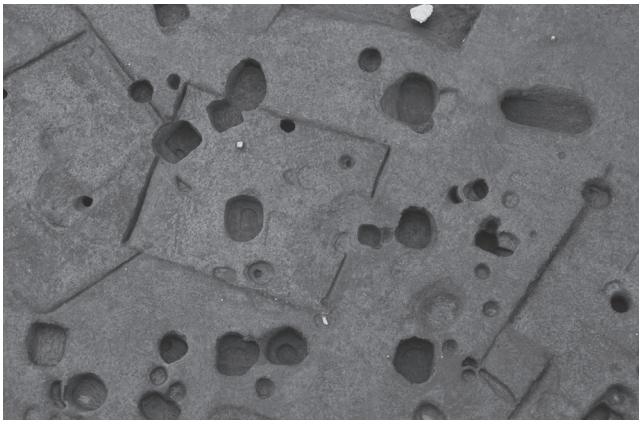
（7）SB02

（8）SP203 土器出土状況

（1）SP203（SB02）土層

（2）SP273（SB02・03）土層

（3）SP390（SB04）土層



（4）SB05

（5）SP37（SB17）土層

（6）SP86（SB17）土層

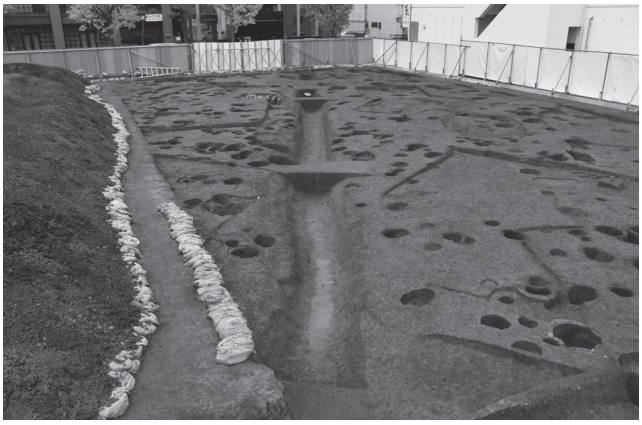
（7）SP492（SB17）土層

（8）SP547（SB17）土層

（1）SD02 土器出土状況

（2）SD110

（3）SD110 土器出土状況



（4）SD225

（5）SD225 Ⅰ区東側土層

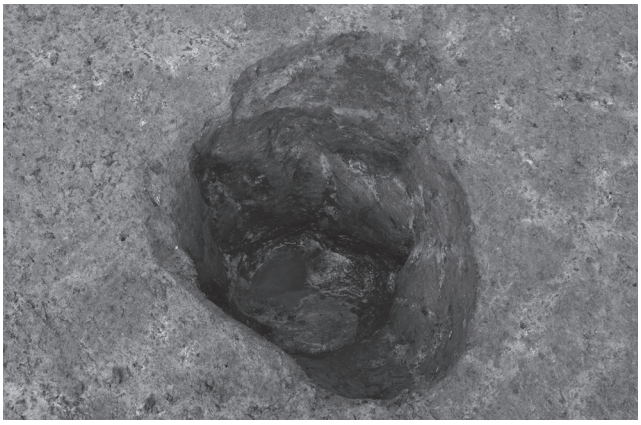
（6）SD225 Ⅰ区西側土層

（7）SD225 Ⅱ区土層

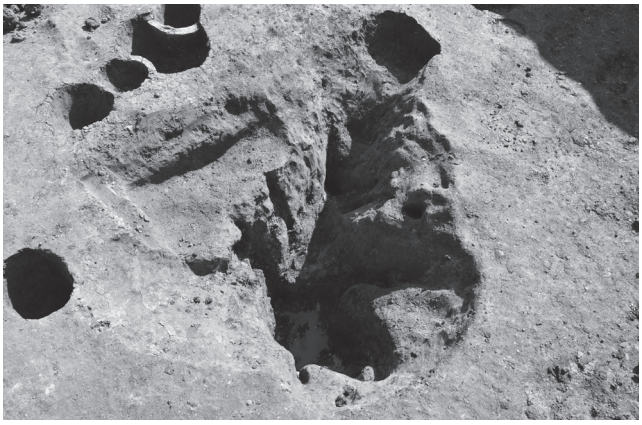
（8）SD727

（1）SD727（上から）

（2）SD727 土器出土状況



（3）SE1207



（4）SE1238

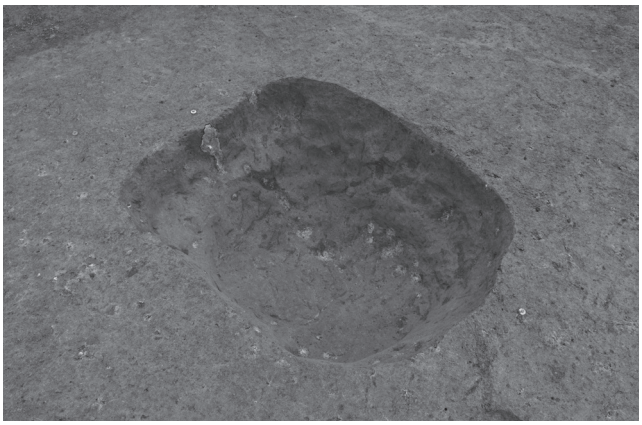
（5）SE1238 土器出土状況

（6）SE1251 断ち割り

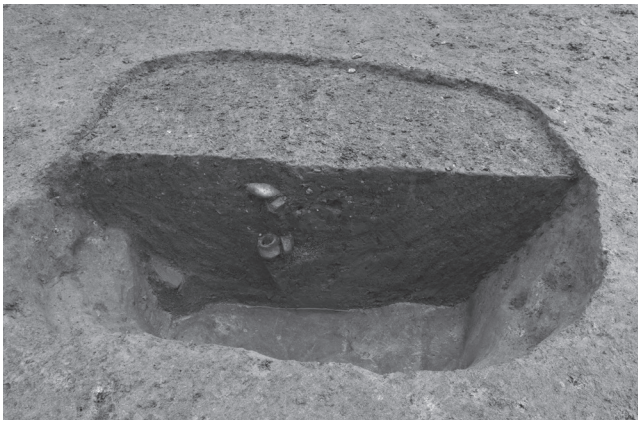
（7）SK142

（8）SK142 土層

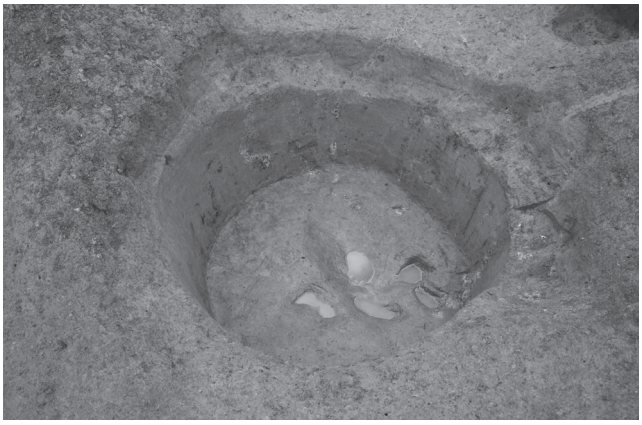
（1）SK1100 土器出土状況



（2）SK1206



（3）SK1206 土層



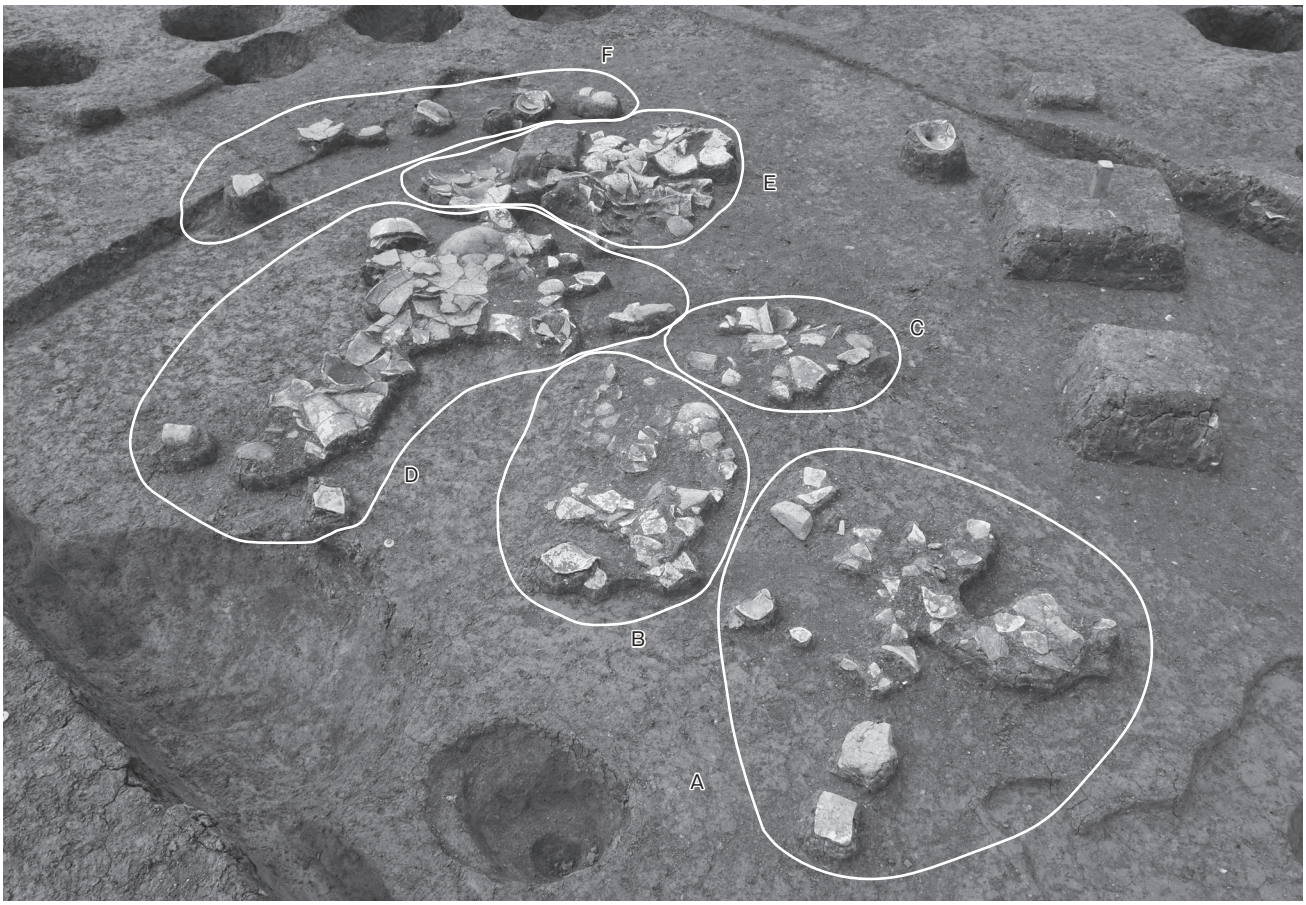
（4）SK1250

（5）SK1250 土層

（6）SX204 土器出土状況

（7）SX625 土器出土状況

（8）SX1403

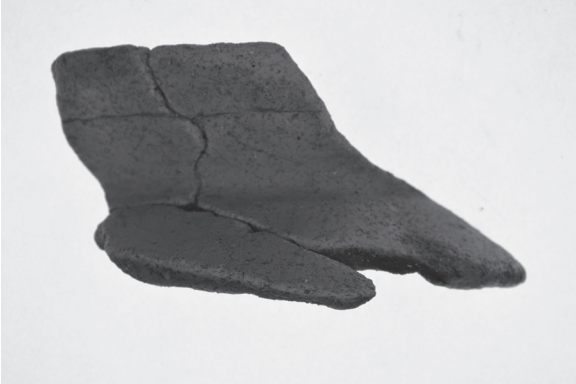


（1）SC30 土器出土状況①

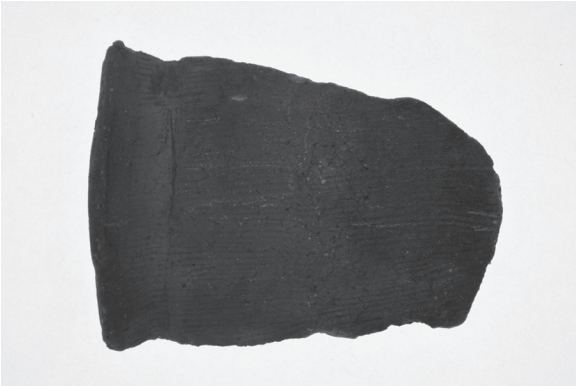
（2）SC30 土器出土状況②

（1）SC30 土器出土状況③

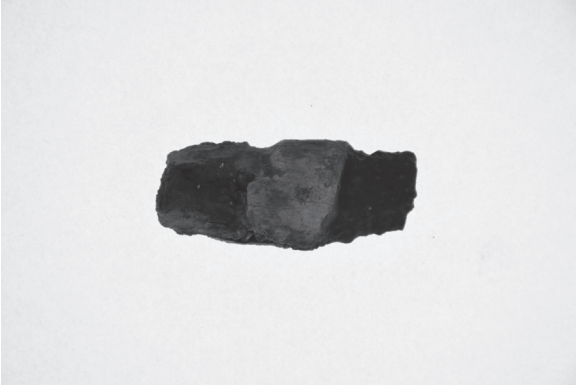
（2）SC30 土器出土状況④


6

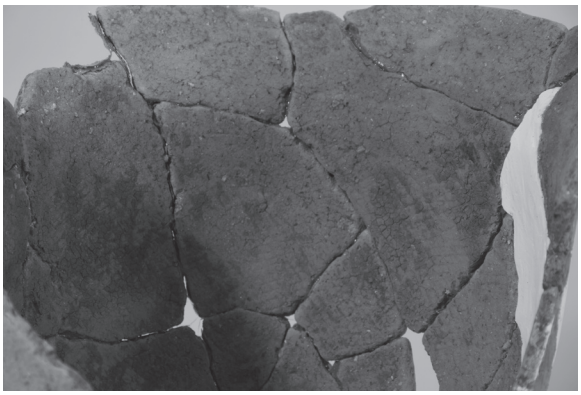
11

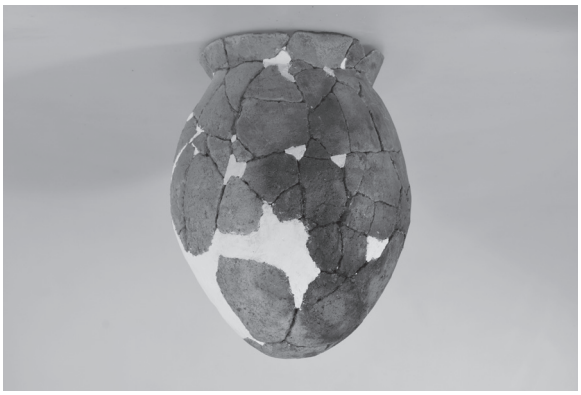

14

16


34

81


81
内側

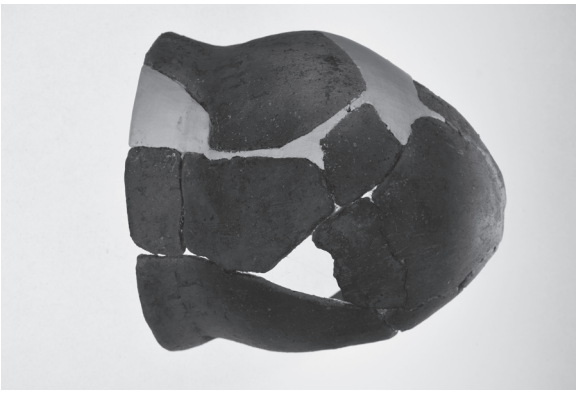

83

87

90

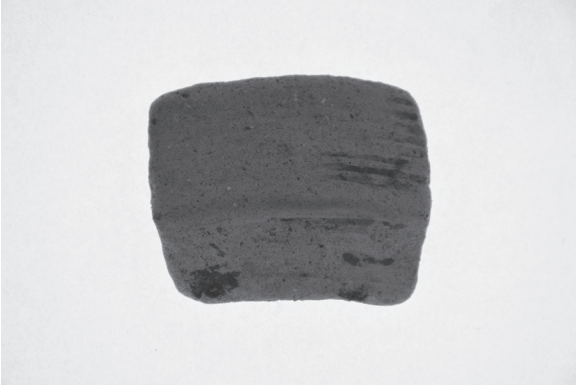
PL. 16　遺物②

93

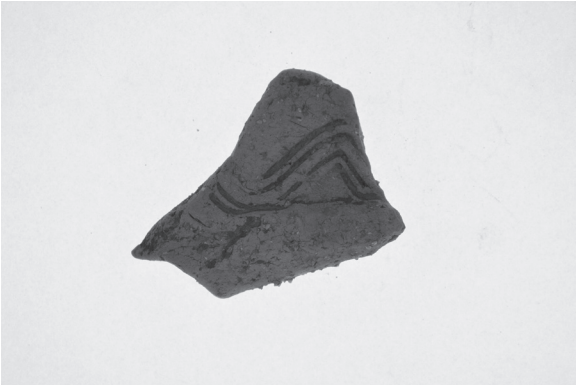

119

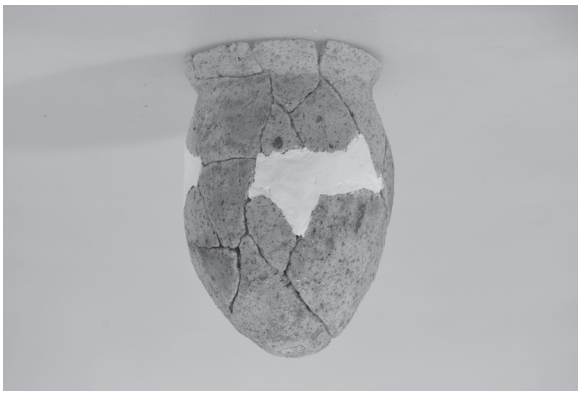
119
底

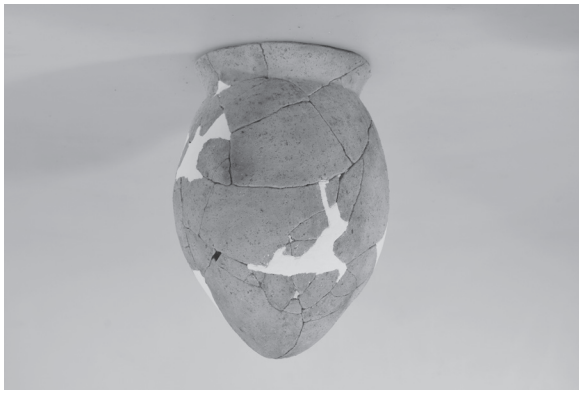
125


150

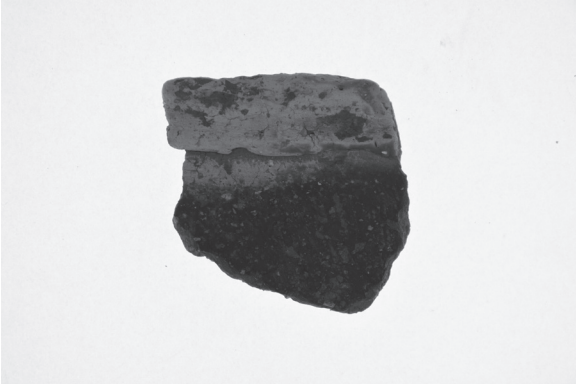
159
160


169

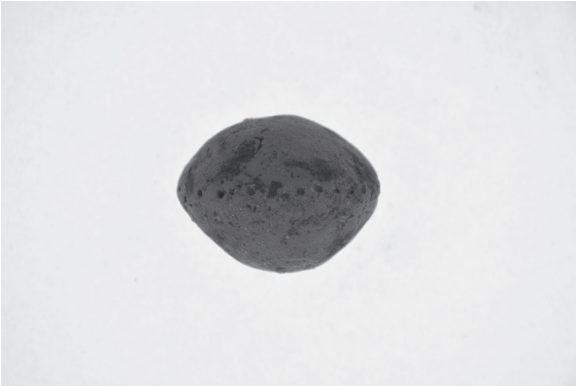

171

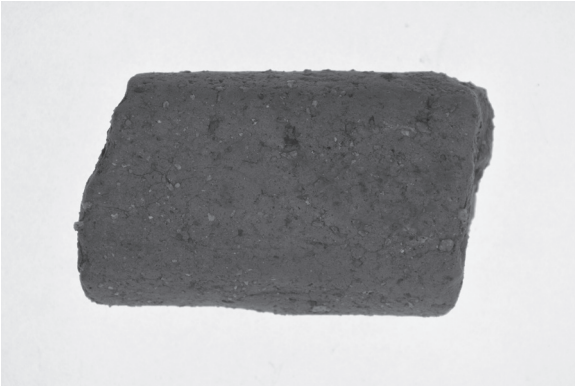

178

180


186

186
断面

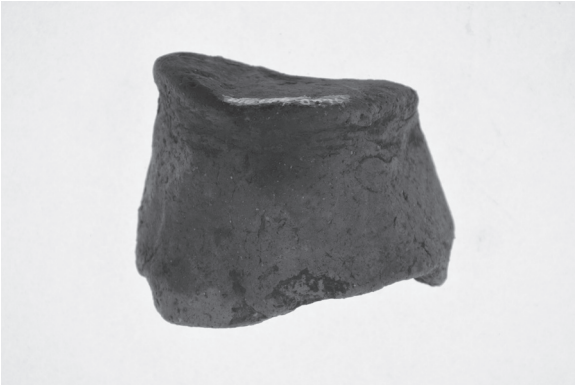

220

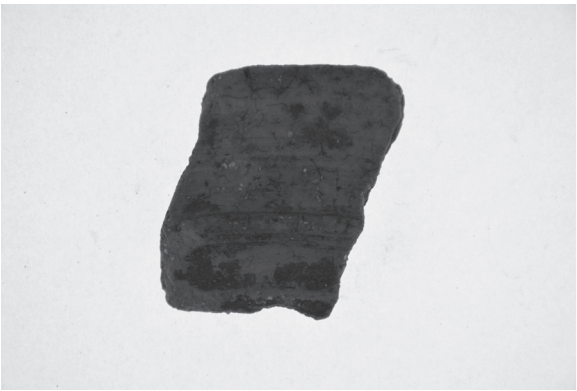

221

231

231
断面

237


260

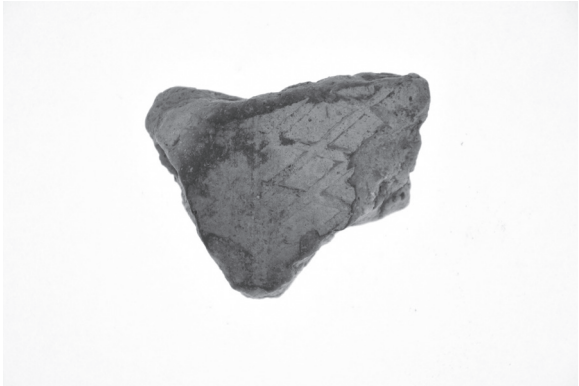

300

309
外面

309
内面

310
外面

310
内面


320

341

343

353

354

357

362
363

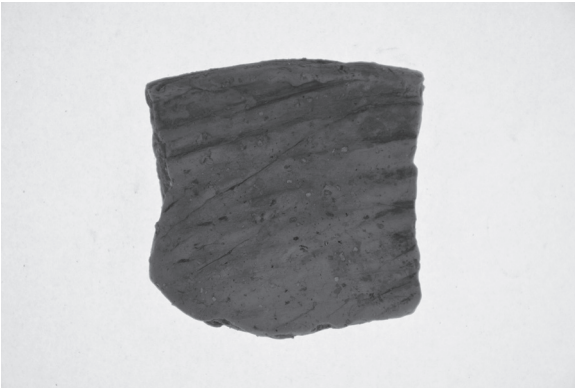
371

373

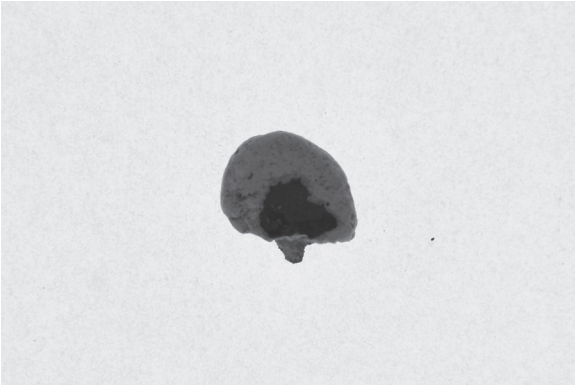
382

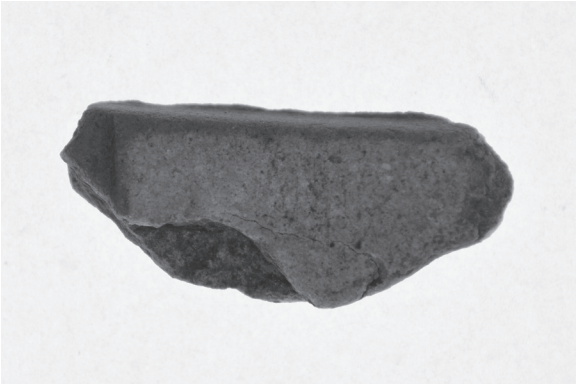
384

386


390

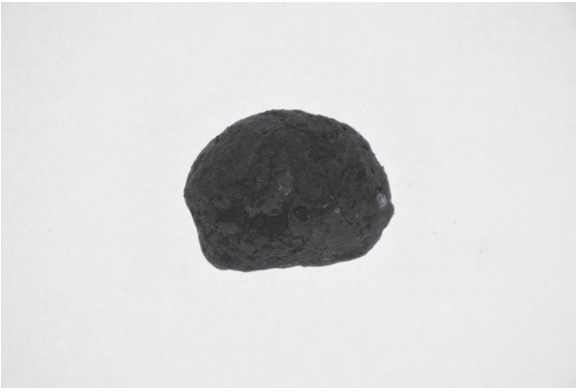
410

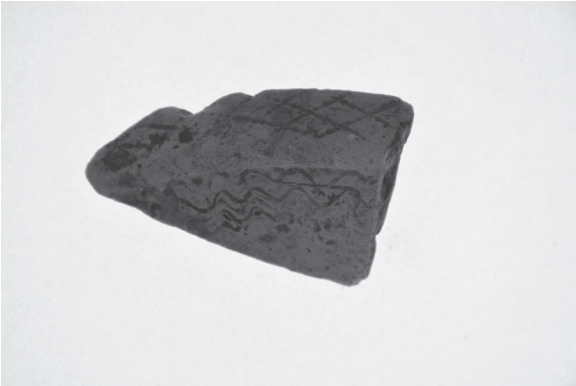

417

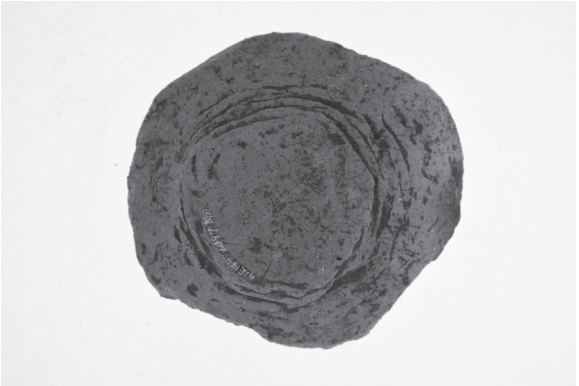

425

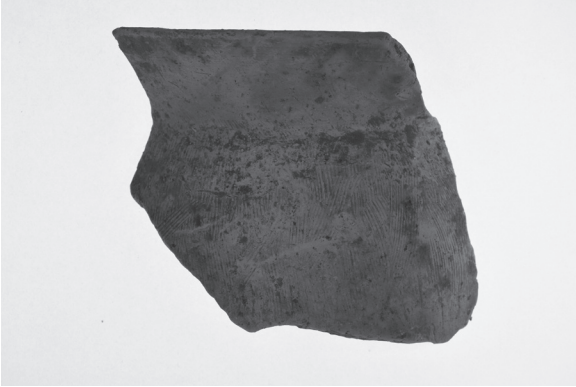
450

456

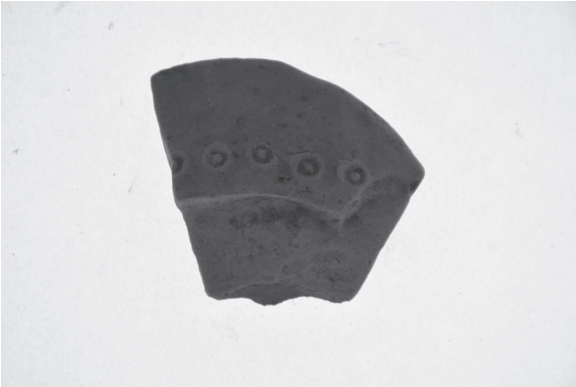

457


461


462


466

478


479

482

484

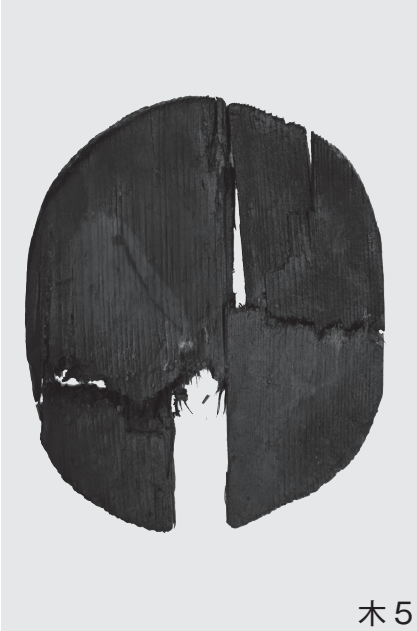
492

木１

木２

木３

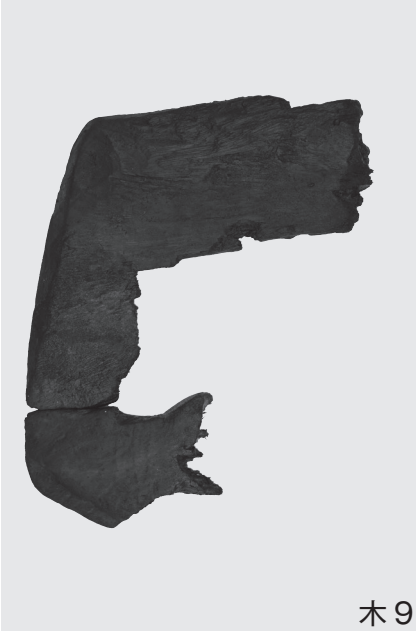
木４


木５

木６

木７

木７側面


木９

木８

木８側面

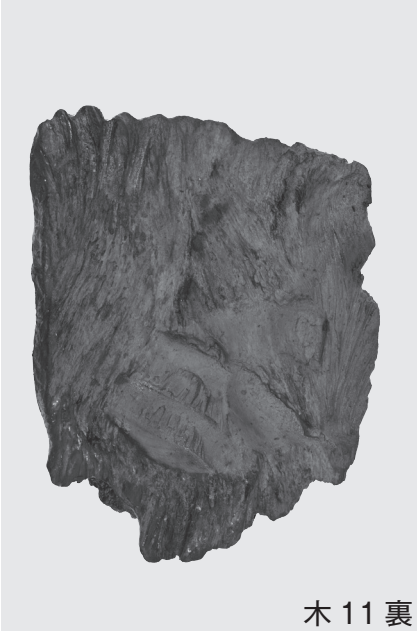
木 12

木 10

木 10 裏

木 12
加工痕

木 11


木 11 裏

木 13

報告書抄録

ふりがな	ひえ
書名	比恵83
副書名	―比恵遺跡群第１４４次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１３５１集
編著者名	朝岡俊也
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒８１０－８６２０　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2018年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
比恵遺跡群（ひえいせきぐん）	福岡県福岡市博多区博多駅南（ふくおかけんふくおかしはかたくはかたえきみなみ）4丁目162-1,175	40137	0127	33° 34'53"	130° 25'47"	20160801 ～ 20170217	1248㎡	自走式駐車場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群	集落	弥生／古墳／古代／中世	弥生 - 竪穴建物+井戸+溝+土坑+柱穴/古墳 - 竪穴建物/古代 - 溝＋土坑/中世 - 溝	弥生 - 弥生土器＋石器/古墳 - 土師器＋石器＋金属器/古代 - 土師器＋石器/中世-陶磁器	

要約	比恵遺跡は御笠川・那珂川間の洪積台地上に展開し、本調査区は遺跡の中で北東側の微高地頂部付近にあたる。検出遺構は弥生時代から古墳時代前期までの竪穴建物58軒以上と掘立柱建物25軒以上を中心に、飛鳥時代及び中世の溝、周構状遺構・井戸・貯蔵穴・土坑などがある。特質すべき遺物は鹿角装刀子や青銅製鋤先などの金属器、肥後系・豊前系・山陰系・瀬戸内系・東海系・北陸系等の多様な外来系土器、農具を中心とした木器などがある。比恵遺跡の中では近年稀にみる広い面積での調査であり、弥生時代から古墳時代初頭にかけての集落の変遷を追える貴重な調査である。

比恵 83

―比恵遺跡群第１４４次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1351集

2018年（平成30年）3月26日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　株式会社　宣巧社
福岡県福岡市博多区吉塚８丁目７番30号